

京都府遺跡調査概報

第 78 冊

1. 名神高速道路関係遺跡
 - (1) 長岡京跡左京第384次(7ANVKN-9)
 - (2) 長岡京跡左京第385次(7ANVKN-10・VST-6)
2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡(7ANFIR-4・FDN-3)
3. 第二京阪自動車道関係遺跡
 - 内里八丁遺跡

1 9 9 7

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)A-5 地区全景 (北西から、長岡京期)



(2)B-5b・B-8 地区全景 (東から、長岡京期)



(3)B-5 b地区 S T385619木棺墓 (弥生時代)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成8年度に実施した発掘調査のうち、日本道路公団大阪建設局、京都府土木建築部住宅課の依頼を受けて行った名神高速道路関係遺跡(長岡京跡左京第384・385次)、長岡京跡左京第389次・中福知遺跡、第二京阪自動車道関係遺跡(内里八丁遺跡)に関する発掘調査概要を取めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会・(財)京都市埋蔵文化財研究所・八幡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口隆康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 名神高速道路関係遺跡(長岡京跡左京第384・385次)

2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡 3. 第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 名神高速道路関係遺跡 (1)長岡京跡左京第384次	京都市南区久世東土川町金井田・正登	平8.4.8～ 9.30	日本道路公団 大阪建設局	竹井 治雄 岩松 保 中川 和哉 八木 厚之 野島 永
(2)長岡京跡左京第385次	京都市南区久世東土川町金井田・正登	平8.6.3～ 平9.2.28		
2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡	向日市上植野町池ノ尻・大門	平8.7.26～ 平9.1.14	京都府土木建築部住宅課	小池 寛
3. 第二京阪自動車道関係遺跡 内里八丁遺跡	八幡市内里小字日向堂ほか	平8.4.16～ 平9.2.27	日本道路公団 大阪建設局	森下 衛

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

本文目次

1. 名神高速道路関係遺跡平成8年度発掘調査概要-----	1
(1) 長岡京跡左京第384次 P.A.工区A-5地区(7ANVKN-9)-----	6
(2) 長岡京跡左京第385次 P.A.工区B-5b・B-8地区(7ANVKN-10・7ANVST-6)-----	17
2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡発掘調査概要(7ANFIR-4・FDN-3)-----	49
3. 第二京阪自動車道関係遺跡平成8年度発掘調査概要-----	79

挿図目次

1. 名神高速道路関係遺跡	
第1図 調査地区位置図(長岡京全体図)-----	2
第2図 パーキングエリア調査地区配置図-----	3
(1)長岡京跡左京第384次	
第3図 A-5地区(L384)遺構平面図(1) 中世・平安時代-----	6
第4図 A-5地区(L384)遺構平面図(2) 長岡京期-----	7
第5図 S D33003出土鉄(長岡京期)-----	8
第6図 A-5地区出土土器(長岡京期)-----	9
第7図 門跡S B384110・S X384122-----	11
第8図 A-5地区(L384)遺構平面図(3) 古墳・弥生時代-----	14
第9図 水田面積の規模-----	15
(2)長岡京跡左京第385次	
第10図 B-5b・B-8地区(L385)遺構平面図(1) 中世・平安時代-----	19
第11図 井戸(1)-----	20
第12図 井戸(2)-----	21
第13図 B-5b・B-8地区出土土器(1) 中世・平安時代-----	22
第14図 B-5b・B-8地区(L385)遺構平面図(2) 長岡京期-----	23
第15図 検出遺構断面土層図(長岡京期)-----	24
第16図 B-5b・B-8地区出土土器(2) 長岡京期-----	25
第17図 掘立柱建物跡S B385516実測図-----	28
第18図 人形-----	28

第19図	B-5 b・B-8地区(L385)遺構平面図(3) 古墳・弥生時代	29
第20図	B-5 b地区出土石製品(古墳時代)	30
第21図	B-5 b地区出土土器(古墳時代)	31
第22図	S T385619周溝内木棺墓	32
第23図	B-5 b・B-8地区出土土器(3) 弥生時代	32
第24図	B-5 b地区出土青銅器・石器(弥生時代)	33
第25図	南一条四坊五町建物配置図	35
第26図	宅地規模想定図	38
第27図	パーキングエリア予定地内遺構平面図(1) 長岡京期	39
第28図	パーキングエリア予定地内遺構平面図(2) 古墳・弥生時代	41

2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡

第29図	調査地位置図	49
第30図	トレンチ配置図	50
第31図	トレンチ配置図(左京第366次第4トレンチは、中世～平安時代面)	51
第32図	第1トレンチ土層断面実測図	52
第33図	第1トレンチ実測図	53
第34図	第2トレンチ土層断面図	54
第35図	第2トレンチ実測図	56
第36図	土坑S K38920実測図	57
第37図	第3・4トレンチ土層断面実測図	58
第38図	第3・4トレンチ実測図	59
第39図	第3トレンチ遺構平面図	60
第40図	第4トレンチ遺構平面図	61
第41図	柱穴23実測図	62
第42図	柱穴23出土銭貨拓影	62
第43図	第4トレンチ遺構実測図	63
第44図	柱穴24実測図	64
第45図	出土遺物実測図	65
第46図	左京第366次 古墳時代前期出土遺物分類表	67
第47図	左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列実測図	69
第48図	調査地周辺旧流路復原図	70
第49図	左京第226・252・253次調査検出遺構配置図	71
第50図	左京第353・366次調査出土遺物実測図(1)	72
第51図	左京第353・366次調査出土遺物実測図(2)	73
第52図	左京第353・366次調査出土遺物実測図(3)	74

第53図	左京第366次 S E 36668実測図	77
第54図	左京第366次・第4トレンチ S E 36668井戸枿材実測図	77

3. 第二京阪自動車道関係遺跡

内里八丁遺跡

第55図	調査地周辺遺跡分布図	81
第56図	調査区配置図	82
第57図	調査地地区割り図	84
第58図	弥生時代中期～弥生時代後期終末主要遺構配置図	85
第59図	C地区弥生時代後期終末主要遺構平面図	87
第60図	S H 083実測図	88
第61図	出土遺物実測図(1)	91
第62図	出土遺物実測図(2)	92
第63図	出土遺物実測図(3)	93
第64図	古墳時代(F1地区)・飛鳥時代(C地区)主要遺構配置図	95
第65図	C地区第3遺構面(飛鳥時代)主要遺構平面図	96
第66図	S X 030実測図	97
第67図	S X 033実測図	97
第68図	出土遺物実測図(4)	99
第69図	奈良時代末～平安時代前期主要遺構配置図	100
第70図	S B 020実測図	101
第71図	S B 216～S B 218平面図	101
第72図	S B 219・S B 220・S A 221平面図	102
第73図	平安時代中期～平安時代末主要遺構配置図	103
第74図	F1地区北半部第3遺構面主要遺構平面図	104
第75図	S E 023実測図(内側井戸枿除去後)	105
第76図	出土遺物実測図(5)	106
第77図	出土遺物実測図(6)	107
第78図	S B 024・S B 025平面図	109
第79図	鎌倉時代以降主要遺構配置図	110
第80図	出土遺物実測図(7)	112

付 表 目 次

1. 名神高速道路関係遺跡	
付表1	平成8年度名神高速道路関係遺跡調査一覧表-----1
付表2	A-5地区遺構記録番号対応表-----5
(2)長岡京跡左京第385次	
付表3	B-5b・B-8地区遺構記録番号対応表-----18
付表4	条坊路側溝交点の座標-----37
付表5	A-5地区出土土器観察表-----43
付表6	B-5b・B-8地区出土土器観察表-----44
2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡	
付表7	左京第353次S X35317出土土器破片計数表-----75

図 版 目 次

1. 名神高速道路関係遺跡	
(1)長岡京跡左京第384次	
図版第1	(1)P.A.工区全景(北から) (2)A-5地区弥生・古墳時代遺構検出状況(全景、北から) (3)A-5地区弥生・古墳時代遺構検出状況(全景、南西から)
図版第2	(1)A-5地区中世遺構(素掘り溝群)検出状況(全景、北から) (2)A-5地区中世遺構(素掘り溝群)検出状況(中央部、南から) (3)A-5地区中世遺構(素掘り溝群)検出状況(西辺部、南から)
図版第3	(1)A-5地区長岡京期遺構検出状況(全景、南から) (2)A-5地区長岡京期遺構検出状況(全景、南から) (3)A-5地区長岡京期主要遺構検出状況(全景、北から)
図版第4	(1)A-5地区東三坊大路西側溝S D33001・十三町東辺溝S D363100検出状況(南から) (2)A-5地区南一条大路路面S F33006検出状況(東から) (3)A-5地区南一条大路北側溝S D33003・十三町南辺溝S D33004など検出状況 (東から)
図版第5	(1)A-5地区十三町門跡S B384110検出状況(南から)

- (2) A-5 地区十三町門跡 S B 384110・S X 384112 町内通路側溝検出状況(北から)
- (3) A-5 地区十三町南辺溝 S D 33004 牛の足跡検出状況(東端部、南東から)
- 図版第 6 (1) A-5 地区十六町掘立柱建物跡群など検出状況(南から)
- (2) A-5 地区十六町掘立柱建物跡群など検出状況(東から)
- (3) A-5 地区十六町掘立柱建物跡 S B 384112 検出状況(南から)
- 図版第 7 (1) A-5 地区十六町井戸 S E 384108 内井戸側検出状況(北から)
- (2) A-5 地区十六町井戸 S E 384108 完掘状況(北から)
- (3) A-5 地区十三町井戸 S E 384092 内井戸側構築状況(北から)
- 図版第 8 (1) A-5 地区十三町暗渠 S X 384091 検出状況(南西から)
- (2) A-5 地区十三町暗渠 S X 384109 検出状況(南から)
- (3) A-5 地区南一条大路北側溝内木鋤出土状況(西端部、南から)
- 図版第 9 (1) A-5 地区水田区画検出状況(北西から)
- (2) A-5 地区水田区画検出状況(南から)
- (3) A-5 地区流路 S R 33016 検出状況(東から)
- 図版第 10 (1) A-5 地区流路 S R 33016 内溝 S D 33017 検出状況(東から)
- (2) A-5 地区方形周溝墓群検出状況(北東から)
- (3) A-5 地区方形周溝墓 S X 384114 検出状況(南東から)

(2) 長岡京跡左京第 385 次

- 図版第 11 (1) B-5 b・B-8 地区中世・平安時代遺構検出状況(全景、北から)
- (2) B-5 b 地区中世・平安時代遺構検出状況(近景、北から)
- (3) B-8 地区中世・平安時代遺構検出状況(近景、西から)
- 図版第 12 (1) B-8 地区井戸 S E 385536 内井戸側・井筒(水溜め)検出状況(西から)
- (2) B-5 b 地区井戸 S E 385519 内井戸側・井筒(水溜め)検出状況(南東から)
- (3) B-5 b 地区井戸 S E 385543 内井筒(水溜め)検出状況(西から)
- 図版第 13 (1) B-5 b・B-8 地区南一条大路両側溝検出状況(西から)
- (2) B-5 b 地区南一条大路北側溝 S D 33003 b 区西壁セクション(東から)
- (3) B-5 b 地区南一条大路北側溝 S D 33003 i 区西壁セクション(東から)
- 図版第 14 (1) B-8 地区南一条大路南側溝 S D 33002 b 区西壁セクション(東から)
- (2) B-8 地区南一条大路南側溝 S D 33002 i 区西壁セクション(東から)
- (3) B-8 地区大溝 S D 33305 d 区南壁セクション(北から)
- 図版第 15 (1) B-5 b 地区五町掘立柱建物跡 S B 385511 検出状況(北から)
- (2) B-5 b 地区五町掘立柱建物跡 S B 385512 検出状況(南から)
- (3) B-5 b 地区五町掘立柱建物跡 S B 385513 検出状況(南から)
- 図版第 16 (1) B-5 b 地区五町掘立柱建物跡 S B 385546 検出状況(西から)
- (2) B-5 b 地区五町門跡 S B 385547 柱穴 1 礎板出土状況(西から)

- (3) B-5 b 地区五町方形土坑 S X385538完掘状況(西から)
- 図版第17 (1) B-8 地区八町掘立柱建物跡 S B385514完掘状況(南から)
(2) B-8 地区八町掘立柱建物跡 S B385515完掘状況(西から)
(3) B-8 地区八町掘立柱建物跡 S B385516完掘状況(北から)
- 図版第18 (1) B-8 地区大溝 S D33305須恵器壺出土状況(西から)
(2) B-5 b 地区南一条大路北側溝 S D33003土師器高杯出土状況(南から)
(3) B-5 b 地区五町掘立柱建物跡 S B385513柱穴9 須恵器杯出土状況(北から)
- 図版第19 (1) B-5 b 地区溝 S D385609C区須恵器高杯出土状況(西から)
(2) B-5 b 地区方形周溝墓 S T385619弥生土器出土状況(北西から)
(3) B-5 b 地区方形周溝墓 S T385619木棺墓石鏃・石剣出土状況(南西から)
- 図版第20 (1) B-8 地区方形周溝墓 S T616・615完掘状況(南から)
(2) B-5 b 地区溝群検出状況(西から)
(3) B-5 b・B-8 地区弥生・古墳時代遺構検出状況(全景、北から)
- 図版第21 出土遺物(1)
- 図版第22 出土遺物(2)
- 図版第23 出土遺物(3)
- 図版第24 出土遺物(4)

2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡

- 図版第25 (1) 調査地遠景(空中写真、南東から) (2) 調査地遠景(空中写真、北から)
- 図版第26 (1) 調査地遠景(空中写真) (2) 第3・4トレンチ全景(空中写真、下方が北)
- 図版第27 (1) 第1トレンチ上面全景(北から) (2) 第1トレンチ下面全景(北から)
- 図版第28 (1) 第1トレンチ中世溝検出状況(東から)
(2) 第1トレンチ流路検出状況(東から)
(3) 第1トレンチ旧小畑川河道断ち割り(北東から)
- 図版第29 (1) 第2トレンチ全景(西から) (2) 第2トレンチ全景(北西から)
- 図版第30 (1) 第2トレンチ土坑 S K38920検出状況(南から)
(2) 第2トレンチ土坑 S K38920完掘状況(南から)
- 図版第31 第4トレンチ上面遺構検出状況(上方が北)
- 図版第32 (1) 第4トレンチ柱穴47断ち割り(北から)
(2) 第4トレンチ柱穴47柱痕検出状況(北から)
(3) 第4トレンチ柱穴47完掘状況
- 図版第33 (1) 第4トレンチ柱穴23洪武通寶検出状況(北西から)
(2) 第4トレンチ柱穴35完掘状況(南から)
- 図版第34 (1) 第4トレンチ下面遺構検出状況(北東から)
(2) 第4トレンチ下面遺構検出状況(南東から)

- 図版第35 (1)第4トレンチ柱穴24遺物検出状況(北から)
(2)第4トレンチ柱穴24遺物検出状況(北から)
- 図版第36 (1)第4トレンチ柱穴32遺物検出状況(南から)
(2)第4トレンチ柱穴34遺物検出状況(南東から)
- 図版第37 (1)第4トレンチ柱穴26遺物検出状況(東から)
(2)第4トレンチ柱穴36遺物検出状況(南から)
- 図版第38 出土遺物(1)
- 図版第39 出土遺物(2)
- 図版第40 (1)左京第366次第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671・S D36673検出状況(南から)
(2)左京第366次第4トレンチ古墳時代前期溝S D36673完掘状況(南から)
- 図版第41 (1)左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列S X36675検出状況(北東から)
(2)左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列S X36675検出状況(北東から)
- 図版第42 (1)左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列S X36604・S X36675検出状況
(2)左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列S X36675検出状況(北東から)
(3)左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列S X36604・S X36675検出状況(北東から)
- 図版第43 (1)左京第353次東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝検出状況(南から)
(2)左京第353次東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝完掘状況(南から)
- 図版第44 (1)左京第4次(府立向陽高校)杭検出状況(南から)
(2)左京第4次(府立向陽高校)杭列検出状況

3. 第二京阪自動車道関係遺跡

内里八丁遺跡

- 図版第45 (1)調査地全景(南上空から) (2)調査地全景(北上空から)
- 図版第46 (1)C地区第4遺構面全景(南から)
(2)C地区第4遺構面竪穴式住居跡群(南から)
- 図版第47 (1)C地区第4遺構面S H082・S H083・S H092検出状況(南東から)
(2)C地区第4遺構面S H076検出状況(西から)
(3)C地区第4遺構面S H085検出状況(西から)
- 図版第48 (1)C地区第4遺構面S X079全景(南東から)
(2)C地区第4遺構面S X098全景(南東から)
- 図版第49 (1)C地区第4遺構面S X099検出状況(南から)
(2)C地区第4遺構面S H091南東隅(土坑及び石敷き)検出状況(南から)
(3)C地区第4遺構面S K103検出状況(東から)
- 図版第50 (1)F1地区第6遺構面全景(南から)
(2)F1地区第6遺構面S D224足跡状遺構検出状況(南から)
- 図版第51 (1)F1地区第5遺構面全景(南から)

- (2) F1地区第5遺構面S D222南端部遺物出土状況(南から)
- 図版第52 (1) F1地区第4遺構面全景(南から) (2) C地区第3遺構面全景(南から)
- 図版第53 (1) C地区第3遺構面S B056・S B057・S B058検出状況(北から)
(2) C地区第3遺構面S B053・S B054・S B055検出状況(南から)
(3) C地区第3遺構面S E051検出状況(西から)
- 図版第54 (1) C地区第3遺構面S B021検出状況(南から)
(2) C地区第3遺構面S X033検出状況(南から)
(3) C地区第3遺構面S X030検出状況(東から)
- 図版第55 (1) 調査地全景(C地区第2遺構面、F1地区第3遺構面、北から)
(2) C地区第2遺構面全景(南から)
- 図版第56 (1) C地区第2遺構面S B020検出状況(南から)
(2) C地区第2遺構面S E023検出状況(南から)
- 図版第57 (1) F1地区第3遺構面全景(南から)
(2) F1地区第3遺構面S B216・S B217・S B218検出状況(南から)
- 図版第58 (1) F1地区第2遺構面全景(南から)
(2) F1地区第2遺構面S B210・S K206・S K207検出状況(南から)
- 図版第59 (1) C地区第1遺構面全景(南から)
(2) C地区第1遺構面S B024・S B025検出状況(南から)
- 図版第60 (1) F1地区第1遺構面全景(南から)
(2) F1地区第1遺構面島畑3検出状況(南から)

1. 名神高速道路関係遺跡平成8年度発掘調査概要

はじめに

中央自動車道西宮線(名神高速道路)の大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間における慢性的な交通渋滞解消のため、日本道路公団では、走行車線の拡幅工を行い、名神桂川パーキングエリアの建設を計画された。この調査は、名神高速道路桂川パーキングエリア建設に伴う事前調査であり、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。

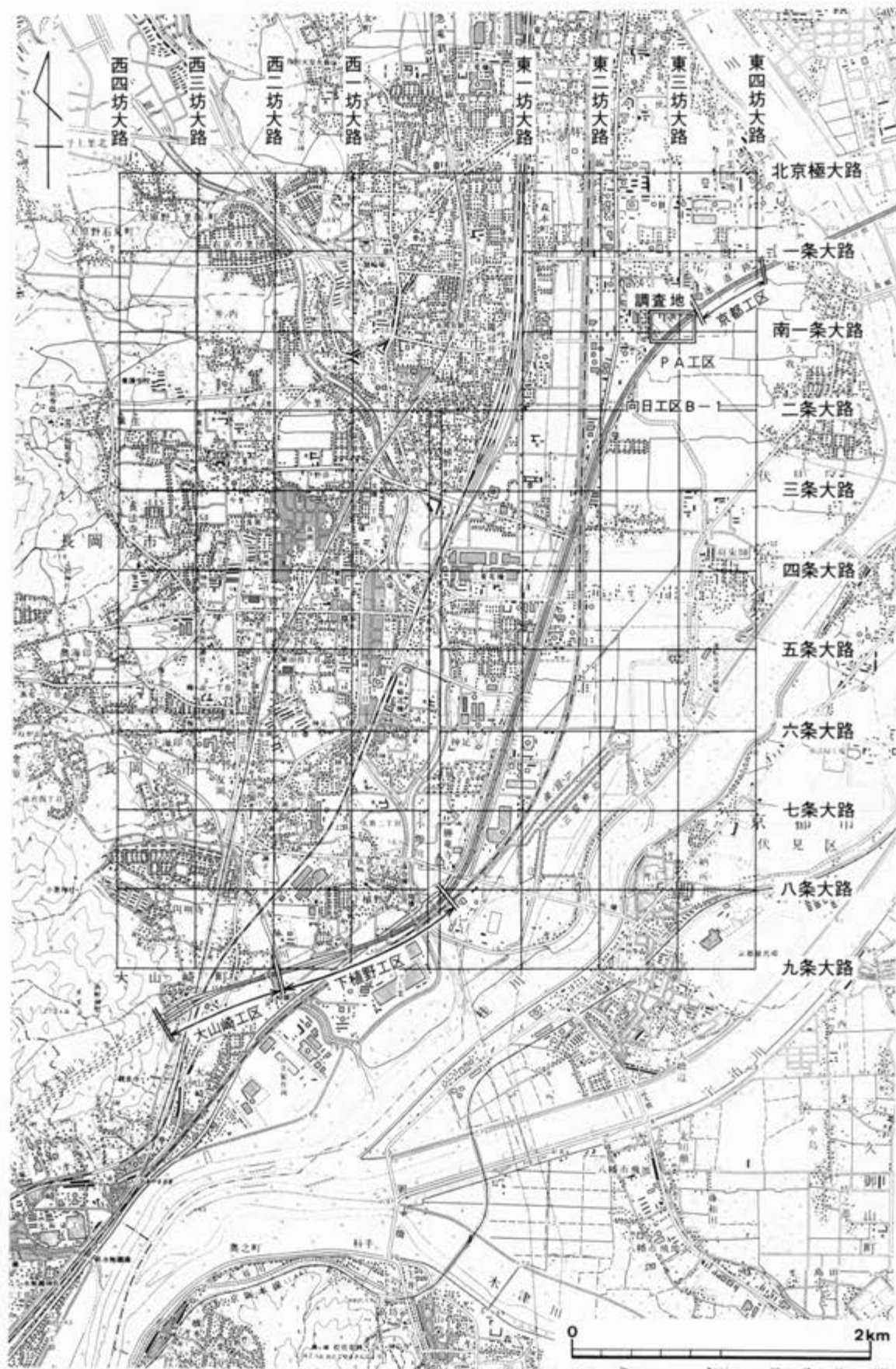
当調査研究センターでは、昭和63年度から、名神高速道路の拡幅に伴う発掘調査を行い、平成5年度からは名神高速道路桂川パーキングエリア建設予定地(P.A.工区)の調査を開始し、同年には、予定地内の本線拡幅部分について約3,100㎡の発掘調査を行った。平成6年度には、同予定地内北東部分ほか約11,250㎡、平成7年度には、北西部分約14,880㎡を発掘調査し、年度ごとに調査の概要報告を行ってきた。本年度の現地調査は、パーキングエリア建設予定地内(P.A.工区)の南西部と南東部にあたる(第2図)。調査期間は、平成8年4月8日～平成9年2月28日である。調査にかかわる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担された。

調査地名・長岡京の調査回数・面積・期間については、付表1に示した。検出した遺構の番号は、基本的に各調査区ごとの連番としたが、条坊遺構や自然流路など、広域に及ぶ同一遺構については、先行する調査の遺構番号を優先して記載し、今回の調査時の遺構記録番号との対応表(付表2・3)を示した。また、条坊路の呼称は、P.A.工区調査区内の遺構記述の混乱を避けるため、基本的に旧来の条坊復原案に従い、適宜括弧内に山中^(註1)章氏による条坊復原案の条坊路・町呼称を併記することとした。

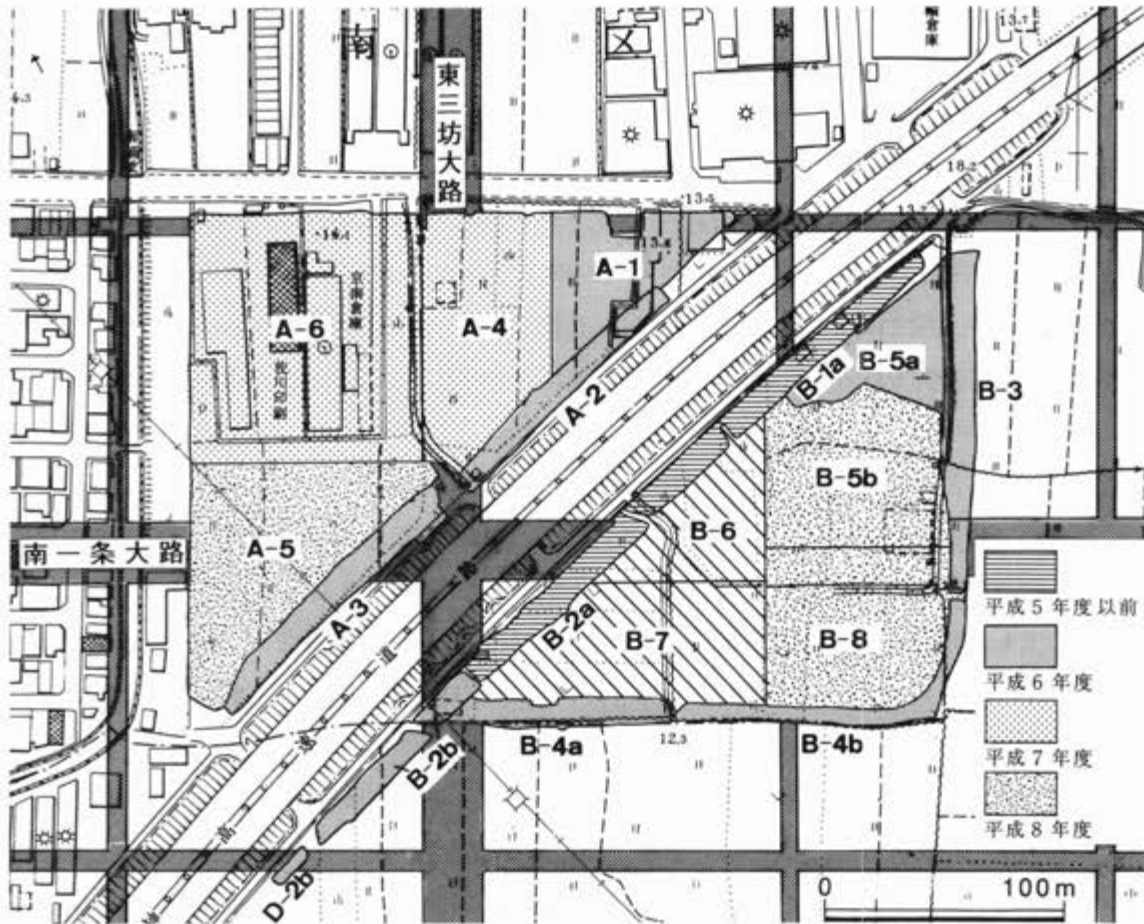
調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久、同主任調査員戸原

付表1 平成8年度名神高速道路関係遺跡調査一覧表

回数	地区名	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	面積	開始	終了	担当者
L384	A-5	7ANVKN-9	南区久世東土川町 (金井田・正登)	左京南一条三坊十三町 二条三坊十六町 南一条大路 (東土川遺跡)	5,680	平8.4.8	平8.9.30	竹井・岩松 八木・野島
L385	B-5b	7ANVKN-10	南区久世東土川町 (金井田・正登)	左京南一条四坊五町 南一条大路 東四坊第一小路 (東土川遺跡)	4,400	平8.6.3	平9.2.28	八木・野島
L385	B-8	7ANVST-6	南区久世東土川町 (金井田・正登)	左京二条四坊八町 南一条大路 東四坊第一小路 (東土川遺跡)	4,400	平8.6.3	平9.2.28	竹井・中川



第1図 調査地区位置図(長岡京全体図)



第2図 パーキングエリア調査地区配置図

和人、同主査調査員竹井治雄、同調査員岩松 保・中川和哉・八木厚之・野島 永が担当した。

本概報は、小池 寛・中川和哉・八木厚之の協力を得て、岩松 保・野島 永が執筆し、野島永が編集した。また、挿図作成には堀 大輔・魚津知克・曾根 茂の協力があった。

調査にあたっては、日本道路公団・大山崎町教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係各機関の御協力をいただいた。^(注2)

調査地周辺における長岡京の調査

調査地は、桂川パーキングエリア建設予定地の南西部分の一部、A-5地区(左京第384次調査)と、南東部分B-5b・B-8地区(左京第385次調査)の2地点に分かれる。

A-5地区(左京第384次調査)は、長岡京条坊復原案によれば、東三坊大路の西側に位置しており、左京南一条三坊十三町(二条三坊十五町)と南一条大路(二条条間大路)を隔てた南側の左京二条三坊十六町(二条三坊十四町)にあたる。

左京南一条三坊十三町は、以前に都合3度の発掘調査が行われている。西羽東師川改修工事(第6次)に伴う左京第139次調査^(注3)では、パーキングエリア建設予定地のほぼ西側に沿って南北に長い区画の調査が行われた(第27図参照)。宅地北辺町内溝、1間×1間の掘立柱建物跡、宅地南

辺町内溝と南一条大路北側溝をつなぐ暗渠施設などを確認している。十三町南辺の町内溝からは、「□□□我林延□虫□」と記した木簡が出土した。パーキングエリア建設予定地内本線拡幅に伴うA-3地区(左京第330次調査^(註4))の調査では、十三町南東を画する南一条大路両側溝と東三坊大路西側溝を検出した。両大路の交差点は、両大路の側溝が互いに横断しあう閉鎖型と判明した。パーキングエリア建設予定地北西部分の先行調査であるA-4・A-6地区(左京第361・362・363次調査^(註5))は、今回のA-5地区の北側に隣接し、十三町北半と東三坊大路・南一条四坊四町西半の一部にあたる。十三町では、主殿と後殿が一町の北東よりに位置し、西側にのみ脇殿を配すること、檜皮葺の屋根に漆喰を塗った白壁の双堂や酒造施設の存在など、建築遺構の様相が判明した。さらに、町内外郭をめぐる築地塀が造られ、宅地を東西に1/2に等分割する南北方向の通路が設定されていることを認めた。これらの調査成果によって、十三町が、一町規模を占める長岡京の大規模宅地であると判断した。また、平良泰久氏は、造東大寺司長官や左大辨・大宰大貳を歴任し、造長岡宮使を務めた参議正三位佐伯宿禰今毛人の邸宅と推察された^(註7)。

十六町でも、西羽東師川改修工事(第7・8次)に伴う左京第117次調査^(註8)と、名神高速道路の本線拡幅に伴う左京第267次調査(12BL第13トレンチ)、及びパーキングエリア本線拡幅部分におけるD-2b・B-2b地区(左京第331次調査^(註9))が先行して行われている。

左京第117次調査では、十六町の西端を限る東三坊第二小路東側溝が検出された。左京第267次調査では、東三坊第二小路と二条第一小路の交差点を検出し、両小路の両側溝が横断しあう閉鎖型と確認した。また、第331次調査では、二条第一小路両側溝を検出し、宅地の南東部で2間×3間の小規模な南北棟の掘立柱建物跡を検出している。B-5b・B-8地区(左京第385次調査)は、同様に左京南一条四坊五町(二条四坊七町)と、南一条大路を隔てた南側の左京二条四坊八町(二条四坊六町)にあたる。

南一条四坊五町では、名神高速道路拡幅関連で過去4回の調査が実施された。名神高速道路京都工区の本線拡幅に伴う左京第304次調査^(註11)のA-2b地区は、宅地の北辺と南一条条間第一小路の推定ラインの部分であるが、旧河道のため遺構が検出されなかった。桂川パーキングエリア建設予定地東半の先行調査でもあるB-1・B-3・B-5地区(左京第303次・同334次・同337次調査^(註12))は、五町の北半を中心とした調査区である。B-1地区(左京第303次)調査では、宅地の西端の南北中央やや北側で柱穴掘形の大きい1間×3間の東西棟の掘立柱建物跡と3間×3間以上の南北棟の掘立柱建物跡や五町の西辺を画する東四坊第一小路東側溝を検出した。B-3地区(左京第334次)調査では、南北方向に蛇行する幅5mほどの大溝を検出した。また、B-5地区(左京第337次)調査では、一町の中心やや西側で、2間×7間と2間×5間の東西棟2棟を検出した。

二条四坊八町でも、名神高速道路パーキングエリア建設予定地内南東隅の先行調査がある^(註13)。B-4b地区(左京第333次調査)では、八町の宅地の中央部分で「L」字形の細長いトレンチを設定し、西端で2間×3間の身舎に北廂を持つ東西棟掘立柱建物跡1棟を検出した。また、八町の中心付近でB-3地区(左京第334次調査)の五町内の宅地で確認した南北方向の大溝を検出した。

(野島 永)

付表2 A-5地区遺構記録番号対応表

報告番号	埋文情報挿図名		説明会資料	当調査記録番号	備考
水田畦畔	弥生時代	水田畦畔2	—	—	下層の説明会はなし
S D33001	63号15頁 第2図	溝3	溝3	S D106	東三坊大路西側溝
S D33002	63号15頁 第2図	溝2	溝2	S D102	南一条大路南側溝
S D33003	63号15頁 第2図	溝1	溝1	S D101	南一条大路北側溝
S D33004	63号15頁 第2図	溝4	溝4	S D103	十三町南辺溝
S F33007	—	—	—	なし	東三坊大路路面
S X33008	—	—	—	なし	東三坊大路路面上土坑
S D33010	—	—	—	S D98	十六町内道路側溝
S D33011	—	—	—	S D97	十六町内道路側溝
S X33015-1	—	—	—	—	南一条大路路面上土坑
S X33015-2	63号15頁 第2図	土坑3	土坑3	S X90-2	南一条大路路面上土坑
S X33015-3	63号15頁 第2図	土坑4	—	—	南一条大路路面上土坑
S X33015-4	—	—	—	—	南一条大路路面上土坑
S X33015-5	—	—	—	—	南一条大路路面上土坑
S D33017	63号16頁 第3図	溝3	—	S D119	下層の説明会はなし
S R33016	63号16頁 第3図	谷状地形4	—	S X116	下層の説明会はなし
S D362125	63号15頁 第2図	溝9	溝9	S D362125	十三町内道路側溝
S D362138	63号15頁 第2図	溝10	溝10	S D362138	十三町内道路側溝
S D363086	63号15頁 第2図	溝8	溝8	S D87	十三町内道路側溝
S D363100	63号15頁 第2図	溝5	溝5	—	十三町東辺溝
S F363109	63号16頁 第3図	大畦畔1	—	—	下層の説明会はなし
S D363121	63号16頁 第3図	溝8	—	—	下層の説明会はなし
S X384088	63号15頁 第2図	土坑1	土坑1	S X88	
S X384089	63号15頁 第2図	土坑2	土坑2	S X89	
S X384091	63号15頁 第2図	暗渠2	堰	S X91	
S E384092	63号15頁 第2図	井戸2	井戸2	S E92	十三町井戸:平安時代か
S D384104	63号15頁 第2図	溝6	溝6	S X104	十三町南辺築地地業溝
S B384107	63号15頁 第2図	掘立柱建物3	掘立柱建物3	S B107	十六町宅地内建物
S E384108	63号15頁 第2図	井戸1	井戸1	S E108	十六町宅地内井戸
S X384109	63号15頁 第2図	暗渠1	溝7・堰	S D109	後に暗渠施設と判明
S B384110	63号15頁 第2図	門1	門1	S B110	十六町宅地内建物
S B384111	63号15頁 第2図	掘立柱建物2	掘立柱建物2	S B111	十六町宅地内建物
S B384112	63号15頁 第2図	掘立柱建物1	掘立柱建物1	S B112	十六町宅地内建物
S A384113	63号15頁 第2図	柵2	—	S A113	十六町北辺柵列
S X384114	63号16頁 第3図	方形周溝墓6	—	S X114	下層の説明会はなし
S X384115	63号16頁 第3図	方形周溝墓5	—	S X115	下層の説明会はなし
S X384118	63号16頁 第3図	方形周溝墓7	—	S X118	下層の説明会はなし
S A384123	63号15頁 第2図	柵1	—	S B112北廂	
S X384122	63号15頁 第2図	門2	門2	—	
S X384124	—	—	—	S X124	不明土坑

その他、調査時に遺構番号をつけていないものについては、左京第330・361～363次調査の報告番号を踏襲している(A-5地区の調査記録番号は124まで)。

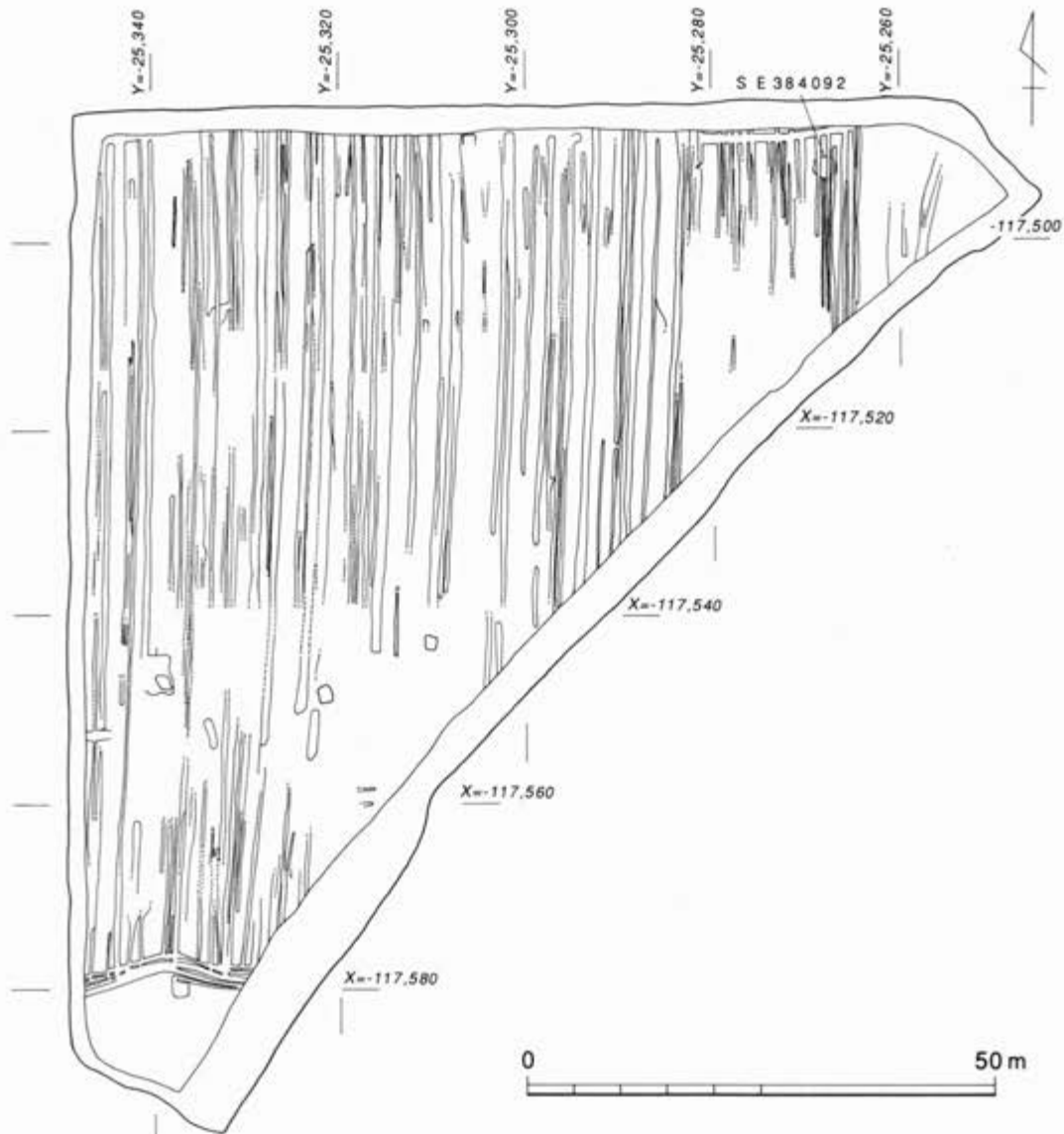
(1) 長岡京跡左京第384次 P.A.工区A-5地区
(7ANVKN-9)

1. 中世の遺構(第3図、図版第2)

調査地の全域にわたって、13~14世紀の素掘り溝を多数検出した。掘削されている方向は南北方向が大多数であるが、調査地北東端部と南端部で東西方向の溝が検出できた。今までの調査によって、これらの溝の方向の違いは、条里型地割りの坪の違いを反映していると考えられる。

2. 平安時代の遺構

井戸 S E 384092(図版第7-(3)) 調査地の北東部で検出した。一辺2.2mの方形の掘形の南側

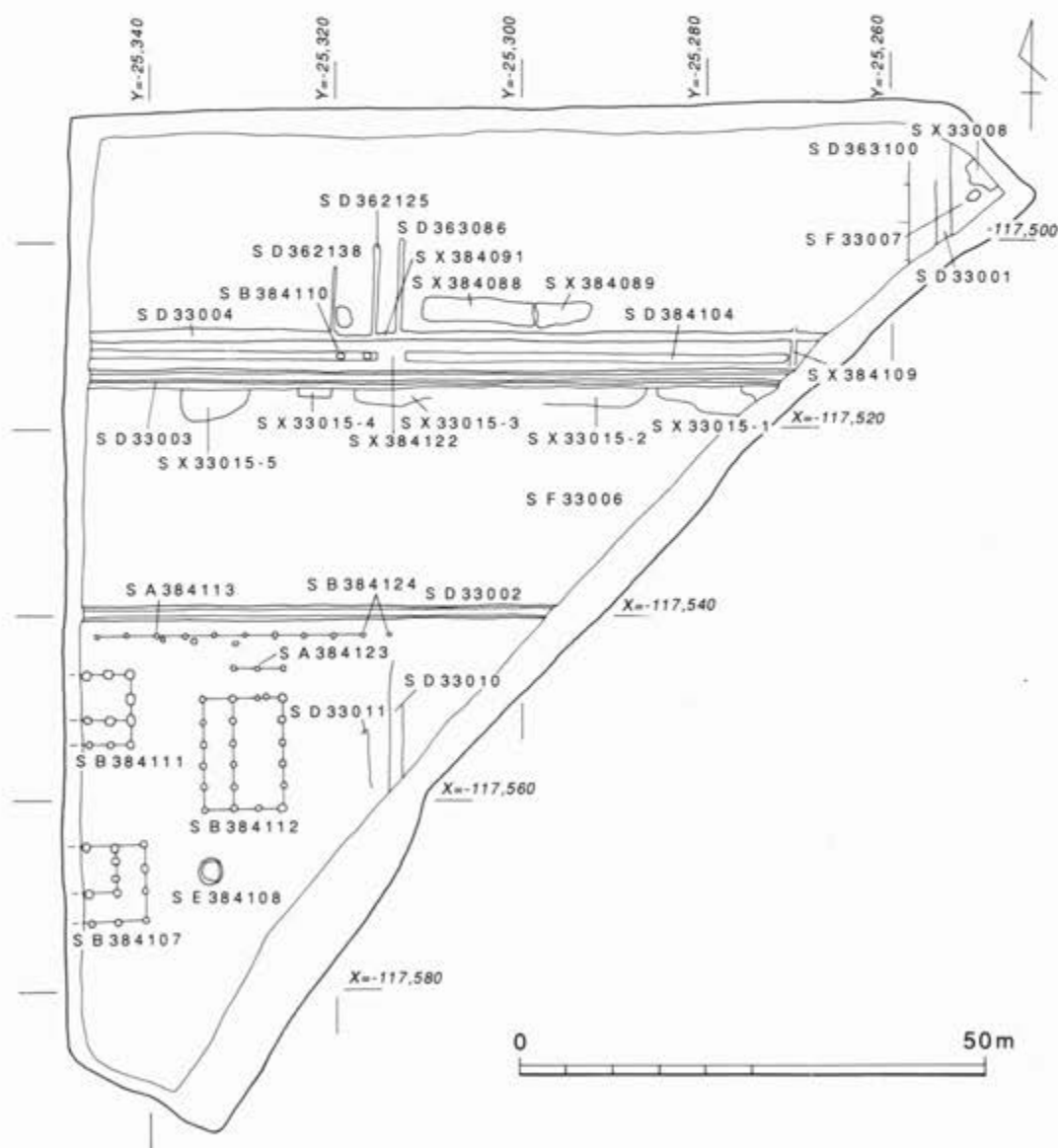


第3図 A-5地区(L384)遺構平面図(1) 中世・平安時代(1/800)

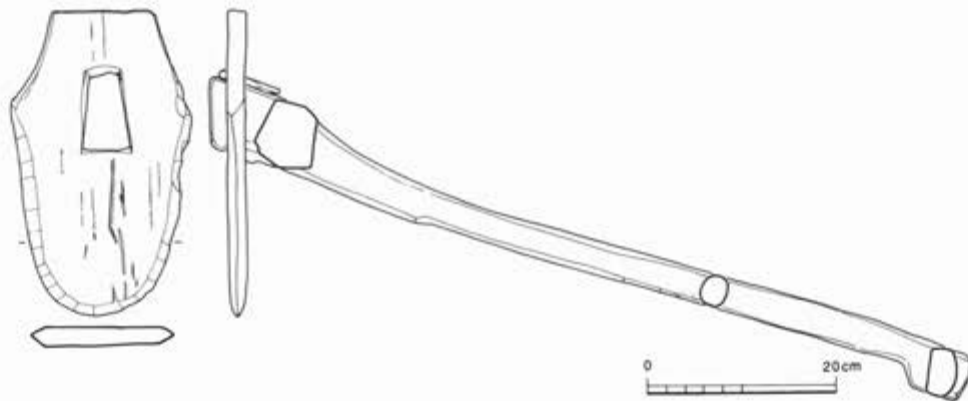
に偏して、径65cmの曲物を据えた井戸である。この曲物は高さ55cmで、この曲物の上部には、一回り大きな曲物(残存高12cm)がはめ込まれており、両者の曲物の隙間には板材が縦に挟み込まれていた。さらに、曲物の周囲は縦板で保護されていた。井戸の掘形は北で東にやや振れている。井戸内部から土師器皿(第6図11)、斎串が出土した。これらの遺物は、長岡京期のものとも考えられるが、S E 384092の内部構造が粗雑な点、この井戸の周囲に長岡京期の宅地関連の遺構が全く見られず、十三町の宅地とは直接に結びつかない点から、長岡京期以後のものとする。

3. 長岡京期の遺構(第4図、図版第3)

条坊関連遺構では、南一条大路の南北側溝と路面、東三坊大路西側溝と路面の一部を検出した。南一条大路の北側の十三町では、十三町の南辺溝と東辺溝、築地の地業、土坑、門跡と、そこから南北に通じる町内の通路側溝を検出した。十六町では、掘立柱建物跡・柵・井戸などを検出した。



第4図 A-5地区(L384)遺構平面図(2) 長岡京期(1/800)



第5図 SD33003出土鋏(長岡京期) 1/8

a. 条坊関連遺構

東三坊大路西側溝 S D 33001 (図版第4-(1)) 調査地の東端部で検出した南北方向の溝である。東三坊大路の西側溝である。北半部の西肩は、攪乱のため検出できなかった。幅1.5~1.6m・深さ約0.2mで、約10.5mにわたって検出した。細片の土師器・須恵器がわずかながら出土した。溝心の座標はY=-25,255.05(X=-117,495.0)である。

東三坊大路路面 S F 33007 調査地の東端で確認したもので、S D 33001より東側に当たる。この路面上では、左京第330・361次調査と同様に、不定形の土坑が検出できた。この土坑内からは、遺物はほとんど出土しなかった。この土坑の性格を直接判断できるような資料は全くないが、路盤改良に伴う土坑または、宅地内の生活廃物を遺棄した土坑とも推測⁽¹⁸¹⁴⁾できる。

南一条大路北側溝 S D 33003 (図版第4-(3)) 幅約1.5m・深さ約0.35~0.4mで、総長80mにわたって検出した。溝の底面では牛や人間の足跡が多数検出できた。この溝内の堆積土は大きく三層に分かれ、下層から黒色粘土混白色粘土、黒色粘土、黄色土が堆積する。調査地西端部の黒色粘土層の上部で木製鋏を検出した(第5図、図版第8-(3))。この層は、この溝が長岡京の条坊側溝として機能していた段階に堆積したと推定される。この溝の中央部やや東(Y=-25,301.0付近)では、溝の底面に高さ20cm・幅50cmの枕状の掘り残しが認められた。この溝内からは、土器はほとんど出土していない。溝底面では、牛の足跡を検出したが、最下層の白色粘土層の上から踏み込まれており、足跡内に黒色粘土が堆積したものであった。溝心の座標は、調査地の東端部でX=-117,514.5(Y=-25,272.0)、中央部でX=-117,514.6(Y=-25,310.0)、西端部でX=-117,514.75(Y=-25,346.5)である。

南一条大路南側溝 S D 33002 幅1.4m・深さ0.4mで総長40mにわたって検出した。溝内の堆積は下層から、暗褐色粘土、黄色土、灰色粘土に分かれる。内部からは、土器を主体とした遺物がコンテナ3箱分程度出土したが、その大半が最上層から出土している。この中には若干の瓦片が認められる。溝心の座標は、調査地の東端部でX=-117,539.5(Y=-25,297.5)、西端部でX=-117,539.7(Y=-25,347.3)である。

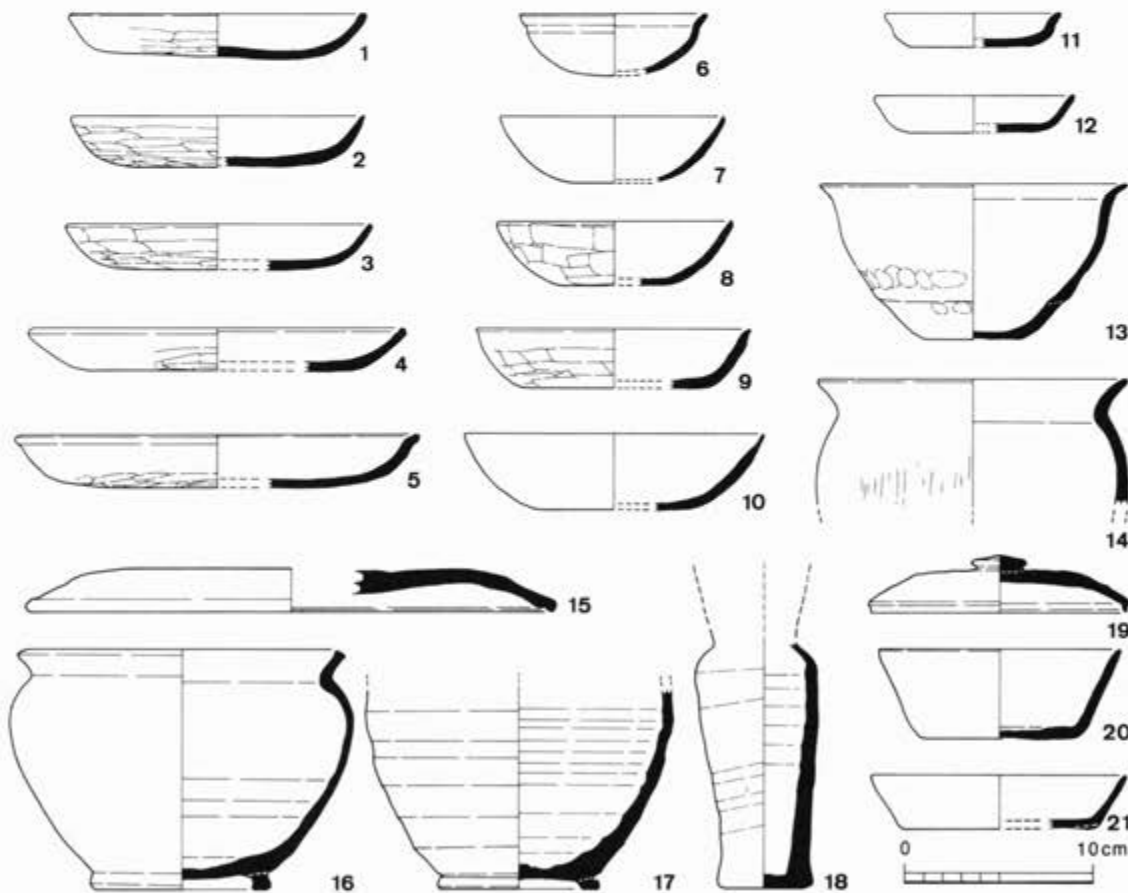
南一条大路路面 S F 33006 (図版第4-(2)) 南一条大路北側溝 S D 33002と同南側溝 S D 33003

に画された平坦面。溝の心々で25.05～25.15m、路面自体は約23.7mである。路面上では、轍や足跡などは検出できなかった。路面の北辺部では、北側溝 S D33003に沿って土坑状のくぼ地 S X33015を検出した。

土坑 S X33015 南一条大路路面 S F33006の北辺部で、同北側溝 S D33003に沿って検出した、溝状の浅い土坑である。大きく5か所で検出できたが、大きいものでは東西11mにわたって確認でき、南北の幅約2.8m・深さ0.05～0.15mである。この土坑の埋土は、黄色土と黒色粘土、白色土がブロック状に混ざり合っており、南一条大路北側溝 S D33003内の堆積土をミックスしたような土であった。その性格はよくわからないが、側溝の溝さらえをした土を路面上の縁辺部に埋めたもの、宅地内の廃棄物を条坊路上に埋めたものなどが考えられる。なお、この土坑は一昨年度に調査した左京第330次調査では、調査範囲が狭かったため、溝と判断し、「S D」33015と報告したが、今回の調査で土坑状の遺構と確認できたため、不明土坑 S X33015と改める。

b. 十三町内の遺構

十三町内南辺溝 S D33004 南一条大路北側溝 S D33003と2.9～3.2mの平坦地を隔てて北側で検出した東西方向の溝である。十三町の南辺に造られた築地の北側雨落ち溝と推測しうる。町内



第6図 A-5地区出土土器(長岡京期)

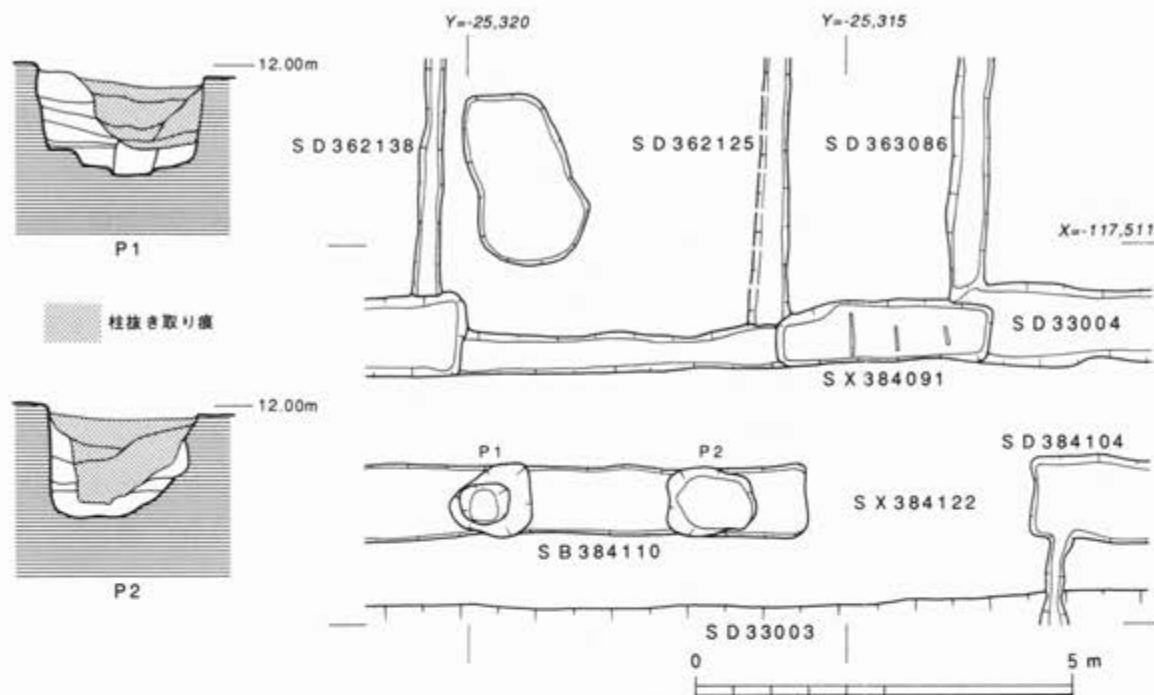
- | | | | |
|---|----------------|---------------|-----------------|
| 1・2・4・5・7・8・10・13・15・16・20・21. S D33002 | | | |
| 3・9. S D33003 | 6・12. S D33004 | 11. S E384092 | 14・18. S X33015 |
| 17. S B384111 | 19. S X384089 | | |

溝 S D 363086より東では、幅0.9～1m・深さ0.15～0.3mで掘削されているのに対して、町内溝 S D 362138より西では幅1～1.35m・深さ0.4～0.45mと、規模を大きくして掘削されている。町内溝 S D 363086と町内溝 S D 362138の間の6.5mにわたって、溝の南辺は直線的に掘削されているが、北辺は幅を狭めて掘削されている。町内溝 S D 362138と S D 362125の間では、幅0.4m程度で、町内溝 S D 362125と S D 363086の間では、幅0.8m程度となっており、後者の位置に暗渠 S X 384091が造られている(第7図、図版第8-(1))。この位置は、後述の門跡 S X 384122の北側にあたり、通路として利用されていたために、溝内に暗渠が必要であったと考えられる。また、調査地の東端部の暗渠 S X 384109の北側付近では、溝底で牛の足跡を多数検出した(図版第5-(3))。溝心の座標は、調査地の東端部で X=-117,510.2(Y=-25,268.5)、中央付近の門跡 S B 384110の北側で X=-117,510.4(Y=-25,318.3)、西端部で X=-117,510.3(Y=-25,346.3)である。

十三町東辺溝 S D 363100(図版第4-(1)) 東三坊大路西側溝 S D 33001の西側で、約2.9mの平坦地を隔てて検出した南北方向の溝である。近世井戸や中世溝によって攪乱を受けていたので、東辺の溝肩のみを11mにわたって確認しただけである。東三坊大路西側溝 S D 33001との間の平坦部には、南北方向に築地が設けられていたと推測されるが、後述の築地地業溝 S D 384104のような痕跡は確認できなかった。この溝から遺物は全く出土しなかった。溝の東肩の座標は、X=-117,500.0のとき、Y=-25,258.7である。

築地地業溝 S D 384104 南一条大路北側溝 S D 33003と十三町南辺溝 S D 33004の間の平坦面に東西方向に掘削された溝である。築地本体の基部に掘削された地業痕跡と考えられる。幅0.9～1.1m・深さ0.1～0.2mで掘削されており、溝の断面は「コ」の字形を呈している。埋土には灰色土や黄褐色土が2～4層に突き固められている。この築地に伴う添柱や寄柱などの柱穴などは全く確認できなかった。この築地地業跡は、調査地東端の暗渠施設 S X 384109の西側で終わっており、これより東側では検出できなかった。これは、暗渠施設 S X 384109の枕木が検出面でほぼ全容を現していたことから、調査地の東側にかけてかなりの削平を受けていることが推測され、そのため、築地地業溝 S D 384104は消失してしまったと考えられる。また、門 S B 384110の東側で約2.9mにわたってこの築地地業溝が途切れており、この北側の十三町南辺溝 S D 33004内には暗渠施設が造られている。そのことから、上部構造はよくわからないが、この築地地業溝 S D 384104が途切れた部分も門として機能していたと推定できる(S X 384122)。溝心の座標は、東端部で X=-117,512.5(Y=-25,270.2)、門跡 S X 384122の東側で X=-117,512.3(Y=-25,312.65)、西側で X=-117,512.35(Y=-25,315.6)、調査地の西端部で X=-117,512.15(Y=-25,346.6)である。

町内通路側溝 S D 363086・S D 362125・S D 362138(第7図、図版第5-(1)・(2)) 溝 S D 363086・362125は幅0.4～0.5mで、溝 S D 362138は幅0.2～0.3mで、これらの溝はほぼ北で東に約2°振れている。中世掘り溝によって削平を受けているが、北側の左京第362・363次調査で検出した町内道路の側溝に連なると考えられる。これらの溝は、十三町南辺溝 S D 33004に接続して終わっているのに対して、他の中世溝は S D 33004を越えて南側に続いている点で異なっている。十三町南辺溝 S D 33004の溝幅は、これら南北溝が接続している約6.5mにわたっては40～



第7図 門跡S B 384110・S X 384122(1/100)

80cmと半分から2/3の広さになっている。町内溝S D 363086・S D 362125が門跡S X 384122に通じる南北通路の東・西側溝と考えられ、町内溝S D 362125・S D 362138が門跡S B 384110から宅地に通じる通路の側溝と考えられる。前者が路幅2.1m、後者のそれが4.1mである。これらの溝からは、遺物はほとんど出土しなかった。また、十三町南辺溝S D 33004との接続関係を溝内堆積土層で観察すると、通路側溝から南辺溝に土が流入していた。また、これらの溝が意図的に埋められた痕跡は認められなかった。

門跡S B 384110(第7図、図版第5-(1)) 築地地業溝S D 384104の上から掘り込まれた2基の柱穴を検出した。柱穴は、昨年度調査の十三町で見つかった掘立柱建物跡の柱穴と比べて大型で、1.1m×0.9mの隅丸方形を呈しており、深さは0.7~0.75mを測る。土層の観察によって、柱を抜き取った痕跡が認められた。柱心々で3mを測り、十三町の東西のほぼ中央に位置した門跡と考えられる。

門跡S X 384122 門跡S B 384110の東側で検出したもので、築地地業溝が2.9mにわたって途切れている部分である。柱穴などの施設は検出できなかったが、計画的に築地を造っていないこと、この位置に通じる町内通路と考えられる溝を検出したこと、十三町南辺溝S D 33004内に暗渠S X 384091を検出したことから、大路に面した入り口であったと考える。

土坑S X 384088 十三町南辺溝S D 33004の北側で検出した土坑である。東西約11.8m・南北約2.4m・深さ0.15~0.25mで、後述の土坑S X 384089と接している。ほぼ東西に掘削されている。土坑の底面には5~10cmの厚さの灰色粘土が堆積しており、この上面は凹凸になっていた。この粘土は、自然に堆積したとは考えにくいいため、意図的に土坑内に入れたと判断され、池状の施設または粘土を貯蔵したものか、あるいは、築地築造のための粘土をこねた施設と推測される

が、その性格を断じがたい。

土坑 S X 384089 土坑 S X 384088の東側に接して検出した。6.2m×2.1mの土坑である。埋土の状況は、土坑 S X 384088と同じである。内部から、第6図19の須恵器杯蓋が出土しており、長岡京期のものとする。

暗渠 S X 384091(図版第8-(1)) 十三町南辺溝 S D 33004内で、門跡 S X 384122の北側で検出した遺構である。S D 33004は、町内溝 S D 363086と S D 362125の間が幅0.8mと狭められて掘削されており、この溝内が0.8m×2.6mの土坑状に掘削され、0.6mの間隔で3本の角材が東西に並べて埋め込まれていた。この南側では、築地地業溝が2.9mにわたって途切れており(門跡 S X 384122)、通路を横切る溝内に構築された暗渠施設の枕木と考えられる。

暗渠 S X 384109(図版第8-(2)) 調査地の東端部、築地地業 S D 384104が途切れる地点で検出した。幅65cmの溝内に、幅約5cm・長さ約60cmの角材が東西に三列配置されていた。構造的には暗渠 S X 384091と同じである。検出した面ですでにこれらの部材が見えており、しかも深さは最大で5cmしかなかったため、この遺構の周辺は当時の地表面から数十cmの削平を受けていると推定される。十三町南辺溝 S D 33004から南一条大路北側溝 S D 33003へと排水するために、築地の下に構築された暗渠施設の枕木と判断される。

c. 十六町内の遺構(図版第6)

掘立柱建物跡 S B 384112(図版第6-(3)) 南北棟の掘立柱建物跡で、唯一その全貌がわかるものである。2間×5間の身舎に西面に廂を有する南北の建物跡で、梁間の柱間が9尺、桁行の柱間が8尺、廂の出が11尺である。柱穴は一辺70~80cmの方形掘形で、身舎の梁間の棟持ち柱の掘形のみやや小型で、一辺50cm程度である。身舎の北東隅の柱穴の座標は、X=-117,548.5・Y=-25,325.9である。

掘立柱建物跡 S B 384111 梁間2間・桁行2間以上の身舎に、南側に廂を有する。梁間の柱間は8.5尺、桁行の柱間は8尺で、廂の出は9尺である。柱穴は、身舎が一辺90cm、廂が一辺70cmと、他の2棟の掘立柱建物跡と比べやや大型である。北東隅の柱穴の座標は、X=-117,546.0・Y=-25,342.2である。

掘立柱建物跡 S B 384107 S B 384111の南で検出した掘立柱建物跡である。身舎の梁間3間・桁行2間以上の東西棟で、東側と南側に廂を有する。柱間は、身舎の梁間が5.5尺、桁行が10尺、廂の出は10尺で、梁間の廂の柱間は身舎の梁間柱間とは異なっており、8.25尺である。身舎の柱掘形は、60cm×90cmの長方形を呈しており、廂の柱掘形は50~60cmの方形である。身舎の北東隅の座標値は、X=-117,564.65・Y=-25,343.9である。

井戸 S E 384108(図版第7-(1)・(2)) 掘立柱建物跡 S B 384112の南側で検出した。縦板組隅柱横棧留めの井戸で、土圧のために四周の縦板は内側に倒れた状態で検出した。四隅の隅柱のうち、北西の隅柱のみが残存していた。他の3本の隅柱を除去したために、井戸側全体が崩壊したようである。井戸掘形は、やや崩れているが、一辺1.8mの方形掘形に復原できる。井戸側の内法は、一辺1.3~1.4mと推定しうる。井戸の底には、径50cm・残存高34cmの曲物が1基据えられ

ていた。曲物内には須恵器甕の体部が据えられ、曲物の口縁に小児頭大の石が5個据えられている。井戸廃棄時の祭祀に伴うものか、使用時における状態を保っているのかは判断し難い。

柵 S A 384113 南一条大路南側溝 S D 33002の南側で検出した。十六町の北辺を画するものである。柱間は3.15m(10.5尺)で、9間分を検出した。柱穴の平面形態は40~50cmの隅丸方形で、深さ20~50cmである。この柵は、十六町町内道路に設けられた門跡 S B 384124に接続して終わっている。西端の柱穴の座標は、 $X=-117,541.95 \cdot Y=-25,345.75$ である。この柱穴の位置では、南一条大路南側溝 S D 33002の溝心より2.3m南で、溝肩から柱穴心まで1.7mを測る。

門跡 S B 384124 柵 S A 384113の東端で検出した。2基の柱穴からなり、町内道路に設けられた門跡と考えられる。柵 S A 384113と一続きであるが、この一対の柱間のみ9尺で柵の柱間(10.5尺)と違う点、町内道路の通行を考えると柵で閉じているのではなく、開いていなければならない点を考慮して、門跡と判断した。東側の柱穴の座標は、 $X=-117,541.8 \cdot Y=-25,314.4$ である。この柱穴の位置では、柱穴心は南一条大路南側溝 S D 33002の溝心より2.35m、溝肩より1.6m南に位置している。

柵 S A 384123 掘立柱建物跡 S B 384112の北側で検出した東西2間の柵。S B 384112の梁間の一間と同じく柱間は9尺で、桁行と柱筋をそろえている。東端の柱穴の座標は、 $X=-117,545.35 \cdot Y=-25,325.7$ である。

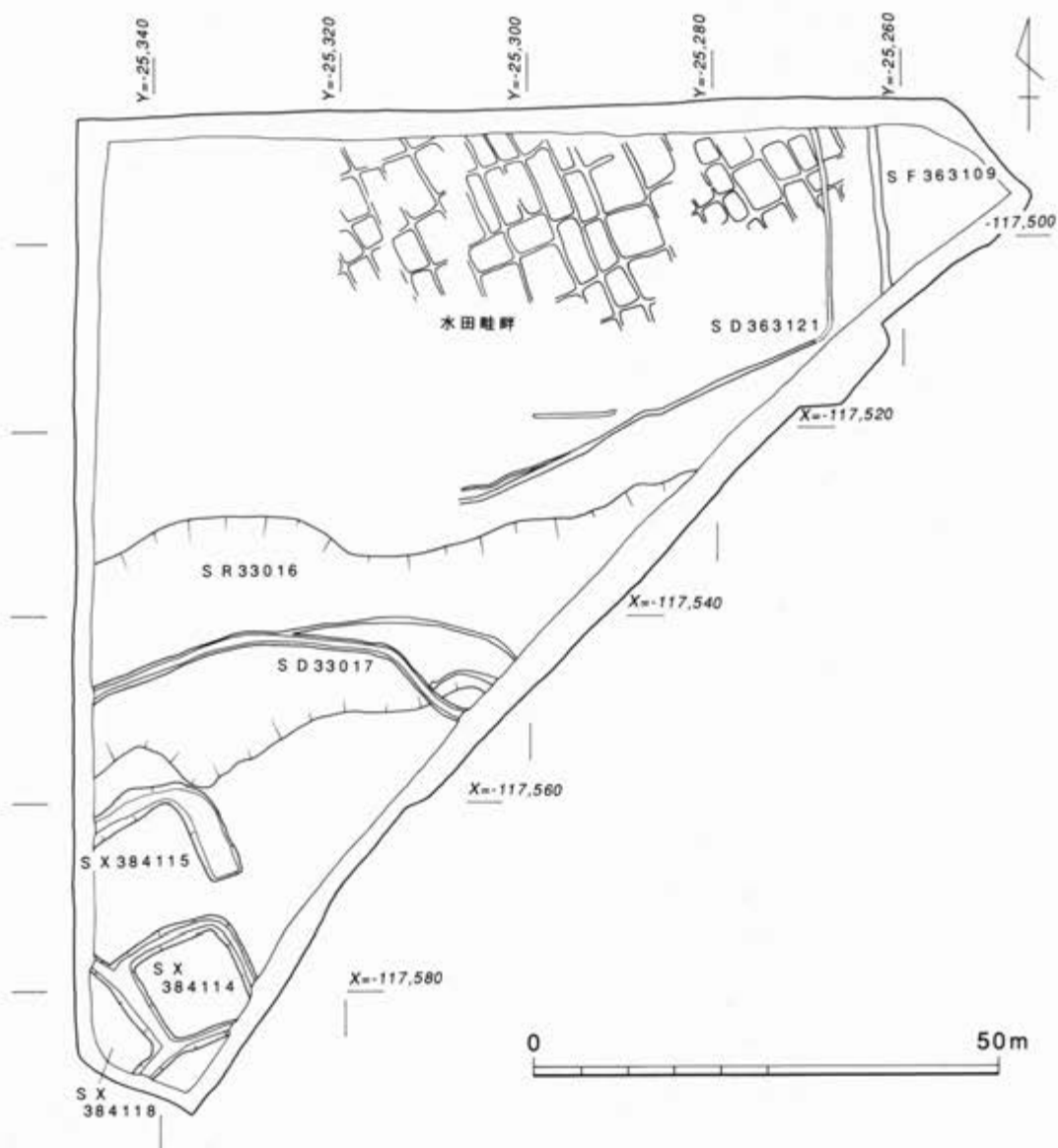
町内溝 S D 33010 S D 33011とともに、十六町の東西幅のほぼ1/2に位置する町内道路の側溝と推定される。幅1.4~1.6m・深さ最大0.2mの南北方向の溝で、約14mにわたって検出したが、北端部は徐々に浅くなり、南一条大路南側溝 S D 33002との接続関係の有無は確認できなかった。十六町の北辺を画する柵は、この溝の東側には造られていない。この溝の座標は、 $X=-117,555.0$ のとき、 $Y=-25,313.7$ である。

町内溝 S D 33011 S D 33010の西で検出した溝の残欠で、東肩の一部を検出したに留まった。S D 33010と対になる町内道路の側溝と考えられ、通路と判断される両溝間の平坦部の幅は1.8~2.4mである。柵 S A 384113はこの溝の東肩部で終わっており、この町内道路上には門があったと推定される。今回の調査では、両肩が確認できなかったのでその座標値は不明であるが、一昨年度にこの南で行った左京第330次調査で検出した溝心の座標値を参考のために掲げておくと、 $X=-117,570.0$ のとき、 $Y=-25,318.0$ である。

4. 長岡京期以前の遺構(第8図)

長岡京期以前の遺構 主として弥生・古墳時代のものであるが、調査地の中央部やや南側を東から西に流れる谷状の流路、この流路を挟んで北側の微高地では、昨年度の調査で検出した水田区画の続きを検出し、南側の微高地上では弥生時代の3基の方形周溝墓を検出した。

流路 S R 33016(図版第9-(3)・10-(1)) 東から西に向けて下る谷状の窪地を呈した自然流路である。肩部は北・南ともになだらかに下る緩傾斜面をなしており、流路の幅は16~22m程度を測る。西端部が最も深く、検出面からの深さは約0.5mである。北斜面・南斜面ともに、急激な



第8図 A-5地区(L384)遺構平面図(3) 古墳・弥生時代(1/800)

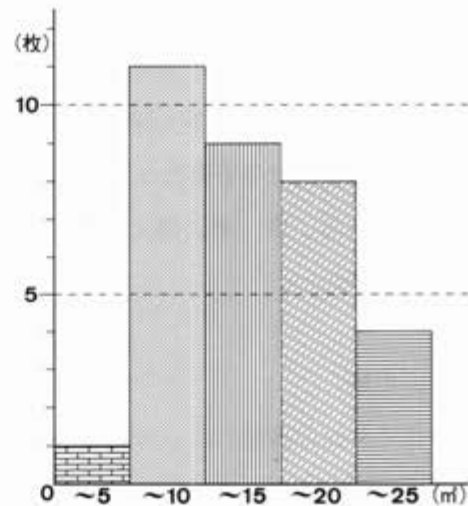
土砂流によって抉られたと推測される小さな溝状の筋が斜面に沿って認められた。この谷状の流路内の堆積土は、上層から黄色土-灰色粘土-黒灰色土-淡灰色粘土-黒灰色土-淡灰色土で、灰色粘土以下の堆積土には弥生~古墳時代と考えられる土器片が混じっている。しかも、これらの堆積土は流路内の堆積と考えられる粘土で、最上層の黄色土と土質・色調とも明らかに異なることから、最上層の黄色土は長岡京の造営に伴って埋め立てられたと判断される。

溝 S D 33017 左京第330次調査では、S R 33016の南肩部に沿うが、この調査地の南辺付近で南斜面を下って谷状流路の中央最深部を流れる溝である。土砂流で抉られた溝と考えられる。

方形周溝墓 S X 384115(図版第10-(2)) 「コ」の字形に造られた周溝墓で、南側の微高地の北縁辺で検出した。主体部は削平のためか、検出できなかった。西辺の溝は、調査地外にあってよくわからないが、北辺溝の幅は2.4~3.2mで、東辺溝の幅は最大4mとやや幅広く掘削されている。深さは0.5~0.7mを測る。この溝の南端は急激に浅くなって終わる。台状部は、東西の幅が

11.4mを測り、南北幅は、方形周溝墓S X384114の北辺までに2.8mの掘り残しがあるが、そこまでを台状部と捉えると、同じく11.4mを測り、ほぼ正方形を呈している。

方形周溝墓 S X 384114(図版第10-(3)) 9.8m×10.1mのほぼ正方形の台状部の四周に周溝がめぐり、ほぼ全形を確認できた。西辺の溝は、2.3~3.2mと幅広に掘削されているが、それ以外の溝幅は1.3~2.0mである。検出した溝の深さは70cmである。北辺・東辺の溝底では、深さ約0.1mの不明瞭な土坑状の窪みを検出しているが、溝内埋葬かどうかは確定できなかった。ただ、東辺の土坑状の落ち込み直上では、土器片が集中していた。これらの土器は、畿内第Ⅱ~Ⅲ様式のものである。



第9図 水田面積の規模

方形周溝墓 S X 384118 東辺溝が方形周溝墓 S X 384114の西辺溝と共有している。南辺溝の一部と東辺溝を検出した。溝幅は1.5~2mで、検出した高さは0.35~0.65mである。大半が調査地外にあるため、詳細は不明である。

水田遺構(図版第9-(1)・(2)) 北側の微高地上で検出した多数の方形区画で、昨年度調査の左京第362・363次調査で検出した水田区画の続きと判断される。出土遺物などは全くないが、周辺の調査で弥生時代の環濠や方形周溝墓群が確認されているため、昨年度の調査と同様に、弥生時代の水田遺構と考えておく。北西-南東方向に造られた平行する畦畔を基本線とし、そこに南西-北東の畦畔を任意に設けて区画している。前者の畦畔は、基本的に北から南まで一本につながっているのに対して、後者の畦畔は隣りあう2~3の区画間でのみつながっているだけである。総数70枚程度の水田区画を確認したが、面積のわかるものは24.8m²(5.5m×4.5m)を最大に、4.8m²(2.8m×1.7m)まで33枚あり、平均で13.2m²で、最頻値が5~10m²である(第9図)。昨年度にこの北側で調査した際に検出した水田の平均面積は10.4m²で、今回の成果と矛盾しない。

溝 S D 363121 大畦畔 S F 363109と平行に掘削され、谷状流路 S R 33016の手前で西へ屈曲し、削平のためか、徐々に浅くなって終わる。埋土は淡褐色砂質土である。断面「コ」の字状に掘られている。南端部は掘り直されており、北側の溝が南側の溝に先行する。内部からは遺物は全く出土しなかった。

大畦畔 S F 363109 調査地の東端で検出した南北方向の帯状の色の違いで、幅0.6~1.2mで、17.5mにわたって確認した。左京第363次で検出した畦畔状の道の延長部と考えられる。色調は茶褐色~褐色混黄褐色土で、周囲の地山と異なっているが、土質は地山と変わらないため、盛り土の残欠というよりも、この上にあったであろう盛り土によって雨水のしみ込みの違いがあり、それによる鉄分・マンガン質の沈着の違いが帯状に色調を違えたと考えられる。

5. 出土遺物(第5・6図、図版第21)

今回の調査で出土した遺物の総量は、整理用コンテナ・パッド60箱と概して少ない。長岡京期関係の遺構では、南一条大路南側溝 S D33002からの出土量が多い程度で、多量に出土した遺構はない。第6図は平安時代から長岡京期の遺構から出土した土器で、第5図は木器のうち、鍬の実測図である。南一条大路北側溝 S D33003内から出土した。各遺物の詳細については、付表6を参照されたい。

6. 小結

ここで今回の調査によって判明したことを以下、簡単にまとめておきたい。

長岡京期 まず、十三町の宅地は、南一条大路に面して門をあけていることが確認できた。門は2基あり、十三町のほぼ中央に隣接して造られる。その先後関係と周囲の遺構との関連を見たい。

門跡 S B384110の柱穴は、築地地業溝 S D384104を切って検出しているのので、築地を“壊して”造っているのは明らかである。一方、門跡 S X384122は、築地地業を行っていない。すなわち、築地を造る当初から門を“計画”していることがうかがえ、S X384122→S B384110への変遷が追える。ところが、十三町南辺溝 S D33004は、町内通路の側溝と判断される S D363086・S D362125・S D362138が取り付く範囲の6.5m(これはまさに S X384122と S B384110をあわせた幅にほぼ一致する。)にわたって狭く掘削されている。このことから、南辺溝を掘削した“当初から”門跡 S X384122と S B384110の二門をこの位置に造る計画のあったことが推測される。そうすると、門跡 S X384122と S B384110の二門が同時に並存していたと考えざるを得なくなり、先の考えと単純には整合しない。可能な解釈としては、築地・門跡 S X384122の計画→築地地業・門跡 S X384122の造作→門跡 S B384110との併設へと計画の変更→十三町南辺溝 S D33004の掘削、と考えられるが、築地の造作と南辺溝の計画と掘削時期がずれるという点でやや納得し難い。

十三町の南辺の築地に取り付けられた暗渠施設は、西羽東師川改修工事に先立つ調査時でも確認されている⁽¹⁶⁾。報告によると、S X07は十三町南辺溝と南一条大路北側溝の間を直交する方向で検出され、0.4~0.5mの掘形内部に底板・側板が据えられていた。十三町の中では、今回の調査で確認した暗渠 S X384091とほぼ対称の位置にあり、ともに築地の下位に設けられた排水施設と判断される。同様に築地の下の暗渠施設には、左京第289次調査の S X28917がある⁽¹⁷⁾。また、図面による判断では、左京五条四町内南辺築地を南北に横断する位置に溝が検出されており、築地の下に設けられた排水施設と考えられる⁽¹⁸⁾。また、南一条大路北側溝に接して土坑を検出した。P. A.工区他の調査でも、東三坊大路路面上で不明土坑を多く調査している。近年の調査では、条坊路上の土坑が多く見つかっており、宅地から出たゴミを捨てた穴という考えもある⁽¹⁹⁾。「長屋王邸」の調査で、大量の木筒が見つかったのも二条大路上の「土坑」であり、この遺構と共通するものである。一方、十六町は少なくとも1/2町の宅地であることが判明した。十六町内の北辺柵 S A384113は、東西の1/2町に位置する町内道路の手前で終わっており、柵の東端には門が開いているが、東側の宅地には柵が造られていない。しかも、町内道路の西で検出した掘立柱

建物跡S B 384112は、廂が西側に造られており、西側の掘立柱建物跡群を意識して造られている点、町内道路より東側では建物跡がほとんどなく、宅地の利用形態に著しい差が見られる点からもうなずけよう。

古墳・弥生時代 今回の調査で、谷地形状の流路がこの地域の微地形を形成していたことが判明した。結論的にいえば、この谷地形は、長岡京の造営時に埋め立てられたと考えられる。それ以前には、流路を挟んで北と南に微高地が分布し、この地の土地利用に制約を加えていた。古墳時代以降についてはよくわからないが、弥生時代中期には、北の微高地には水田と左京第361・363次調査の周溝墓群、その東北部には居住区(左京第361・336次調査)があり、南の微高地上にも周溝墓が分布している。弥生時代の集落には複数の墓域が分布しており、この東土川遺跡の弥生時代集落の調査では、環濠内で2か所、環濠外で3か所の周溝墓群が確認できた。ただ、今回のA-5地区の調査で検出した周溝墓に関しては、間に浅い谷状の流路が存在することから、南側に存在する別の弥生時代集落に伴う墓域の可能性がある。

(岩松 保)

(2) 長岡京跡左京第385次 P.A.工区B-5b・B-8地区 (7ANVKN-10・7ANVST-6)

1. 中世の遺構(第10図、図版第11)

調査地の全域にわたって、素掘り溝を多数検出している。掘削方向は南北方向が多いが、西南隅では東西方向の溝も検出した。今までの調査によって、これらの溝の方向の違いは、条里型地割りの坪の違いを反映していると考えられる。今回の調査地では、溝内から遺物はほとんど出土しなかったが、周辺の調査で、これらの溝群から、13~14世紀を中心とした時期の瓦器碗などが出土している。本報告で詳細したい。

土坑S K 385544(第11図2) 調査地中央東隅で検出した。直径85cmほどの円形の掘形を持つ。深さは検出面から1.0mで、井戸側、井筒などを抜き取ったものとみられる。井戸底から、土師器皿・甕・羽釜、楠葉系瓦器碗、須恵器練り鉢などが出土した(第13図1~6)。12世紀前葉の共存関係を示している。特に、甕・羽釜・練り鉢は、ワラ状の植物繊維で編まれた袋に入れられていたと想定できる。

2. 平安時代の遺構(第10図)

溝S D 385229 五町の北部を東西に貫流する溝。幅は0.6~1.2mほどで、半円形の掘形をもつ。東側に行くに従って、広く深くなる。溝内からは9世紀後葉から10世紀初頭の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・無釉陶器などが出土した(第13図12・13・15・20)。

付表3 B-5b・B-8地区遺構記録番号対応表

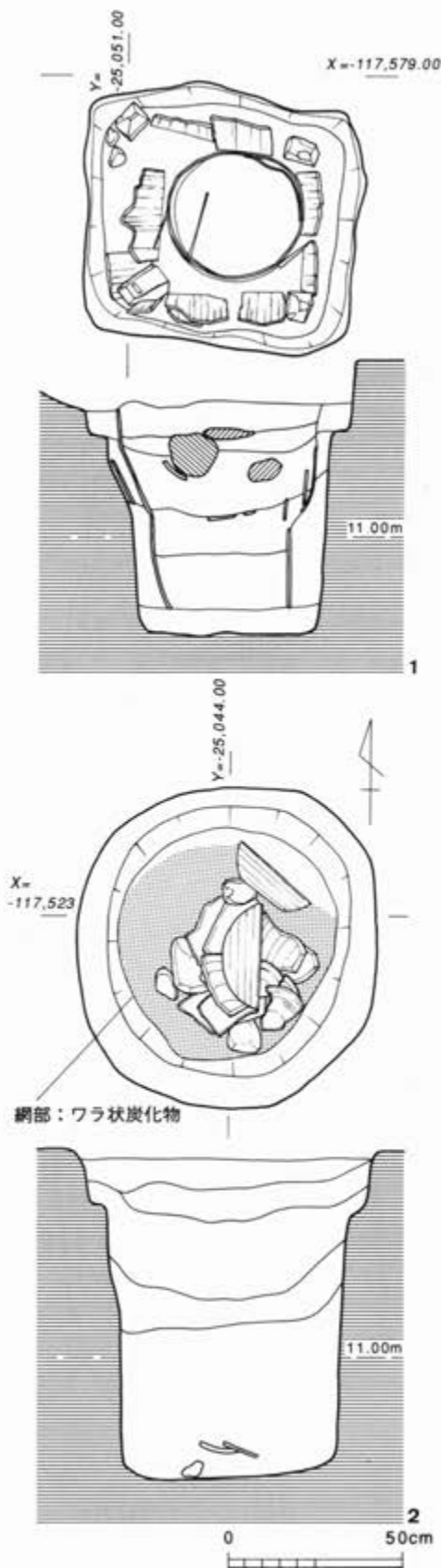
報告番号	時期	説明会資料	記録番号	備考
S D 303001	平安時代	溝 7	S D 215	平安時代溝
S D 385229	平安時代	—	S D 229	平安時代溝
S D 303002	長岡京期	溝 3	S D 503	東四坊第 1 小路東側溝
S D 303007	飛鳥時代	流路 3	S D 607	自然流路
S D 303008	古墳時代	流路 2	S D 608	自然流路
S D 303009	古墳時代	溝 1	S D 609	
S D 303011	弥生時代	濠 1	S D 610	S D 303010 と合流
S D 33003	長岡京期	溝 1	S D 501	南一条大路北側溝
S D 33002	長岡京期	溝 2	S D 502	南一条大路南側溝
S B 33303	長岡京期	掘立柱建物跡 8	S B 33303	八町宅地内建物
S D 33304	飛鳥時代	溝 6	S D 507	
S D 33305	長岡京期	溝 5	S D 505	水路状遺構
S K 385322	平安時代	井戸 1	S K 322	井戸抜き取り坑
S D 385504	長岡京期	溝 4	S D 504	東四坊第 1 小路東側溝
S B 385509	長岡京期	掘立柱建物跡 1	S B 509	五町宅地内建物
S B 385510	長岡京期	掘立柱建物跡 2	S B 510	五町宅地内建物
S B 385511	長岡京期	掘立柱建物跡 9	S B 511	五町宅地内建物
S B 385512	長岡京期	掘立柱建物跡 3	S B 512	五町宅地内建物
S B 385513	長岡京期	掘立柱建物跡 4	S B 513	五町宅地内建物
S B 385514	長岡京期	掘立柱建物跡 5	S B 514	八町宅地内建物
S B 385515	長岡京期	掘立柱建物跡 6	S B 515	八町宅地内建物
S B 385516	長岡京期	掘立柱建物跡 7	S B 516	八町宅地内建物
S E 385519	平安時代	—	S E 519	井戸(縦板組+曲物)
S B 385533	長岡京期	—	S B 533	五町宅地内建物
S E 385536	平安時代	—	S E 536	井戸(縦板組+曲物)
S E 385537	長岡京期	—	S E 537	井戸(縦板組+曲物)
S X 385538	長岡京期	—	S X 538	方形土坑
S E 385543	中世	—	S E 543	井戸(縦板組+曲物)
S K 385544	中世	—	S K 544	井戸抜き取り坑
S B 385546	長岡京期	—	S B 546	五町宅地内建物
S B 385547	長岡京期	—	S B 547	五町宅地内門
S X 385548	長岡京期	—	S X 548	路面整地土坑
S D 385553	長岡京期	—	S D 553	東四坊第 1 小路西側溝
S D 385601	古墳時代	溝 8	S D 601	S D 303005 か
S D 385602	古墳時代	溝 7	S D 602	
S D 385603	古墳時代	溝 6	S D 603	
S D 385604	古墳時代	溝 5	S D 604	
S D 385605	古墳時代	溝 4	S D 605	
S D 385606	古墳時代	溝 2	S D 606	
S D 385611	古墳時代	溝 3	S D 611	
S K 385613	弥生時代	—	S X 613	石器剥片出土
S T 385616	弥生時代	方形周溝墓 4	S T 616	
S T 385615	弥生時代	方形周溝墓 3	S T 615	
S T 385614	弥生時代	方形周溝墓 2	S T 614	
S T 385619	弥生時代	方形周溝墓 1	S T 619	
S K 385630	弥生時代	—	S X 630	石器剥片出土

土坑 S K 385322 南一条大路南側溝 S D 33002 と溝 S D 33305 の交差する地点で検出した直径約 6 m の不整形円形の土坑である。井戸側などの木材は、廃絶の際に取り除かれたと思われる、井戸掘形も抜き取り土坑による掘削のために遺存していない。また、遺物も土器が細片の状態で出土したにすぎない。

井戸 S E 385519 (第 12 図 1、図版第 12-(2)) 調査地北端で検出した。検出面で直径 1.25~1.35 m のややいびつな円形の掘形で、深さは 1.35 m を測る。南西の隅柱と南側の縦板が 4 枚ほど遺存していたため、四隅柱に縦板を組む方形の井戸側が抜き取られたと考えられる。北側は、横板材に縦板留めを施した木杵材を転用して縦板に替えていた。井筒(水溜め)は、三段に組まれた円形曲物の側板で、中段の曲物側板は 6 重になっていた。井筒の総長は 0.66 m になる。井筒内から黒色土器・東海系灰釉陶器が出土した(第 13 図 11・14)。10 世紀前半の廃絶と思われる。



第10図 B-5b・B-8地区(L385)遺構平面図(1) 中世・平安時代(1/600)



第11図 井戸(1) 1/20
1. S E 385536 2. S K 385544

井戸 S E 385543(第12図2、図版第12-(3)) 調査地中央東側で検出した。南北約1.0m・東西約1.1mの方形の掘形を持つ。検出面からの深さは約1mを測る。井戸側は、縦板を方形に組んだだけの構造で、隅支柱や横棧を持たない。直径50cm・高さ40cmの円形曲物の側板を井戸底におく。曲物内から無釉陶器が出土した(第13図7~10・17・19・21)。10世紀前半の廃絶と思われる。

井戸 S E 385536(第11図1、図版第12-(1)) 調査地東南部の掘立柱建物跡 S B 385515の南東で検出した。南北約0.7m・東西約0.75mの方形の掘形を持ち、深さは検出面から0.75mを測る。井戸側は、四隅柱に転用材を用い、一辺3枚ほどの縦板を組む。井底には円形曲物の側板を置き、水溜めとする。土師器・無釉陶器が出土した(第13図16~18)。10世紀前葉頃か。

3. 長岡京期の遺構(第14図)

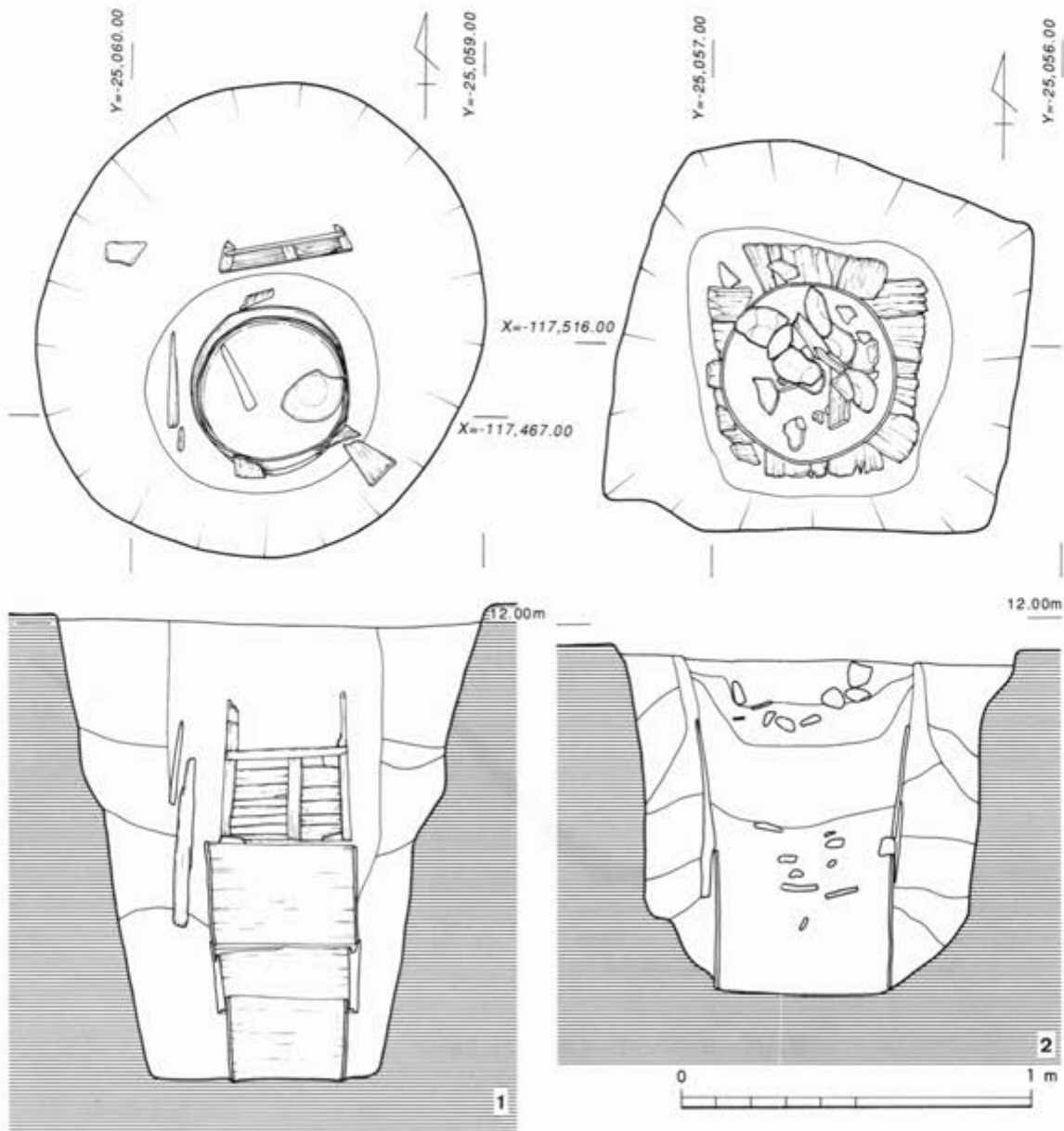
a. 条坊関連遺構

条坊関連遺構では、南一条大路の南北両側溝(図版第13-(1))及び、東四坊第一小路両側溝を検出した。南一条大路と東四坊第一小路の交差点では、大路の側溝が小路を横断するいわゆる条型となっており、大路通行が優先され、機能的な排水設計がうかがえる。

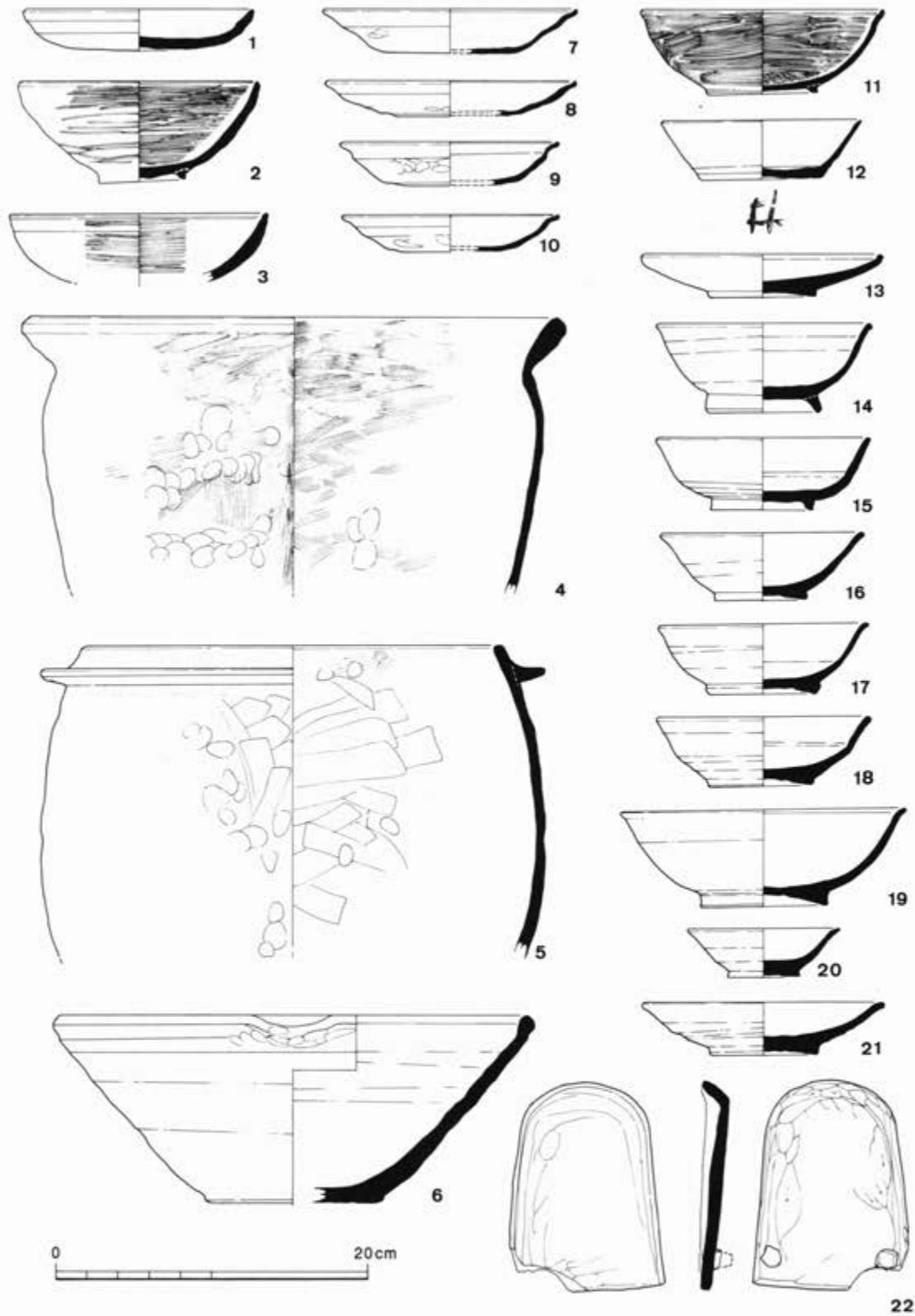
南一条大路北側溝 S D 33003 東西約77mにわたって検出した。幅1.0~1.2m・深さ0.40~0.55mを測る。溝掘形は、断面逆台形状に掘削される(第15図1~3、図版第13-(2)・(3))。床面には礫敷きの部分もある。底面近くに有機質の多い灰黒色土層が堆積する。掘形側面には、直径10cm程度の杭跡が列になって認められた。板材を組み合わせてあてがい、流水による溝の崩壊と宅地への冠水を防いだと考えられる。この北側溝の西側では、溝の埋没後に再掘削されたようすが認められる(第

15図3、図版第13-(3))。溝内から、土師器碗や甕などが出土した(第16図9・11・19)。溝心の座標は、調査地の東端部でX=-117,513.32(Y=-25,040.0)、中央部でX=-117,513.32(Y=-25,075.0)、西端部でX=-117,513.68(Y=-25,110.0)である。

南一条大路南側溝 S D 33002 北側溝と同様、東西約77mにわたって検出した。幅1.3~1.6m・深さ0.50~0.60mを測る。北側溝同様、溝の埋没による再掘削が認められ、再掘削によって側溝心が70~80cmほど北側にずれる(第15図、図版第14-(1)・(2))。溝心の座標は、調査地の東端部でX=-117,537.68(Y=-25,040.0)、中央部でX=-117,538.02(Y=-25,075.0)、西端部でX=-117,538.30(Y=-25,110.0)である。溝内から、土師器・須恵器などが出土した(第16図5・17・18)。南一条大路は、両側溝心心間の距離で、調査地の東端部で、24.36m(約82尺)(Y=-25,040.0)、中央部で24.7m(約83尺)(Y=-25,075.0)、西端部で24.62m(約83尺)(Y=-25,110.0)



第12図 井戸(2) 1/20
1. S E 385519 2. S E 385543



第13図 B-5b・B-8地区出土土器(1) 中世・平安時代

1~6. S K385544

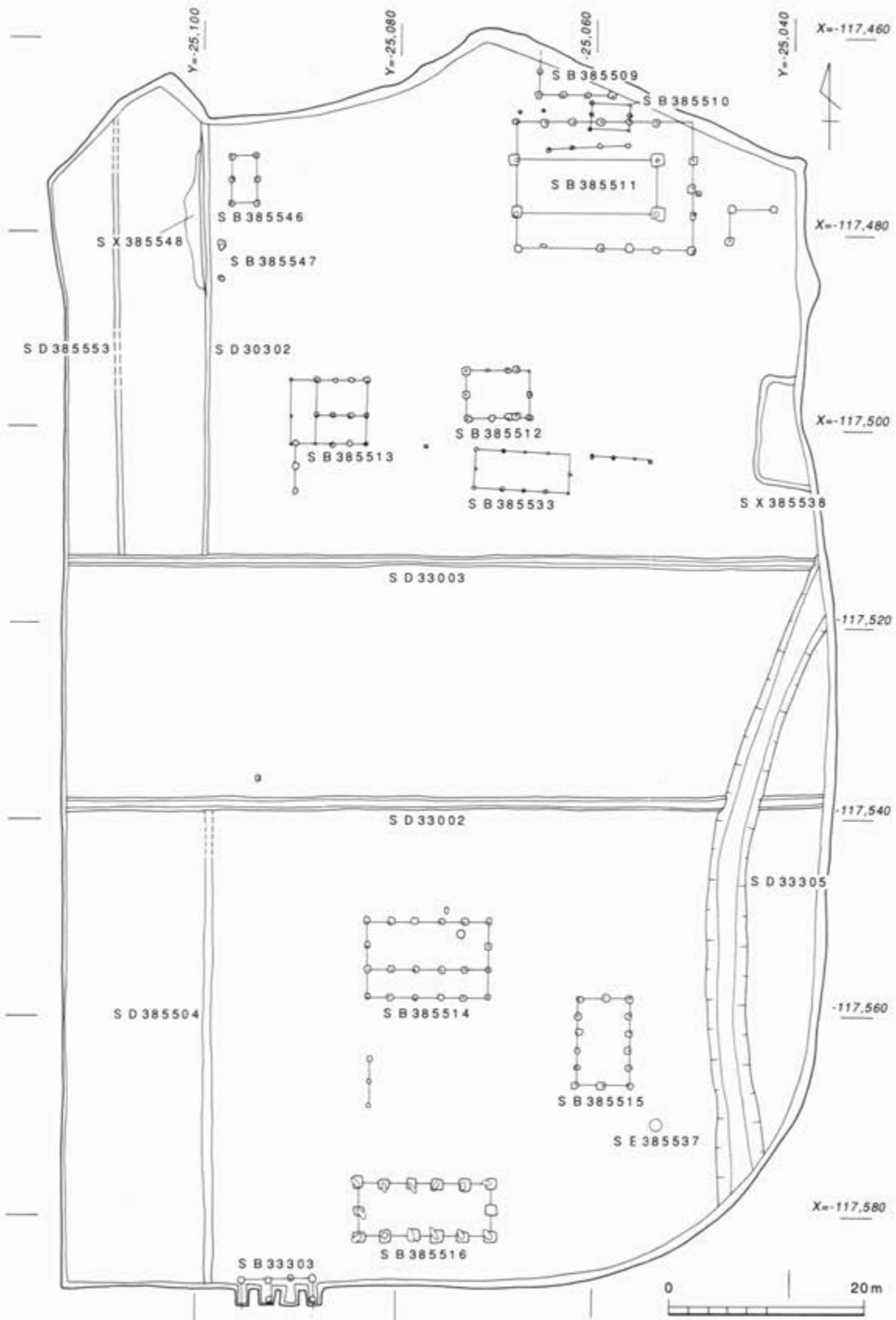
7~10・17・19・21. S E385543

11・14. S E385519

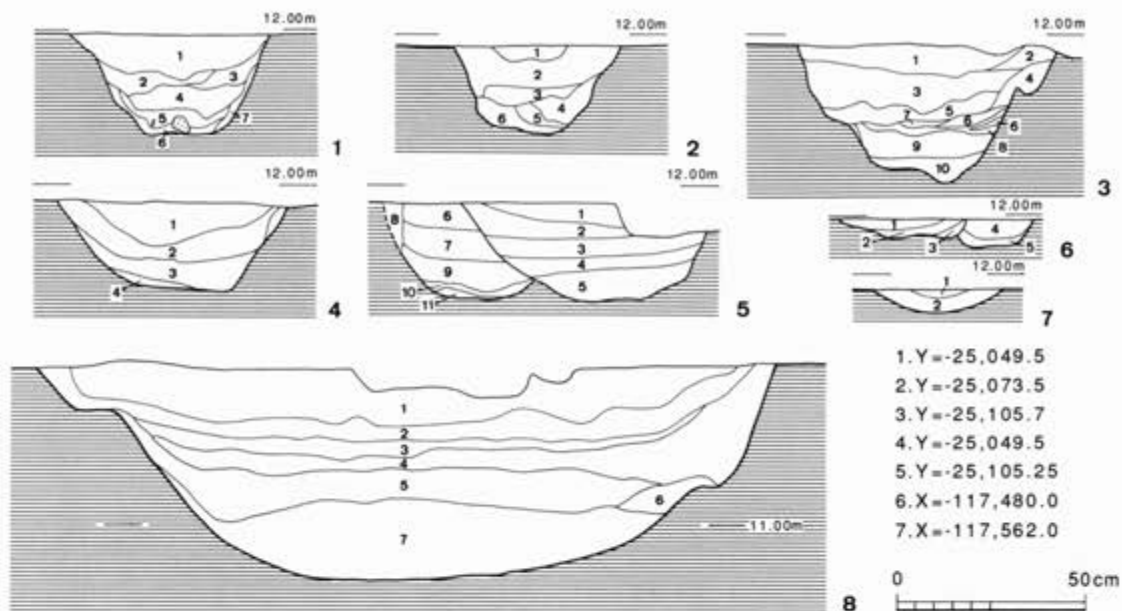
12・13・15・20. S D385229

16~18. S E385536

22. S X385538



第14図 B-5b・B-8地区(L385)遺構平面図(2) 長岡京期(1/600)



第15図 検出遺構断面土層図(長岡京期) 1/20

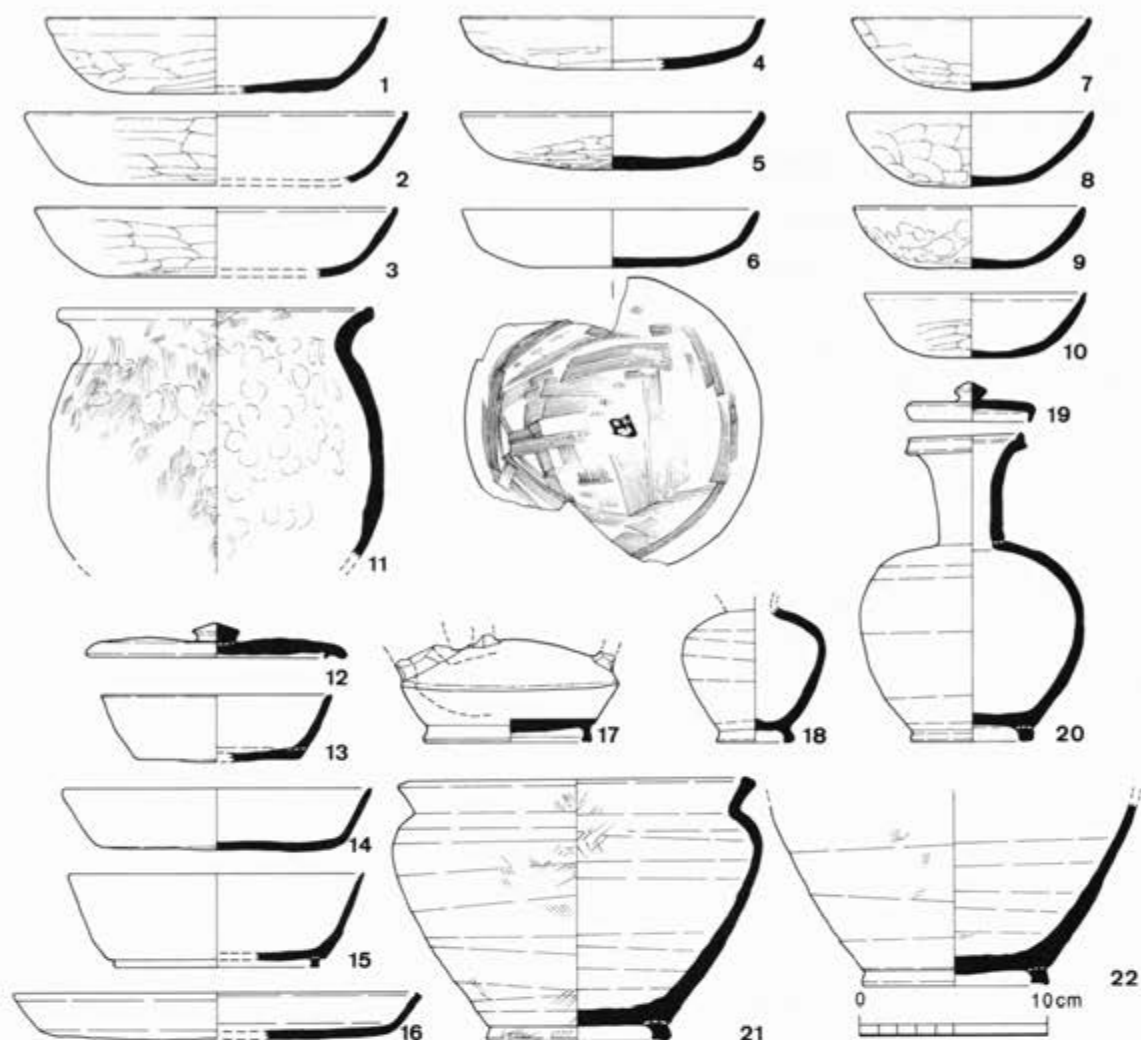
- | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 南一条大路北側溝 b 区西壁 | 2. 南一条大路北側溝 e 区西壁 | 3. 南一条大路北側溝 i 区西壁 |
| 4. 南一条大路南側溝 b 区西壁 | 5. 南一条大路南側溝 i 区西壁 | |
| 6. 東三坊坊間第一小路東側溝 k 区北壁 | 7. 東三坊坊間第一小路東側溝 C 区北壁 | 8. 大溝 S D 33305 C 区南壁 |

土層名

1 - 1. 黄褐色砂礫土層	2. 暗褐色砂礫土層	3. 暗褐色砂土層	4. 暗黄褐色砂土層
5. 暗青灰色粘土層	6. 灰白色粘土層	7. 灰黄褐色粘土層	
2 - 1. 黄褐色砂礫土層	2. 暗黄褐色砂礫土層	3. 明黄褐色砂土層	4. 暗青灰色シルト+粘土層
5. 暗青灰色粘土層	6. 黄灰色シルト層		
3 - 1. 黄褐色砂礫土層	2. 黄褐色砂土層	3. 黄褐色砂礫土層	4. 黄褐色砂土層
5. 黄色シルト+粘土層	6. 暗青灰色粘土層	7. 明黄褐色砂土層	8. 暗黄褐色砂土層
9. 暗青灰色粘土+シルト層	10. 灰白色粘土層		
4 - 1. 暗紫灰褐色砂質土層	2. 暗灰褐色砂質土層	3. 暗灰褐色粘質土	4. 淡黄灰色粘質土
5 - 1. 灰褐色砂質土	2. 暗橙灰色砂質土	3. 暗灰褐色粘質土	4. 淡黄褐色粘質土
5. 暗灰色粘質土	6. 紫灰褐色砂質土	7. 暗褐色砂質土	8. 紫灰色砂質土(中世土坑)
9. 淡黄灰色粘質土	10. 濃灰色粘質土	11. 濃灰色粘土	
6 - 1. 暗褐色砂土層	2. 暗灰色砂土層	3. 黒褐色砂質土層	4. 褐色砂質土層
5. 黒灰褐色粘質土層			
7 - 1. 暗青紫灰色粘砂質土層	2. 青紫灰色粘砂質土層		
8 - 1. 暗橙褐色砂+シルト層	2. 明橙褐色粘質土層	3. 淡青灰色粘土層	4. 淡青灰色シルト+細砂層
5. 暗灰色シルト+粘土層	6. 暗灰色粘土+シルト層	7. 暗灰色シルト層	

である。A-5 地区で検出した同大路両側溝心々間距離は、25.05~25.15m(84~85尺)であり、東四坊では、路面幅が若干狭くなる。

東四坊第一小路東側溝 S D 30302 南一条大路によって隔てられており、北側は南一条四坊五町の宅地の西端を限る溝となる。削平によって幅0.3m・深さ0.15mほどしか遺存しない。北側では、やや幅広になり、幅0.5m・深さ0.3mほどになる。再掘削によって側溝心が20cmほど西にずれる。溝内から、須恵器が出土した(第16図21・22)。溝心の座標は、調査地の北端部で Y=-25,099.96(X=-117,510.0)、南端部で Y=-25,100.44(X=-117,470.0)、及び北側再掘削後の溝心は Y=-25,100.24(X=-117,470.0)である。



第16図 B-5b・B-8地区出土土器(2) 長岡京期

1・4・7. S E385537 2・3・6・8・10・12~16・20. S D33305 5・17・18. S D33002
9・11・19. S D33003 21・22. S D30302

東四坊第一小路東側溝 S D 385504 南一条大路の南側、二条四坊八町の宅地の西端を限る側溝である。南一条大路を隔てた S D 30302 よりもやや深く、幅 0.8m・深さ 0.5m ほど遺存する。溝心の座標は、調査地の北端部で Y=-25,099.448 (X=-117,545.0)、南端部で Y=-25,099.032 (X=-117,585.0) である。

東四坊第一小路西側溝 S D 385553 南一条大路によって隔てられており、調査地北側の南一条四坊四町の宅地の東端を限る。溝心の座標は、調査地の北端部で Y=-25,109.28 (X=-117,476.0)、南端部で Y=-25,108.68 (X=-117,512.0) である。東四坊第一小路は、検出範囲内の北側で、両側溝心々間 9.32m・路面幅 8.92m、南側で、両側溝心々間 8.72m・路面幅 8.20m となる。二条四坊一町の東端を限る東四坊第一小路西側溝は、検出し得なかった。中世溝の掘削によって削平されたと思われる。

土坑 S X 385548 東四坊第一小路路面の東辺部で、同東側溝 S D 33003 に沿って検出した溝状を呈する浅い土坑である。南北約 14.2m にわたって確認した。東西の最大幅 1.6m・深さ 0.05~0.15m である。側溝の再掘削土を路面上の縁辺部に埋めたものと考えられる。

b. 五町内の遺構(第25図)

掘立柱建物跡 S B 385509 長岡京左京第337次調査で検出した⁽¹⁸²⁰⁾柵 S A 33704が北側柱列となる2間×3間の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法が、梁間2.4m(8尺)・桁行2.4m(8尺)となる等間の建物跡である。建物跡は、座標東で1°ほど南に振る。柱掘形は60cm前後で、直径22～26cmの柱痕跡を確認した。南側柱筋は、南一条大路北側溝心から47.44m(160尺)北に位置する。南東隅の柱心は $X=-117,465.840 \cdot Y=-25,066.288$ である。

掘立柱建物跡 S B 385510 掘立柱建物跡 S B 385509と掘立柱建物跡 S B 385511の位置に重複する2間×3間の南北棟の小型の掘立柱建物跡である。柱掘形に切りあい関係はないが、建物跡は座標東で南に3°近く振るため、長岡京期でも後半か、平安時代初頭に下る。北西隅の柱心は $X=-117,466.644 \cdot Y=-25,060.924$ である。

掘立柱建物跡 S B 385511(図版第15-(1)) 2間×5間の身舎に、北・東・南に廂をもつ東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、梁間2.7m(9尺)・桁行2.82m(9.5尺)である。廂の出は、南北二面は3.85m(13尺)、東は3.7m(12.5尺)である。建物跡の振角は座標東で北に10'振る。身舎の四隅と廂の柱穴のみが遺存していたが、それ以外の柱穴は著しい削平のため遺存していなかった。身舎の四隅の柱掘形は、一辺1.3m前後の隅丸方形で、柱抜き取り痕を検出した。抜き取り痕からすれば、直径30cm以上の柱を推測しうる。掘形床面からは、ていねいに円く敷き並べられた拳大の根石を検出した。S B 385511の西妻は、東四坊第一小路東側溝心から31.8m(107尺)東、門跡 S B 385547から30.3m(102尺)東に位置している。また、南廂柱筋は門跡 S B 385547の北の柱穴にそろえ、南一条大路北側溝心より、31.8m(約107.5尺)北となり、宅地の南・西を限る条坊路側溝心からほぼ等距離に配置される。柵や築地などの宅地外郭施設心から大路北側溝心までを7.5尺前後とすれば、宅地南辺から100尺となる。北西隅の柱心は、 $X=-117,472.472 \cdot Y=-25,068.608$ である。

掘立柱建物跡 S B 385512(図版第15-(2)) 2間×3間の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、梁間が2.4m(8尺)、桁行が2.1m(7尺)になる。建物跡は、座標東で北に40'あまり振る。柱掘形の一辺が0.7mほどになり、柱痕跡は直径0.2～0.24mを測る。隣接して同規模の柱穴がみられることから、建て替えがあったと見られる。南側柱筋は、南一条大路北側溝心から14.6m(49尺)北に配置される。北西隅の柱心は、 $X=-117,494.036 \cdot Y=-25,073.504$ である。

掘立柱建物跡 S B 385513(図版第15-(3)) 五町の宅地の南西で検出した、1間×3間の小規模な身舎に南廂が取り付く東西棟の掘立柱建物跡である。西側には、直径約10cmの柱穴が棟柱筋にそろえて検出された。目隠し塀か土間廂のいずれかであろう。柱間寸法は、梁間3.58m(12尺)・桁行1.64～1.80m(5.5～6尺)を測る。南廂の出は2.8m(9.5尺)、西土間廂の出は2.52m(8.5尺)。柱穴掘形は40cm内外で、柱痕の直径は20cmを大きく越えない。建物跡は、座標東で7'ほど南に振る。一辺約0.2mの掘形しかなく、雑舎として機能していたとみられる。南側柱筋は、南一条大路北側溝心から14.8m(50尺)北に配置される。北西隅の柱心は、 $X=-117,495.136 \cdot Y=-25,088.624$ である。

掘立柱建物跡 S B 385533 S B 385512の南前面にある2間×3間の小規模な東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、梁間1.93m(6.5尺)・桁行2.2m(7.5尺)と2.7m(9尺)で、直径約0.4mの円形の柱掘形に直径約0.14mの柱痕を確認した。建物跡は、S B 385510に平行し、座標東で南に3°近く振るため、時期は新しくなる。南西隅の柱心は南一条大路北側溝心から7.4m(25尺)北に配置される。北西隅の柱心は、 $X=-117,502.180 \cdot Y=-25,072.320$ である。

掘立柱建物跡 S B 385546(図版第16-(1)) 東四坊第一小路に面した1間×2間の小規模な南北棟掘立柱建物跡である。柱間寸法は、梁間2.5m(8.5尺)・桁行2.7m(9尺)。隅丸方形の柱掘形の一辺はおおよそ50~60cm。柱痕跡は20cmを測る。建物跡は、座標北で1°西に振る。東側柱筋は東四坊第一小路東側溝心から2.73m(9尺)に位置する。北西隅の柱心は、 $X=-117,472.352 \cdot Y=-25,097.524$ である。

門跡 S B 385547 東四坊第一小路に面し、S B 385546の南側に位置する2基の柱穴である。南側の柱穴は近代の攪乱坑のため、掘形底面の柱痕跡しか遺存しなかったが、北側は直径70~80cm・深さ80cmの柱掘形に、柱の抜き取り痕跡が認められた。両柱の距離は、推定3.52m(12尺)である。掘形床面には柄穴をもつ建築部材を3分割した木材が礎板として遺存していた(図版第16-(2))。南北両柱を結ぶ中点は、南一条大路北側溝心から約100尺北にあり、東四坊第一小路東側溝心から1.48m(5尺)の宅地外郭区画線上に位置する。北側の柱心は、推定 $X=-117,481.28 \cdot Y=-25,099.52$ である。南側の柱心は、推定 $X=-117,484.80 \cdot Y=-25,099.49$ である。

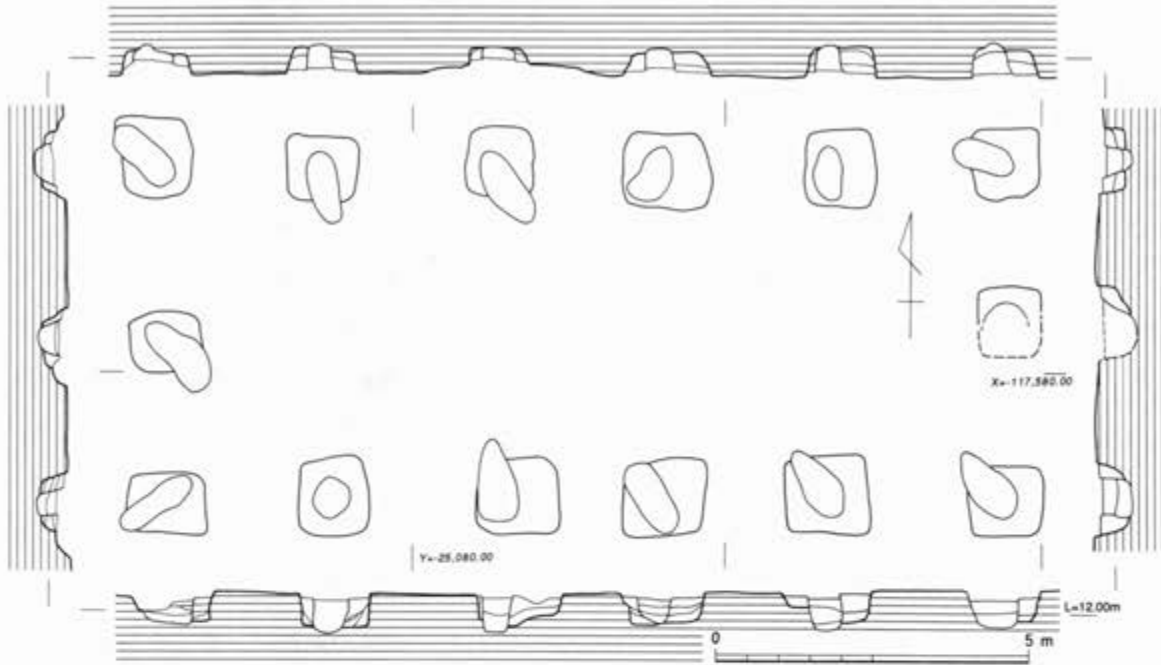
方形土坑 S X 385538(図版第16-(3)) 調査地の北東で検出した南北約5.5m・東西3m以上の長方形の土坑である。最下層から長岡京期の遺物がみられることや、S D 33305に接続して掘削されたと考えられることから、長岡京期に掘削されたと考えられる。埋没時期は、S D 385229の埋没時期とはほぼ同じ9世紀後半と考えられる。

b. 八町内の遺構

掘立柱建物跡 S B 385514(図版第17-(1)) 八町内の北西に位置する2間×5間の身舎に南側に廂をもつ東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は梁間・桁行ともに2.4m(8尺)等間で、廂の出は2.7m(9尺)を測る。一辺60cm前後の隅丸方形の柱掘形をもち、柱痕跡は直径15cm内外である。建物跡は座標東で40°余り北に振る。S B 385514の身舎の北側柱筋は、南一条大路南側溝心から12.1m(40尺)南に配置される。北西隅の柱心は、 $X=-117,550.128 \cdot Y=-25,083.272$ である。

掘立柱建物跡 S B 385515(図版第17-(2)) S B 385514の南東に位置する2間×5間の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は梁間2.7m(9尺)・桁行1.8m(6尺)を測る。建物跡は、座標北で東に2°ほど振る。北妻をS B 385514の南廂柱筋にそろえ、南一条大路南側溝心から19.9m(67尺)に配置させる。隅丸方形の柱掘形は一辺0.5~0.9m、柱痕跡も直径0.14~0.22mと統一されない。北西隅の柱心は、 $X=-117,557.628 \cdot Y=-25,061.748$ である。

掘立柱建物跡 S B 385516(第17図、図版第17-(3)) S B 385514の南側に位置する2間×5間の東西棟の掘立柱建物跡である。一辺1~1.4mほどの大型の隅丸方形の柱掘形を持つ八町内の中心的な建物跡と考えられる。S B 385514の主軸から60cm(2尺)東にずれるが、座標に対する振角



第17図 掘立柱建物跡 S B 385516 実測図 (1/12)

が一致し、平行して建てられたとみられる。柱間寸法は、梁間・桁行ともに2.7m(9尺)を測る。柱痕跡は、0.4m内外と推定される。北側柱筋は南一条大路南側溝心から38.5m(130尺)に位置する。北西隅の柱心は、 $X=-117,576.752 \cdot Y=-25,084.092$ である。

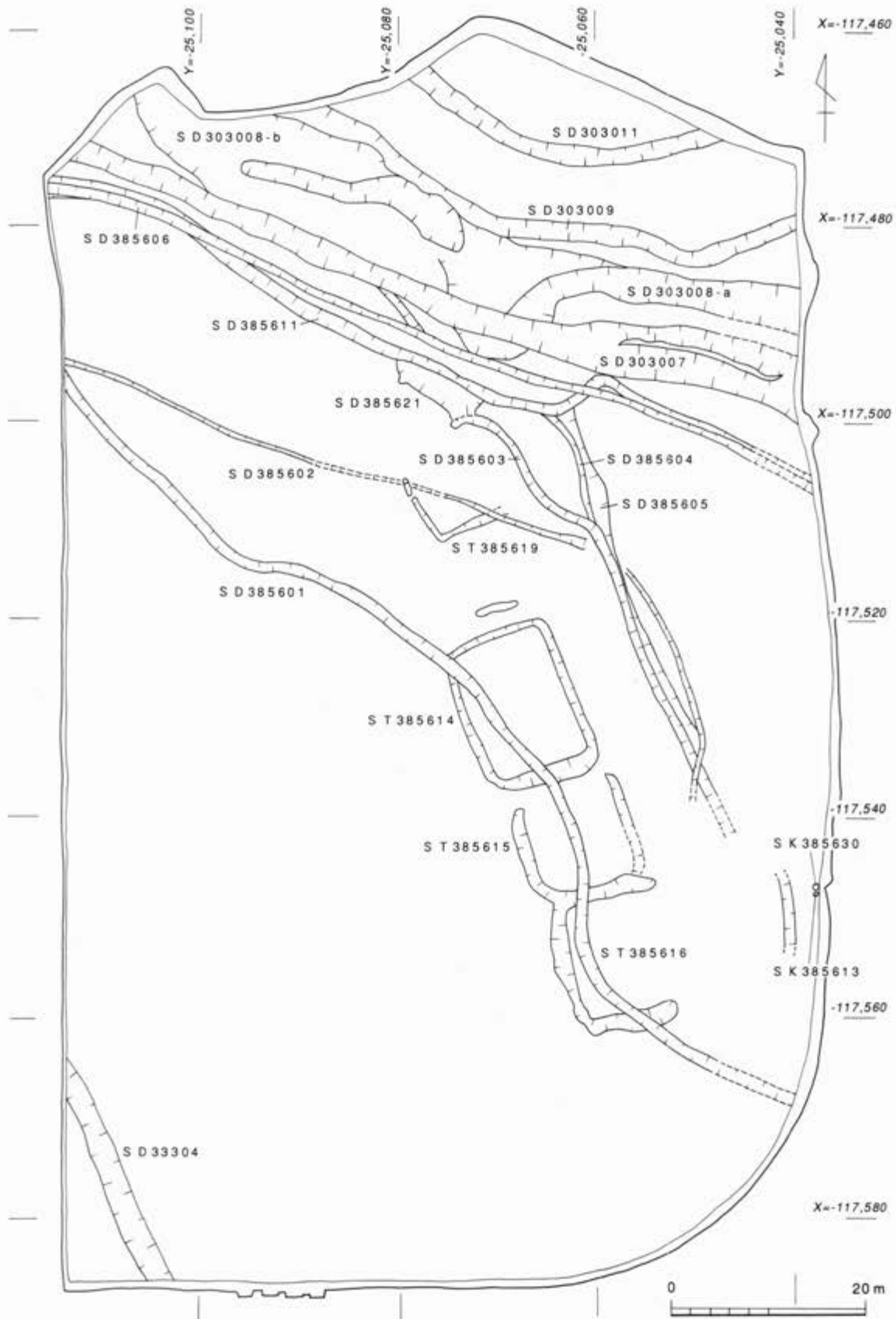
掘立柱建物跡 S B 333036 左京第333次調査で見つかった、S B 33303を身舎の南側柱筋とする2間×3間の身舎をもつ東西棟の小型の掘立柱建物跡である。北に廂をもつ。柱間寸法は、梁間2.2m(7.5尺)・桁行2.4~2.7m(8~9尺)を測る。柱掘形は一辺が60cm内外で、直径約0.18mの柱痕跡が認められた。建物跡の振角は、座標東で $2^{\circ}40'$ 北となる。身舎の北西隅の棟柱心は、 $X=-117,591.116 \cdot Y=-25,095.964$ である。



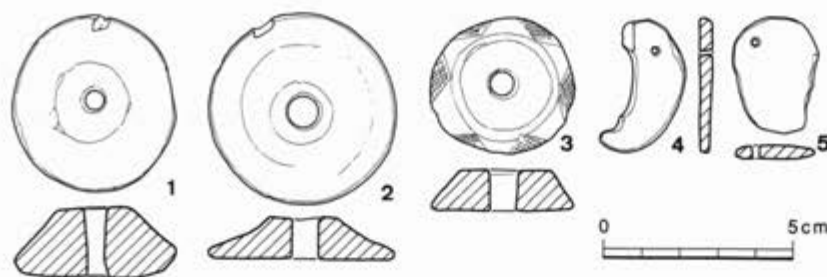
第18図 人形(1/3)

井戸 S E 385537 S B 385515の南東に位置する。円形の掘形をもち、直径1.2m・深さ0.8m。井戸側や井筒を抜き取った土坑と考えられる。土坑内から長岡京期の土師器杯・皿・椀が出土した(第16図1・4・7)。

溝 S D 33305(図版第14-(3)) 調査地の南東部、南北に貫流する幅5m・深さ1.6m以上の大溝である。掘形は、断面が左右対称に近い椀状に掘削されているが、大路路面部分のみ、断面が逆台形状に掘削されている。また、長岡京期の南一条大路両側溝と切り合い関係をもたないことから、路面を横断していたと考えられる。水路として使用されたと想定される。埋土全体から、飛鳥時代から長岡京期の各種土器(第16図2・3・6・8・10・12~16・20)が出土した。また、暗褐色粘土層からは人形(第18図)や、獣骨細片が出土した。八町の宅地を東西に2分割する位置に掘削される。



第19図 B-5b・B-8地区(L385)遺構平面図(3) 古墳・弥生時代(1/600)



第20図 B-5b地区出土石製品(古墳時代)
1. S D 303008 2・4・5. S D 303009 3. S D 385601

4. 飛鳥・古墳時代の遺構(第19図)

溝 S D 385601 北西から蛇行しながら、調査地の南東へのびる溝で総長100m以上検出した。幅約1m・深さ約0.3m。断面は、逆

台形を呈する。須恵器・土師器・紡錘車などの遺物が出土しており(第21図16・17・26)、古墳時代後期中葉以後、埋没したと考える。

溝 S D 385602 北西から南東へ直線的に掘削され、南に屈折する細い溝である。幅は20~30cm前後・深さ10cm未満のため、遺物はほとんど出土しなかった。

溝 S D 385603 北西から南東に蛇行してのびる溝。幅は1m内外で、深さ0.2m以上を測る。断面は半円形を呈する。南側で S D 385604 と合流する。須恵器などが出土しており(第21図18)、古墳時代後期後半の埋没である。

溝 S D 385604 調査地の北部中央から蛇行して南東へのびる、幅1m内外・深さ0.1m未満の浅い溝。溝 S D 385605 の埋没後に掘削されたと考えられる。

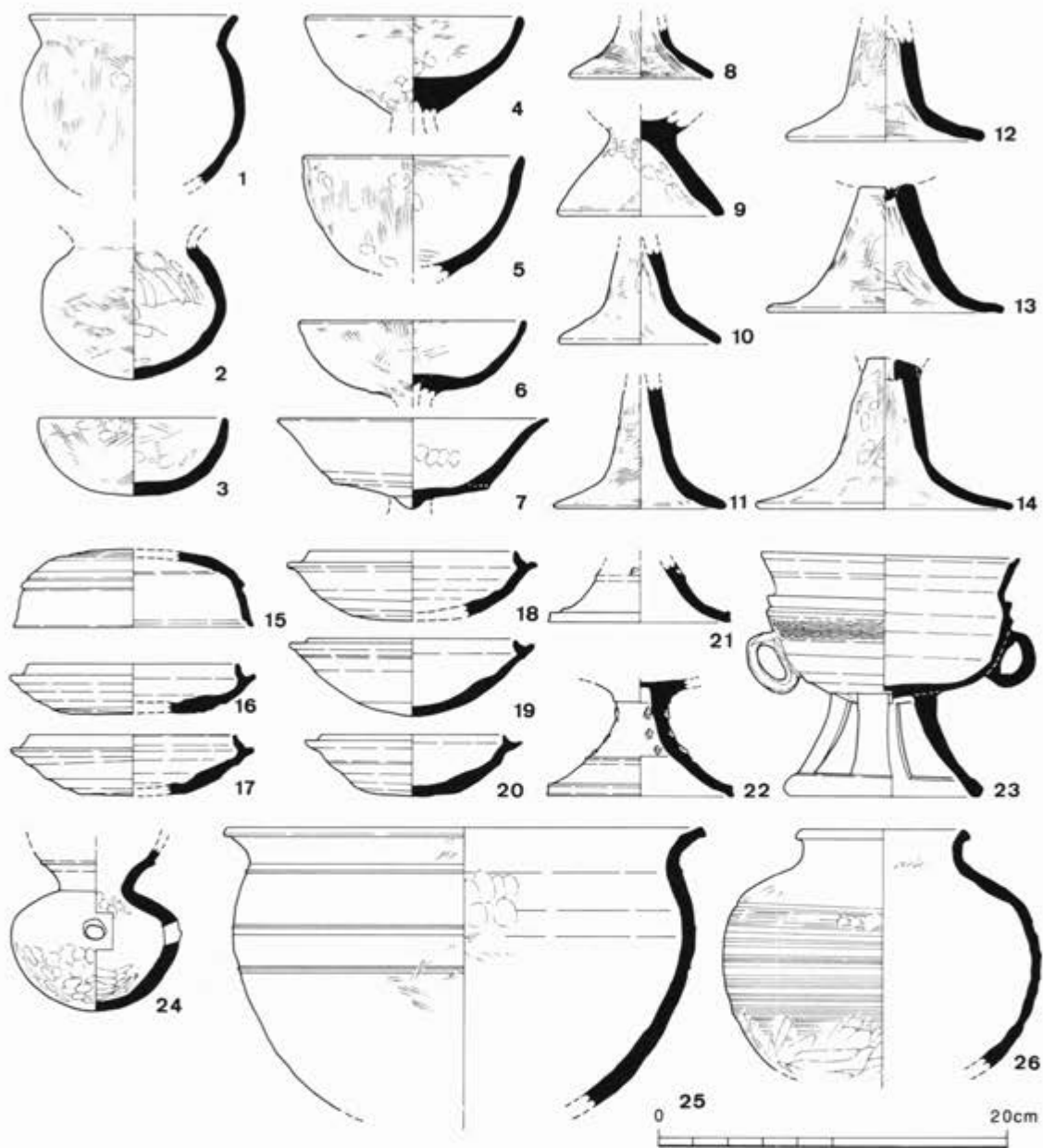
溝 S D 385605 溝 S D 385604 に並行して流れる幅約1.2mの浅い溝。埋土からは、古墳時代中期の土師器破片がかたまって出土した。埋没後に S D 385603 に切られる新旧関係を持つ。また、弥生時代中期の銅鏃や石庖丁も出土した(第24図1・15・16・18)。

溝 S D 385606 北西から東へのびる溝。幅0.6~0.8m・深さ0.25m前後。逆台形に掘削される。S D 385606 は、S D 385611 の埋没後、それに沿うように再掘削されている。

溝 S D 303007 調査地の北部を北西から東に流れる自然流路。総長約80mにわたって検出した。幅約5m・深さ約0.8mである。西半部は狭く、東半部は広がっていた。自然流路と考えられる。この流路からも多くの土師器・須恵器などの土器類や獣骨などが出土している(第21図19・20)。古墳時代後期後半から飛鳥時代に埋没したものと思われる。

溝 S D 303008 溝 S D 303007 同様、調査地の北部を北西から東に流れる自然流路。総長約80mにわたって検出した。幅4m~8.6mで、深さ1m前後。埋没までに、数回流路が蛇行し、氾濫したようである。土師器・須恵器のほか陶質土器の破片も出土しており、古墳時代中期中葉から後半に埋没した。この流路を形成する下層の砂層から、弥生土器や石剣・石鏃などが出土している(第24図2・6・8)。

溝 S D 303009 溝 S D 303008 の北側で、約55mにわたって検出した溝。S D 303008・S D 303011 同様に弧状に東方向に流下する。幅1.3~2.5mで、深さは0.2m未満と浅い。多量の土師器高杯のほか、初期須恵器・紡錘車などが出土しており、古墳時代中期中葉に埋没した(第21図1~15・21・23~25)。



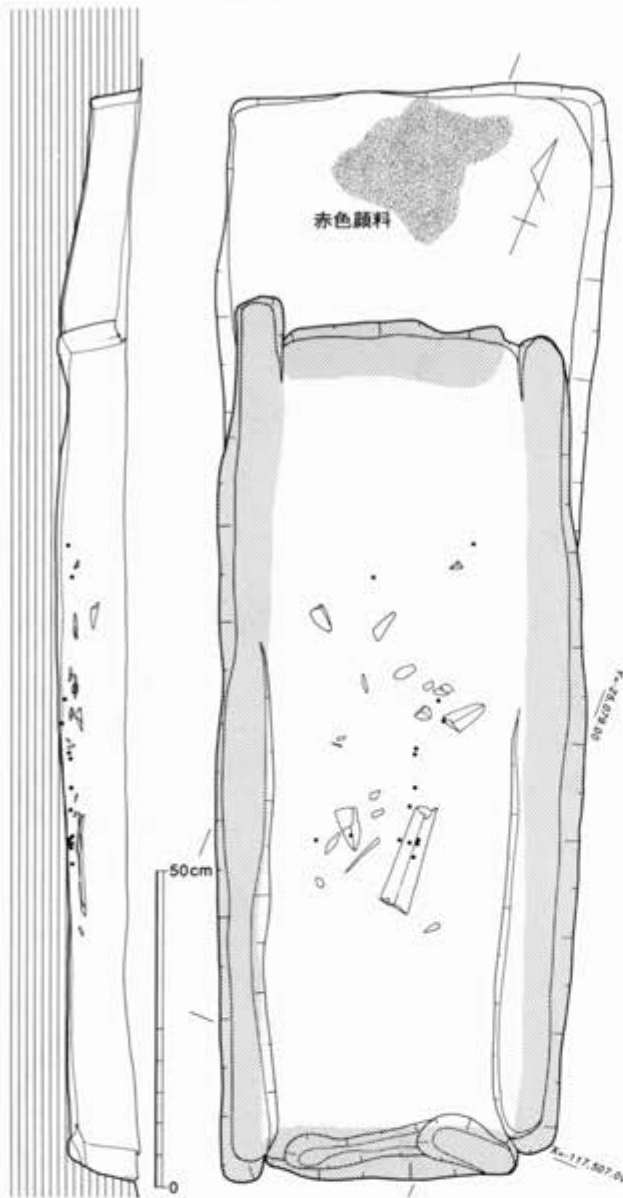
第21図 B-5b地区出土土器(古墳時代)

1~15・21・23~25. S D303009 16・17・26. S D385601 18. S D385603 22. S D303008
19・20. S D303007

5. 弥生時代の遺構

環濠 S D 303011 調査地の北辺部で検出した。断面は「V」字形に掘削され、幅1.9m・深さ1.3mを測る。周辺の遺構の削平度からすれば、幅3m・深さ2m近くになるものと見られる。遺物は、石弋の破片と考えられる石製品(第24図12)以外、ほとんど出土しなかったが、以前の隣接調査地における成果から弥生時代中期後葉の埋没と考える。

方形周溝墓 S T 385616(図版第20-(1)) 方形周溝墓の西辺と南辺の周溝の一部を検出した。北



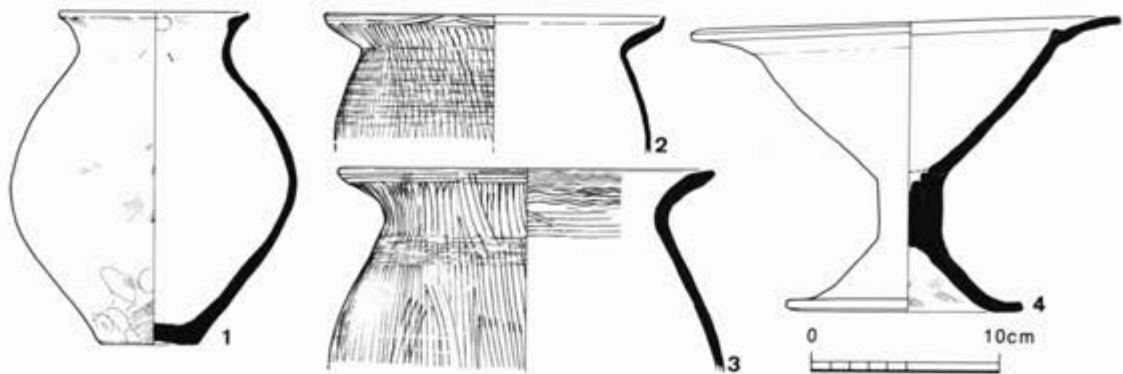
第22図 S T 385619周溝内木棺墓(1/12)
点表示は、石鏃・石剣細片の位置

辺周溝は、方形周溝墓 S F 385615の南辺周溝を兼ねる。南北15.2m・東西20mの長方形の方形周溝墓である。

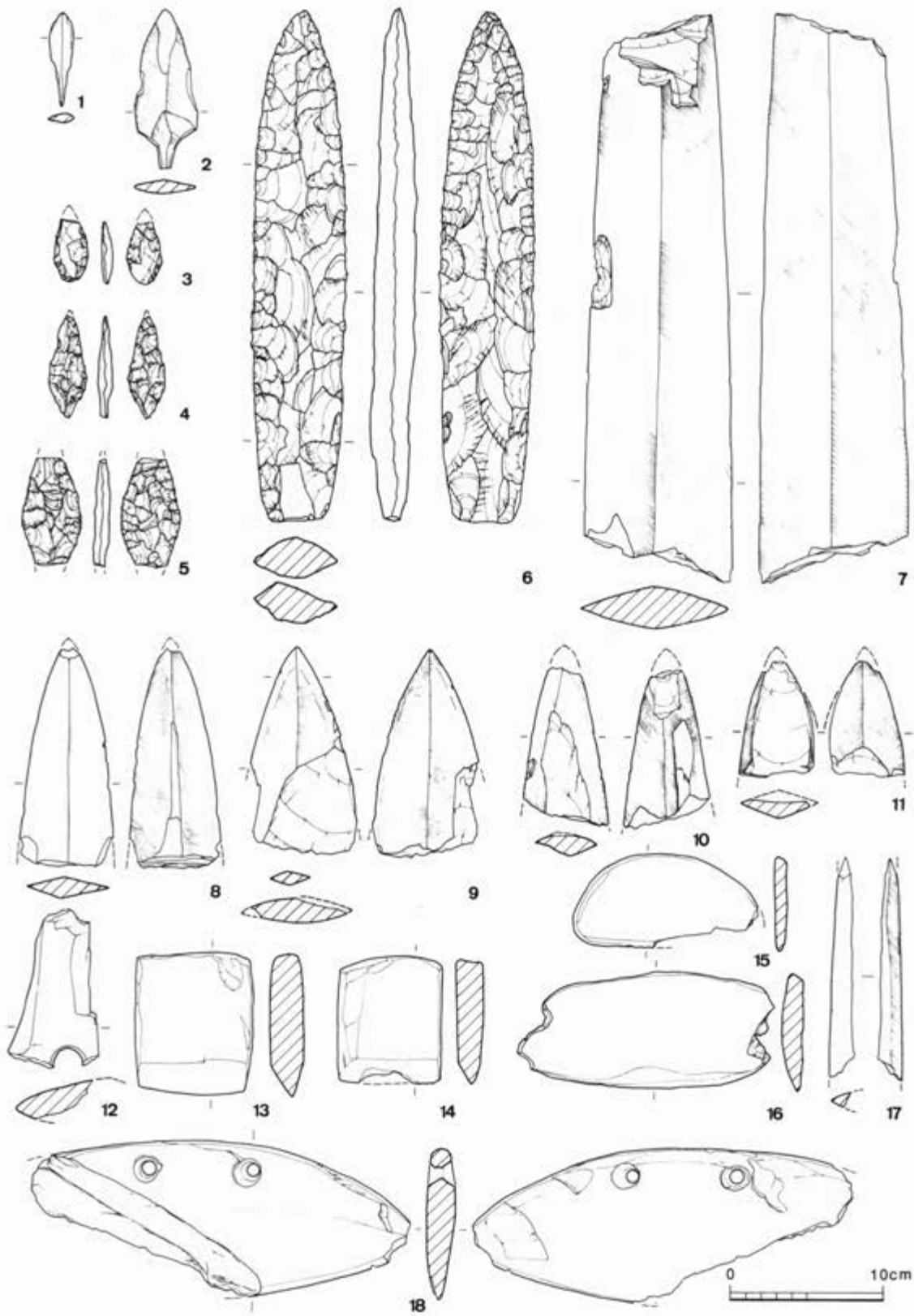
方形周溝墓 S T 385615 東辺と西辺の周溝を検出した。南北12m・東西11.8m以上で、正方形に近いプランを持つ。

方形周溝墓 S T 385614 全周の溝を検出した。南北16.8m・東西12.5mの長方形で、周溝の幅は0.8m~1.3m。主体部は、削平され、遺存していなかった。また、方形周溝墓 S F 385614の東辺の周溝北側で埋葬施設を検出した。長さ1.4m・幅0.5mである。遺物は出土していない。

方形周溝墓 S T 385619(図版第19-(2)・(3)) 周溝の西辺と南辺の一部を検出した。著しい削平を受けており、溝底部分のみ検出した。西辺周溝の底面には埋葬主体と考えられる木棺痕跡を認めた(第22図網部)。長さ1.25m・幅0.4mの規模の組合式木棺である。墓壙床面長辺の小口部分の角隅に切り込みを入れ、墓壙掘形側辺に木棺側板を設置し、短辺部分の小口板を両側板で挟み込み、「H」



第23図 B-5b・B-8地区出土土器(3) 弥生時代
1. S T 385615 2. S T 385619 3・4. S T 385616



第24図 B-5b地区出土青銅器・石器(弥生時代)

1・15・16・18. S D385605

2・6・8. S D303008

3~5・7・9~11・17. S D385619木棺墓

12. S D303011

13. S D385621

14. S D385606

形に収める形態と考えられる。中央床面付近から、石剣身1点、石剣の鋒5点、石鏃10点、石鏃や石剣の鋒細片が19点以上出土した(第24図3・5・7・9・11・17)。木棺の北西側には、長さ38cm・幅60cmの墓壙空隙があり、床面には酸化鉄朱と考えられる暗赤褐色の顔料の付着が見られた。

このほか、S D 385603・604・605・606などの合流する調査地北中央の洪水砂堆積層 S D 385621から片刃扁平磨製石斧などが出土した(第24図13・14)。

6. 出土遺物(第13・16・18・20・21・23・24図、図版第21~24)

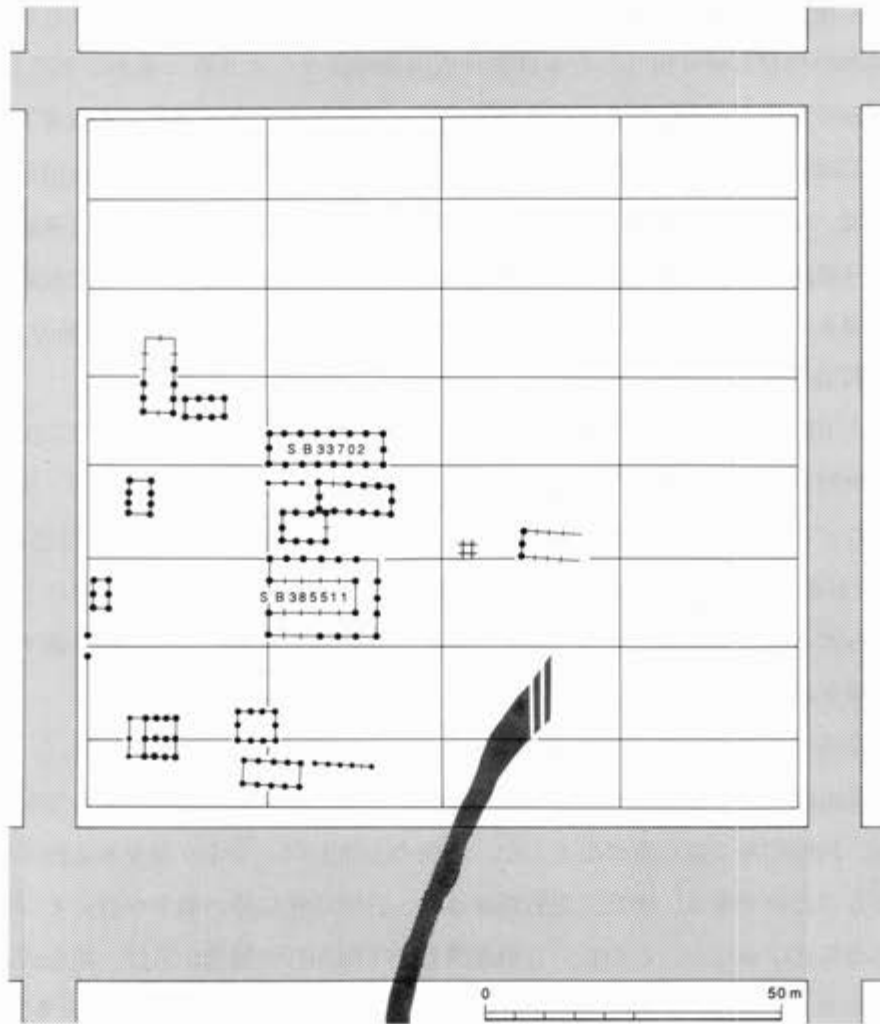
今回の調査で出土した遺物の総量は、整理用コンテナ・バット50箱ほどである。長岡京期関係の遺構では、南一条大路両側溝や大溝 S D 33305の出土土器が十数個体に復原しうる。調査地北部の溝 S D 303009や S D 303008からは、多量の土師器高杯や須恵器両耳付裝飾高杯のほかに、陶質土器と考えられる椀形器台・高杯などが出土した。調査地北部の流路下の砂層からは畿内第Ⅳ様式の土器群と打製石器・磨製石鏃・扁平片刃石斧など多種にわたる石器が出土した。第13図は、中世~平安時代、第16・18図は長岡京期、第20・21図は飛鳥・古墳時代、第23・24図は弥生時代の各種遺物である。土器の詳細については、付表5・6を参照されたい。なお、方形周溝墓出土土器は、現在も整理途中であり、ほとんど図化し得なかった。S T 385619溝内の木棺墓出土石鏃・石剣の一部も脂肪酸分析などの理科学的分析のために図化をし得なかった。今後刊行が予定されている本報告等で詳述したい。

7. 小結

今回の調査では、長岡京の宮城東面街区の宅地利用の様相だけでなく、弥生時代から古墳時代にかけて、東土川遺跡の変遷の状況を把握することができた。以下に各時期ごとに調査成果を述べてみたい。

長岡京期 長岡京の左京南一条四坊五町・二条四坊八町の宅地の班給規模と建物配置、南一条大路の様相が判明し、長岡京期の水路と考えられる大溝を検出した。

五町の建物配置をみると、まず、中心的建物跡と考えられる三面廂付掘立柱建物跡 S B 385511が宅地の中央南西寄りに位置する(第25図)。三面廂付掘立柱建物跡は、このほか、南一条三坊十三町・南一条四坊四町にもみられ、この地区に集中することは注目しうる調査結果であろう。S B 385511南廂柱筋は、南一条大路北側溝から107尺北に位置し、北廂柱筋は、南一条大路北側溝から150尺となる。また、西妻は東四坊坊間第一小路の東側溝から107尺東の距離に位置する。門跡 S B 385547が東四坊第一小路東側溝心から5尺東にあることから、宅地外郭の区画施設心は東側溝から5尺宅地側に設置されていたとみられる。つまり、S B 385511西妻は宅地西辺から100尺あまり東の地点となる。また、その後方、S B 33702南川柱筋は南一条大路北側溝から202尺、西妻を S B 385511の西妻柱筋にそろえる。両者は建物跡の振角も一致することから、同時期に建てられたものとみられる。よって五町では、「⁽¹⁾⁽²⁾二字型」の建物配列を中心とする配置をとるといえる。また、一町の東西を二等分する南北線付近に溝・柵・掘立柱塀などの町内区画施設や町内



第25図 南一条四坊五町建物配置図

小路が認められなかったことから、五町宅地は一町規模であったと推察する。さらに、S B 385512南側柱筋やS B 385533身舎南側柱筋なども南一条大路北側溝から50尺北に配置されることから、四行八門制に則った戸主制に見られる宅地分割基準が建物配置を規制していたことを追認することができた。^(B22)

八町では、S B 385514の身舎北側柱筋は南一条大路南側溝心から40尺南に配置する。S B 385515は、北妻をS B 385514の南廂柱筋にそろえ、南一条大路南側溝心から67尺に配置させる。八町内の中心的な建物跡と考えられるS B 385516は、S B 385514の南側に位置し、北側柱筋は南一条大路南側溝心から130尺に配置される。S B 385514の主軸から2尺東にずれるが、建物跡の振角が平行する点から、同時期に存在していたと考えられる。やはり、「二字型」建物配列が中心的な配置となるとみてよい。ただし、S B 385515は、脇屋的建物と見ることができ、「L字型」建物配列が付帯する配置とみることもできる。また、東西2等分割線を蛇行して南北に大溝S D 33305が開削されていたことが判明した。八町では、宅地の中心的建物跡群の中心が西一行と西二行の境界付近に位置することから、一町の西側1/2町の宅地班給であった可能性がある。南一条大路を横断して開削されていたこの水路の北西1km足らずの左京一条三坊六町、十一町付近

では、北西から南東方向の大規模な流路が見つかり、「進上樽十六村」と書かれた木簡が出土している。⁽¹⁸²³⁾丹波国の柚から切り出された木材が丹波国瀧額津から大井津に漕運されたと考えられ、葛野大井津からの水運を京内に引き込む水路だったと思われる。今回調査した大溝も、その支流にあたるものではないかと考えられる。この大溝の上を重複して流れる現在の水田用水路を遺存地割りと見れば、この大溝は調査区の南に直線的に掘削され、二条大路北側溝に連結していた可能性がある。丹波国などからの資材の運搬に使われた運河の機能を有していたと仮定すれば、延暦8年以降と考えられるB I型式の⁽¹⁸²⁴⁾大形人形が出土したことから、長岡宮の後期造営の際にも、資材の漕運に利用されていたのだろうか。

古墳時代 古墳時代後半期の自然流路や掘削溝が調査地の北部、北西から南東に流下する状況を把握し、5世紀中葉から5世紀後半及び、6世紀後葉から7世紀に至る土師器・須恵器・陶質土器・紡錘車などの出土をみた。特に、S D303008・S D303009から出土した須恵器高杯(第21図21・22)や埴形器台(第21図25)などは、列島では珍しく、慶尚南道陝川苧浦里B古墳群などにその原型がみられる。⁽¹⁸²⁵⁾5世紀後半には、伽耶は金官伽耶から大伽耶にその中心を移す時期にあたり、我彼の交流を示すものとして注目することができる。

弥生時代 弥生時代中期前半の方形周溝墓4基と、中期後半の包含層を検出した。包含層は、洪水などによる氾濫に伴うと考えられる砂層であり、古墳時代の溝や流路によってかなり攪乱されてはいたが、比較的多くの石器が出土した。流路の上流方向、つまり調査地北西に中期後半の集落を想定することができる。また、方形周溝墓は、古墳時代以降の削平が著しく、いずれも中心主体部は認められなかった。しかし、方形周溝墓S T385619の周溝からは、組合式木棺痕跡を検出し、その中からいわゆる鉄剣形磨製石剣の鋒や剣身・石鏃及び、その破片を多数確認した。周溝内の埋葬主体であったことを考慮すれば、この被葬者は、方形周溝墓の中心主体部被葬者に従属する立場であったとみられる。近畿地方における弥生時代中期の埋葬主体被葬者体内の石鏃・石剣の遺存例は、10例を越えるほどであるが、この中で、方形周溝墓の周溝から、従属的な周辺主体として検出された意義は大きい。このような被葬者は、壮絶な最期を遂げた戦士として認識される例が多い。だが、集落内に持衰のような社会的立場の人間が、天候の不順や、それによる作物の凶作などによって引き起こされた社会的不安定を解消するために供犠とされたと推測することもできる。いずれにせよ、方形周溝墓の周溝内埋葬主体被葬者の社会的性格を類推する良好な資料を得ることができた。

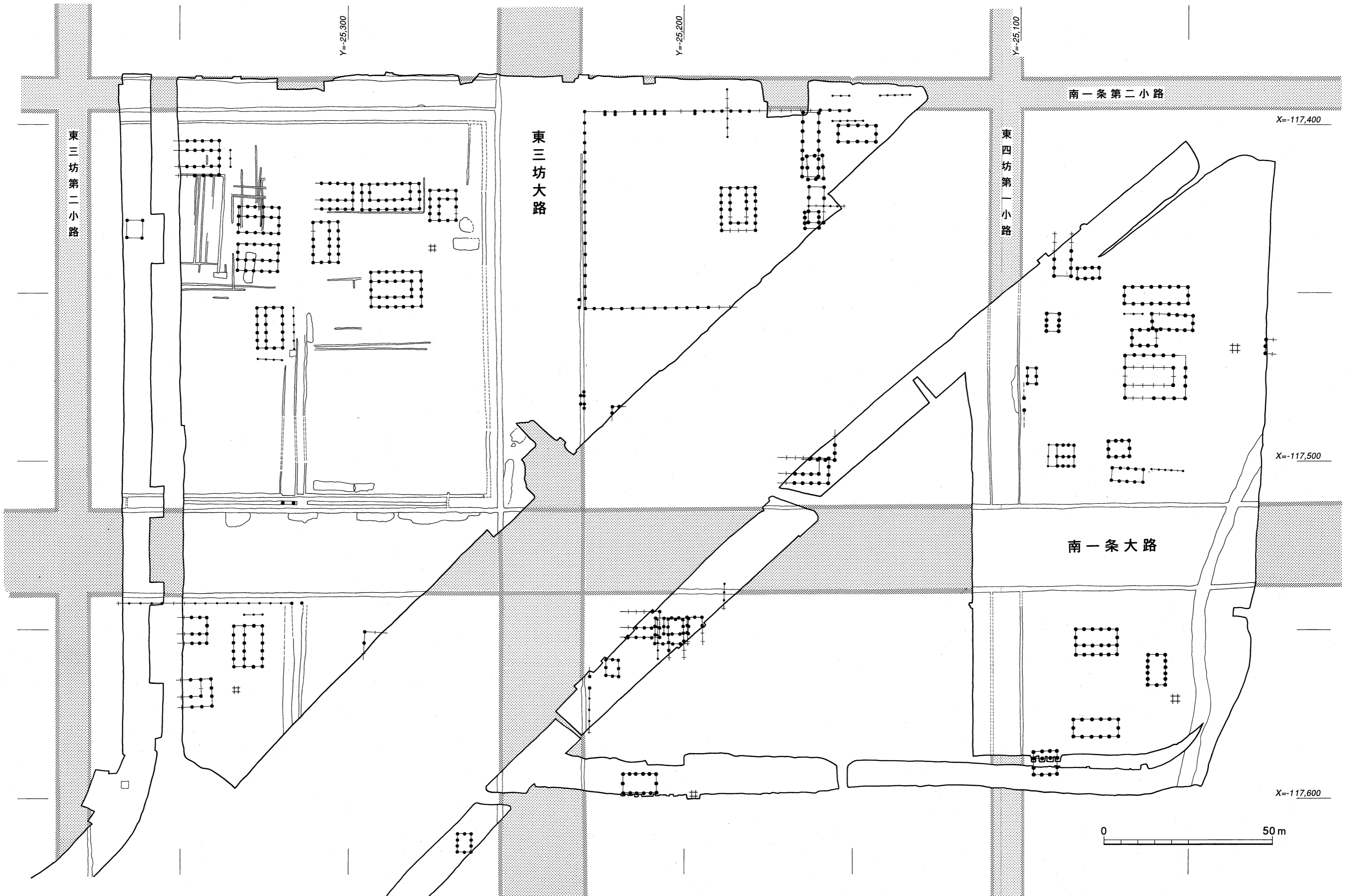
(野島 永)

ま と め

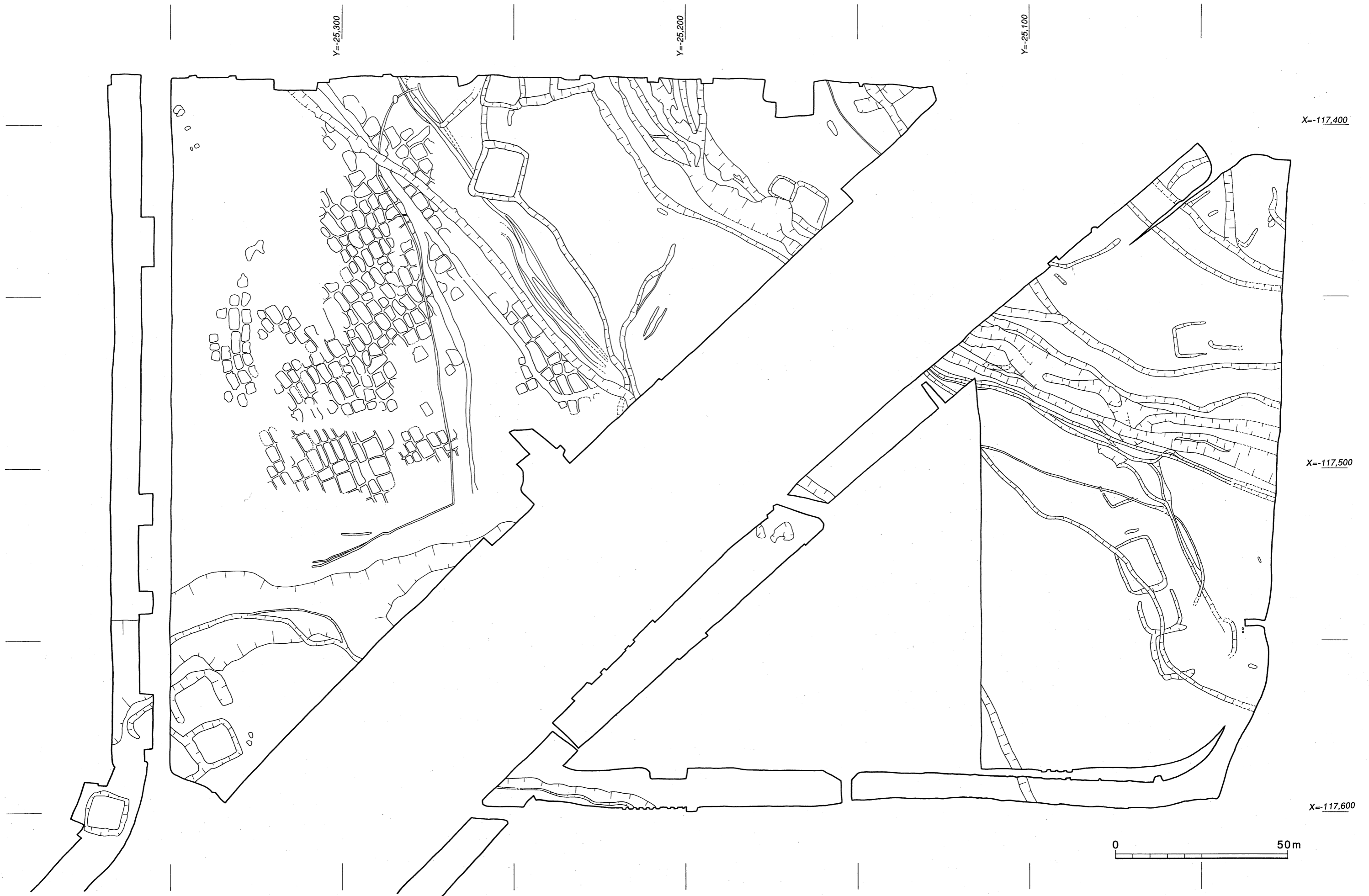
今回の調査で名神高速道路パーキングエリア建設予定地の大半の調査を終え、平成9年度調査予定のB-6・B-7地区を残すのみとなった。長岡京期では、宮城東面街区の東三坊から四坊にかけて都合六町(南一条三坊十三町(二条三坊十五町)・二条三坊十六町(二条三坊十四町)・南一条四坊四町(二条四坊二町)・南一条四坊五町(二条四坊七町)・二条四坊一町(二条四坊三町)・二条四坊八町(二条四坊六町))にわたる調査を行ったことになる。特に、南一条三坊十三町は、宅地の大部分が調査対象地となり、一町全域の調査を行うことができた。その結果、一町規模の班給が行われたことが判明した。造東大寺司長官や左大辨・大宰大貳を歴任し、造長岡宮使を務めた参議正三位佐伯宿禰今毛人の邸宅とも推察された^(註26)。また、各条坊側溝の検出から、この六町域の宅地の規模を推定することができた(付表4・第26図)。詳細を省略するが、パーキングエリア調査区内におけるなるべく遠い任意の条坊側溝心実測値2点を通る直線を条坊側溝計画線と仮定し、条坊側溝の各交点を2直線の交点としてその座標を算出した。その結果、南一条大路(二条条間大路)に南面する宅地では、南北を画する条坊側溝の心心間で、平均398尺を得た。また、東西は側溝心心間410尺内外となる。南一条大路(二条条間大路)に北面する宅地では、南北を画する条坊側溝の心心間で、平均375尺を得た。また、東西は側溝心心間で南面宅地と同様に410尺内外となる。条坊大路に関しては、東三条大路は平均84尺(70大尺)、南一条大路も平均84尺(70大尺)となる。パーキングエリア調査区内では、大路に面した宅地の、外郭における築地や柵などの区画施設心から大路側溝心までの幅の実測値は、おおよそ7.5～8尺程度である。〔延喜式〕左

付表4 条坊路側溝交点の座標

条坊路側溝交差点	X座標	Y座標
南一条第2小路南側溝と東三坊第2小路東側溝の交点	X=-117,396.358	Y=-25,375.409
南一条第2小路南側溝と東三坊大路西側溝の交点	X=-117,395.896	Y=-25,254.980
南一条第2小路南側溝と東三坊大路東側溝の交点	X=-117,395.801	Y=-25,230.217
南一条第2小路南側溝と東四坊第1小路西側溝の交点	X=-117,396.391	Y=-25,110.607
南一条第2小路南側溝と東四坊第1小路東側溝の交点	X=-117,396.422	Y=-25,101.341
南一条大路北側溝と東三坊第2小路東側溝の交点	X=-117,515.034	Y=-25,375.730
南一条大路北側溝と東三坊大路西側溝の交点	X=-117,514.310	Y=-25,255.052
南一条大路北側溝と東三坊大路東側溝の交点	X=-117,514.161	Y=-25,230.137
南一条大路北側溝と東四坊第1小路西側溝の交点	X=-117,513.578	Y=-25,108.654
南一条大路北側溝と東四坊第1小路東側溝の交点	X=-117,513.546	Y=-25,099.907
南一条大路南側溝と東三坊第2小路東側溝の交点	X=-117,540.458	Y=-25,375.799
南一条大路南側溝と東三坊大路西側溝の交点	X=-117,539.251	Y=-25,255.062
南一条大路南側溝と東三坊大路東側溝の交点	X=-117,539.001	Y=-25,230.121
南一条大路南側溝と東四坊第1小路西側溝の交点	X=-117,538.031	Y=-25,108.246
南一条大路南側溝と東四坊第1小路東側溝の交点	X=-117,537.971	Y=-25,099.608
二条第1小路北側溝と東三坊第2小路東側溝の交点	X=-117,648.686	Y=-25,376.091
二条第1小路北側溝と東三坊大路西側溝の交点	X=-117,649.220	Y=-25,255.108
二条第1小路北側溝と東三坊大路東側溝の交点	X=-117,649.331	Y=-25,230.047
二条第1小路北側溝と東四坊第1小路西側溝の交点	X=-117,649.876	Y=-25,106.382
二条第1小路北側溝と東四坊第1小路東側溝の交点	X=-117,649.912	Y=-25,098.237



第27図 パーキングエリア予定地内遺構平面図(1) 長岡京期(1/1,000)



第28図 パーキングエリア予定地内遺構平面図(2) 古墳・弥生時代(1/1,000)

A-6a地区水田畦で大型蛤刃石斧が出土したことから、弥生時代中期と考えて大過ないものと思われる。方形周溝墓は、削平によって中心主体の具体的状況は不明であるが、築造時期は出土土器から、畿内第Ⅱ～Ⅲ様式を中心としており、第Ⅳ様式の時期に埋没する環壕より若干先行する可能性がある。また、Ⅲ～Ⅳ様式の遺構・包含層からは、打製石剣・磨製石剣や石鏃など、石製武器の出土例が目立っている。畿内各地で周辺集落間の戦闘が激化した時期とも考えられる。いずれ、刊行が予定されている本報告で詳細に検討したい課題である。今回は、調査内容の速報ともいうべきものであり、調査結果の概略のみ提示した。

(野島 永)

付表5 A-5地区出土土器観察表(第6図)

出土遺構	分類	器種	口径	器高	残存率	色調	焼成	調整		備考	
								内面	外面		
1	S D33002	土師器	皿	15.3	2.5	9/10	淡黄褐色	やや軟	ナデ	ナデ・ケズリ	
2	S D33002	土師器	皿	15.4	2.6	2/5	淡黄褐色	やや軟	ナデ	ナデ・ケズリ	
3	S D33003	土師器	皿	15.9	2.4	1/5	黄灰褐色	やや軟	ナデ	ケズリ	
4	S D33002	土師器	皿	19.7	2.3	2/5	淡黄褐色	やや軟	ナデ	ナデ・ケズリ	
5	S D33002	土師器	皿	20.9	2.8	1/2	橙褐色	やや軟	ナデ	ナデ・ケズリ	
6	S D33004	土師器	椀	9.6	(3.2)	3/10	淡灰褐色	良	ナデ	ナデ・指オサエ	
7	S D33002	土師器	椀	11.8	(3.5)	1/2	茶褐色	やや軟	不詳	不詳	
8	S D33002	土師器	椀	12.3	3.5	2/5	淡茶灰色	やや軟	ナデ	ケズリ	
9	S D33003	土師器	杯	14.2	2.9~3.4	1/4	橙褐色	良	ナデ	ナデ・ケズリ	
10	S D33002	土師器	杯	15.7	3.9	3/10	淡黄褐色	やや軟	不詳	不詳	底部にスス附着
11	S E384092	土師器	皿	9.0	1.8	2/5	明茶褐色	良	ナデ	ナデ	底部未調整
12	S D33004	土師器	皿	10.4	1.9	2/5	茶灰色	やや軟	ナデ	ナデ・底部指頭圧痕	
13	S D33002	土師器	鉢	16.0	8.2	2/5	淡黄褐色	軟	ナデ	ナデ・指オサエ	
14	S X33015	土師器	甕	16.0	(6.7)	1/4	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ・ハケメ	
15	S D33002	須恵器	蓋	27.8	(2.2)	2/5	青灰色	やや軟	ナデ	ナデ・未調整	
16	S D33002	須恵器	鉢	16.4	12.6	1/2	淡灰色	やや軟	ナデ	ナデ	
17	S B384111	須恵器	壺	8.5	(10.5)	下半1/8	青灰色	良	ナデ	ナデ	底径を表示
18	S X33015-3	須恵器	壺	4.9	(13.0)	体部完存	暗灰色～灰色	やや軟	ナデ	ナデ	
19	S X384089	須恵器	杯蓋	13.5	3	3/10	淡青灰色	良	ナデ	ナデ	
20	S D33002	須恵器	杯身	12.6	4.8	3/10	暗灰色	良	ナデ	ナデ	外面スス附着
21	S D33002	須恵器	杯身	13.4	2.9	1/4	淡灰褐色	良	ナデ	ナデ	

器高の()は残存高を示す。

付表6 B-5b・B-8地区出土土器観察表(第13・16・21・23区)

区	番号	出土遺構	分類	器種	口径 「底径」	器高	残存 率	色調	焼成	調整		備考
										内面	外面	
13	1	SK385544	土師器	皿	14.4	2.6	3/8	淡明褐色	良	ナデ	ナデ	記録番号d
	2	SK385544	瓦器	椀	15.0	6.5	2/8	暗鉛色	良	ナデ+ ミガキ	ナデ+ ミガキ	記録番号c
	3	SK385544	瓦器	椀	16.2	(4.4)	1/8	暗鉛色	良	ナデ+ ミガキ	ナデ+ ミガキ	記録番号c
	4	SK385544	土師器	甕	33.6	(17.6)	2/8	淡灰褐色	良	ハケ+ 指頭圧 痕	ハケ+ 指頭圧 痕	記録番号
	5	SK385544	土師器	羽釜	26.4	(19.6)	4/8	淡黒褐色	良	ヘラナ デ+指 頭圧痕	ヘラナ デ+指 頭圧痕	記録番号f
	6	SK385544	須恵器	練り鉢	29.9	12.0	5/8	淡灰色	やや 軟	ナデ	ナデ	記録番号e
	7	SE385543	土師器	皿	16.1	2.9	3/8	濁淡褐色	良	ナデ	ナデ+ 指頭圧 痕	記録番号2
	8	SE385543	土師器	皿	15.7	2.2	3/8	淡褐色	良	ナデ+ 指頭圧 痕	ナデ+ 指頭圧 痕	記録番号3
	9	SE385543	土師器	皿	13.8	2.7	3/8	暗淡褐色	良	ナデ+ 指頭圧 痕	ナデ+ 指頭圧 痕	記録番号23
	10	SE385543	土師器	皿	13.8	2.3	3/8	淡白橙褐色	軟	ナデ	ナデ+ 指頭圧 痕	記録番号10
	11	SE385519	黒色土器	椀	15.3	5.5	5/8	黒鉛色	良	ナデ+ ミガキ	ナデ+ ミガキ	記録番号2
	12	SD385229	須恵器	杯	12.6	3.7	1/8	明灰色	やや 軟	ナデ	ナデ	最下層出 土・「井」 墨書
	13	SD385229	緑釉陶器	皿	14.9	2.8	4/8	淡黄灰褐色	良	ナデ	ナデ	緑釉
	14	SE385519	灰釉陶器	椀	13.4	5.7	8/8	淡灰色	良	ナデ	ナデ	記録番号 1・釉かけ 付け
	15	SD385229	無釉陶器	椀	13.6	4.6	8/8	明灰色	良	ナデ	ケズリ +ナデ	削り高台
	16	SE385536	無釉陶器	椀	12.6	4.4	7/8	淡黄白色	軟	ナデ+ ミガキ	ナデ+ ミガキ	記録番号4
	17	SE385536 SE385543	無釉陶器	椀	13.0	4.4	6/8	淡明灰色	良	ナデ+ ミガキ	ナデ+ ミガキ	記録番号3
	18	SE385536	無釉陶器	椀	13.4	4.4	7/8	濁暗乳白色	軟	ケズリ +ミガ キ	ミガキ	記録番号d
	19	SE385543	無釉陶器	椀	17.9	6.2	2/8	淡明褐色	やや 軟	ミガキ	ミガキ	記録番号1
	20	SD385229	須恵器	皿	9.9	3.0	3/8	青灰色	良	ナデ	ナデ	糸切痕
	21	SE385543	無釉陶器	皿	15.0	3.4	4/8	淡明灰色	良	ナデ+ ミガキ	ナデ+ ミガキ	記録番号19
	22	SX385538	須恵器	風字硯	13.3	2.1	7/8	暗青灰色	良	ケズリ	ケズリ	記録番号 3・墨痕・自 然釉
16	1	SE385537	土師器	杯	17.7	3.9	3/8	淡橙褐色	良	ナデ	ケズリ +ヘラ ナデ	

2	SD33305	土師器	杯	20.0	(3.8)	1/8	淡橙褐色	良	ナデ	ケズリ +ヘラ ナデ		
3	SD33305	土師器	杯	18.9	3.7	1/8	淡橙褐色	良	ハケ+ 指頭圧 痕	ケズリ +ヘラ ナデ		
4	SE385537	土師器	皿	15.9	2.7	2/8	暗淡橙褐色	良	ナデ	ヘラナ デ		
5	SD33002	土師器	皿	15.7	3.1	5/8	淡褐色	良	ナデ	ナデ		
6	SD33305	土師器	皿	15.6	3.0	6/8	淡黄褐色	良	ナデ	ナデ+ ケズリ	墨書「田」	
7	SE385537	土師器	椀	12.4	3.8	3/8	暗淡橙褐色	良	ナデ	ケズリ +ナデ		
8	SD33305	土師器	椀	12.9	3.9	5/8	淡灰褐色	良	ナデ	ケズリ +ナデ		
9	SD33003	土師器	椀	11.9	3.4	3/8	明褐色	軟	ナデ	ナデ	記録番号j	
10	SD33305	土師器	椀	11.6	3.5	8/8	橙褐色	良	ナデ	ナデ		
11	SD33003	土師器	甕	16.3	(13.2)	1/8	淡褐色	軟	ヘラナ デ	ハケ+ 指頭圧 痕	記録番号 6・黒斑	
12	SD33305	須恵器	蓋	13.8	1.8	2/8	淡青灰色	良	ナデ	ナデ		
13	SD33305	須恵器	杯	12.0	3.5	6/8	暗灰色	良	ナデ	ナデ	ヘラ切り未 調整	
14	SD33305	須恵器	杯	16.2	3.2	7/8	淡灰色	軟	ナデ	ヘラ切 り+ナ デ		
15	SD33305	須恵器	杯	15.5	5.0	2/8	灰色	良	ナデ	ケズリ +ナデ		
16	SD33305	須恵器	皿	21.1	2.4	2/8	淡灰色	良	磨滅	磨滅		
17	SD33002	須恵器	平瓶		5.3	7/8	淡青灰色	良	-	-	記録番号 1・自然釉	
18	SD33002	須恵器	壺		(7.8)	4/8	淡青灰色	良	ナデ	ナデ	記録番号1	
19	SD33003	須恵器	壺蓋		2.0	8/8	灰色	良	ナデ	ケズリ +ナデ	記録番号f	
20	SD33305	須恵器	壺	6.0	16.1	8/8	淡青灰色	良	ナデ	ケズリ +ナデ	糸切痕	
21	SD30302	須恵器	鉢	17.7	13.9	3/8	淡紫灰色	良	ハケ+ ナデ	ナデ	自然釉	
22	SD385503	須恵器	壺		(9.6)	2/8	淡青灰色	良	ハケ+ ナデ	ナデ	記録番号o	
21	1	SD385609	土師器	甕	11.6	(9.8)	3/8	淡褐色	軟	ハケ+ ナデ	ハケ	記録番号23
	2	SD385609	土師器	壺		7.6	7/8	淡明褐色	良	ケズリ +指頭 圧痕	ハケ+ ミガキ	記録番号56
	3	SD385609	土師器	椀	10.4	4.4	7/8	淡褐色	良	ハケ	ハケ	記録番号33
	4	SD385609	土師器	台付椀	11.9	(5.5)	2/8	明橙褐色	良	ハケ+ ナデ	ハケ+ ナデ	記録番号 22・黒斑
	5	SD385609	土師器	台付椀	12.3	(7.0)	3/8	明赤褐色	良	ハケ+ ナデ	ハケ	記録番号23
	6	SD385609	土師器	台付椀	12.7	(4.3)	1/8	明橙褐色	軟	ハケ	ハケ	記録番号55
	7	SD385609	土師器	高杯	15.5	(10.2)	4/8	赤褐色	良	ケズリ +指頭 圧痕	ナデ	記録番号18
	8	SD385609	土師器	高杯	7.9	(3.4)	3/8	明橙褐色	良	ハケ	ハケ	記録番号 55・黒斑

9	SD385609	土師器	高杯	8.6	(5.8)	3/8	淡濁褐色	良	ナデ	ナデ+ハケ	記録番号52・黒斑	
10	SD385609	土師器	高杯	8.9	(5.6)	3/8	淡橙褐色	良	ナデ+ハケ	ハケ+ミガキ	記録番号72・黒斑	
11	SD385609	土師器	高杯	9.3	(7.4)	3/8	明橙赤褐色	良	ハケ	ハケ+ミガキ	記録番号36・黒斑	
12	SD385609	土師器	高杯	10.8	(6.4)	4/8	淡褐色	軟	ハケ	ハケ	記録番号43	
13	SD385609	土師器	高杯	12.1	(7.3)	2/8	淡褐色	軟	ハケ	ハケ+ナデ	記録番号57・黒斑	
14	SD385609	土師器	高杯	14.2	(8.6)	3/8	明赤褐色	良	ハケ+シポリ	ハケ+ナデ	記録番号51・黒斑	
15	SD385609	須恵器	蓋	13.5	4.3	6/8	青灰色	良	ナデ	ナデ+ケズリ	記録番号79	
16	SD385601	須恵器	杯	12.0	2.8	2/8	淡灰色	良	ナデ	ケズリ+ナデ		
17	SD385601	須恵器	杯	11.8	(3.5)	1/8	暗灰色	良	ナデ	ケズリ+ナデ	記録番号4	
18	SD385603	須恵器	杯	11.9	(3.8)	1/8	淡青灰色	良	ナデ	ケズリ+ナデ		
19	SD303007	須恵器	杯	11.8	4.0	2/8	緑青灰色	良	ナデ	ケズリ+ナデ		
20	SD303007	須恵器	杯	10.5	3.6	7/8	青灰色	良	ナデ	ケズリ+ナデ		
21	SD385609	須恵器	高杯	[10.3]	(5.8)	1/8	小豆色	良	ナデ	ナデ	22と同型	
22	SD385608	須恵器	高杯	[10.55]	(13.1)	3/8	青灰~小豆色	良	ナデ	ナデ	記録番号2	
23	SD385609	須恵器	高杯	24.7	13.8	7/8	淡青灰色	良	ナデ	ケズリ	記録番号1	
24	SD385609	須恵器	甌		(18.6)	6/8	明灰色	良	ケズリ+ナデ	ナデ	記録番号64	
25	SD385609	須恵器	器台	27.1	(16.0)	1/8	淡青灰色	良	ナデ	ナデ	記録番号18	
26	SD385601	須恵器	壺	9.1	(13.7)	3/8	暗濁白色	軟	ヘラケズリ	ナデ	記録番号3・4・黒斑	
23	1	ST385615	弥生土器	壺	10.2	17.5	8/8	灰白色	良	ナデ	ハケ	
	2	ST385619	弥生土器	甕	17.8	-	7/8	灰黄褐色	良	ナデ	ハケ	
	3	ST385616	弥生土器	甕	20.1	-	7/8	暗褐色	良	ナデ	ハケ	
	4	ST385616	弥生土器	高杯	23.1	15.3	8/8	褐色	良	ミガキ	ミガキ	

注1 山中 章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号) 1992

注2 大庭重信・佐原 眞・清水みき・鋤柄俊夫・都出比呂志・寺前直人・中山清隆・深澤芳樹・福永伸哉・本間元樹・松藤和人・百瀬正恒・森 浩一・門田誠一・山中 章・若林邦彦(敬称略)の各氏には、調査中に御指導・御教示いただいた。記して感謝したい。

また、発掘調査に参加していただいた方は、次の通りである。

魚津知克・尾崎高宏・太田明美・木戸久美子・田畑直彦・羽生夕紀子・堀 躍子・宮本純二・森下恵美子・八津谷 都・吉沢 貴・明日礼子・荒川仁佳子・小澤和子・串田香奈子・倉辻万里子・竹内千賀子・竹内友美・田村重野・内藤チエ・長尾美恵子・那須春美・西村敏子・長谷川マチ子・村上優美子・米澤裕子

注3 久世康博・上村和直「長岡京左京一条三坊・二条三坊」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988、上村和直「京都・長岡京跡(2)」(『木簡研究』第8号 木簡学会) 1986

注4 岩松 保「長岡京跡左京第330次 PA工区A-3地区(7ANVST-3)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊

- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注5 山中 章「古代都城の交通—交差点からみた条坊の機能—」(『考古学研究』第37巻第1号) 1990
- 注6 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡平成7年度発掘調査概要—長岡京跡左京第361・362・363次(7ANVK-6・7・8)—」(『京都府遺跡調査概報』第74冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注7 平良泰久「長岡京の貴神の家」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注8 久世康博・上村和直「長岡京左京^(マ)一条三坊・二条三坊」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988
- 丸川義広・上村和直「長岡京左京南一条三坊・二条三坊」(『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1989
- 百瀬正恒・丸川義広・長宗繁一「長岡京左京二条三坊」(『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1991
- 注9 石尾政信「(1)長岡京跡左京第241・267・268次 向日工区(7ANFWD-2・XKM-2・XYT・WIR-2・WSS-2地区)」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 竹井治雄「(7)長岡京跡左京第331次 PA工区B-2b・D-2b地区(7ANVST-4)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注10 注5文献
- 注11 岸岡貴英ほか「(1)長岡京跡左京第286・304・313・317次 京都工区(7ANWSA-2・3、VNR、WSG地区)」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注12 中川和哉ほか「(2)長岡京跡左京第303・314・315次 PA工区(7ANVK・WSS-4地区)」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 戸原和人ほか「(5)長岡京跡左京第334次 PA工区B-3地区(7ANVK-2)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 竹井治雄「(4)長岡京跡左京第337次 PA工区B-5地区(7ANVK-5)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注13 中川和哉ほか「(6)長岡京跡左京第333次 PA工区B-4地区(7ANVST-5)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注14 長岡京における廃棄土坑の研究には、國下のものがある。國下多美樹「都城と塵介—長岡京を中心に—」(長岡京連絡協議会資料報告No.96-04) 1996
- 注15 南側の左京第330次調査で検出したS R33016は、小面積の発掘調査のため、この流路の一部をそうと認めたものであることが判明したので、今回の報告に改める。
- 注16 久世康博ほか「長岡京左京一条三坊・二条三坊」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988
- 注17 松崎俊郎「長岡京跡左京第289次(7ANFTB-5地区)～左京五条二坊八町(四条二坊六町)、五条条間北小路(四条第二小路)・東二坊坊間小路交差点、鴨田遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第38集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1994
- 注18 中島皆夫「左京第278次(7ANLRB-3地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1993
- 注19 注14文献

- 注20 竹井治雄「(4)長岡京跡左京第337次 PA工区B-5地区(7ANVK-5)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注21 黒崎分類の「並列型」(黒崎 直「平城京における宅地の構造」(狩野 久編『日本古代の都城と国家』 塙書房) 1984)
- 注22 注1文献 六條令解には、「申賣買家地立券文事 合家地壹處 長十五丈 廣十丈 在三坊、長岡京」(『六條令解』(竹内理三編『平安遺文』第一卷四号文書 東京堂出版)とあり、宅地の分割基準が五丈・十丈単位の実測値によるものであったとされる。
- 注23 百瀬正恒「京都・長岡京跡(3)」(『木簡研究』第17号) 1995
- 注24 山中 章・清水みき「長岡京跡左京第51次(7ANESH-4地区)～左京二条二坊六町～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集 向日市教育委員会) 1981
- 注25 朴東百・秋淵植「陝川苧浦里B古墳群」昌原大學校博物館 學術調査報告第二冊 昌原大學校博物館 1988 門田誠一氏のご教示による。記して感謝したい。
- 注26 注7文献
- 注27 注1文献
- 注28 上野邦一「IVまとめ 2官衛か宅地か」(金子裕之編『平城京左京四條二坊一坪』 奈良県教育委員会) 1987
- 注29 清水みき「墨書土器「車宅」をめぐって」(中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』 同朋舎) 1986

2. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡発掘調査概要

(7ANFIR-4・FDN-3)

1. はじめに

長岡京跡左京第389次・中福知遺跡の発掘調査は、府営上植野団地(仮称)建設に伴って、京都府土木建築部住宅課の依頼を受けて実施した。調査地は、京都府向日市上植野町池ノ尻・大門に所在し、長岡京跡左京四条一坊十一町・十四町(旧呼称左京四条一坊九町・十六町)の推定地にあたる。また、第4トレンチ東半部は、東一坊坊間東小路(旧呼称東一坊第二小路)の所在が予想されていたところでもある(第29図)。

当該建設工事に係わる埋蔵文化財の発掘調査は、平成6年度には左京第353次調査^(注1)、平成7年度には左京第366次調査^(注2)として実施しており、古墳時代前期から中世にいたる遺構・遺物を検出している。

発掘調査は、府営上植野団地(仮称)建設工事と併行して行った。そのため、平成8年7月26日から第1トレンチの重機掘削を開始し、廃土を第2トレンチ調査予定地内に仮置きして調査を進めた。一部の人力掘削を残し、第1トレンチ調査終了直前に、第2トレンチ調査予定地内の廃土を第1トレンチに移動しながら、第2トレンチの重機掘削を進めた。一方、第3・4トレンチは、住宅建築工事で生じた残土が調査予定地内に仮置きされていたために、同住宅課の依頼を受けて、第1・2トレンチ内に除去後、重機掘削を開始した。平成9年1月14日に発掘調査は終了したが、建築工事現場に隣接していることから、同課の依頼によって、全トレンチの埋め戻し作業を行った。第1～4トレンチの総面積は、約1,780㎡である(図版第25・26-1)。

平成8年度の発掘調査は、後述するように4か所にトレンチを設定し、実施したが、併行して行われた



第29図 調査地位置図(1/10,000)

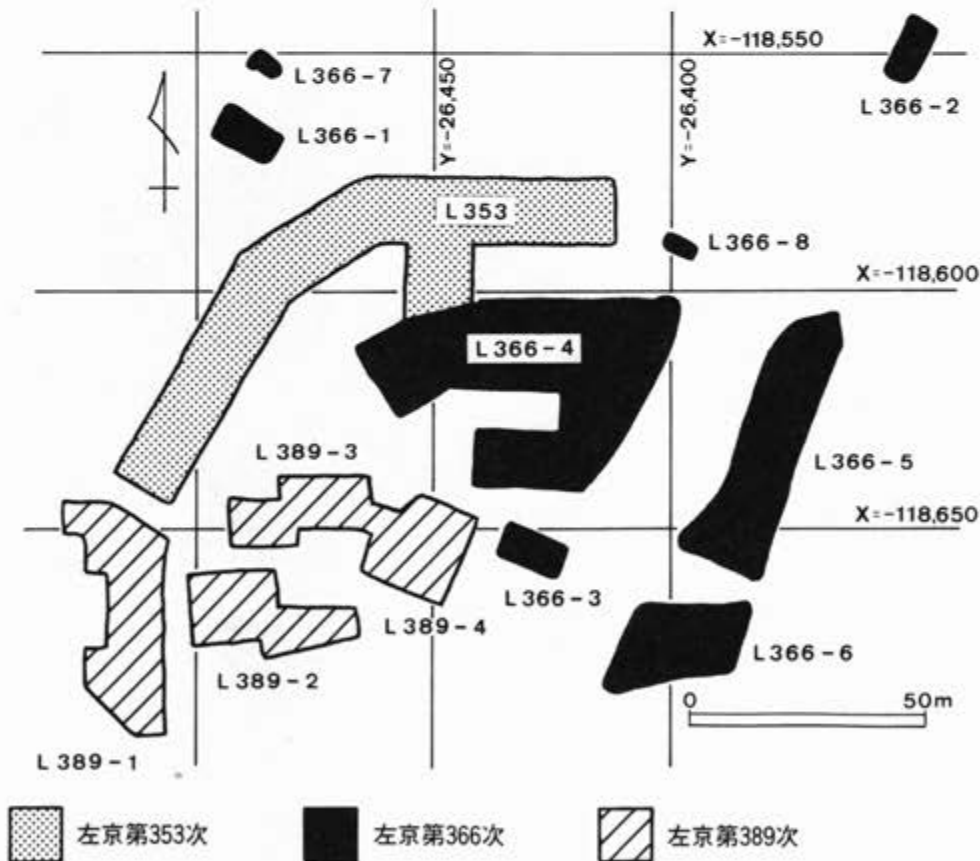
建築工事に伴う小規模な掘削については、その都度、同住宅課から京都府教育庁指導部文化財保護課に連絡がなされ、文化財保護課の依頼を受けて掘削の立ち会い調査も実施した。

発掘調査に伴う現地説明会は、平安時代から中世の掘立柱建物跡群を検出した第3・4トレンチを中心にして、平成8年12月6日に実施した。また、この調査の概略は、当調査研究センター発刊の『京都府埋蔵文化財情報』第63号に掲載した。参照していただきたい。

以上の経過を踏まえ、平成8・9年度事業として、現地調査の平面図及び断面図などの整理と出土遺物の洗浄・実測・トレースなどの整理作業を実施した。

この遺跡の発掘調査は、調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員小池 寛・竹下士郎が担当し、遺物写真は調査第1課資料係主任調査員田中 彰、遺構図の調整及びトレース・遺物実測及びトレースは伊達優子を中心となり実施した。また、本概要の執筆・編集は、小池が担当した。

今回の報告は、一連の府営上植野団地建設に伴う発掘調査の最終報告でもあることから、本概要の後半部分には、左京第353・366・389次調査によって得た成果をまとめて掲載するとともに、左京第353・366次調査概要には掲載できなかった遺物についても新たに掲載した。なお、当該調査に係わる経費は、京都府土木建築部住宅課が負担した。



第30図 トレンチ配置図

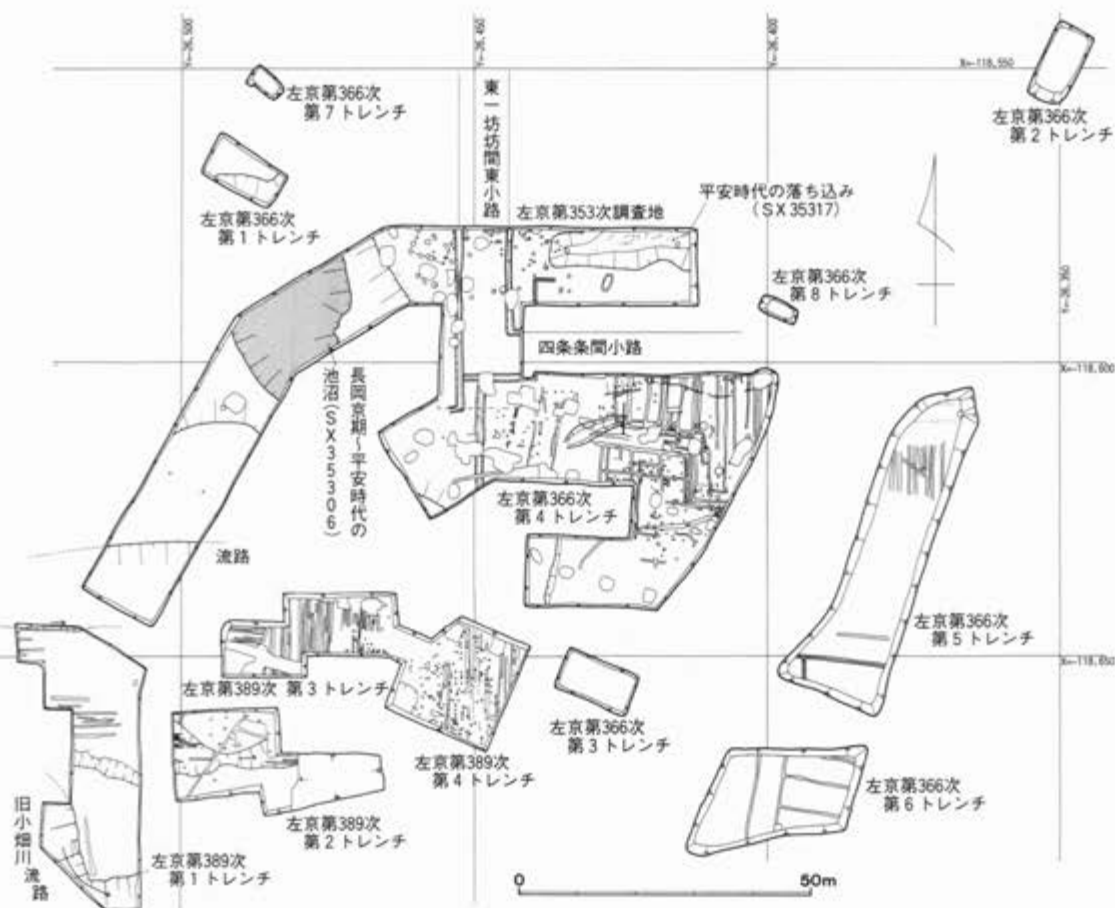
2. 調査概要

今回の発掘調査地は、一連の府営上植野団地建設予定地内の南西部に位置している(第30・31図)。平成6年度に実施した左京第353次調査では、四条条間小路(旧呼称三条大路)と東一坊坊間東小路(旧呼称東一坊第二小路)を検出するとともに、平安時代前期の掘立柱建物跡を検出した。北隣接地で実施された左京第226・252次調査でも長岡京期から平安時代前期の遺構を検出していることから、この建設予定地内以北に同時期の遺構が広がっていることが確認できた。一方、平成7年度に実施した左京第366次調査の第4トレンチでは、長岡京期から平安時代前期の遺構の検出はわずかであったが、古墳時代前期・奈良時代・平安時代後期・中世の遺構を検出した。このことから、第4トレンチ北半を中心とする一帯に古墳時代から中世の遺構が広がっていることが予想できた。一方、建設予定地内の東方に設定した左京第366次調査の第2・5・6トレンチでは、明確な遺構は検出できなかった。

(1) 層位及び検出遺構

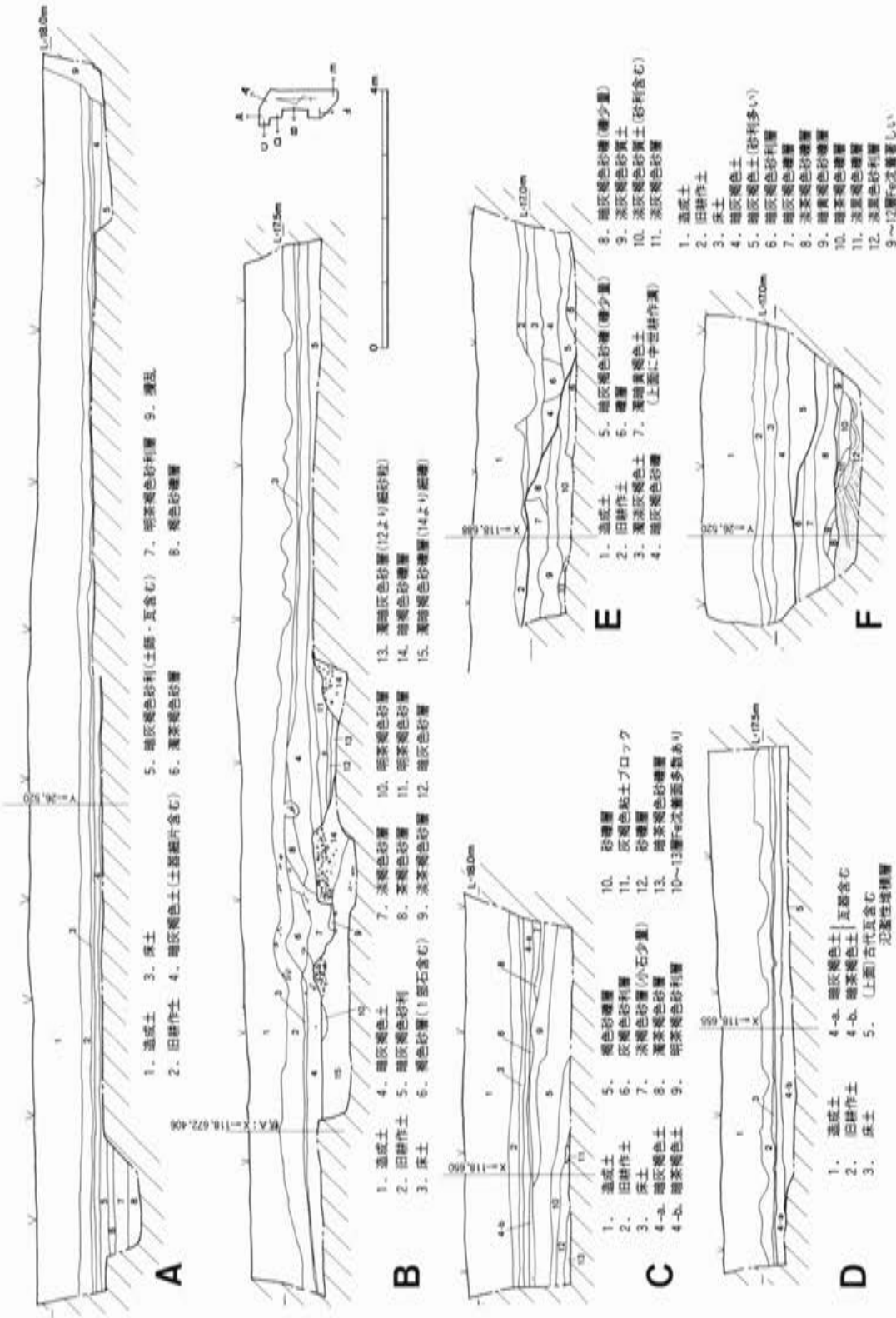
a. 第1トレンチ(第32・33図、図版第27・28)

調査区内の最も南西部分に設定したトレンチで、現在の府道志水西向日停車場線(外環状線)一帯に推定されている小畑川の旧河道の検出が予想されていた。また、左京第353次調査地の南半部分で検出した自然流路の南側肩部の検出も予想された。



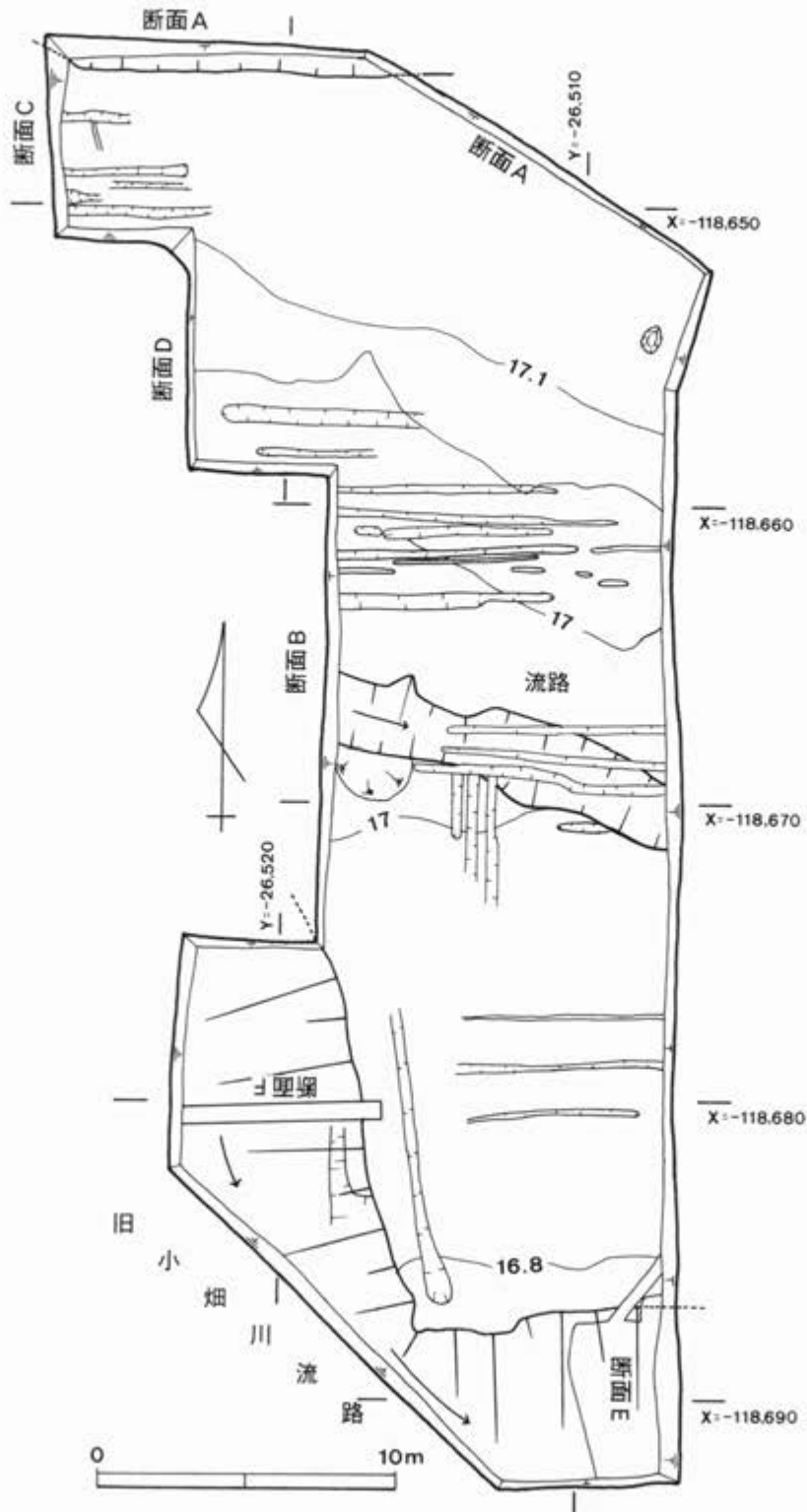
第31図 トレンチ配置図(左京第366次第4トレンチは、中世～平安時代面)

第1トレンチは、複雑な平面形を呈しているため、北壁断面(第32図断面A)と3分割された西壁断面(第32図断面B~D)を中心に土層堆積状況を把握するとともに、小畑川の旧河道の南壁断面(第32図断面E)と東壁断面(第32図断面F)により旧河道の堆積状況を把握した。

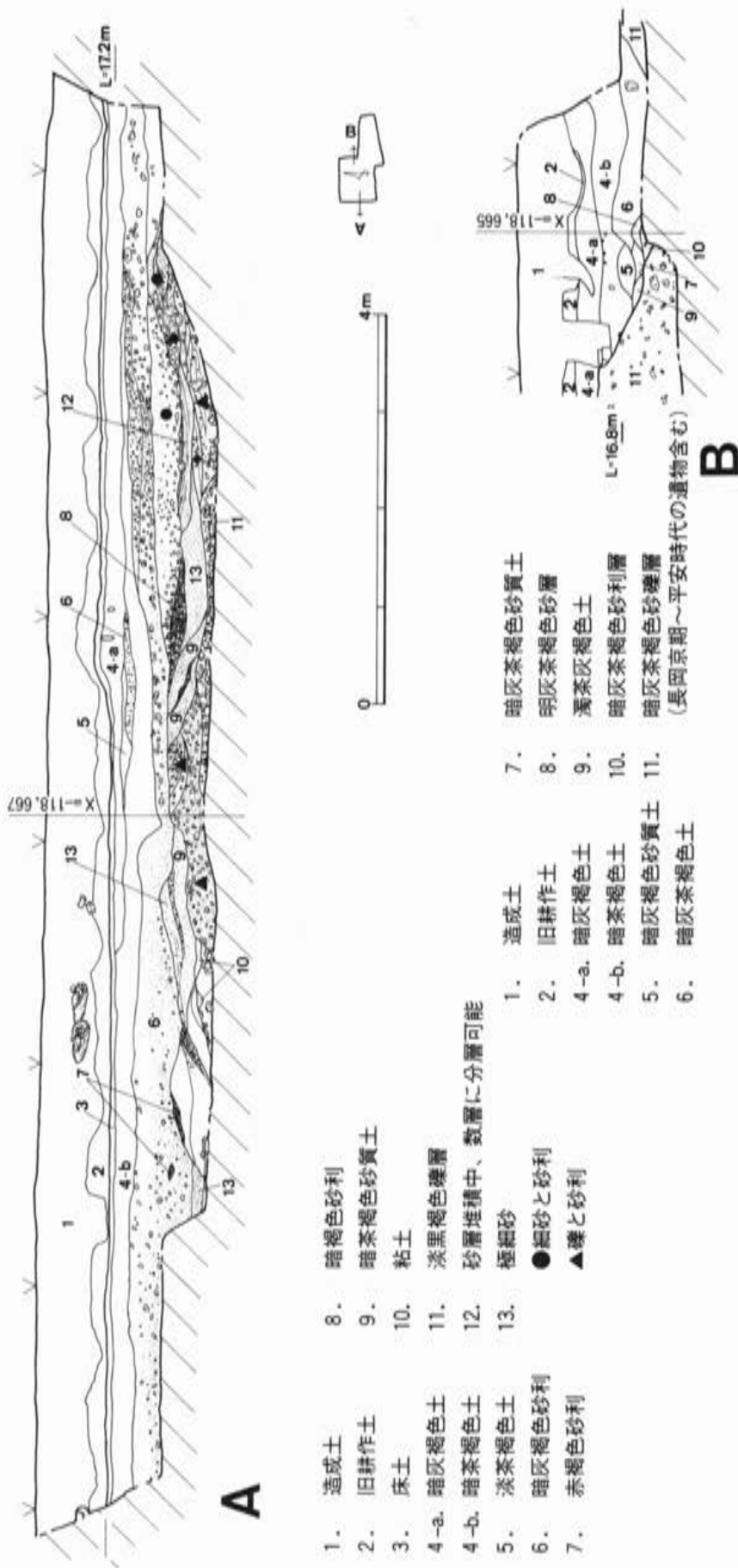


第32図 第1トレンチ土層断面実測図

基本的な堆積状況は、最上層に工場建築に伴う約0.8mの造成土(第1層)が堆積しており、標高17.4~17.5mに旧耕作土(第2層)が約0.2m堆積している。第2層下には、濁黄褐色土を主体とする床土(第3層)が堆積しており、中世耕作溝群を検出した暗灰褐色土(第4層)上面の標高は、



第33図 第1トレンチ実測図



第34図 第2トレンチ土層断面図

17.2～17.3mを測る。第4層下には、暗灰褐色砂礫層(第5層)が堆積しており、層内から著しく磨滅した土器・瓦片・凝灰岩が出土している。この第5層は、小畑川の旧河道氾濫に伴う堆積と考えられる。一方、トレンチ北端部では、北方へ傾斜する砂礫を主体とする堆積層(第32図断面C)が見られるが、左京第353次調査で検出した自然流路の南端部分である可能性が高い。また、トレンチ中央では、東流したと見られる自然流路が、中世耕作溝群を確認した第4層の一部を攪乱するように堆積しており、中世の小規模な氾濫を想定できる(第32図断面B)。

トレンチ南端では、小畑川の旧河道が、南から東へ屈折する肩部を検出した。この旧河道の南壁(第32図断面E)では、中世耕作溝群を検出した第4層がほぼ水平に堆積している。また、第4層下には、西方に傾斜して堆積する暗灰褐色砂利層(第6層)が堆積しており、暗灰褐色砂利層(第7層)、暗灰褐色礫層(第8層)、淡茶褐色砂礫層(第9層)などの氾濫による堆積層が下位に確認できた。第6層中からは瓦器片、第8層中からは須恵器片が出土しており、各堆積層の堆積時期を広い時間幅ではあるが把握できた。なお、第9層下には、鉄分を多量に含む砂礫層(第10層以下)が複雑に堆積していることが確認できた。第10層上面の標高は、約16.1mである。一方、旧河道東壁(第32図断面F)では、南方に傾斜する砂礫を主体とする堆積層を確認した。旧河道南壁とは異なり、中世耕作溝を検出した第4層は確認できなかったが、瓦器をわずかに包含する濁暗黄褐色土(第7層)が河道の肩部をなしており、氾濫した時期をほぼ把握できた。

以上が、基本的な土層堆積状況であるが、次に、検出した遺構について概観しておきたい。

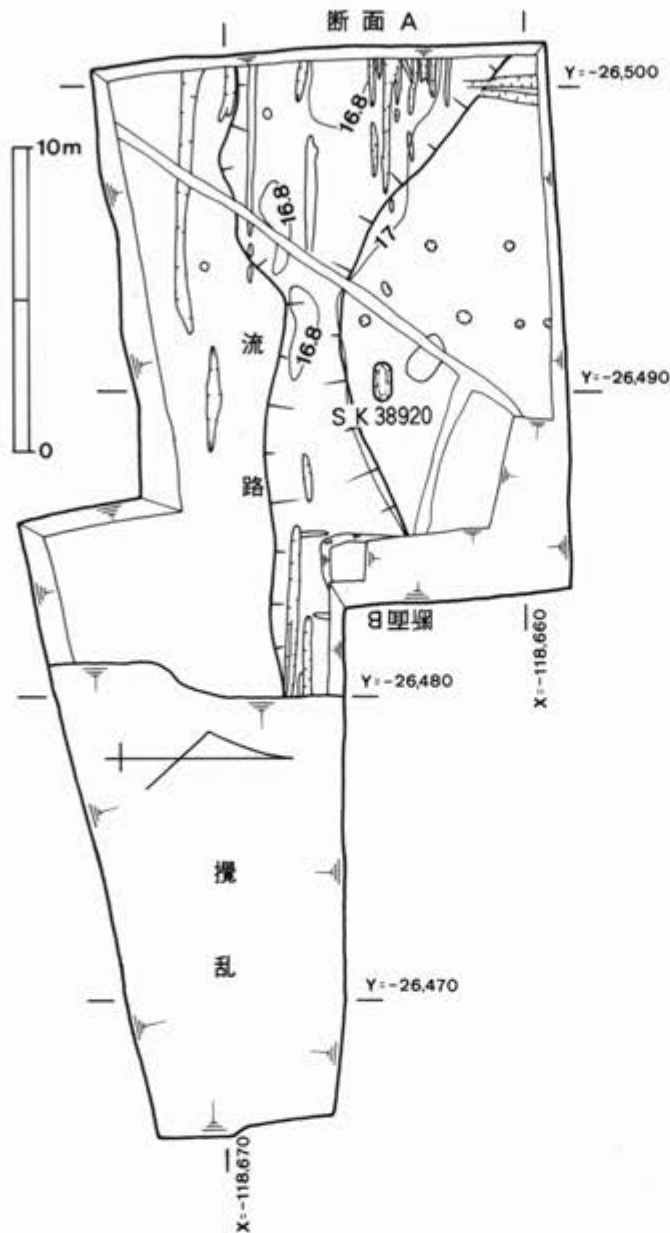
トレンチの中央部を中心として中世耕作溝群を検出した。溝の方向は、大半が東西方向であるが、南北方向に穿たれた溝は4条を数える。大半の耕作溝の方向が、後述する第2トレンチと第3トレンチ西端で確認した中世耕作溝群と同一方向であるが、これは、周辺の地形あるいは何らかの地割りなどの規制を受けたことを示唆している(第33図)。

一方、トレンチ中央部から北半部分には、中世以前の氾濫による自然流路が、複雑に東流している。各流路の時期を明確にできないが、少なくとも、長岡京期以前である可能性が高い。平成7年度に実施した左京第366次調査の第4トレンチでは、ツガ属の角杭を約600本打ち込んだ杭列S X36675と杭列によって護岸を施した流路S X36604を検出したが、第1トレンチで確認した自然流路群と関連する可能性もある。

b. 第2トレンチ(第34～36図、図版第29・30)

第1トレンチの東隣接地に設定した東西方向に長いトレンチである。トレンチ東半は、攪乱を受け、遺構面は消失している。第2トレンチも第1トレンチと同じく、平面形が複雑であったため、土層堆積状況を把握するためトレンチ西壁(第34図断面A)とトレンチ中央部の東壁(第34図断面B)を観察・図化した。

第2トレンチの床土以上の堆積状況は、第1トレンチとほぼ同一であるが、それ以下の土層堆積状況を正確に把握するために、標高16mに至るまでの断ち割りを西壁全面に設定した。なお、先述した第1トレンチでは、西壁において断ち割りを設定し、第4層以下の堆積状況の把握に努めたが、東壁については、断ち割りを設定していない。そのため、第2トレンチで検出した下層



第35図 第2トレンチ実測図

の流路が、第1トレンチの平面図には表現されていないという不整合が生じている。

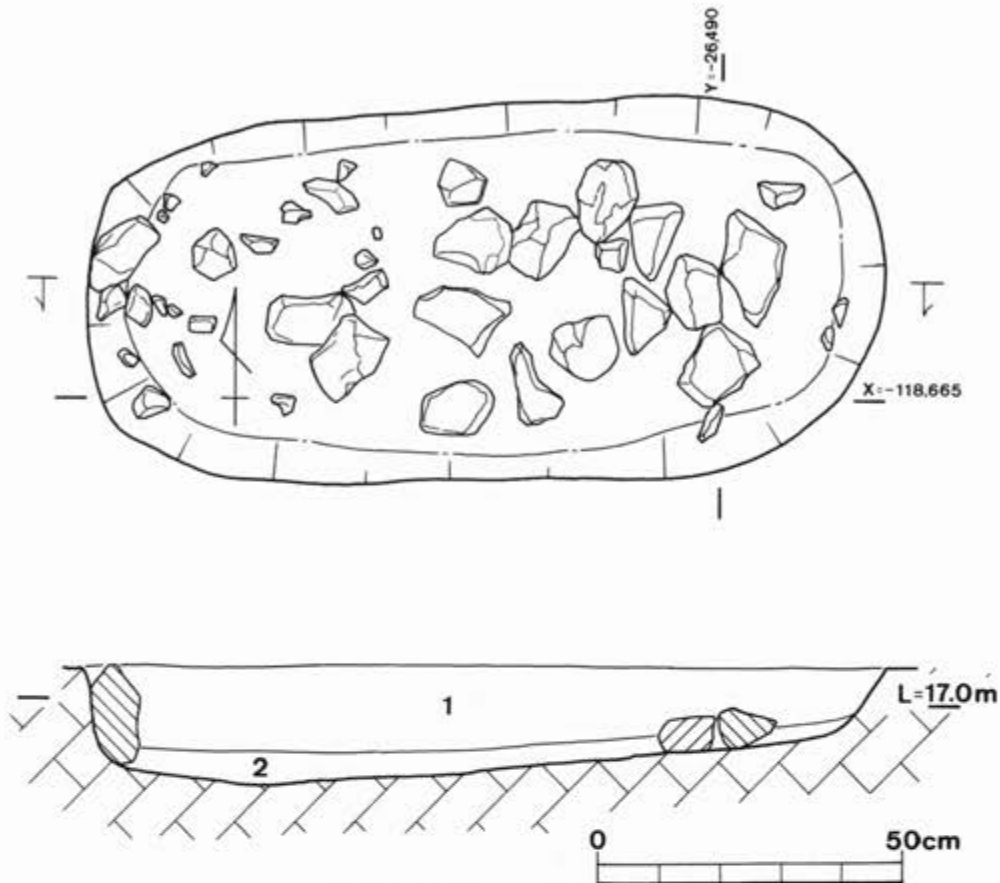
第2トレンチの第4層以下の土層堆積状況は、断ち割りの最下部において、拳大の礫を含む堆積層が数層確認でき、細砂層も複雑な堆積を呈している。また、下層は、砂粒の粗密から極めて多くの堆積層に分層できる。

第2トレンチ中央部を東流する流路内には、わずかではあるが土師器・須恵器を包含していることを確認した。これは、第1トレンチで検出した北端の流路及び暗灰褐色砂礫層(第5層)と同時期の堆積である可能性が考えられる。

一方、第2トレンチ西方では、東西方向の中世耕作溝を検出した。その多くは残存状況が不良である。また、トレンチ西半中央部では、炭を含む土坑 S K 38920(第36図、図版第30)を検出した。土坑 S K 38920は、東西方向の主軸がほぼ座標北に直交しており、平面形は隅丸長方形を呈している。土坑の規模は、東西が1.33m、南北が0.56~0.63mを測る。土坑底部には拳大の礫が点在している。埋土は、最下層に黒褐色炭層が5cm程度堆積しており、その上層には濁黄褐色土が14cm程度堆積している。土坑内からの遺物は出土していない。

c. 第3トレンチ(第37図断面A、第38・39図、図版第26-(2))

第3・4トレンチは、平成7年度の第4トレンチと先述した第2トレンチの中間に位置している。第3トレンチは、西方に所在する流路によって遺構面が流失している可能性があったが、トレンチ北壁(第37図断面A)及び西壁(第37図断面B)の堆積状況は、中世耕作溝を検出した第4層がほぼ水平堆積を呈していることから、第1・2トレンチのようには氾濫の影響を受けていなか



第36図 土坑S K 38920実測図
1. 濁黄褐色土 2. 黒褐色炭層

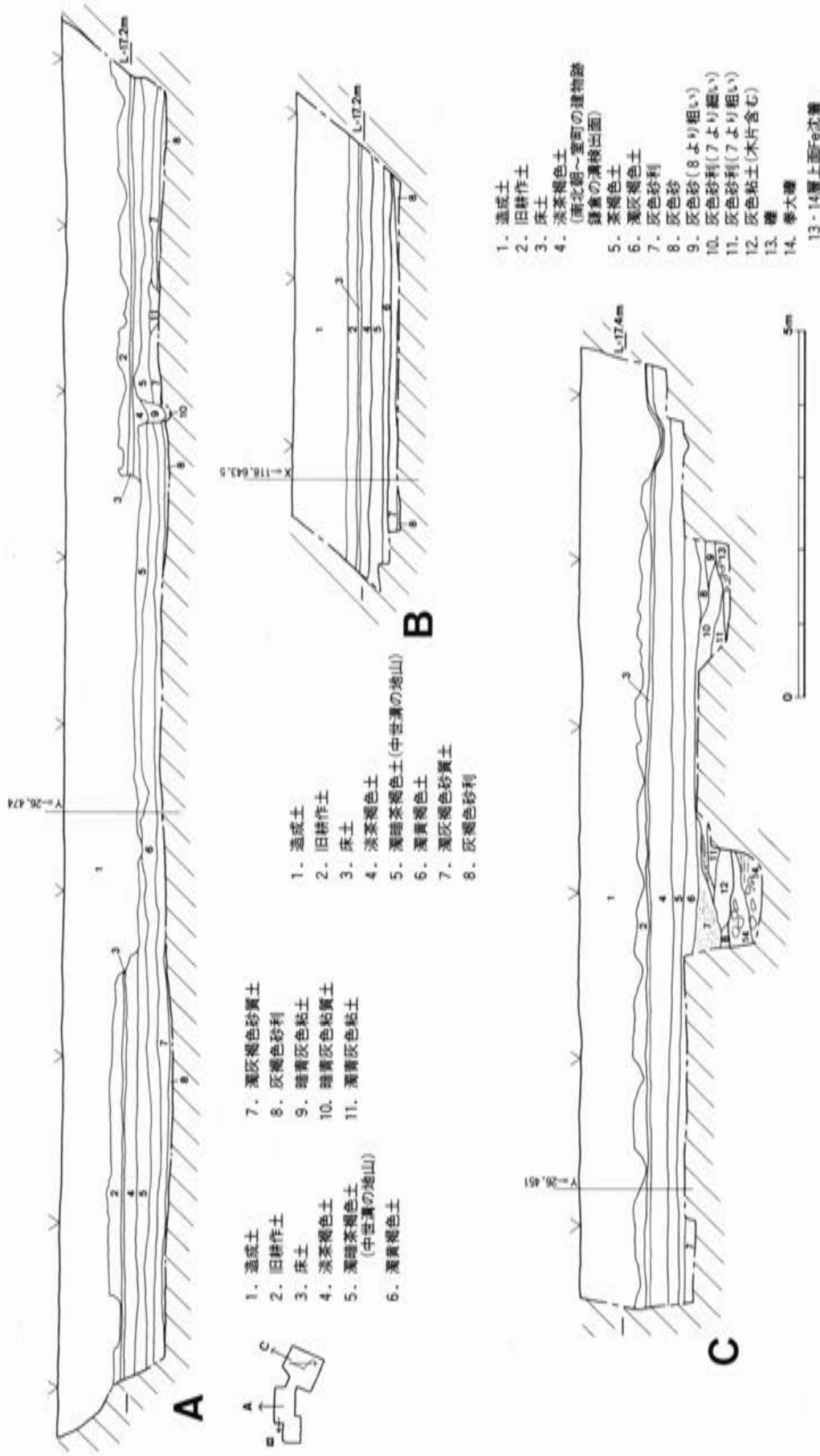
ったことが判明した。

第3トレンチでは、南東部で小規模な掘立柱建物跡を検出し、トレンチ全面で中世耕作溝を検出した。中世耕作溝群は、 $Y = -26,486\text{m}$ を境にして以西が東西方向、以東が南北方向に穿たれている。東西方向の耕作溝群は、第1・2トレンチと同じように、溝と溝に一定の間隔を有しており、残存状況もよくない。なお、南北方向の耕作溝群は、溝と溝とが複雑な切り合いを呈しており、遺存状況に大きな相違点がある。

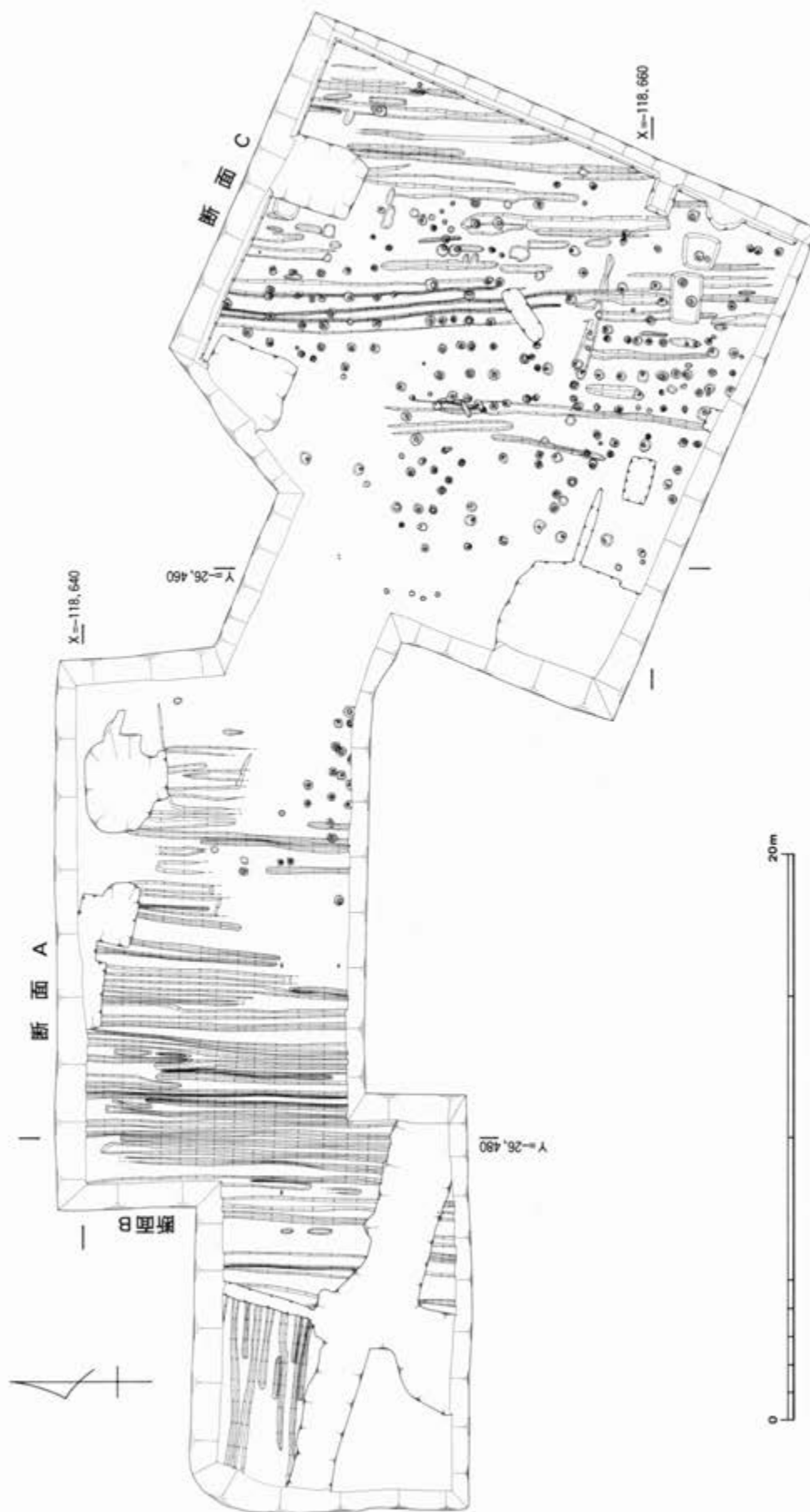
一方、トレンチ南東で検出した掘立柱建物跡1は、建物跡の主軸が座標軸と一致しており、東西4間・南北1間以上の規模を有している。東西4間の長さは3.6mで12尺、1間は0.9mで3尺を測る。なお、掘立柱建物跡1の西半に0.7mの間隔をもった柱列を検出したが、現時点では掘立柱建物跡としては復原できない状況である。

d. 第4トレンチ(第37図断面C、第38・40～44図、図版第31～37)

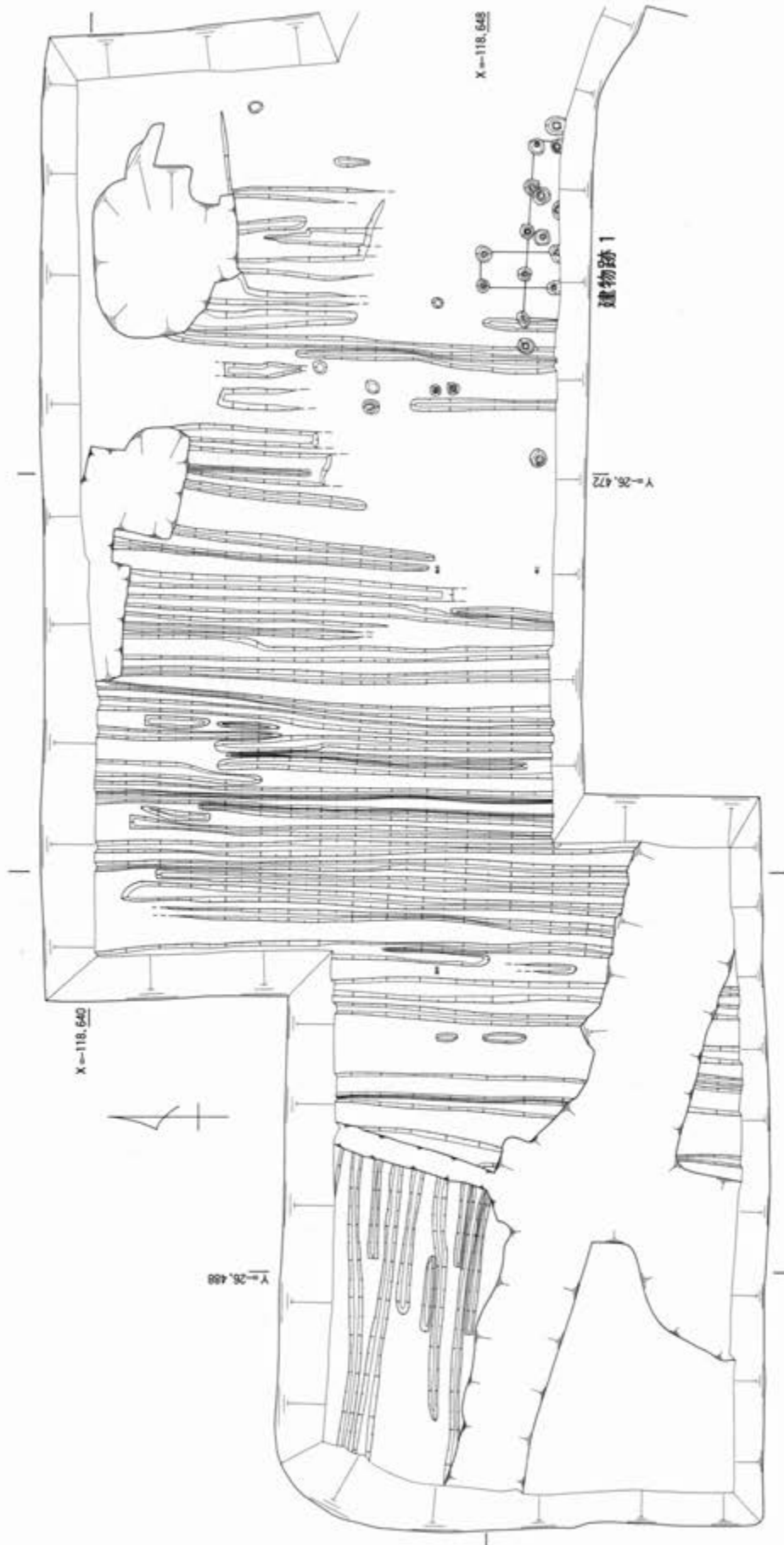
第3トレンチの東方に設定した方形のトレンチであり、堆積状況を確認するために北壁(第37図断面C)の断面観察を行った。中世の耕作溝を検出した第4層は、ほぼ水平な堆積状況を呈しており、上面の標高は17.0mを測る。第4層では、南北方向の中世耕作溝を検出したが、その耕作溝群を切り込んだ柱穴群を多数検出しており、少なくとも中世耕作溝群が埋没した以降に集落が形成されたことが判明した。中世耕作溝を切り込んだ柱穴群の検出は、当該建設予定地内の



第37図 第3・4トレンチ土層断面実測図



第38図 第3・4トレンチンチ実測図



第39図 第3トレンチ遺構平面図

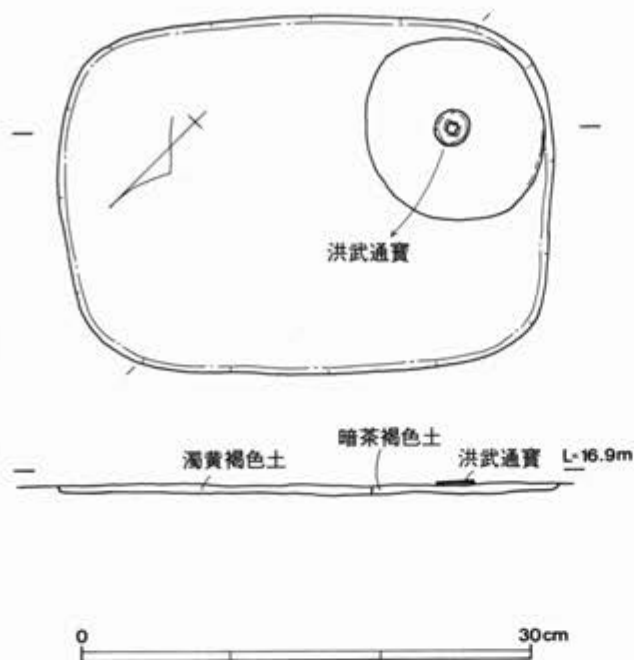
調査では初見である。一方、濁灰褐色土である第6層上面では、平安時代の柱穴群を検出しており、第4層を上層遺構群、第6層を下層遺構群として認識した。なお、第6層下では、一部で著しく腐植した有機物をわずかに包含する灰色粘土を検出したが、砂利・砂礫・砂層が堆積している。

第4トレンチでは、ほぼ7棟の掘立柱建物跡群(第40図)を検出した。各建物跡群は、主軸が座標軸とはほぼ一致しているが、建物跡が近接しすぎており、同時期ではなく、複数の時期にわたるようである。

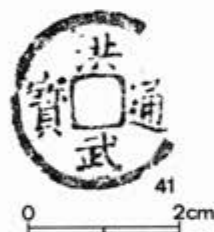
掘立柱建物跡2は、南北に主軸をもつ建物跡で、東西3間(2.7m)×南北4間(3.8m)の規模である。部分的には未検出であるが、総柱の建物跡の可能性も想定できる。掘立柱建物跡3は、南北に主軸をもつ建物跡で、東西2間(3m)×南北4間(6.7m)の規模である。南北の柱間は一定していない。掘立柱建物跡4は、東西に主軸をもつ建物跡である。東西3間(3m)×南北2間(2m)の規模で、束柱をもつ。掘立柱建物跡5は、南北に主軸をもつ建物跡で、東西1間(1.3m)×南北1間(1.8m)の規模である。小規模であるため周辺に未検出の柱穴が存在する可能性がある。掘立柱建物跡6は、各辺の中央で柱穴を検出していないが、東西2間(2.2m)×南北2間(2.4m)の小規模な建物跡である。掘立柱建物跡7は、東西に主軸をもつ建物跡で、東西4間



第40図 第4トレンチ遺構平面図



第41図 柱穴23実測図



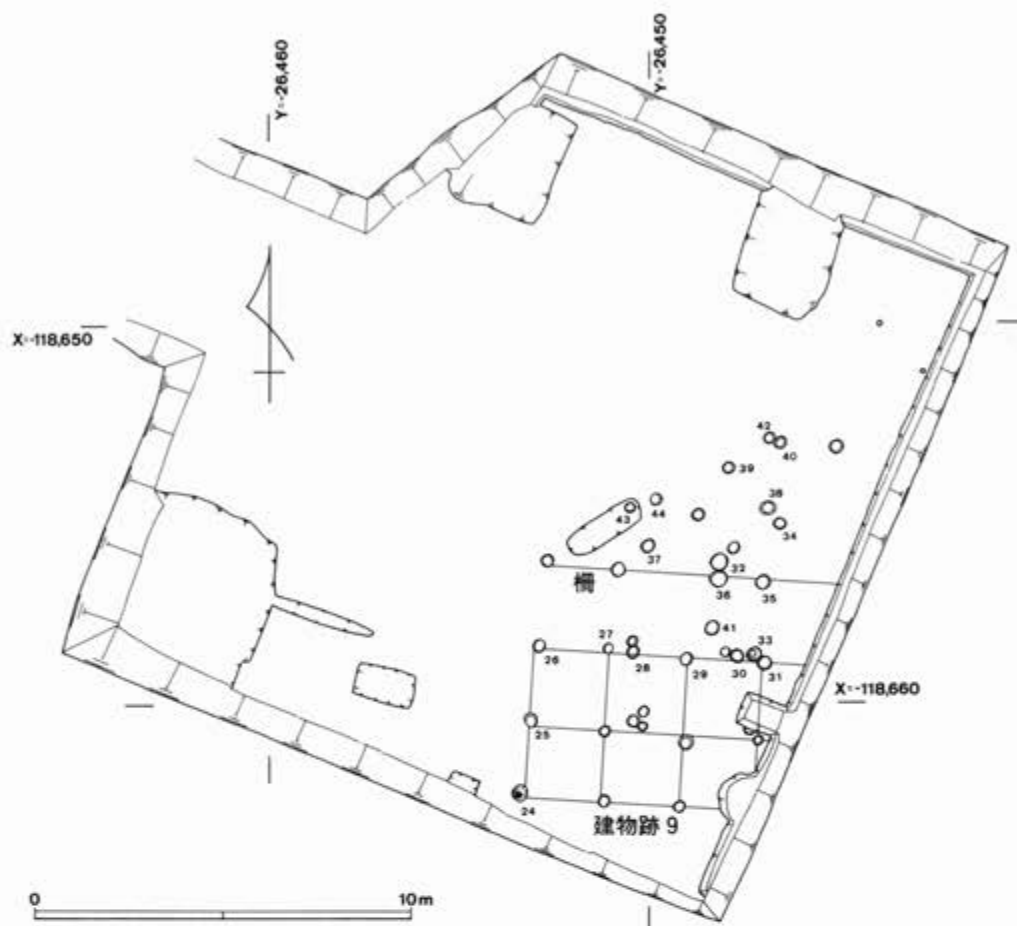
第42図 柱穴23出土
銭貨拓影

である。掘立柱建物跡8の南方にも屈折する柵を検出したが、検出地点がトレンチ南端であるため、一連の掘立柱建物跡との関係については不明である。

以上が、検出した掘立柱建物跡群の概観である。上層で検出した掘立柱建物跡群を構成する柱穴群は、中世耕作溝を切り込んで穿たれていることが判明しており、中世以降に穿たれたことが判明している。具体的に集落の時期を把握する遺構としては、掘立柱建物跡8の南半部分で検出した柱穴23(第41図、図版第33-(1))がある。この柱穴は、建物跡を構成する柱穴としては認識できなかったが、掘形の形状及び埋土が、一連の柱穴群と酷似することから、上層検出の掘立柱建物跡群と同時期と考えてよい状況にある。柱穴23は、長軸0.33m×短軸0.24mを測る隅丸方形の柱穴で、掘形には濁黄褐色土、柱痕部には暗茶褐色土の埋土が確認できた。柱穴の残存状況は不良であるが、柱痕部中央で銭貨(第42図)を1点検出した。銭貨は、柱痕部中央に水平に埋置されており、意図的に埋納されたことが判明した。出土した銭貨は、中国・明代の洪武通寶(1368年初鑄)であり、流通期間などを考慮すれば、少なくとも南北朝以後の掘立柱建物跡群であることが把握できた。意図的に埋納された銭貨は、建物廃絶時の地鎮行為と関連することが想定できる。

一方、第6層で検出した下層遺構群(第43図、図版第34)には、掘立柱建物跡と柵がある。掘立柱建物跡9は、東西に主軸をもつ建物跡で、東西3間以上(7.8m以上)×南北2間(3.9m)の規模を測る。また、掘立柱建物跡9の北面から2mのライン上では柵を確認した。この柵は、掘立柱建物跡9を構成する柱列である可能性もあるが、西から2間目の柱間の距離が掘立柱建物跡9の柱間と一致しないことから、柵として復原した。

(5.1m)×南北1間(1.6m)の規模である。南北両面には、3か所で柱穴を検出したのみであるが、柱間が2.5m以上に広くなることから4間と復原した。掘立柱建物跡8は、南北に主軸をもつ建物跡で、東西2間(2.4m)×南北4間(3m)の規模である。南北の柱間が、東西に比べてやや狭いが、総柱の建物に復原できる。また、掘立柱建物跡8の北面・西面には、北面3間(3.6m以上)、西面2間(3.6m以上)の規模を測る柵を検出した。掘立柱建物跡8と主軸が同一であることから、付随する施設として復原することも可能

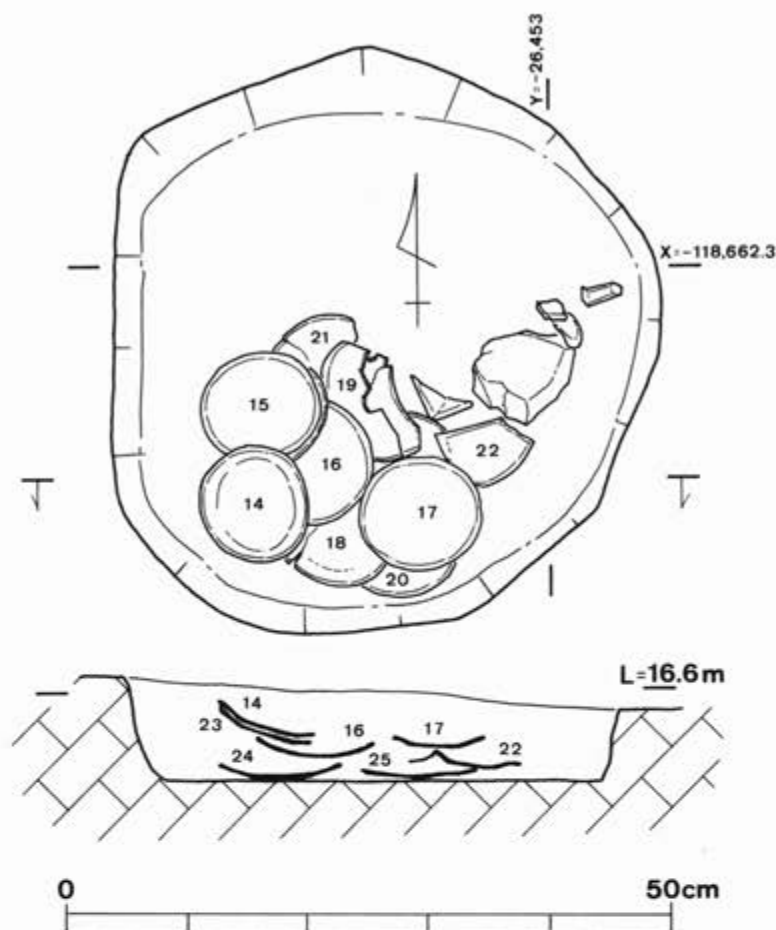


第43図 第4トレンチ遺構実測図

下層で検出した柱穴内には、比較的まとまった土器が埋納されているが、特に、掘立柱建物跡9を構成する柱穴24(第44図、図版第35)では、土師器・皿が重なった状態で出土している。柱穴24は、長径0.52m×短径0.48mの不整形な円形を呈している。検出面から柱穴底部までの深さは、平均0.07mを測り、上半部の削平が想定できる。土師器・皿は、柱穴の南半で重なった状態で出土しており、0.25mの範囲内から出土していることから、柱の抜き取り後に埋納された可能性が高い。

なお、柱穴32(図版第36-(1))からは土師器・皿とともに黒色土器・椀が、柱穴34(図版第36-(2))からは土師器・皿が、柱穴26(図版第37-(1))からは土師器・小型椀が、柱穴36(図版第37-(2))からは土師器・皿とともに黒色土器・椀が各々出土しており、意図的に埋納したと考えてよい状況である。

以上が、下層で検出した遺構群の説明であるが、出土した土師器・皿の形態的特徴から時期差は考慮しなければならないが、ほぼ、平安時代中期の掘立柱建物跡及び柵列と認識して大過ないところである。



第44図 柱穴24実測図

(2)出土遺物(第45図、図版第38・39)

1は、第1トレンチの中世耕作溝を検出した第4層内から出土した瓦器・碗である。口径14.6cm・残存高3.9cmを測る。内外面とも粗いヘラ磨きで調整するが、外面下半部には指頭圧痕が観察できる。口縁端部内面に1条の沈線が入る。

2は、第1トレンチの中世耕作溝を検出した第4層内から出土した中国製青磁・碗である。高台径6cm・高台高0.5cmを測る。削り出しによって高台を成形している。

3は、第1トレンチの第5層内から出土した緑釉陶器・碗である。高台径7cm・高台高0.8cmを測る。貼り付け高台で、胎土の色調は、明黄褐色を呈している。

4は、第1トレンチから出土した土師器・皿である。口径4.9cm・器高1.5cmを測る。底部が著しく上げ底になる形態的特徴をもつ。

5は、第1トレンチの中世耕作溝SD38914から出土した土師器・皿で、口径6.3cm・器高0.9cmを測る。内外面ともなで調整する。

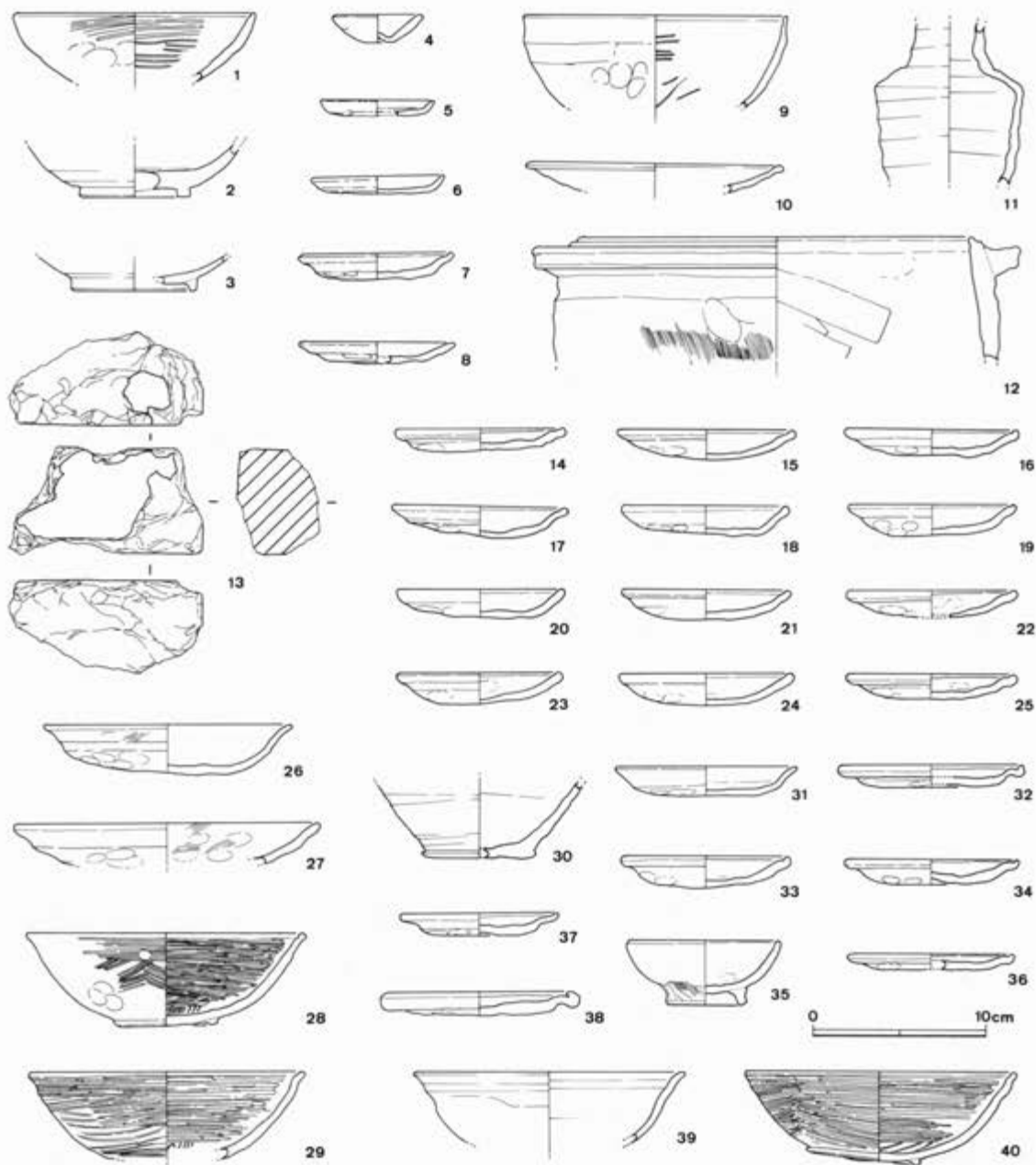
6は、第1トレンチの中世耕作溝を検出した第4層内出土の土師器・皿である。口径7.6cm・器高1.0cmを測る。内外面とも不整方向のなで調整しているが、底部外面には工具によるなで

が観察できる。

7は、第2トレンチから出土した土師器・皿である。口径8.6cm・器高1.5cmを測る。口縁部でわずかに屈曲し、玉縁状の口縁端部をもつ。色調は、明赤褐色である。

8は、第2トレンチから出土した土師器・皿である。口径8.8cm・器高1.2cmを測る。外面には1cmあたり8条のハケ目が観察できる。

9は、第2トレンチから出土した瓦器・椀である。口径15cm・残存高5.1cmを測る。内外面と



第45図 出土遺物実測図

- | | | |
|-------------------|----------------|-------------------|
| 1. 第1トレンチ旧小畑川流路 | 2~4. 第1トレンチ4層 | 5. 第1トレンチS D38914 |
| 6. 第1トレンチS X38902 | 7~13. 第1トレンチ5層 | 14~25. 第4トレンチ柱穴24 |
| 26~32. 第4トレンチ柱穴36 | 33. 第4トレンチ柱穴34 | 34. 第4トレンチ柱穴38 |
| 35. 第4トレンチ柱穴26 | 36. 第4トレンチ柱穴40 | 37~40. 第4トレンチ柱穴32 |

も粗いヘラ磨きで調整するが、外面下半部には指頭圧痕が観察できる。

10は、第1トレンチの第5層内から出土した緑釉陶器・皿である。口径14.4cm・残存高1.6cmを測る。胎土は密であり、焼成は堅緻である。

11は、第2トレンチの第5層内から出土した灰釉陶器・壺である。残存高8.9cmを測る。

12は、第2トレンチの第5層内から出土した土師器・羽釜である。口径22.2cm・残存高7cmを測る。外面を1cmあたり12条のハケ、内面を斜め方向のなでで調整している。胎土は暗茶褐色を呈しており、胎土には0.5~2mmの砂粒を含む。

13は、残存状況が極めて不良な埴である。3面の一部が残存するにすぎず、法量は不明である。

14~25は、第4トレンチ柱穴23から一括して出土した土師器・皿である。底部は、平らな個体とやや丸みのある個体に分類できる。また、わずかに内湾する口縁部と、屈曲し肥厚する口縁部に分類できる。口径は9.3~9.9cmである。

28は、第4トレンチ柱穴32から出土した黒色土器・椀である。口径15.9cm・器高5.3cmを測る。内外面ともていねいなヘラ磨きで調整するが、外面下半部には指頭圧痕が観察できる。

29は、第4トレンチ柱穴36から出土した黒色土器・椀である。口径15.6cm・残存高5.0cmを測る。内外面ともていねいなヘラ磨きで調整する。口縁端部内面に1条の沈線が入る。

35は、第4トレンチ柱穴26から出土した土師器の小型椀である。口径8.1cm・器高3.7cmを測る。

38は、第4トレンチ柱穴32から出土した土師器・皿である。口径10.5cm・器高1.4cmを測る。平らな底部と鋭く折り返した口縁部からなる。色調は、淡茶褐色である。

40は、第4トレンチ柱穴32から出土した黒色土器・椀である。口径15.3cm・器高5.4cmを測る。内外面ともていねいなヘラ磨きで調整する。

以上が、各トレンチから出土した遺物である。第4トレンチの下層で検出した柱穴36出土の土器は11世紀前半、柱穴32の出土土器は11世紀中頃、柱穴24出土土器は11世紀末に各々比定できる。これは、集落が営まれた存続期間を示している。

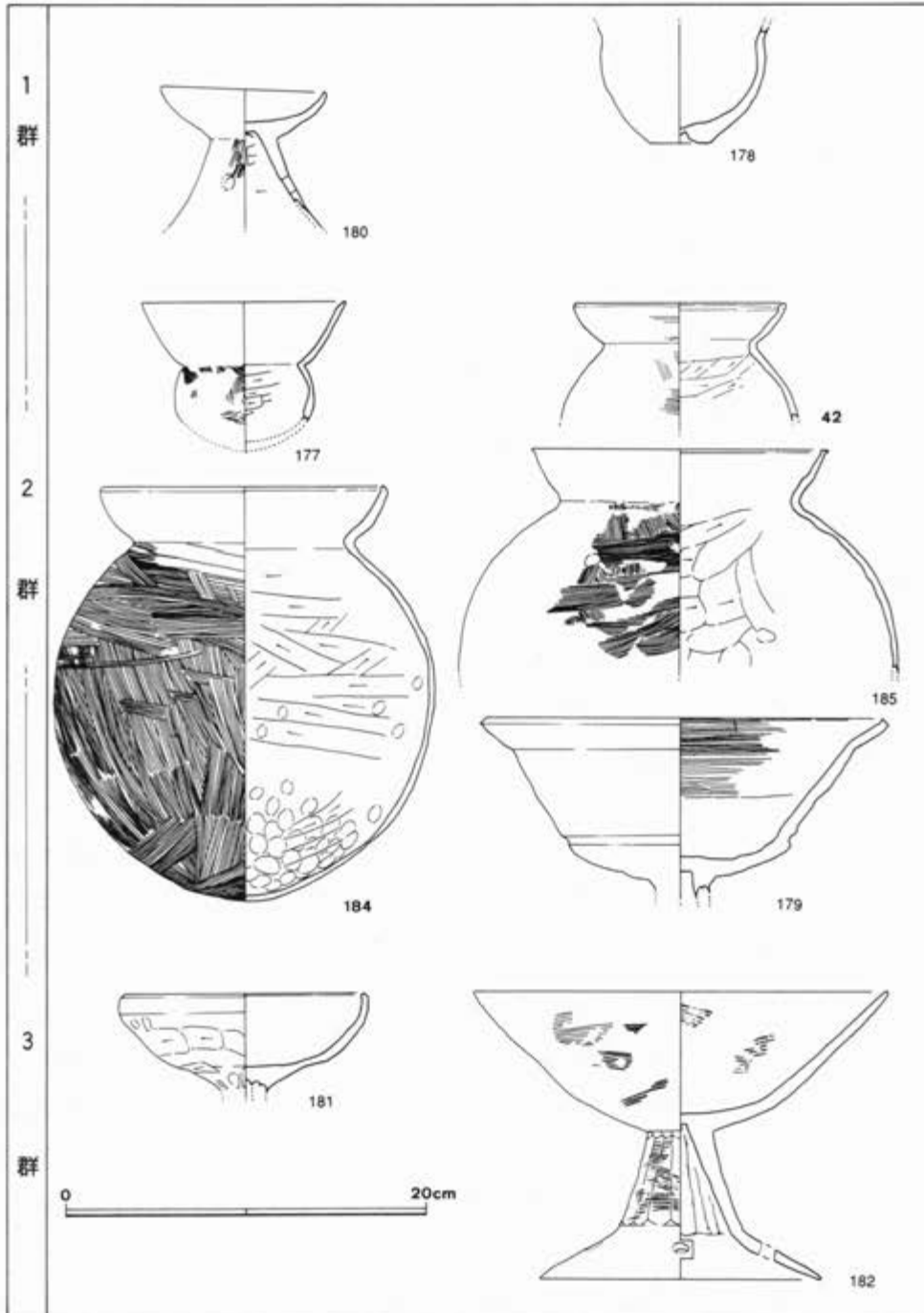
3. 小 結

今回実施した左京第389次調査では、第1トレンチ南西で小畑川の旧河道の一部を検出することができた。従来、小畑川の河道が現行の河道に改修された時期については、隣接地における多くの発掘調査成果をもとに論議が繰り返されてきたが、今回の発掘調査の結果、中世に至るまでは現在の府道志水西向日停車場線(外環状線)一帯を東流していることが把握できた。また、小畑川の旧河道の北隣接地に位置する第4トレンチでは、初鑄年代が1368年の洪武通寶が出土した掘立柱建物跡群を検出できた。この遺構の検出で少なくとも南北朝時代から室町時代前半期には河道の改修が完了し、旧河道一帯が生活空間として利用されていたことが判明した。また、従来、中福知遺跡は、中世に耕地化されると考えられてきたが、第4トレンチの上層で検出した掘立柱建物跡の存在から、南北朝時代から室町時代前半期に至るまで集落が営まれたことが判明した。

最後に発掘調査を進めるにあたり、京都府土木建築部住宅課をはじめ、向日市埋蔵文化財セン

ター・地元自治会から多くの御協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。また、酷暑の中、発掘調査に従事していただいた方々の芳名を記し、御礼を申し上げたい。

4. ま と め 一府営上植野団地建設に係わる左京第353・366・389次調査の成果総論—
 府営住宅上植野団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成6～8年度の3か年に及んだ。
 平成6年度は左京第353次調査、平成7年度は左京第366次調査、平成8年度は左京第389次調査
 として次数登録を行った。ここでは、当該建設工事に伴う発掘調査の成果を時代ごとにまとめ、



第46図 左京第366次 古墳時代前期出土遺物分類表

周辺地域の歴史的環境を復原する上での考古学的資料として提示しておきたい。

(1) 古墳時代(第46図、図版第40)

平成7年度に実施した左京第366次調査の第4トレンチにおいて、古墳時代前期に比定できる溝・土坑などを検出した。竪穴式住居跡などのような集落の存在を示す遺構は検出できなかったが、布留式甕の完形品を埋納した土坑S K36672や蛇行する複数の溝などの存在から、耕作に関する施設が存在した可能性を指摘した。この布留式の甕内部からは、植物遺体が出土しており、植物珪酸体分析の結果、イネと食用のキビ族であることが判明した。収穫した稲穂をまとめて甕内に納め、何らかの祭祀の後、最小規模の土坑を穿って埋納した可能性がある。

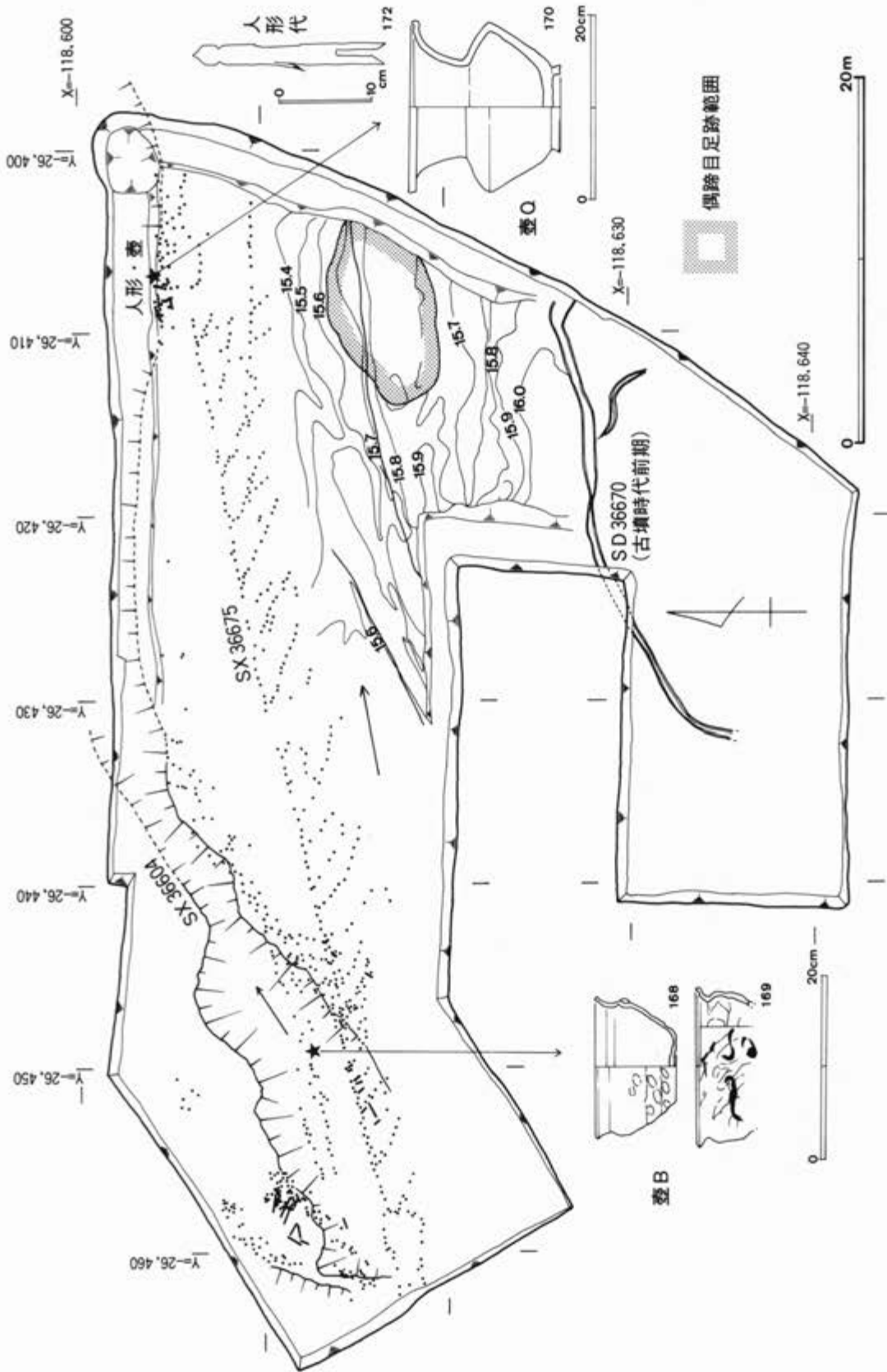
古墳時代前期の土器群は、第46図に図示したように高杯・甕・小型丸底土器などが出土している。遺構に伴う土器は、第46図184の甕のみであり、他の土器は遺物包含層からの出土である。そのため、一括資料としての明確な共伴関係は不明であるが、形式的な分類を基準に土器群を見た場合、3群に分類することが可能である。1群は、庄内式最終末に比定できる底部輪台の甕と布留式古段階に比定できる高杯がある。この1群は、出土量もわずかであり、当該地が広義の意味での生業の空間として利用され始めた時期を示している。2群に比定できる土器は、比較的まとまっており、埋納土坑S K36672の甕(第46図184)と高杯・小型丸底土器などがある。これらの土器群は、1群よりも形式的にやや後出する形態的特徴を有している。この2群は、当該地の土地利用が最も盛んに行われた時期であり、当該遺跡の中心時期を示している。3群は、一群と同様、基本的な土器量は少ないが、高杯が出土している。2群よりもやや新しい要素をもっており、布留式中段階に比定できよう。

周辺での同時期の遺跡としては、約130m北東の左京第257次調査^(註7)において、古墳時代前期の水田が確認されている。また、東方には、芝本遺跡などが知られている。これらの遺跡群との関係を明確にすることは困難であるが、比較的広い範囲に生活・生産の場が想定できる。

(2) 奈良時代(第47・48図、図版第41・42・44)

奈良時代に比定できる遺構は、平成7年度に実施した左京第366次調査の第4トレンチで検出した流路S X36604と約800本の杭から構成される護岸施設S X36675がある。両遺構の新旧関係は、度重なる氾濫によって形成された流路S X36604を固定した後、約800本の杭から構成される護岸施設S X36675が構築されたと考えられる。この護岸施設S X36675は、第4トレンチでは複雑に杭が打ち込まれているが、東方に隣接する左京第366次調査の第5トレンチでは、2列に集約されている。また、東方300mに位置する府立向陽高校敷地内の左京第2・4次調査^(註8)でも同様な遺構が確認されており、奈良時代に大規模な土木事業が行われたことが、これらの調査から判明した。また、流路S X36604と護岸施設S X36675を検出した第4トレンチ北肩部には、四条条間小路の一部が確認されているが、土層堆積状況の観察から、四条条間小路施工以前の土木事業であることが確認できた。

平成6年度の左京第353次調査地の北方で実施された左京第252次調査地の小字名は「車返し」と呼称するが、大規模な土木事業を示唆する流路S X36604と護岸施設S X36675が交差する当該



第47図 左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列実測図

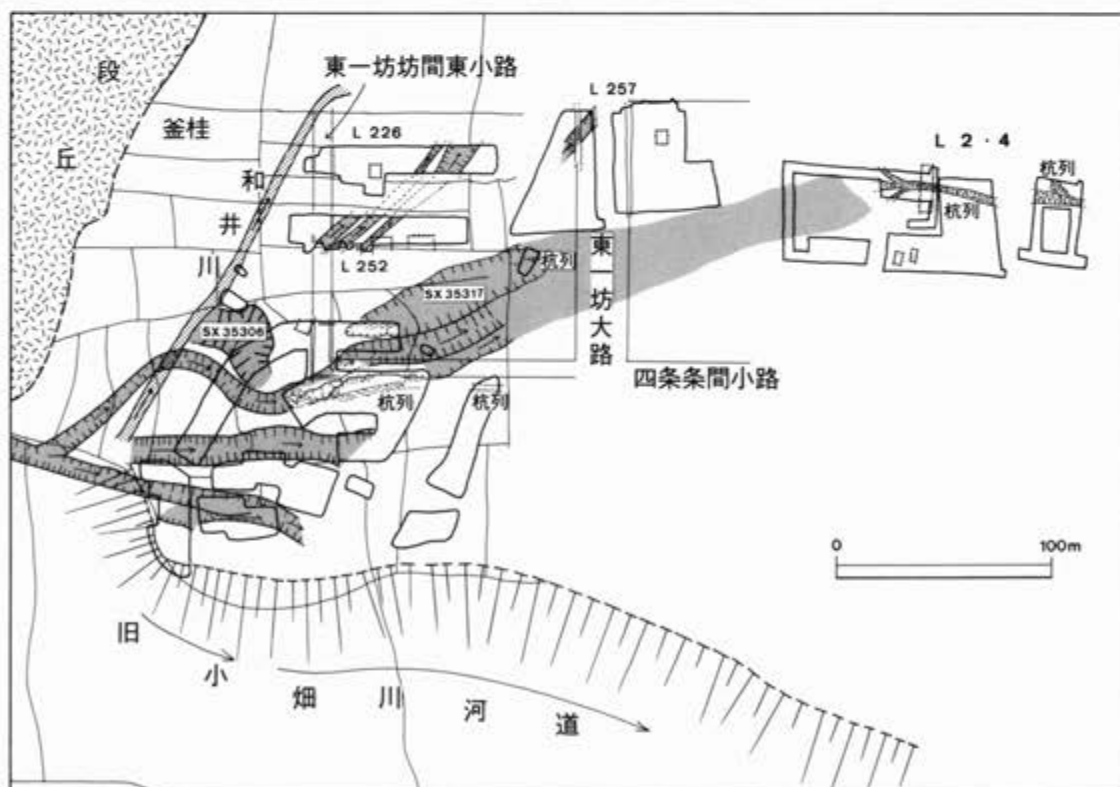
地が、小畑川の氾濫の北限を示しているのかもしれない。周辺に奈良時代の集落が確認されていないことから、長岡京造営前段階における国家的な土木事業であった可能性が考えられる。また、「車返し」の地名から、第4トレンチ以南一帯は、長岡京期には条坊施工が不可能な地形であったことを示唆している。

一方、府営上植野団地建設予定地の土層堆積状況は、極めて複雑であることが、土層断面の観察から明らかになっている。周辺地域一帯で実施された調査成果も含め、当該地における自然流路・池沼などの分布を図示したのが第48図である。時期的には、奈良時代から平安時代の流路を図示しているが、今回、調査を行った左京第389次調査の第1トレンチ南西部では、小畑川の旧河道を検出しており、調査地一帯が旧河道に隣接していることが判明した。この小畑川の氾濫により形成されたのが各所で確認した自然流路・池沼などであり、最終的にこの氾濫が改修される時期が、長岡京期に限りなく近い奈良時代と考えられる。つまり、先述した大規模な土木事業は、小畑川の旧河道を改修する国家的目的をもって遂行されたことが、第48図から読みとることができるのである。今後、周辺地域で改修の跡が確認できれば、さらに、その土木事業の規模が明らかになるであろう。

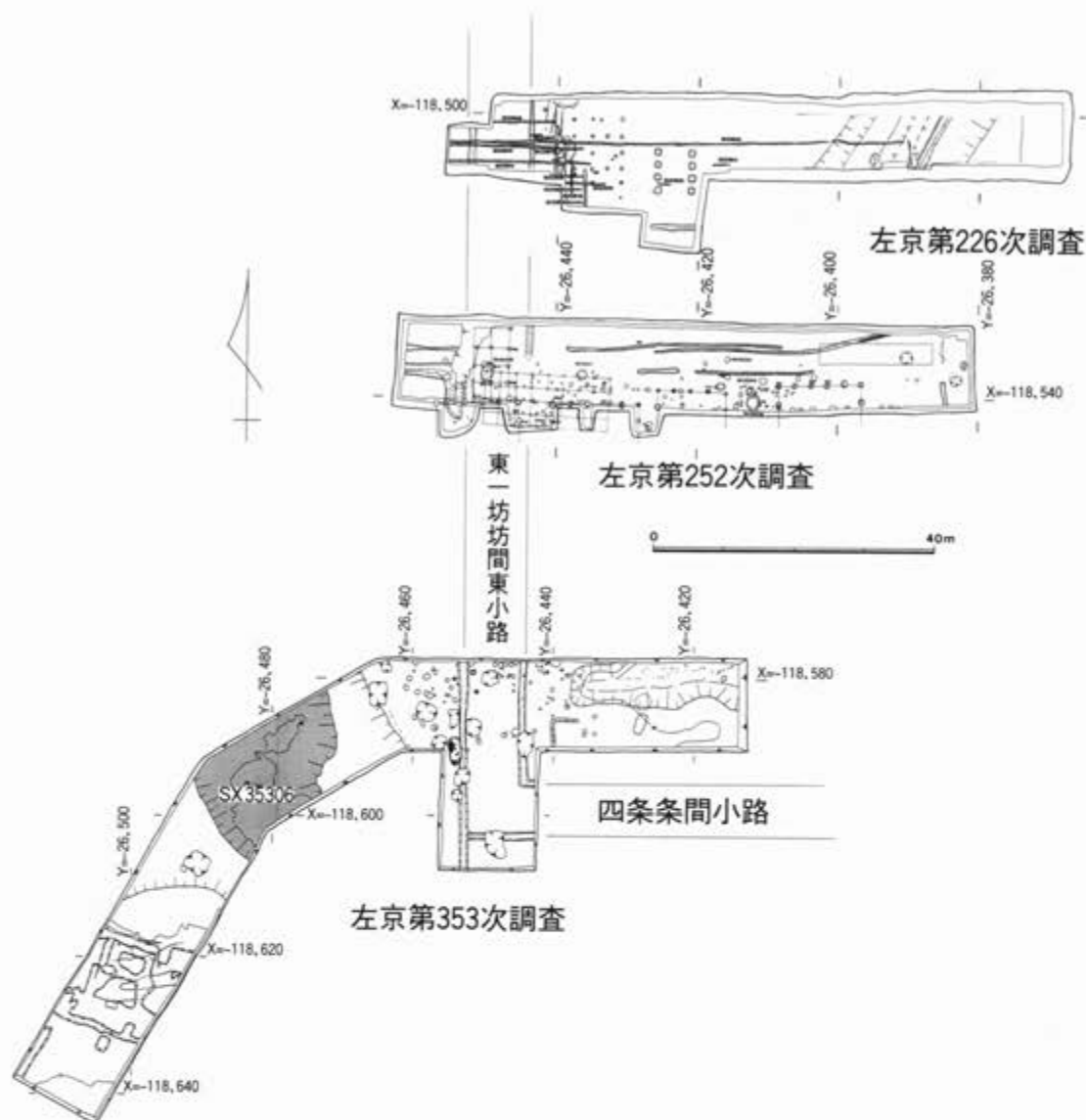
(3)長岡京期(第49図、図版第43)

当該地は、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町の推定地であり、建設予定地内には東一坊坊間東小路と四条条間小路の所在が予想されていたところでもある。

この東一坊坊間東小路は、左京第226・252・353次調査によっても確認されている。しかし、



第48図 調査地周辺旧流路復原図

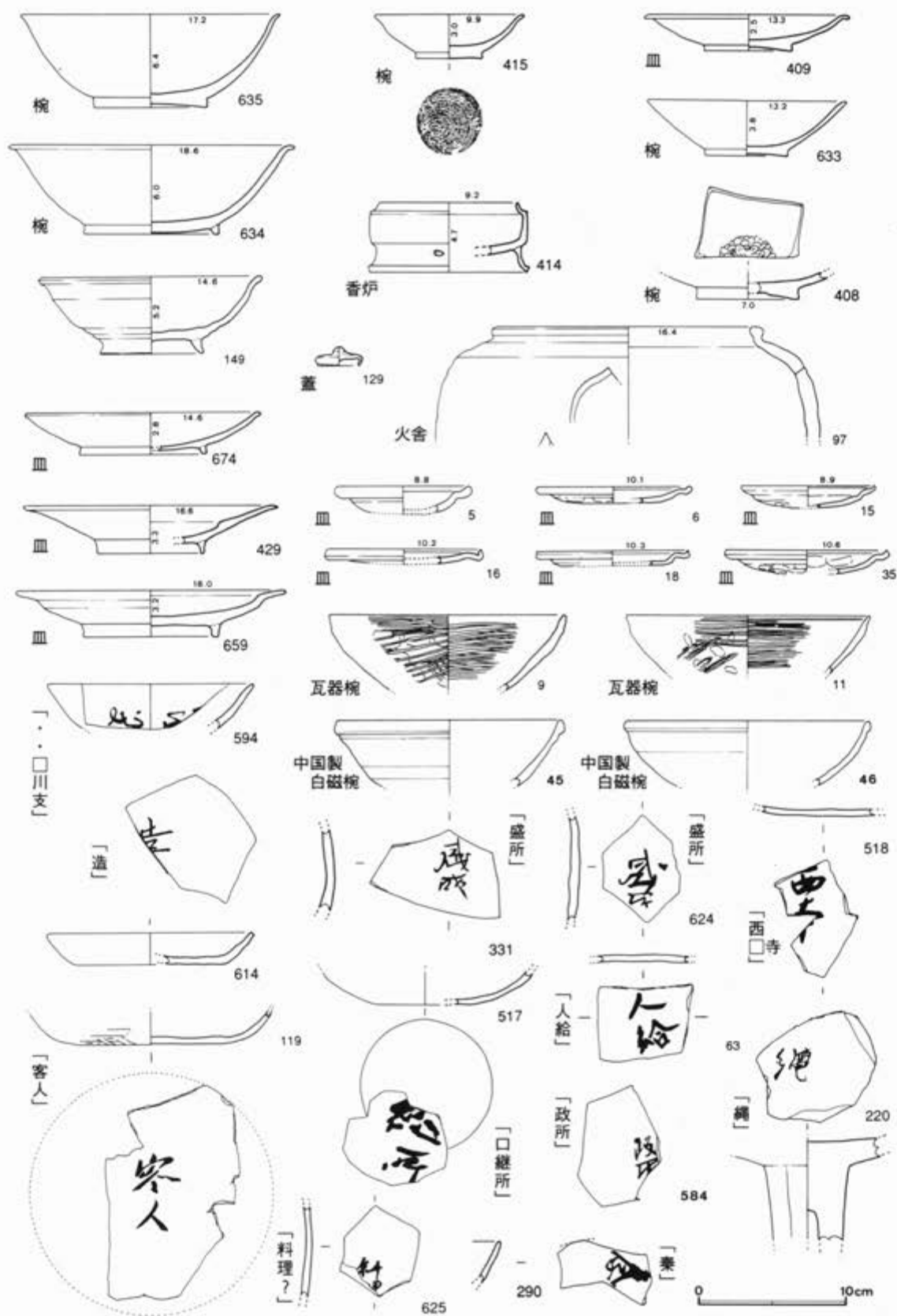


第49図 左京第226・252・353次調査検出遺構配置図

平成7年度の第4トレンチでは、東一坊坊間東小路を検出しておらず、その原因として、度重なる小畑川の氾濫を想定したところである。一方、東一坊坊間東小路のほぼ中央で検出した溝S D 36606は、中心座標がY=26,448.689mを測る。左京第353次調査では、断面でかろうじて確認できた溝であり、第4トレンチで、平面的に確認することができた。直線的に検出しており、検出位置が東一坊坊間東小路の西側溝S D 35313に隣接していることから、条坊側溝の可能性も視野に入れる必要がある。しかし、仮に、東一坊坊間東小路の西側溝とすれば、東一坊坊間東小路の東側溝との距離は、5.3mとなり、条坊の小路としての機能は果たせなくなる。今後、解決しなければならない問題点は多い。

(4)平安時代(第50～52図、付表7)

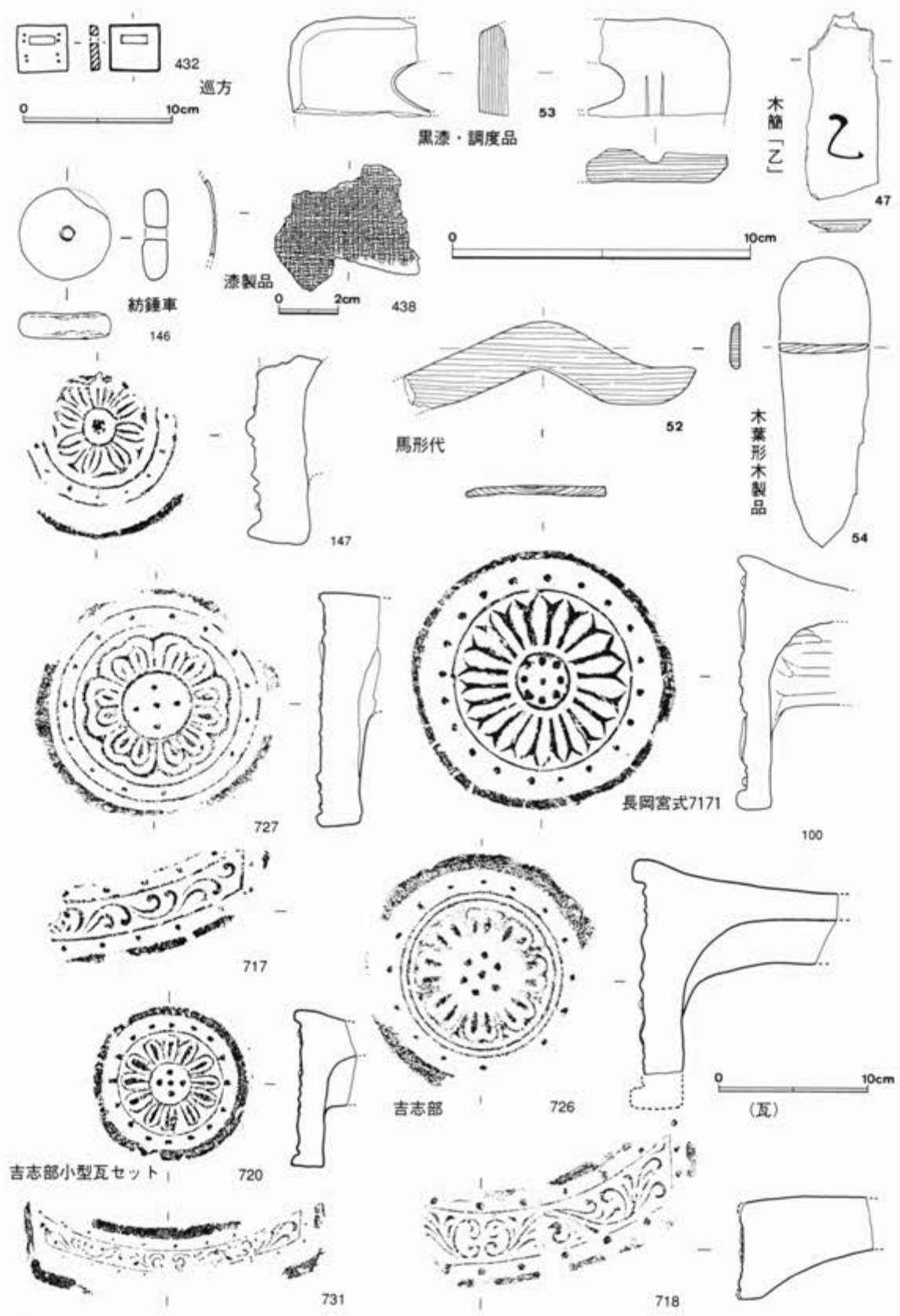
平安時代前期 平安時代前期に比定できる遺構としては、平成6年度の左京第353次調査で検出した、池沼S X 35306、落ち込みS X 35317、土坑S K 35312、掘立柱建物跡などがある。池沼S X 35306は、暗茶褐色粘土を埋土とし、堆積層の厚みは、0.4mを測る。最下層である第6層か



第51図 左京第353・366次調査出土遺物実測図(2)

635・415・409・633・634・414・408・674・429・659・45・46・614・331・517・625・290・624・518・584・220. 左京第353次調査

149・129・97・5・6・15・16・18・35・9・11・119・63. 左京第366次調査



第52図 左京第353・366次調査出土遺物実測図(3)

432・53・47・438・52・54・727・717・720・731・726・718. 左京第353次調査 146・147・100. 左京第366次調査

ら長岡京期～平安時代の遺物が出土している。調査地周辺は、『類聚三代格』延暦14年1月29日付け太政官符に、長岡京左京三条一坊八・九・十五・十六町、二坊三・四・六町を勅旨所の藍畑、三条一坊十町を近衛府の蓮池にするようにとの記載事項が知られているが、埋土の花粉分析の結果から、基本的には関連しないことが判明した。これにより太政官符の記載事項が示す施設は、当該地よりも以北に存在することが想定できた。また、左京第353次調査で検出した落ち込みS X35317からは、第50～52図に図示した多量の遺物が出土した。土師器では、杯・碗、皿A高杯、壺E、甕の各器形が出土している。土師器が全体に占める割合は76.5%である。また、須恵器には杯・碗、鉢D、壺A・N、瓶などが出土しており、須恵器が全体に占める割合は20.4%である。一方、施釉陶器の中で緑釉陶器には碗、皿、香炉、火舎などが出土しており、京都系・東海系の混在が見られる。全体に占める割合は、1%に満たないが616の破片数を数える。

落ち込みS X35317から出土した同時期の土器点数は、付表7にあるように34,043点であるが、各器種の出土比率は、平安京内の出土比率に近似しており、当該地の平安時代前期における土地利用の実態を把握することが、急がれる。また、転用硯は128点を数え、「繩」「秦」「料理?」「□継所」「政所」「□川支」「造」「盛所」「人給」「客人」などの墨書や判読できないが木簡なども出土している。このように出土した土器群は、平安京跡の出土比率に近似し、なおかつ、平安京I期新段階のパターンに近似しているものの、出土土器の全体的な型式から見ると、平安京II期古段階が中心時期となる。これらの土器群は、厳密な一括性に問題があるが、9世紀第2四半世紀から9世紀第4四半世紀の中葉に中心時期を設定できる。

一方、出土瓦には、平城宮式・長岡宮式の軒丸瓦とともに、大阪吉志部産の軒丸・平瓦や小型軒丸・平瓦が出土しており、建物の性格を考察する上での基礎資料と言える。また、落ち込みS X35317からは、檜皮が多量に出土しており、瓦葺き建物と檜皮葺き建物が混在していたことが

付表7 左京第353次S X35317出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	全体比率 (%)	土師器以外比率 (%)
土師器	杯・碗・皿	22,567	88.0	76.5	
	高杯・盤・鉢	831	3.2		
	甕・釜・鍋	2,244	8.7		
	その他	8	0.0		
	不明	19	0.1		
	小計	25,669	100.0		
黒色土器	杯・碗・皿	470	61.1	1.9	9.2
	甕	297	38.6		
	その他	2	0.3		
	不明	0	0.0		
	小計	769	100.0		
須恵器	杯・碗・皿	4,274	62.7	20.4	81.4
	壺・瓶	308	4.5		
	鉢	1,164	17.1		
	甕・大型壺	1,058	15.5		
	その他	2	0.0		
	不明	10	0.2		
	小計	6,816	100.0		
緑釉陶器	杯・碗・皿	605	98.2	0.8	7.4
	壺・瓶	10	1.6		
	その他	1	0.2		
	不明	0	0.0		
	小計	616	100.0		
無釉陶器	杯・碗・皿	25	100.0	0.1	0.3
	高杯	0	0.0		
	盤	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0		
	小計	25	100.0		
灰釉陶器	杯・碗・皿	91	61.5	0.3	1.7
	壺・瓶	55	37.2		
	その他	2	1.3		
	不明	0	0.0		
	小計	148	100.0		100.0
総数		34,043			

判明した。現時点では双方に関係する建物跡の検出はできていないが、左京第226・252次調査地帯に大規模な建物が存在する可能性が指摘される場所である。

以上のように、長岡京廢都後から9世紀中葉にかけての考古学的調査成果は、何らかの公的施設が存在したことを示唆しているが、その性格については、具体的な資料を提示して、推定することはできない。

そこで長岡京廢都後の土地利用について、平安貴族に旧京内の土地が、下賜された状況を「日本後紀」の記載事項を整理して、以下にあげておきたい。

なお、これらの記載事項と当該地から出土した考古資料を結びつける根拠は希薄であるが、公的機関が存在したという一定の推論を前提とし、その基礎史料としておきたい。

延暦十六年「長岡京地一町賜從四位下菅野朝臣眞道。」

延暦十六年「長岡京地二町賜諱。」

延暦十六年「長岡京地五町賜從四位下多治比真人邑刀自。同京地一町賜大田親王。」

延暦十八年「長岡京地一町賜從五位下藤原朝臣奈良子。」

延暦十八年「長岡京地一町賜民部少輔從五位下菅野朝臣池成。」

延暦廿三年「山城國乙訓郡白田六町賜甘南備内親王。」

延暦廿四年「山城國乙訓郡白田一町賜大判事從五位下讚岐公千繼。」

延暦廿四年「山城國乙訓郡地六町賜大原内親王。」

大同四年「長岡京地四町賜四品坂本親王。」

弘仁二年「山城國乙訓郡白田一町。賜從四位下百濟王教法。」

弘仁二年「山城國乙訓郡藥園一町賜施藥院。」

弘仁二年「山城國乙訓郡地四町賜左衛士督從四位上藤原朝臣冬嗣。」

弘仁二年「山城國乙訓郡地二町。田十町。池一處。栗林一町。賜甘南備内親王。」

弘仁二年「山城國乙訓郡地一町賜春日内親王。」

弘仁三年「山城國乙訓郡荒地賜大外記從五位上上毛野朝臣穎人。左大使正六位上朝原宿祢諸坂。左少史從七位下佐太忌寸豐長各一町。」

弘仁三年「山城國乙訓郡陸田一町九段賜春日内親王。」

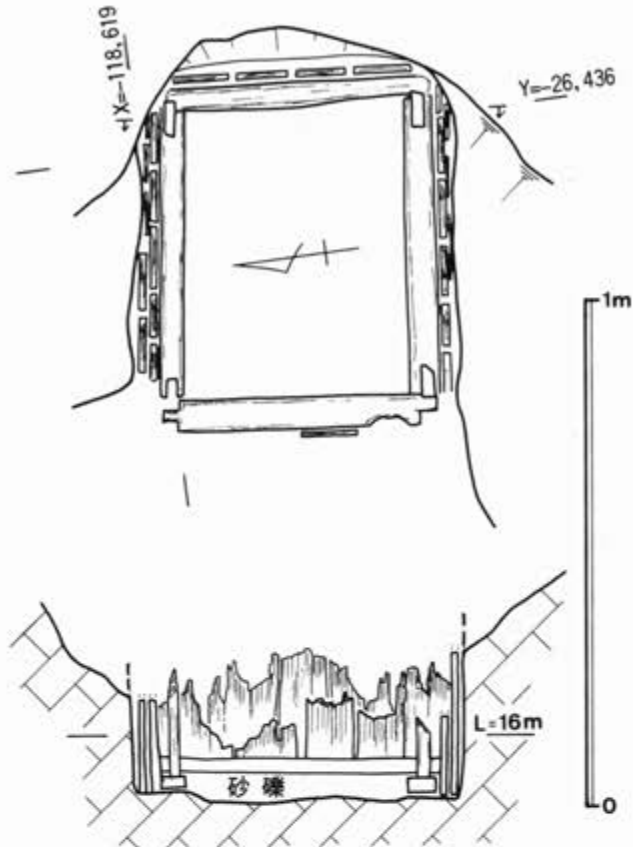
以上の記載は、平安貴族に旧長岡京一帯が部分的に繰り返し下賜されていたことを示しているが、下賜された土地が旧長岡京のどこであるかを特定できないのが現状である。おそらく、左京第353次の調査の成果は、平安貴族に当該地周辺が下賜され、それを管理するために家司などの家政機関が設置されていた可能性も指摘することができる。

一方、延暦十六年には、「遷「任」山城國治於長岡京南。以葛野郡地勢狹隘也。」の記載から山城国府が長岡京の南方に移される記事が見受けられる。先に見たように長岡京廢都後の旧長岡京の呼称は、延暦18年前後までは、「長岡京」の記載が一般的であるが、それ以降、「山城國乙訓郡」の記載が一般化している。そのような状況下にあって延暦16年の「長岡京南」の記載は、正確に長岡京城全域を意図した記述であるのか、あるいは、中核的な長岡宮を意図したものなのか、現

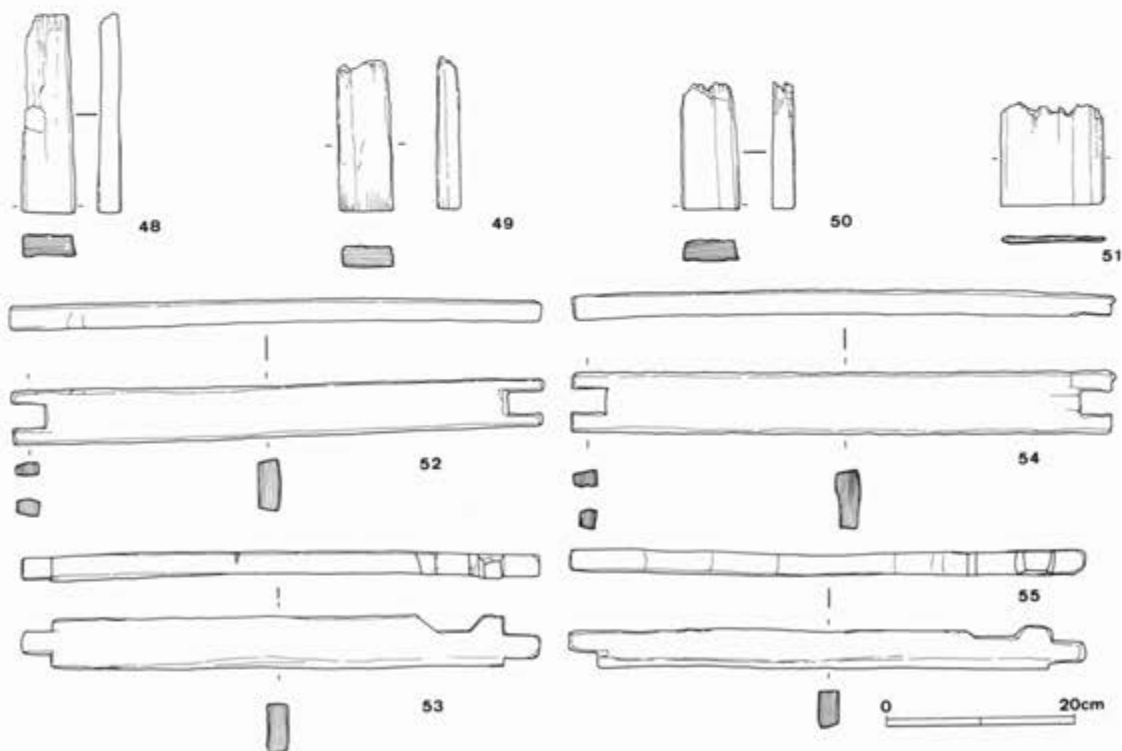
状では明確に言及できる材料は見あたらぬのである。当該調査地は、長岡宮の南方に位置しているが、延暦16年に移される山城国府の推定地としての可能性も指摘しておきたい。

平安時代後期 平安時代後期に比定できる遺構には、平成7年度に実施した左京第366次第4トレンチの掘立柱建物跡及び井戸がある。掘立柱建物跡群は、数棟確認できるが、柱穴内からまとまった状態での土器を検出していないことから、存続期間は不明な点が多い。しかし、井戸から出土した土器群から11世紀末期から12世紀前半にかけて集落が存在したことが推定できる。

検出した井戸は、曲物のみを井筒に使用する井戸 S E 36660 が11世紀



第53図 左京第366次 S E 36668実測図



第54図 左京第366次・第4トレンチ S E 36668井戸杵材実測図

末期に比定でき、曲物の上位に拳大から人頭大の礫を円形に配する井戸 S E 36663が12世紀前半に比定できる。特に、井戸 S E 36663の堆積土である黒褐色粘土の花粉分析では、イネ科の花粉が最も多く検出され、オモダカ属、カヤツリグサ科などの花粉も検出されていることから、周辺には水田が営まれていた可能性が指摘されている。一方、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、アブラナ科の花粉も検出されていることから、畑地も営まれていた可能性が指摘されている。これらのことから平安時代後期には、水田・畑地の隣接地に営まれた小規模な農村の存在が想起される。

なお、左京第389次調査第4トレンチ下層でも集落の広がりを確認できたが、その意義は大きい。

(5)中世(第53・54図)

中世耕作溝群は、平成7年度の左京第366次第4トレンチでは、東西方向と南北方向の素掘り溝が錯綜する部分があり、また、左京第389次第3トレンチでは、Y=-26.486mを境界にして以西が東西方向、以東が南北方向に穿たれている。これらは、何らかの土地区画の存在を示唆している。このように、平安時代後期の集落が廃絶した後に耕地化が認められる現象は、従来の中福知遺跡^(注10)の調査でも認められており、比較的広範囲に耕地化が進められたことが想定できる。一方、中世耕作溝を切り込んだ状態で検出した南北朝時代以降の建物跡群は、現在、8棟を数える。小畑川の旧河道の北隣接地に位置する左京第389次調査の第4トレンチでは、初鋳年代が1368年の洪武通寶が出土した柱穴を検出した。これにより少なくとも南北朝時代から室町時代前半期には、河道の改修が完了し、旧河道一帯が生活空間として利用されていたことが判明した。

(小池 寛)

- 注1 小池 寛「長岡京跡左京第353次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注2 小池 寛「長岡京跡左京第366次・中福知遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注3 三好博喜「長岡京跡左京第226次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注4 中川和哉「長岡京跡左京第252次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注5 平成8年12月6日(金)に実施した関係者説明会の当日配布資料『京埋セ中間報告資料No.96-11』と本概要の掘立柱建物跡の付番は異なっているが、今後は、本概要の付番を踏襲する。
- 注6 調査参加者(敬称略・順不同) 伊達優子・尾田洋子・福島正和・池田悦子・船原佳久・高橋文子・西村美智子
- 注7 概要については、長岡京連絡協議会に提示された資料及び(財)向日市埋蔵文化財センター山中 章氏から御教示を得た。感謝致したい。
- 注8 高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第1次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会) 1975、及び高橋美久二氏からの御教示による。
- 注9 黒板勝美『日本後紀』(新訂増補国史大系 吉川弘文館) 1980
- 注10 『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1991

3. 第二京阪自動車道関係遺跡 平成8年度発掘調査概要

はじめに

第二京阪自動車道は、京阪間の新たな広域幹線ネットワークの形成を目的として計画されている総延長約30kmの自動車専用道路である。本自動車道建設に先立ち発掘調査の対象となる埋蔵文化財包蔵地は、京都府域で9遺跡(約8.8km間)に及び、当調査研究センターでは、建設省並びに日本道路公団の依頼を受け、昭和63年度以来、継続してその発掘調査を実施している^(注1)。

平成8年度における発掘調査事業は、八幡市に所在する内里八丁遺跡を対象として実施した。内里八丁遺跡は、京都府八幡市内里小字日向堂ほかに所在し、これまでの調査によって、木津川左岸の沖積地に立地する弥生時代～鎌倉時代の複合遺跡であることが確認されている。

第二京阪自動車道建設事業に先立つ内里八丁遺跡の調査は、昭和63年度に試掘調査に着手することから開始した。試掘調査の結果から、遺跡が広範囲にわたることや、弥生時代から鎌倉時代の遺構が3～4面にわたって重複して存在することなどが確認され、関係機関との協議の結果、道路予定部分における遺跡調査の完了には長期間を要すると判断された。このため、対象地全域をA～Gの7地区に分け、継続して本格的な調査を進めることとなった。本格的な調査は、平成元年度以降、対象地南端のA地区から順次進め、これまでにA・B・Dの3地区の調査を終えている。また、平成7年度からは対象地区のうち、G地区に関して京都文化博物館が調査を分担して行っており、未調査部分はC・E・Fの3地区となった。

平成8年度の調査は、こうした経過を受け、C地区(約1,800m²)及びF地区の北半部(F1地区；約2,000m²)を対象として平成8年4月15日～平成9年2月27日までの間に実施した。現地調査は、当センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同主査調査員古瀬誠三、同調査員森下 衛、大岩洋一が担当し、多くの調査補助員、整理員の協力を得て実施した^(注2)。また、調査期間中は、京都府教育委員会、京都府山城教育局、京都府立山城郷土資料館、京都文化博物館、八幡市教育委員会などの関係諸機関から多大な協力をいただいた^(注3)。

なお、調査は日本道路公団の依頼に基づいて実施しており、これに係る経費は同公団が負担された。

本書は、調査を担当した各調査員と協議のもと、また調査に参加した調査補助員各氏の協力を得て、森下が執筆した。

内里八丁遺跡

1. 遺跡の概要

内里八丁遺跡は、先述のとおり、京都府八幡市内里日向堂ほかに所在する。ここは、八幡市の北東部、石清水八幡宮のある男山丘陵から東方約3.5kmに位置し、木津川左岸の平地部に相当する。ここ数年継続して実施している第二京阪自動車道建設に伴う発掘調査では、弥生時代～鎌倉時代にわたる時期の多岐にわたる貴重な成果が得られており、京都府内でも有数の長期的かつ広範囲な複合遺跡としての姿が明らかになりつつある。中でも、遺跡地の南端付近で確認された弥生時代後期終末の稲株痕を残す水田跡は全国的にも稀な調査成果であるとともに、南山城地域では数少ない古墳時代中期～後期の集落跡や、官衙的な特色をもつ奈良～平安時代の遺構・遺物などは、この遺跡を特徴付ける成果の一部である。^(註4)

内里八丁遺跡の周囲一帯は、現在では比較的平坦な水田地帯となっており、遺跡がどのような微地形に基づいて立地しているのか確認することは難しい。しかし、空中写真や地形図、さらに現地で水田景観の中に散在する島畑の分布などを子細に観察すれば、幾筋もの河川の痕跡や、これらによって形成された自然堤防の存在を認めることができる。^(註5)そして、この内里八丁遺跡が一帯では最も大規模な痕跡を残す旧河道^(註6)によって形成された自然堤防上に立地していることも確認されるのである。

この旧河道の痕跡のルートは第55図の網カケ部で示したとおりであるが、この旧河道によって形成された自然堤防を復原することによって、八幡市域北東部の平野部一帯に分布する現集落並びに集落遺跡の立地をかなり整理することができる。すなわち、旧流路の東岸～北岸では、岩田、上奈良、下奈良、二階堂などの現集落に加え、これらを結ぶように西岩田遺跡、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、上奈良北遺跡、出垣内遺跡、今里遺跡、下奈良遺跡などが、また西岸部でも内里、戸津などの現集落とこれに一部重複して新田遺跡、内里五丁遺跡、戸津遺跡などが帯状に分布するといった具合にである。

このようにみると、内里八丁遺跡は、八幡市北東部の平野部で、大規模な旧河道によって形成された自然堤防上に立地する遺跡群の一つとして位置づけることができるのである。

なお、遺跡の立地する自然堤防の歴史的な環境を考える上で、留意すべき点が2点ある。その一つは、足利健亮氏による「古山陰道」の復原ルートである。^(註7)足利説による「古山陰道」は、ここ八幡市北東部の平野部では、まさに、先にみた旧河道東岸の自然堤防上を通過することとなる。すなわち、内里八丁遺跡はそのルート上に位置することとなる。二つめは、遺跡の北方にある「奈良」という地名から想定される古代「奈良園」との関連である。^(註8)『倭名類聚抄』によれば「奈良園」は奈良・生津・美豆を含む範囲とされているが、現在も遺存する地名を追いかけると、これも遺跡の立地する自然堤防の北半部と重複することとなるのである。これまでの発掘調査でも、



第55図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------------|--------------|
| 1. 内里八丁遺跡 | 2. 上津屋遺跡 | 3. 新田遺跡 | 4. 女谷横穴群 | 5. 荒坂横穴群 |
| 6. 荒坂遺跡 | 7. 口仲谷古墳群 | 8. 木津川河床遺跡 | 9. 河口扇遺跡 | 10. 河口環濠集落 |
| 11. 下奈良遺跡 | 12. 戸津遺跡 | 13. 奥戸津遺跡 | 14. 今里遺跡 | 15. 出垣内遺跡 |
| 16. 上奈良北遺跡 | 17. 上奈良遺跡 | 18. 内里五丁遺跡 | 19. 西岩田遺跡 | 20. 金右衛門垣内遺跡 |
| 21. 狐谷遺跡 | 22. 狐谷横穴群 | 23. 美濃山横穴群 | 24. 美濃山廃寺下層遺跡 | |
| 25. 美濃山廃寺 | 26. 松井横穴群 | 27. 魚田遺跡 | 28. 散布地(遺跡名称未定) | |

奈良～平安時代の数多くの遺構・遺物が出土しており、これら「古山陰道」や「奈良園」との関連も検討していく必要がある。

2. 調査経過

平成8年度の現地調査は、平成8年4月16日から開始した。すでに昨年度に重機掘削を終えていたC地区の遺構精査に取りかかると同時に、新たにF地区の北半部に調査区を設定し(F1地区)、これの重機掘削を行った。

C地区では、まず鳥畑を2か所確認し、鳥畑部分での遺構精査及び鳥畑以外の部分では中世～近世の水田耕作土と考えられる灰褐色砂質土の除去作業を行った。その結果、鳥畑部上面で12～13世紀に属する掘立柱建物跡や土坑、及び耕作に伴う素掘り溝などを検出するとともに、鳥畑以外の部分で中世～近世の野井戸と思われる土坑や12～13世紀頃の南北溝などを検出した(C地区第1遺構面)。一方、F1地区は、調査区の形態が西側の長方形部分と、そこから東側へ幅約10mのトレンチを延長した格好となったが、長方形部で鳥畑を1基、西側トレンチ部で1基の合計2基の鳥畑を確認した。鳥畑上面での遺構精査では13世紀頃を主体とする素掘り溝群を検出し、鳥畑以外の部分では、南北溝を2条確認した(F地区第1遺構面)。両地区とも、これら検出遺構



第56図 調査区配置図(1/5,000)

の掘削及び記録などの作成を6月中旬には終了し、続いて下層遺構面の調査へと移った。

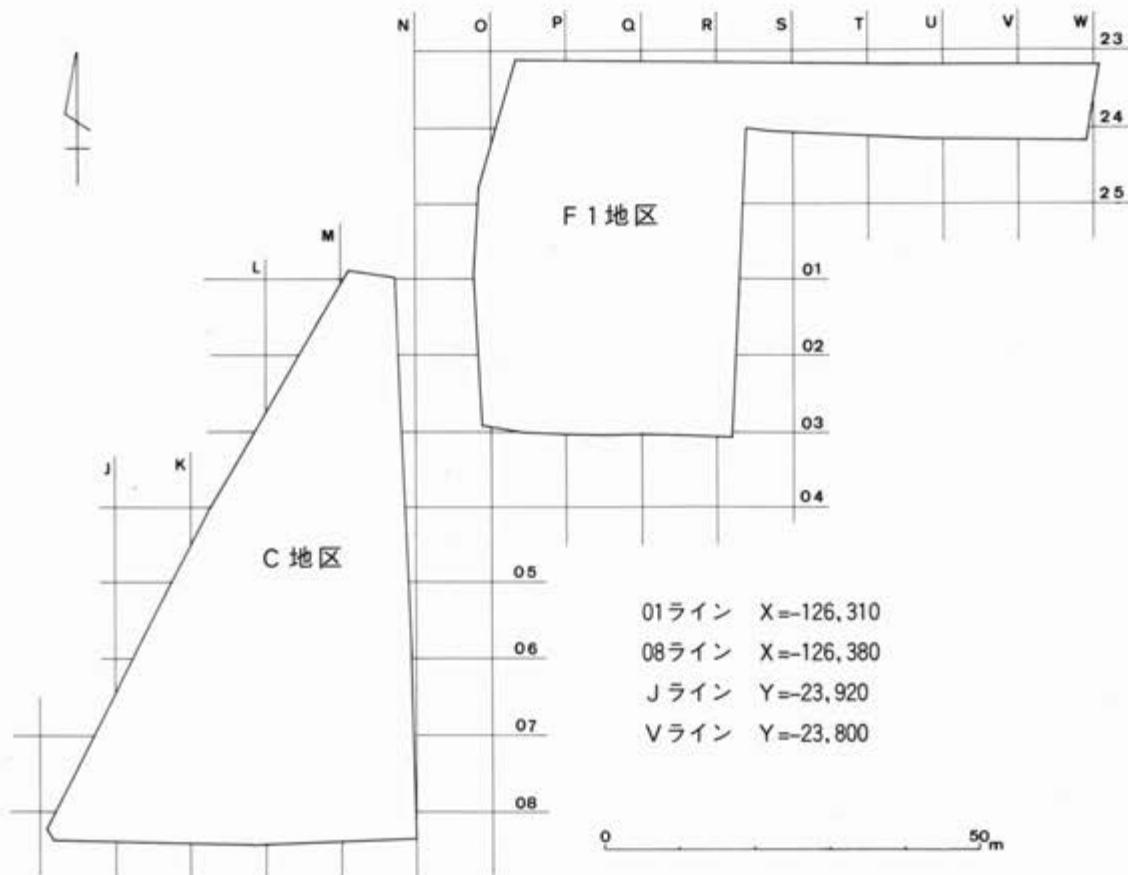
C地区では、第1遺構面から約20cmの掘り下げを行い、暗茶褐色土上面で平安時代の掘立柱建物跡や溝、土坑、井戸などを検出し、これらの掘削を行った(C地区第2遺構面)。F地区でも、第1遺構面から約20cm掘り下げ精査を行ったところ、第1遺構面のものとは方向の異なる素掘り溝群を検出するとともに、これに重複して掘立柱建物跡、土坑などを検出した(F地区第2遺構面)。F地区のこうした遺構は、出土遺物などから10世紀後半頃を主体とすると判断されたが、島畑以外の部分では時期的にこれをさかのぼると考えられる方形の掘形をもつ柱穴なども数か所で確認された。このため、F地区では、この下層にさらに奈良時代末葉～平安時代前半期にさかのぼる時期の遺構面の存在が予想され、上記遺構面の調査終了後、さらに掘削を進めた。その結果、第1遺構面から約40cm下で、第1・2遺構面のものとは方向を異にする素掘り溝群、掘立柱建物跡、柵列などを検出し、これらの調査を行った。

以上、C地区第2遺構面、F地区第2・3遺構面の調査が終了したのは9月初旬であり、これらの調査成果に関して9月6日には関係者説明会を開催した。

続いて、C・F地区ともさらに掘り下げを行い、下層遺構面の調査へと移った。C地区では、約15cm下げると7世紀の掘立柱建物跡、井戸、土坑などが検出された(第3遺構面)。なお、本遺構面調査時には、多量の鉄滓や礫の羽口さらに焼土や炭が出土し、かつ土坑と認識した遺構のなかに炉跡と思われるものも認められた。このことから、この時期の遺構には小鍛冶に関するものが含まれると判断された。F地区では、上記の第3遺構面から約20cmの掘り下げを行ったところ、暗褐色粘質土に至り、この上面で暗茶褐色砂質土を埋土とする浅い地形の窪み(深さ約30cm)を調査区の東半部を中心に検出した(第4遺構面)。地形の窪みは、検出当初は自然流路または沼状地形に相当すると考えたが予想以上に浅く、かつて存在した自然流路が埋没した痕跡と考えられた。

なお、埋土中からは若干の須恵器・土師器片が出土しており、およそ5世紀後半～6世紀初頭頃に相当すると判断している。こうしたF地区第4遺構面の状況からは、この下層に自然流路ないしは沼状地形が埋没している可能性が考えられたため、この面の調査終了段階で断ち割り作業を行った。その結果、この下方約50cmのところ調査区東半部を中心に木製品などを含む流路跡の存在が確認された。このため、急遽、重機による掘削を行ったところ、調査区北辺中央部から南方へ向かってのびる流路跡が検出された(第5遺構面)。流路跡の埋土は大きく3層に分かれ、最下層からは弥生時代末～古墳時代初頭、中層からは古墳時代前期、上層からは古墳時代中期の遺物がそれぞれ出土し、特に最下層中には多くの木製品も含まれていた。これらの掘削及び記録作成などの作業を行い、C地区の第3遺構面、F地区の第4・5遺構面の調査がほぼ終了したのは11月下旬であった。

引き続き、C・F地区とも下層遺構面の調査へと移った。C地区では約15cmの掘削を行い、暗黄灰色土上面で弥生時代末葉～古墳時代初頭(いわゆる庄内併行期)の竪穴式住居跡や溝、土坑などを検出した。また、この遺構面は、土色の識別が非常に難しく、全体の遺構検出には困難を伴った。このため、後述のとおり、1月22日には最終的な調査成果の報告のために現地説明会を開催



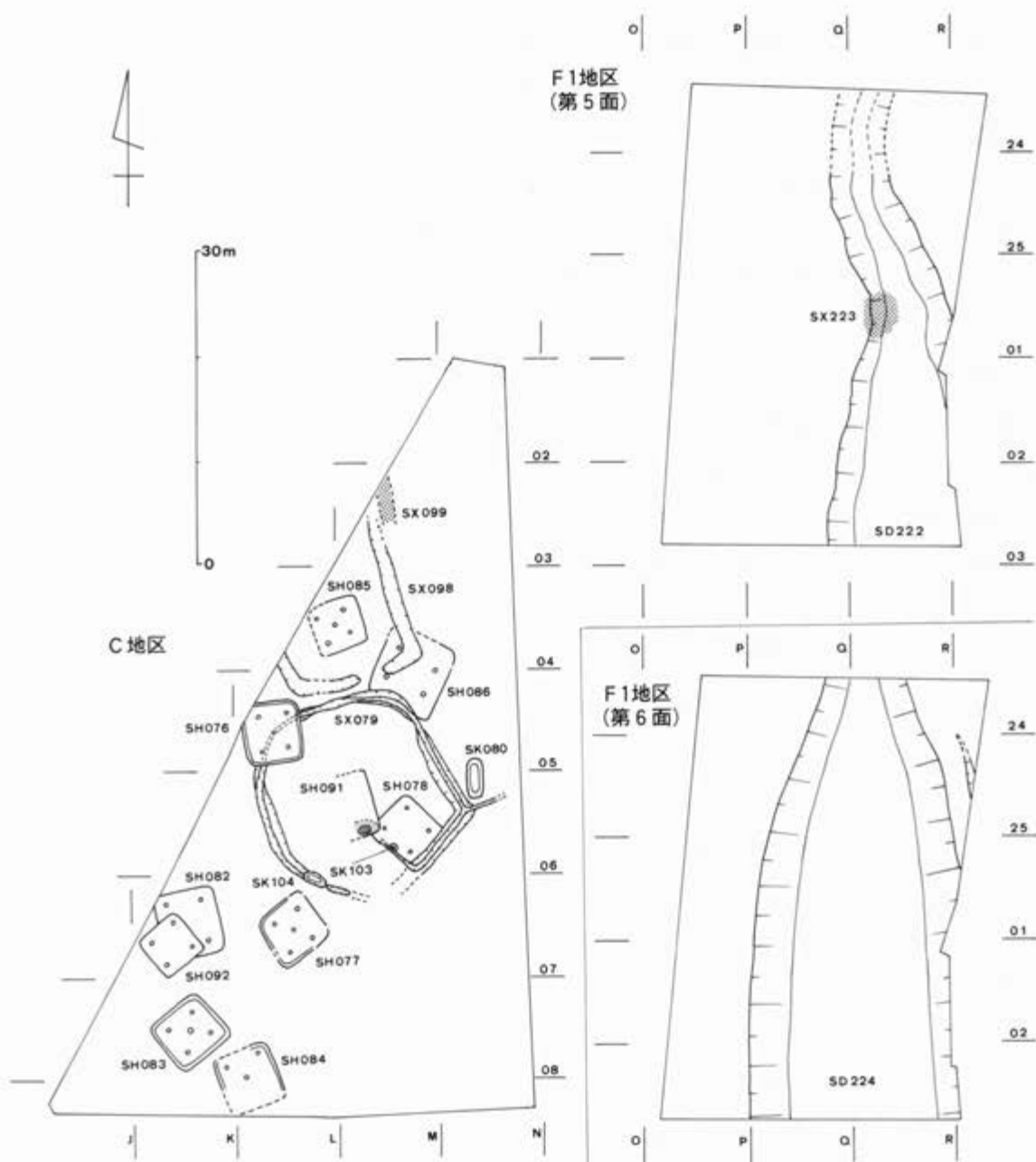
したが、この際に明確に遺構の性格を把握できていなかったものもあった。中でも、方形周溝墓とした遺構は、当初は方形にめぐると判断していた溝が最終的には五角形に近い形状となった。その性格も、墳墓とするより、集落内の特別な区域を区画する目的の溝の可能性が高くなった。

なお、C地区では最終的に弥生時代中期の土坑を1基検出したため、この時期の遺構の広がりを確認するため断ち割りなどの作業を行ったが、これを確認することはできなかった。一方、F地区では、第5遺構面で検出した流路跡の下約0.4mで、洪水砂を挟んでほぼ同一地点を流れる流路跡を検出した(第6遺構面)。流路跡の埋土は、下層の黒灰色粘質土と上層の淡灰色砂とに分かれる。わき水がひどく、調査では上層の淡灰色砂のみを完掘し、下層に関しては断ち割りによって、底部を確認したにとどまったが、この流路跡の基盤をなす暗灰白粘質土の下に幅の広がった流路跡ないしは沼状地形がさらに数層にわたって存在することが確認された。ただし、この流路跡以下では出土遺物もなく、わき水のため作業が極めて危険な状況となったことから、調査はこの面で終了した。こうした両地区の検出遺構の掘削・記録作成作業を行い、2月27日には、すべての現地調査を終了した。なお、上記のとおり、これら調査成果の報告を目的に1月22日には現地説明会を開催し、約60名の参加をみた。

3. 調査成果

平成8年度の調査では、最終的にC地区で4面の遺構面(弥生時代後期末～古墳時代初頭、飛

鳥時代、奈良時代末～平安時代前期、平安時代末～鎌倉時代)、F地区で6面の遺構面(弥生時代後期末～古墳時代初頭、古墳時代前期、古墳時代中期、奈良時代末～平安時代前期、平安時代後期、平安時代末～鎌倉時代)を確認し、それぞれの遺構面で遺構精査・掘削、記録作成といった作業を繰り返した。また、これらの検出遺構を整理すると、7期に区分して捉えることができる(弥生時代中期、弥生時代後期末～古墳時代前期、古墳時代中期、飛鳥時代、奈良時代末～平安時代前期、平安時代後期、平安時代末、鎌倉時代以降)。以下、この時期区分に従い、調査成果の概略を報告する。なお、検出遺構(特に掘立柱建物跡など)の数やその所属時期に関しては、調査期間中に実施した説明会資料及びその後の各種報告などと異なる点があるが、本概要報告書が現時点での検討成果である。



第58図 弥生時代中期～弥生時代後期末主要遺構配置図

(1) 弥生時代中期(C地区：第4遺構面)

弥生時代中期の遺構に関しては、これに係る明確な遺構面を確認することはできなかった。後述する弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構面(第4遺構面)調査時に、検出した竪穴式住居跡の床面で、この時期の土坑を1基検出したにとどまる。調査でこの時期の遺構面を確認するため、断ち割りなどを行ったが、最終的にこれを確認することはできなかった。なお、この状況は、昨年度の調査でも同様であった。

検出遺構は、C地区の第4遺構面で検出した土坑(SK103)である。SK103は、C地区の中央付近やや東寄りで検出した弥生時代末頃の竪穴式住居跡(SH078)の西壁中央付近で確認した。0.6m×0.4mの隅丸方形をなし、深さ約20cmが遺存する。埋土は暗茶褐色砂質土で、埋土中から弥生時代中期と考えられる甕の口縁部片が出土した(図版第49-(3))。

(2) 弥生時代後期末～古墳時代前期(C地区：第4遺構面、F地区：第5・6遺構面)

この時期に相当する遺構は、C地区の第4遺構面で検出した大半の遺構並びにF地区の第5・6遺構面で検出した流路跡である。

C地区の主な検出遺構は、弥生時代後期末(庄内式併行期)に属すると判断している竪穴式住居跡9基、周溝遺構2基、土坑2基などである。一方、F地区はC地区から約1.5m下がった谷地形をなしており、この谷地形の中央付近で流路跡を検出した。なお、この流路跡は、約40cmの砂層を介して弥生時代後期末～古墳時代初頭(第6遺構面)と、古墳時代前期(布留式期)～中期(第5遺構面)のものがほぼ同一地点に重複して検出された。

遺物は、流路跡の堆積層中及び竪穴式住居跡や周溝遺構の埋土から出土したが、その大半は流路跡からのものであり、土器類に加え木製品も数多く認められた。

① 検出遺構

SH076 C地区の北西隅付近で検出した一辺約5.5mの隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。深さ約0.2mが遺存し、床面では、周壁溝、支柱穴のほか、中央付近で丸底の浅いピットを検出した。このピットは径約0.3mを測り、埋土はわずかに焼土・炭を含む。

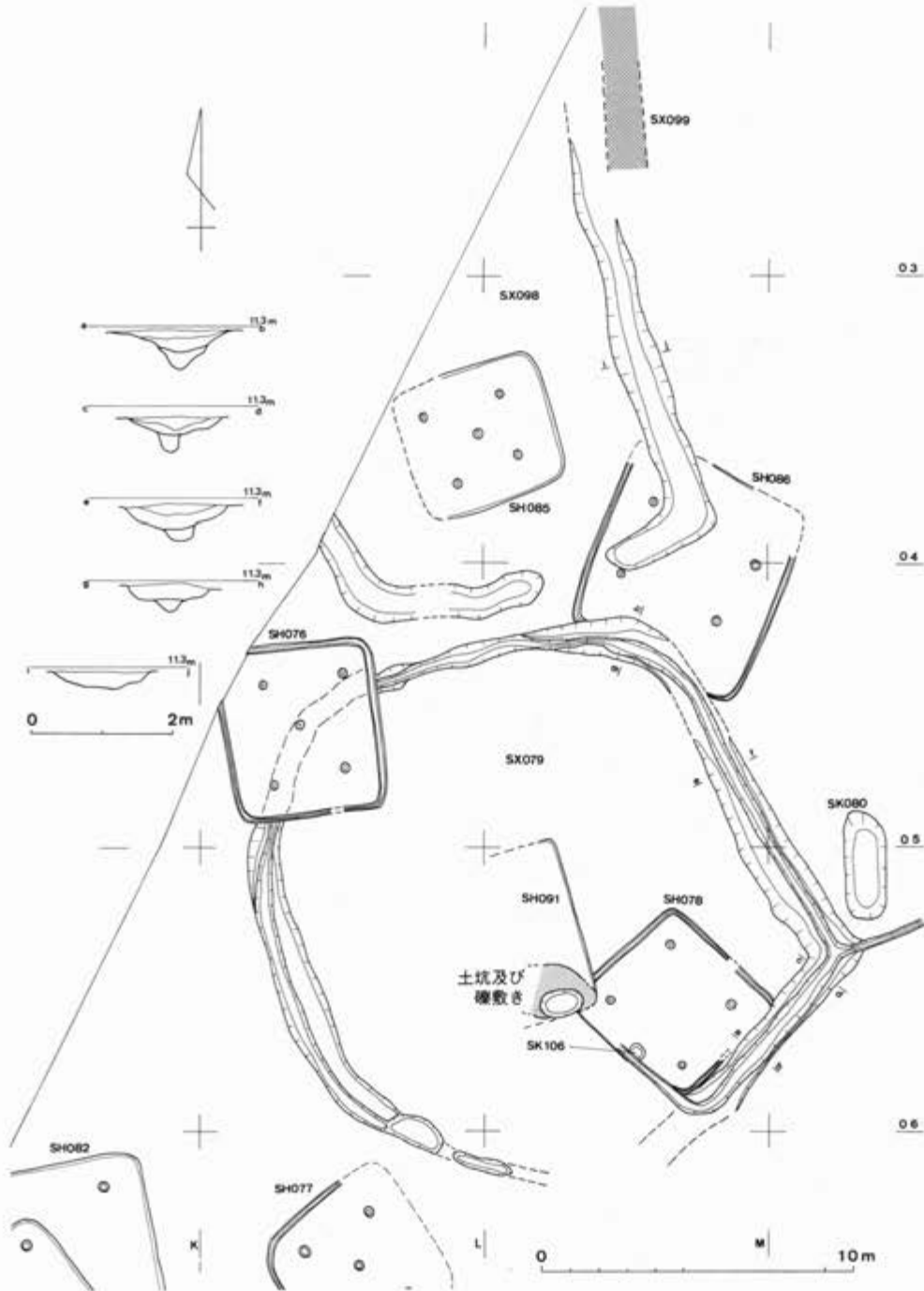
SH077 C地区中央付近で検出した。一辺約5.5mの隅丸方形の竪穴式住居跡と思われるが、その東辺部から南東隅付近が中世の溝によって削平を受ける。深さは、最もよく残っている部分で0.2m程度である。床面では、周壁溝及び4か所で支柱穴を検出したほか、SH076同様に中央付近で径約0.3mを測る丸底の浅いピットを確認した。

SH078 C地区の中央やや東寄りで検出した。西辺から南辺が後述するSX079と重複し、これに切られているため、遺存状況は極めて悪い。一辺5m前後の隅丸方形をなすが、深さ約5cm程度を残すにすぎない。床面では南壁相当部分で周壁溝と考えられる幅0.1m前後の溝が確認されたほか、4か所で支柱穴を確認した。

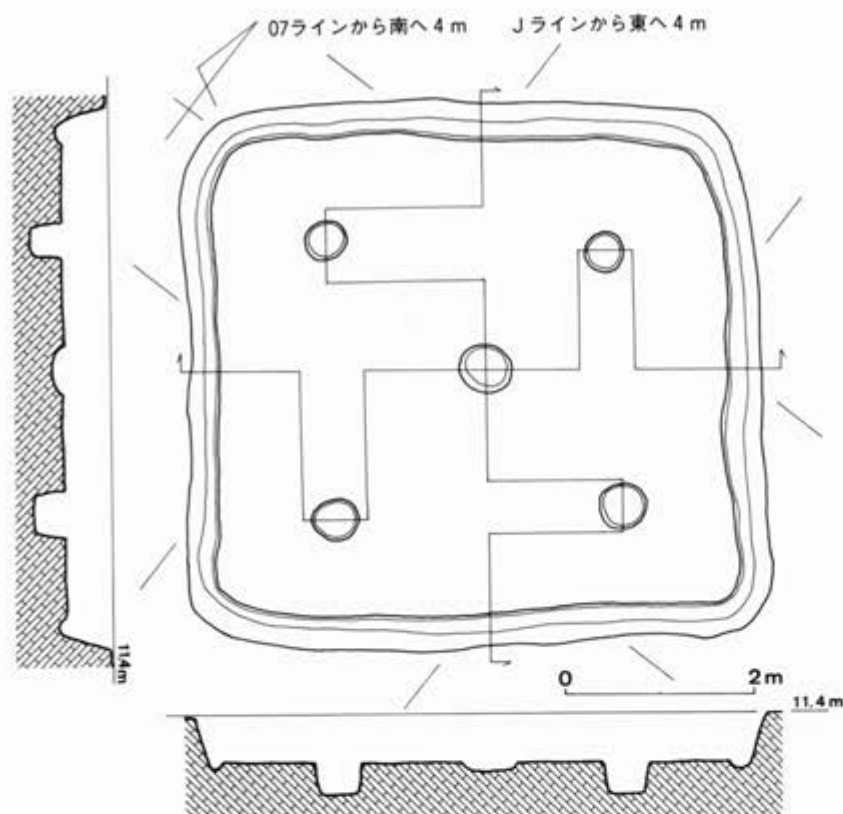
SH082 C地区の西辺部で後述するSH092と一部重複して検出したもので、これに南西部分約1/3が切られる。一辺6mの隅丸方形を呈し、深さ約0.2mが遺存する。床面では支柱穴を4か所で確認したが、周壁溝は検出できなかった。

SH083 C地区の南西隅付近で検出した。一辺約6mを測る隅丸方形をなし、深さ約0.4mが遺存していた。床面では、周壁溝及び4か所で支柱穴を検出するとともに、中央付近で径約0.3mのピットを確認した。ピットは丸底で、深さ約4cmと浅い。その北側に約1m四方の範囲で炭の広がり認められ、ピット底部にも炭が確認された。

SH084 C地区南辺で検出した。南側1/3が確認できなかったが、一辺約5.6mの隅丸方形を呈すると考えられる。床面では、幅約0.1mの周壁溝及び3か所で支柱穴を確認した。また、中央付近で径約0.3mのピットを検出した。



第59図 C地区弥生時代後期終末主要遺構平面図



第60図 SH083実測図

SH085 C地区北辺中央付近で検出した。北西隅部を中世の溝(SD005)によって切られるが、一辺約5mの隅丸方形の竪穴式住居跡であったと考えられる。深さ約0.2mが遺存し、周壁溝は確認されなかったが、支柱穴を4か所、中央で径約0.3mのピットを1か所確認している。

SH086 C地区東半部北寄りで検出した。遺存状況はきわめて悪く、深さ約0.05m

が遺存するにすぎない。確認した形状は一辺約7mのややいびつな隅丸方形を呈する。

SH091 確実に竪穴式住居跡と言い切れない面もあるが、ここではその残骸として報告する。後述する中世の溝(SD004)によって大半が削平されており、竪穴式住居跡であれば、その東辺部分が幅約1m程度遺存していることとなる。遺存部分では東辺が約6m・深さ約0.05mを測る。この遺構で注目されるのは、遺存部南東隅付近で礫敷及び土坑(SK091)が検出されたことである。全容を明らかにできなかった点は残念であるが、竪穴式住居跡の形態をなしていたとしても単なる住居跡とは異なり、特別な意味をもった施設であったと考えている。なお、後述するとおり、周溝遺構(SD079)の下層溝は南辺中央付近で直角に折れ、SH078の西辺と重複しつつ、この住居跡の方向へと伸びている。この住居跡の排水を兼ねた施設であったと考えている。

SH092 SH082と重複して検出したもので、これを切る。一辺約4.7mの隅丸方形を呈し、深さ約0.25mが遺存する。床面で支柱穴を4か所確認した。

SX079 C地区のほぼ中央で検出した、角の丸い五角形状に溝がめぐる周溝遺構である。これを形成する溝は、上下2層に分かれ、上層部は幅約1mで、断面はゆるやかな「U」字状をなし、下層部は幅約0.3mで断面「∪」状となる。上層部には、遺構の遺存状況によって部分的に削平を受けたところがあり、途切れる部分が随所にあるが、下層部では南西部が確認できなかったにすぎない。ただし、この南西部が最初から途切れていたのか、後世の削平のために消滅したのかは確認し得なかった。なお、この南西部では溝が土坑状に一部深くなる部分を確認している(SK104)。また、南東隅部では下層溝に相当する形状で東側へ分岐してのびていく。上記のと

おり、東方部が谷地形をなすF地区方面であることからすれば、地形の下がる方へ水抜きを目的として溝をのばしたものと判断される。溝内の埋土は、炭や焼土が混じる暗灰黄色砂質土で、下層部はこれがやや粘土質となる。遺物(土器類)は、南東隅付近から集中して出土した。本遺構の性格であるが、当初は土質の判別が困難なため、方形に溝がめぐると判断し、方形周溝墓と⁽¹⁸⁹⁾考えていた。しかし、最終的にその形状が明確になるにしたいが、単なる周溝墓と考えるより、何らかの特別な施設を囲んだ溝とするほうがより妥当ではないかと判断するに至った。こうした場合、先に述べたS H091とこの溝の下層部との関連が非常に注目される。その方向からみて、下層溝はS H091の排水をも兼ねていた可能性が高く、位置的にはやや西へ偏っているものの、現状では特異な性格をもった竪穴式住居跡S H091を囲んでいたと判断している。

S X098 C地区の北端付近、先のS X079の北側で検出したもので、幅約12m・長さ15m以上の長方形に溝がめぐる方形周溝遺構である。これを構成する溝は南辺中央付近で一部とぎれるが、幅約1.2m・深さ約0.3mを測り、断面はゆるやかな「U」字形を呈する。溝内からは東辺部で土器の細片が出土した。検出状況から、方形周溝墓の残骸の可能性や、溝に囲まれた内部に竪穴式住居跡(S H085)が存在しており、これに関わる周溝としての可能性が考えられる。ただ、やはり上記のS X079の存在などからみて、これも住居跡(S H085)を囲んでいた周溝としての可能性が高いと判断している。

S X099 C地区北端付近で検出した土器溜まりである。幅約0.5m・長さ約5mにわたって帯状に土器の集中するところが認められたことから、土器溜まりとした。周辺の精査を繰り返し行ったが、これら土器群に係る遺構を検出できなかった。ただ、その出土状況からは、上記の2基の周溝遺構(S X079・098)と同様の溝がここから北側にも存在する可能性が高いと考えている。

S K080 S X079の東に接して検出したもので、長さ(南北)約2m・幅(東西)約0.8mを測る長楕円を呈する土坑である。深さ約0.2mが遺存し、断面はゆるやかな「U」字状をなす。埋土は、少量の炭・焼土が混じる暗茶褐色砂質土である。

流路跡1(S D224) F地区の第6遺構面で検出した流路跡である。この流路跡は、C地区の遺構検出面である微高地から1.5m以上の段差をもって下がった谷地形の中央付近に相当すると考えられ、後述する流路跡2とは厚さ約0.4mの砂層を介して、ほぼ同一地点に重複して存在する。検出部の北端で幅約6m・深さ約0.8m、南端部で幅約20m・深さ約1mと南に向かって幅広となる。埋土は、上下2層に分かれる。上層は、厚さ約0.2mの洪水で堆積したと考えられる乳灰色砂層である。下層は、黒褐色粘質土であったが、遺物はほとんど含まず、土器類並びに木製品などの遺物は主に上層から出土した。なお、この黒褐色粘質土層上面では淡乳灰色砂を埋土とする足跡と思われる窪みを多数認めた(図版第50-(2))。また、最終的な断ち割り作業の結果、この部位ではさらに下層に流路が幾重にもわたって存在することが確認されたが、わき水の量が多く、これ以下の掘削は危険と判断し、以下の状況はこの断ち割りによって確認するにとどめた。

流路跡2(S D222) 上記の流路跡1の上層遺構といえ、流路跡1が洪水で埋没した後、さらに厚さ40cm程度の砂層が堆積した後にほぼ同一地点に形成されている。検出部北端で幅6m・深

さ約1m、南端部で幅約12m・深さ約1.2mと幅が広くなるとともに、蛇行してのびる。埋土は大きく3層に分かれ、出土遺物から、上層は古墳時代中期末頃、中層は古墳時代前期、下層は弥生時代後期末～古墳時代初頭にそれぞれ対応すると判断している。流路跡は、特に検出部の中央付近から急激に幅が広がり、南端部からそれほど遠くないところでさらに幅の広い沼状となると考えられる。中・下層出土の遺物も、この広くなった部分からまとまって出土しており、土器類のほかに扉板などをはじめとする建築部材を主体とする木製品も多く含まれていた。なお、検出部の中央付近で、西岸部から一括投棄された状態で土器群が出土した(SX223)。土器群中には3点の管玉なども含まれており、何らかの祭祀行為に伴って土器群が投棄されたと考えている。

②出土遺物(第61～63図)

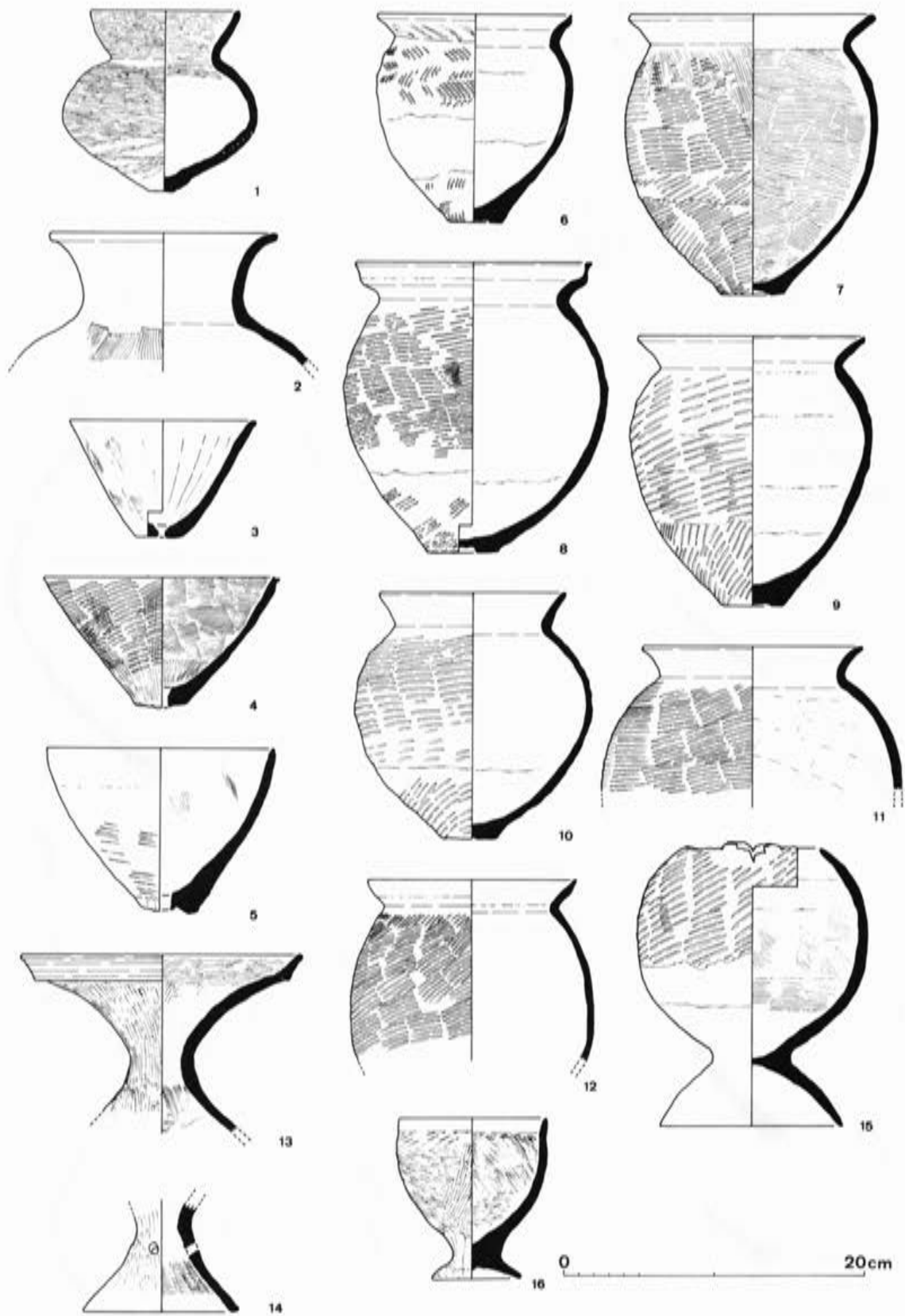
先述のように、この時期の出土遺物は、竪穴式住居跡、周溝状遺構の埋土中や、F地区の流路跡堆積土の中からまとまって出土した。時期的な面を整理すると、C地区の竪穴式住居跡や周溝遺構などの出土遺物は、弥生時代後期終末(いわゆる庄内式併行期)の土器群が主体をなし、F地区の流路跡堆積土出土遺物は、弥生時代後期終末から庄内式併行期を経て古墳時代前期(いわゆる布留式併行期)のものが出土した。特に、後者には土器群とともに建築材を中心とした木製品を含んでいる。

ただ、大半の資料は現在整理作業中のため、現時点で報告できる資料は非常に限られたものとならざるを得ない。このため、以下ではF地区の流路跡(SD222・SD224)から出土したのものの中から主なものを図示するとどめた。先述のとおり、SD222では上層の乳灰色砂層から弥生時代後期終末の土器群が、SD224では下層から弥生時代後期後半、中層から弥生時代後期終末(庄内式併行期)～古墳時代前期(布留式併行期)、上層から古墳時代前期(布留式併行期)～中期後半(須恵器を伴う)の土器群がそれぞれ出土している。

なお、ここでは両遺構出土土器の中から意識的に甕類を中心に図示しており、全体の器種構成などは現時点で全く検討できていない。

SD222出土土器 1・2は、広口壺である。1は、偏球状の体部から内湾気味に口縁部が立ち上がる。2は、体部上半から口頸部の破片であるが、球形の体部から「ハ」の字状に外反して立ち上がる口頸部をもつ。3～5は、甌である。平底から「ハ」の字状に体部が立ち上がり、底部中央を穿孔する。6～12は、小型(口径12.5～14cm・器高14～16.5cm)及び中型(口径15～17cm・器高18～19cm)の甕である。「く」の字状に屈曲する口縁部をもつもの(6・7・9～12)と、受け口状の口縁部を持つもの(8)の二者がある。前者にも、口縁部が直線的にのびるもの(7・9・10)と、強く外反するもの(11)、外反したあと端部を上方へつまみ上げるもの(6)、内湾気味にのびるもの(12)がある。いずれも体部外面はタタキによって成形するが、内面はハケ目によって仕上げるもの、ナデで仕上げるものがある。なお、6は矢羽タタキを施している。13は器台で、脚底部を欠く。口径19cmを測る大型品で、「ハ」の字状に大きく開いたあと、屈曲して二重口縁状にのびる口縁部をなす。14は、器台もしくは高杯の脚台部である。15・16は、台付き鉢である。15は大型品で、台付き甕と呼ぶべきかもしれない。球形の体部に内湾気味に開いて下がる

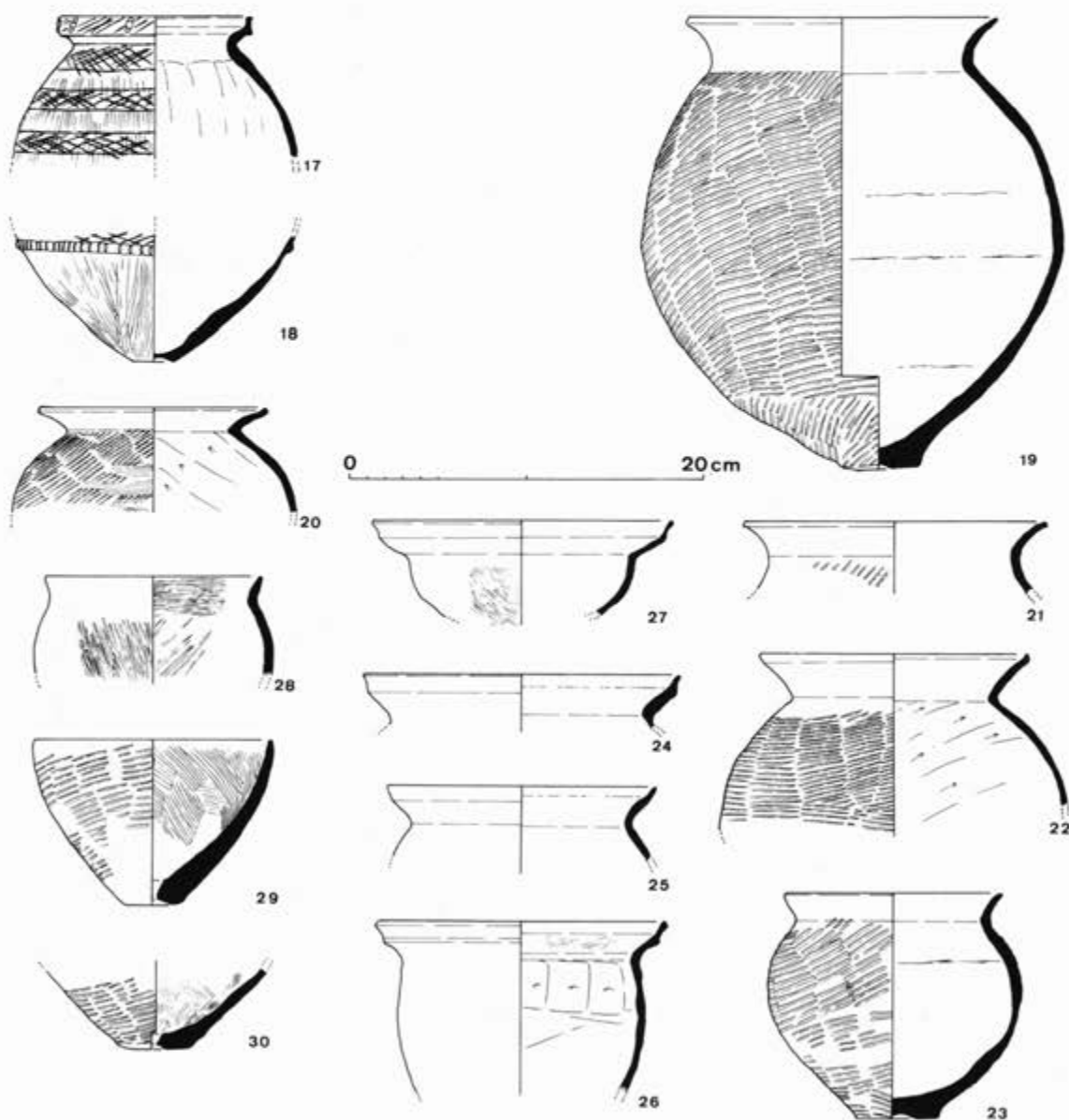
脚台を付しており、口縁部の一部を片口状につまみ出している。体部上半をタタキ、その他をナデによって仕上げる。16は小型品で、椀状の体部にわずかに外反する口縁部と小さな脚台を付す。



第61図 出土遺物実測図(1)

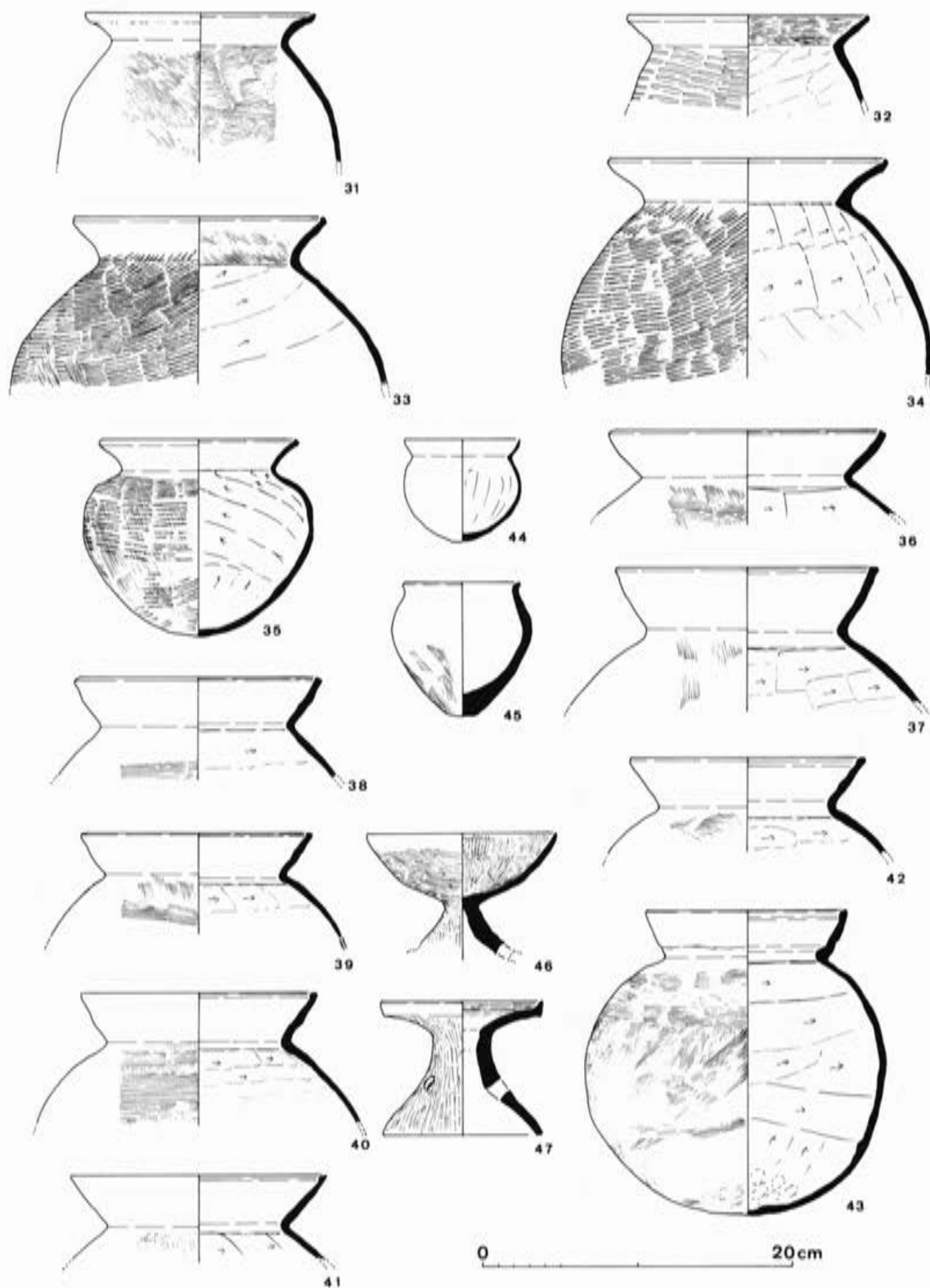
17・18は、同一個体と考えられる壺である。17は受け口状の口縁部をなし、18は体部下半に凸帯を付す。近江方面の製品と思われる。19は、大型の甕である。口径19cm・器高25.6cmを測る。球形に近い体部に、突出気味の平底、強く外反する口縁部を有する。体部外面をタタキ、内面をナデで仕上げる。20は、小型の甕である。体部上半から口縁部を残す破片であるが、水平近くに強く外反する口縁部は端部が上方へつまみ上げられ、体部外面には右上がりの細かなタタキ、内面にはヘラケズリが施される。いわゆる庄内式系の甕に属する。

SD224下層 21～26は、甕である。完形品は少ないが、口縁部の形態をみると、外反した口縁部が端部付近で屈曲し、短く上外方へ立ち上がり受け口状となるもの(24・25)、同様に屈曲して立ち上がり丹後方面でよく見る複合口縁状になるもの(26)、強く外反するもの(21)、短く外反するもの(23)、外反した後端をつまみ上げるもの(22)などが認められる。なお、26は体部外面をハケ目、内面をヘラケズリによって仕上げ、丹後方面からの搬入品の可能性が高い。また、22は、



第62図 出土遺物実測図(2)

いわゆる庄内式系の甕であるが、胎土は地元産である。27・28は、鉢である。27は半球状の体部に、上外方へ直線的にのびた後屈曲して立ち上がる二重口縁をもち、脚台を有する可能性もある。28は、短く外反する口縁部を有する。29・30は、甕である。29は、完形品で平底の底部から「ハ」



第63図 出土遺物実測図(3)

の字状に内湾気味の体部が立ち上がる椀形をなし、底部を穿孔する。30は、底部付近の破片であるが、23とはほぼ同様の形態と思われる。

S D 224中層 中層資料の甕類にはV様式系、庄内式系、布留式系の3タイプのものがある。31・32は、V様式系の甕である。31は、丸みのある体部から口縁部が強く外反し、端部をわずかに上方へつまみ上げ、体部外面はタタキの後ハケ目、内面はハケ目を施す。32は、「く」の字状に屈曲したあと直線的に上外方へのびる口縁部をもち、端部は上方へつまみ上げられる。体部外面に左上がりのタタキ、内面にヘラケズリ、口縁部内面にハケ目が施される。33～35は、いわゆる庄内式系の甕である。33・34は、ともに腹部の張った球形に近い体部に外反して立ち上がった後、端部を上方へつまみ上げる口縁部をもつ。体部外面には右上がりの細かなタタキが、内面にはヘラケズリが施される。35は、口径13cm・器高12.5cmを測る小型品で、肩の張った丸底気味の体部に外反して立ち上がった後、端部を上方へつまみ上げる口縁部をもつ。体部外面には左上がりの細かなタタキが、内面にはヘラケズリが施される。36～43は、布留系の甕である。完形品は少ないが、いずれも球形の体部に内湾気味に外反して立ち上がる口縁部を有し、端部内面が肥厚する。体部外面上半を横方向のハケ目、同下半を縦方向のハケ目、内面をヘラケズリによって仕上げる。44は、小型丸底甕である。球形の体部と、内湾気味に短く外反する口縁部を有する。45は、小型の無頸壺とでもいえるもので、尖底気味の底部とわずかに外反する口縁部をもつ。46は、小型の高杯である。半球状の杯部から、脚台部が「ハ」の字状に開いて下がる。脚台部の下半を欠くが、欠損部は屈曲してさらに大きく開くと考えられる。脚台部に円形の透しを3方向に穿つ。47は、小型器台である。口縁部は水平気味に開き、端部を上方へつまみあげる。脚台部は中空で、「ハ」の字状に下がり、端部付近は内湾気味となる。

(3)古墳時代中期(F地区：第4遺構面)

古墳時代中期の遺構面として把握したのは、F地区の第4遺構面とした暗茶褐色粘質土層上面である。先述のとおり、この遺構面では調査区の東半部で深さ30cm前後の窪地を検出したのみで、顕著な遺構は検出されなかった。遺物も、窪地内に堆積していた暗黄灰色砂質土中からわずかに須恵器・土師器片が出土したにとどまる。こうした状況から、この段階には生活の痕跡を確認することはできなかったが、この東側一帯にその存在が推測される沼状地形の縁辺部に相当し、湿地として放置された部分であったと判断している。

(4)飛鳥時代(C地区：第3遺構面)

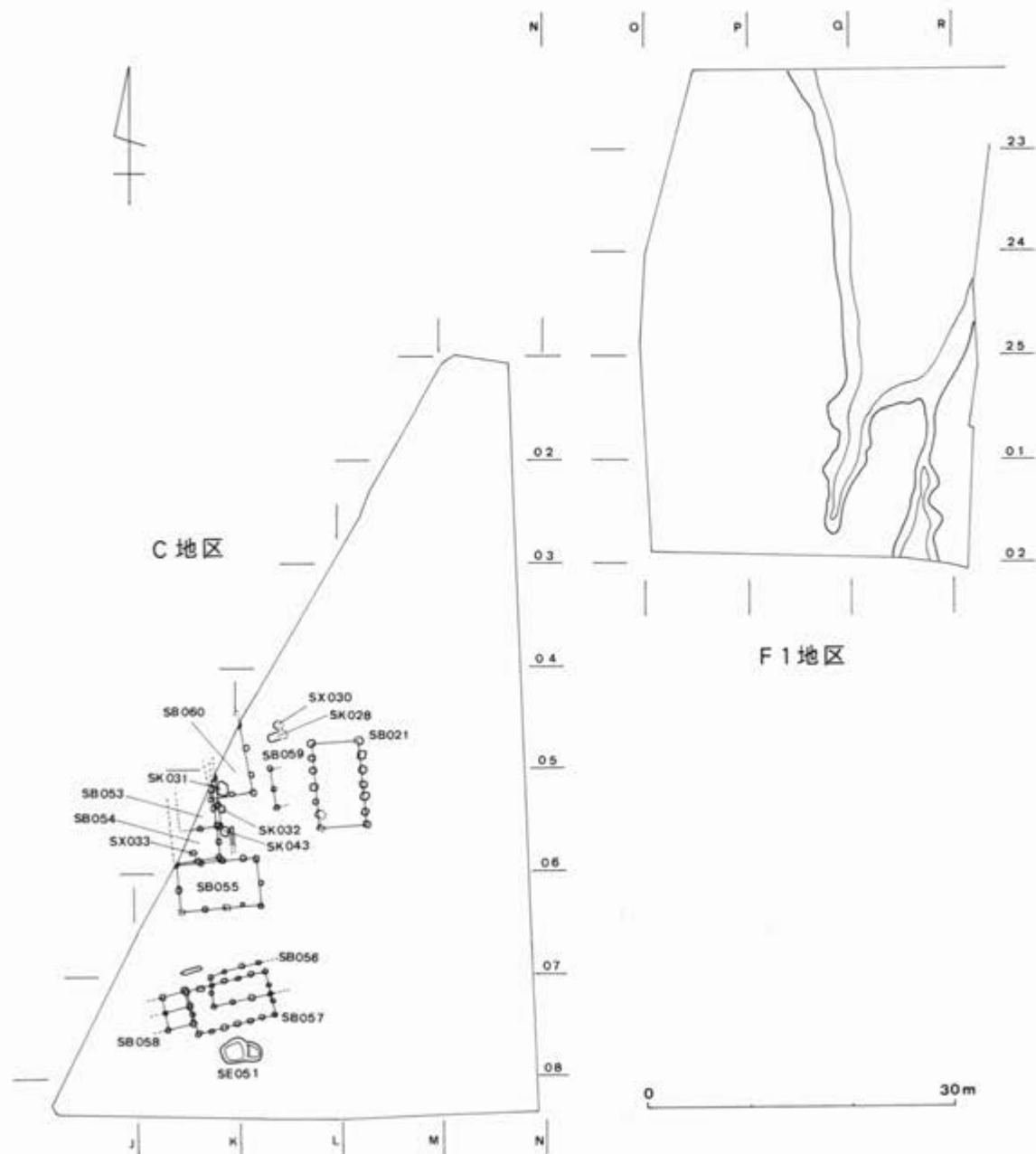
この時期の遺構面と把握したのは、C地区の第3遺構面とした淡黄褐色砂質土上面である。主な検出遺構には、掘立柱建物跡9棟、土坑5基、井戸1基などがある。うち、土坑2基(S X 030・S X 033)は、側壁及び底面が高温のため赤色に変色していたことや、後述する第2遺構面から第3遺構面へ至る掘削で鉄滓、焼土、炭、籾の羽口などが出土していることなどから、小鍛冶に伴う炉跡と判断している。また、今回の調査では、同時期の竪穴式住居跡は検出されず、掘立柱建物跡のみによって構成される建物跡群が検出された。こうした状況は、掘立柱建物の導入が遅れるとされる南山城地域ではめずらしい例といえるが、検出した掘立柱建物跡の多くは倉庫

の可能性が高く、遺跡の性格を考える上で貴重な資料である。

なお、明確な遺構とは認識されなかったが、遺構面精査中に完形の遺物(須恵器杯身・杯蓋・平瓶)がまとまって出土したところがある。精査を繰り返し行ったが、遺構を平面的に把握することはできなかった。ただ、後述する遺物の項で、ここから出土した遺物について触れており、この出土した地点についてはS X027として把握している。

①検出遺構

S B021 調査区の中央やや北寄りで検出した南北棟掘立柱建物跡で、南北(桁行)が6間(約8.3m、1間1.4m前後)、東西(梁間)は中央の柱穴が確認されなかったが、柱穴間の距離からみて2間(約4.6m)であったと思われる。柱掘形は一辺40cm前後の隅丸方形をなし、径約0.2~0.3

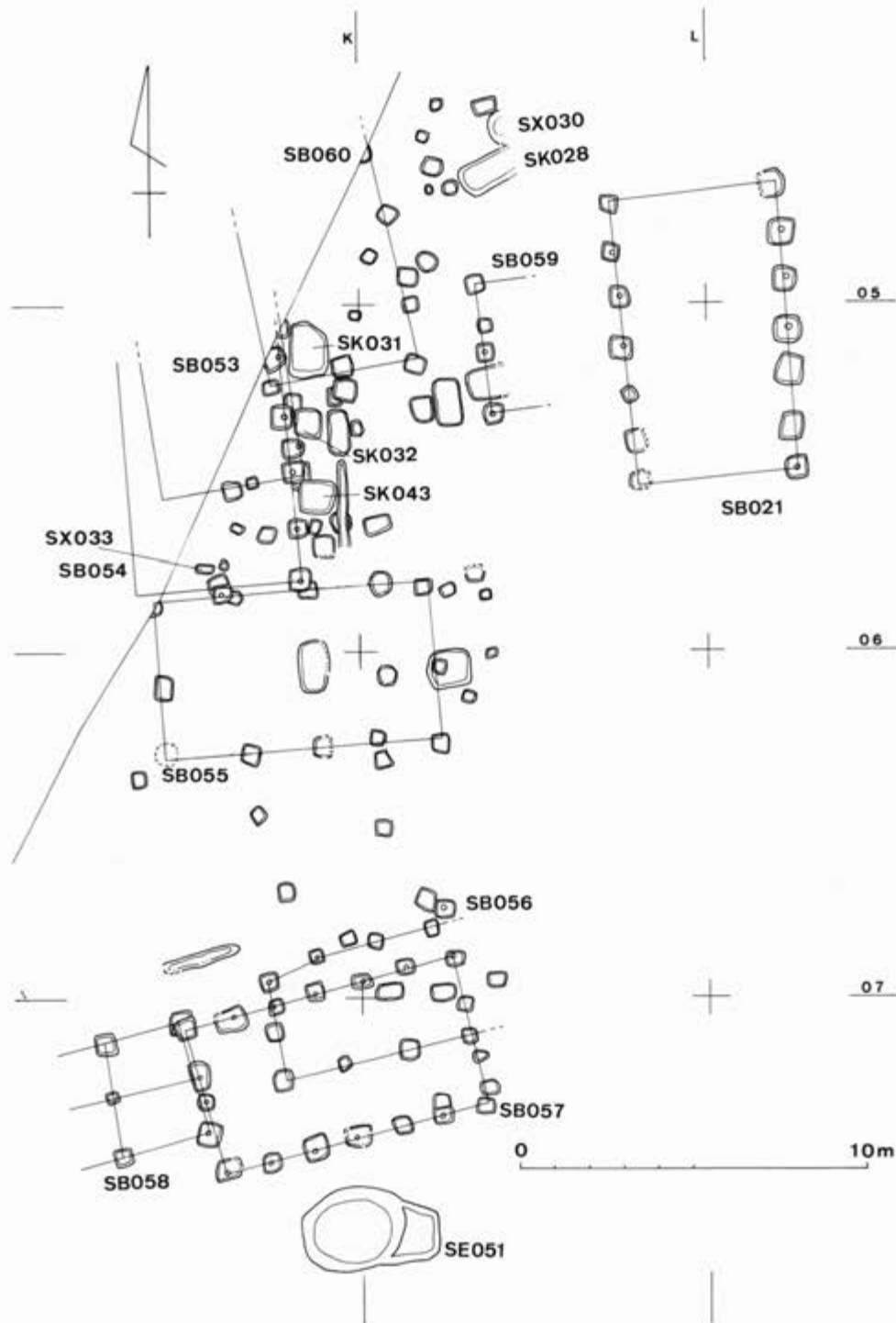


第64図 古墳時代(F1地区)・飛鳥時代(C地区)主要遺構配置図

mの柱痕跡を残すものがある。建物跡の主軸はN-7°-W。

S B053 S B021の西方で検出した掘立柱建物跡で、東西1間以上(1間約1.8m)・南北2間以上(4.2mまでを検出、1間約2.1m)の規模を有する。西辺柱筋は後述するS B054と重複し、これに切られる。主軸はN-8°-W。

S B054 調査区の西辺部で約1/2を検出した掘立柱建物跡である。東西1間以上(1間約2.3m)・南北4間以上(6.4mまで検出、1間約1.6m)の南北棟建物跡である。主軸はN-4°-W。



第65図 C地区第3遺構面(飛鳥時代)主要遺構平面図

S B 055 上記のS B 053・054と北辺柱筋が重複し、東西4間(7.9m、1間1.3~2.3m)・南北2間(約4.4m、1間約2~2.4m)の東西棟の掘立柱建物跡である。主軸はN-4°-W。

S B 056 S B 055の南側で、後述するS B 057と重複して検出した掘立柱建物跡である。南北2間(2.9~3.2m、1間1.4~1.6m)・東西3間以上(5.5mまでを検出、1間1.8m前後)の東西棟建物跡である。ややいびつな柱筋をなすが、主軸はN-15°-W。

S B 057 S B 056と一部重複して検出した掘立柱建物跡である。東西6間(約8m、1間1.3m前後)・南北2間(4.3m、1間2.1m前後)と考えているが、東辺柱筋は3間(1間1.4m前後)となる可能性が高い。主軸はN-15°-W。

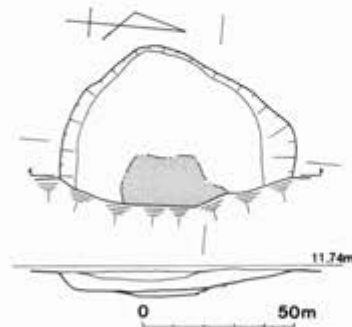
S B 058 S B 057と西側柱筋が重複して検出された掘立柱建物跡である。南北2間(約3.9m、1間1.4~1.5m)・東西1間以上(1間2.3~2.4m)の総柱建物跡である。主軸はN-15°-W。

S B 059 S B 021の西側で検出したものであるが、柱穴が南北に2間(3.6m、1間約1.8m)分並ぶことから建物跡と把握したにとどまり、これを梁間とする東西棟建物跡と考えている。主軸はN-8°-W。

S B 060 S B 053の北側で確認した南北棟建物跡である。大半が調査区外へのびているため、全容は不明であるが、東西2間以上(4.3mまでを検出、1間2.1m前後)・南北3間以上(6.2mまでを検出、1間1.5~2.7m)を検出した。主軸はN-12°-W。

S E 051 調査区の南端西寄り、S B 058の南側で検出した井戸である。長径(東西)約3m・短径(南北)約2.5mの楕円形の平面掘形の東側に約2m四方の方形張り出し部が付く。深さ約1.2mが遺存し、方形張り出し部は深さ約0.5mを測る。

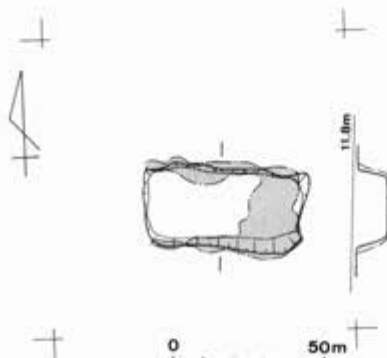
S X 030 調査区西辺やや北寄りで検出した径約0.75mの円形の土坑である。遺存状況は悪く、東側のおよそ半分程度は削平を受け、深さも7cm程度が遺存しているにすぎない。底面が赤色の焼土となっていることから、炉跡と判断している。埋土は大きく2層に分かれ、上層は暗黄灰色砂質土、下層は細かな焼土と炭とによって構成されていた。



第66図 S X 030実測図(アミカケは焼土)

S X 033 調査区西辺中央付近で検出した方形の土坑である。東西約0.5m・南北約0.25mの長方形をなし、深さ約0.1mが遺存する。側壁及び床面は赤色の焼土となっていたことから炉跡と判断した。

S K 031・S K 032・S K 043 調査区西辺中央付近、S X 033の北側で検出した方形の土坑である。南北に一列に並び柱穴の可能性もあるが、埋土中で柱の痕跡は確認されなかった。S K 031は南北約1.5m・東西約1.2mの長方形を呈し、深さ約0.2mが遺存する。S K 032は、一辺約0.9mの方形を呈し、深さ約0.5mを測る。S K 043は、一辺1



第67図 S X 033実測図(アミカケは焼土)

mの方形を呈し、深さ約0.6mが遺存する。

②出土遺物(第68図)

この時期に相当する出土遺物は、検出遺構に対応し、C地区第3遺構面の調査時に包含層並びに遺構埋土から出土したものである。全体に細片が多く、図化し得るものは限られたが、以下では主要な資料を選別して図示した。1～3がS X027、4～8が土坑S K028、その他が第3遺構面直上からそれぞれ出土した。

なお、遺構面直上出土の多くは焼土や灰とともに土層中に含まれていた。

1～18・22は、須恵器杯身・杯蓋である。1～3は、上記のように明確な遺構に伴って出土したものではないが、遺構面直上からまとまって出土した(S X027)。3は身に短い立ち上がりを有するもので、1・2はこれとセットをなす蓋である。1・2は、口径11cm前後・器高3.6cm前後を測る。

4～10は、杯蓋である。4～6・10は、口径9.5～10cmを測り、口縁部内面に返りを付している。7も口縁部に返りを付すが、口径約14.2cmとやや大型となる。8・9は、返りがなくなる。

11～18・22は、杯身である。形態から大きく5タイプに分けられる。丸みのある底部から内湾気味に口縁部が立ち上がるもの(12)、口縁部が上外方へ外反気味に立ち上がるもの(11・13・14)、丸みのある底部から内湾気味に上外方へ口縁部が立ち上がるもの(15・16・18)、口縁部端部付近が内傾した後、短く上外方へつまみ出されるもの(17)、口縁部端部を内傾させるもの(22)である。

19～21・23・24は、土師器杯身である。19・20・24は、丸底気味の低部から上外方へ短く口縁部が立ち上がった後、端部付近をわずかに外側へつまみ出す。21は、丸底から口縁部が短く立ち上がる。23は、丸底気味の底部からゆるやかに屈曲し、内湾気味に口縁部が立ち上がる。

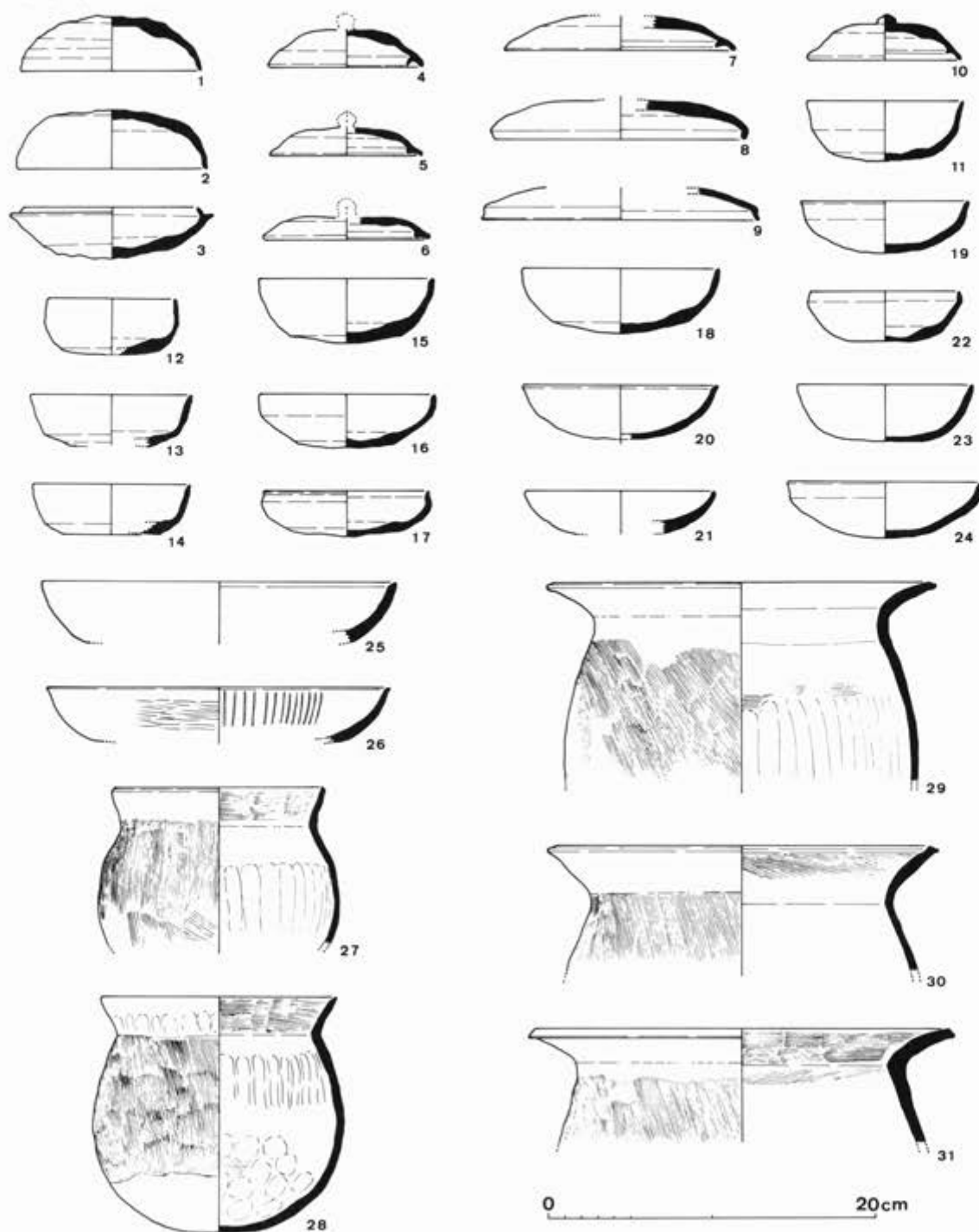
25は、須恵器皿である。口径11.8cm・器高3.5cmを測る。26は、丸みのある低部と内湾気味に上外方へ立ち上がった後、わずかにつまみ出される口縁部からなる土師器皿である。口径20.8cmを測り、内面に放射状の暗文が観察される。

27～31は、土師器甕である。27・28は口径14cm前後の小型品、29～31は口径22～26cmの大型品である。27・28は、球形の体部と短く外反する口縁部からなり、体部外面を縦方向のハケ目、口縁部内面を横方向のハケ目、他をナデによって仕上げている。29～31は、長胴気味の体部を有すると考えられ、これに大きく外反する口縁部をもち、口縁部端部を外下方へつまみ出す。調整は小型品と同様、体部外面を縦方向のハケ目、口縁部内面を横方向のハケ目、他をナデによって仕上げている。

以上、飛鳥時代としたC地区第3遺構面調査時に出土した土器群の概略である。出土資料中には、1～3のように立ち上がりを有する須恵器杯身とこれとセットをなす杯蓋などもある(T K217相当の杯H)が、その多くは口径10cm前後を測り、口縁部内面に返りをもつ杯蓋と、これとセットをなす杯身に代表されるものである(杯G)。しかも、1～3は明瞭に遺構としては認識できなかったものの、1か所からまとまって出土しており(S X027)、他の土器群と混在して出土している状況はない。ここでは、C地区第3遺構面の所属時期を示す遺物群として、後者の杯Gの

一群として認識している。しかし、一方では、7～9の須恵器蓋のように口径が大型化し、かつ蓋の口縁部内面の返りが消失するタイプに代表される土器群もわずかに確認される。こちらは、量的にはわずかであるが、上記の主体をなす土器群と混在して出土する傾向を認める。こうした状況から、土器群の時期的な面については、主体をなすタイプのものをほぼ7世紀中葉～後半とし、これに7世紀末までの資料が混在すると判断している。

なお、焼土や炭とともに出土した遺物として鉄滓や輪の羽口などもあるが整理作業が進んでおらず、今回は図示できなかった。

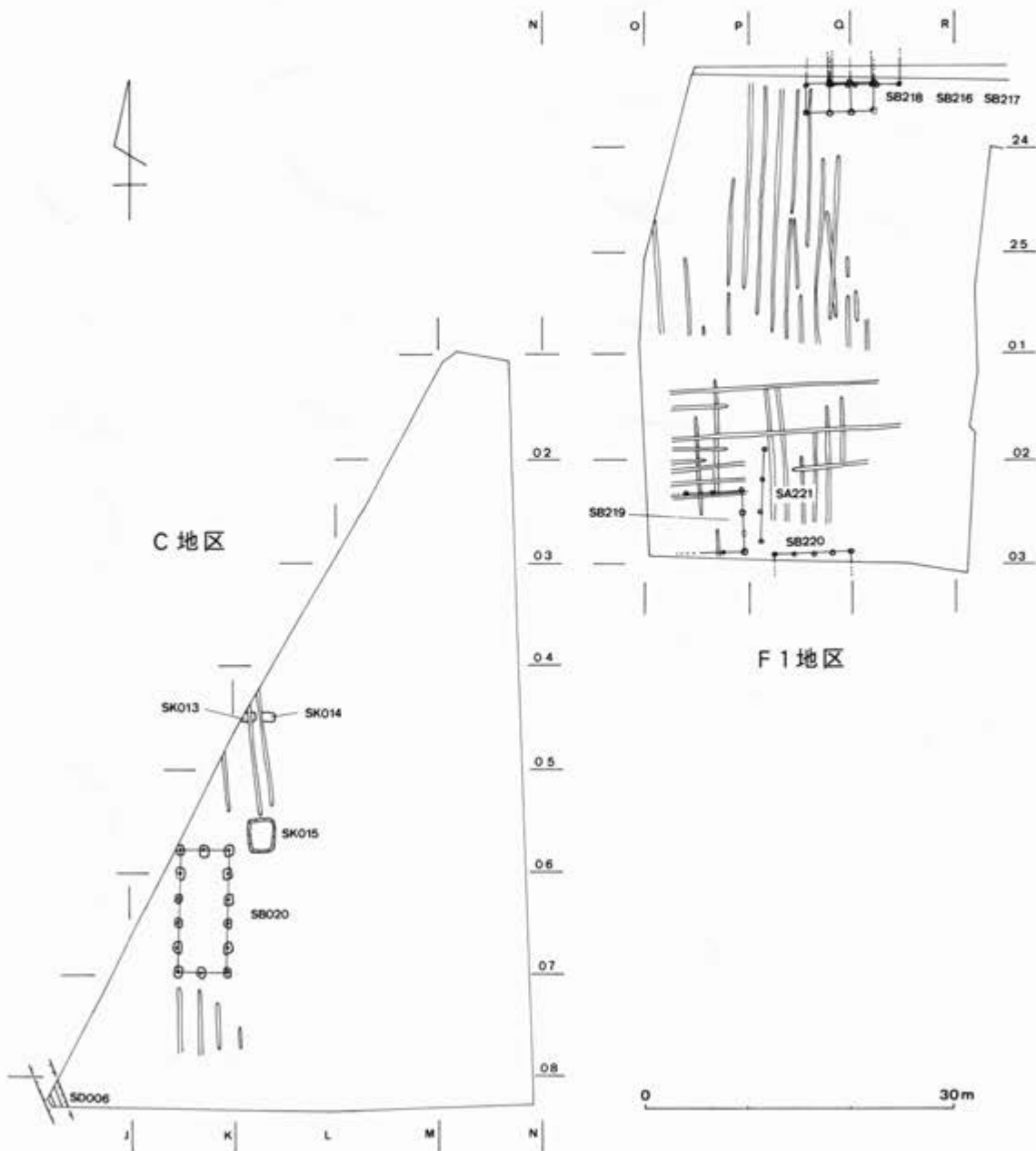


第68図 出土遺物実測図(4)

(5) 奈良時代末～平安時代前期(C地区：第2遺構面、F地区：第3遺構面)

この時期の遺構面として把握したのは、C地区の第2遺構面、F地区の第3遺構面に相当する。主な検出遺構としては、C地区では大型の掘立柱建物跡1棟、土坑3基などがあり、F地区では掘立柱建物跡5棟、櫛列などがある。また、このほか、この遺構面で素掘り溝群を検出している。素掘り溝群に関しては、時期決定の材料を欠くが、特にF地区での検出状況からすれば、後述する平安時代後期まで下るとは考えられない面があり、この遺構面で検出した素掘り溝群についてもここで報告する。

なお、この時期の出土遺物に関しては、包含層中から後述する平安時代中～後期のものと混在して出土したものが多く、次節でまとめて報告する。



第69図 奈良時代末～平安時代前期主要遺構配置図

①検出遺構

S B020 C地区西半部で検出した南北棟の大型の掘立柱建物跡である。南北5間(12m、1間2.4m)・東西2間(4.8m、1間2.4m)で、主軸はN-2°-E。柱掘形は一辺0.8m前後の隅丸方形をなし、径0.2m前後の柱痕跡を認めた。

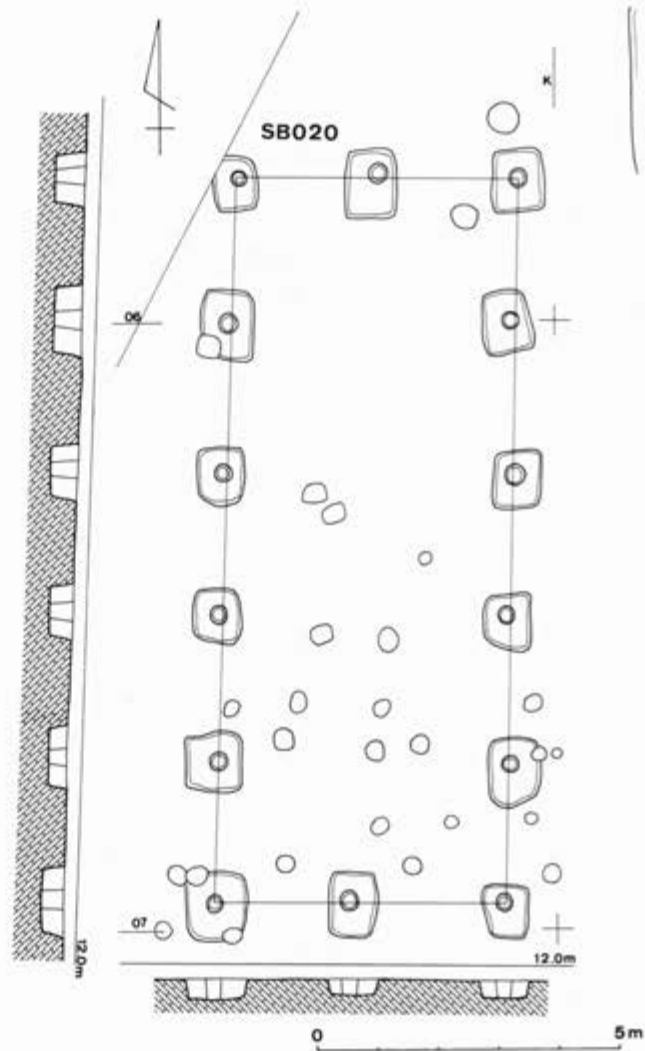
S K015 C地区のS B020の北西側で検出した方形の土坑である。南北約2.7m・東西約2mの隅丸方形を呈し、深さ約0.2mが遺存する。埋土は大きく2層に分かれ、上層は厚さ5cm程度の淡灰色細砂層で、下層は暗黄灰色砂質層である。埋土中からは、明確に時期を決定する遺物は出土しなかったが、検出状況からみてこの時期と判断した。

S K013・014 C地区の西辺やや北寄りでは検出した長方形の土坑である。両者とも東西約0.9m・南北0.5mの長方形の土坑で、深さは約0.2mが遺存

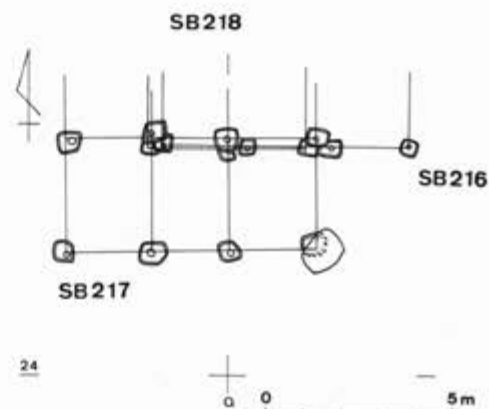
するという共通する形態をなす。土坑とするより、欄列などの柱穴と理解すべきかもしれないが、東側で延長部は確認されなかった。

S D006 C地区南西隅で確認した南北溝である。検出部はわずかであったが、この南側延長部は昨年、一昨年のD1及びD2地区の調査で確認している。それによると、時的には9世紀前半のもので、南南東-北北西へ向かってのび、幅約1.2m・深さ約0.8mを測る。D1地区南端の池状遺構へ注いでいた。

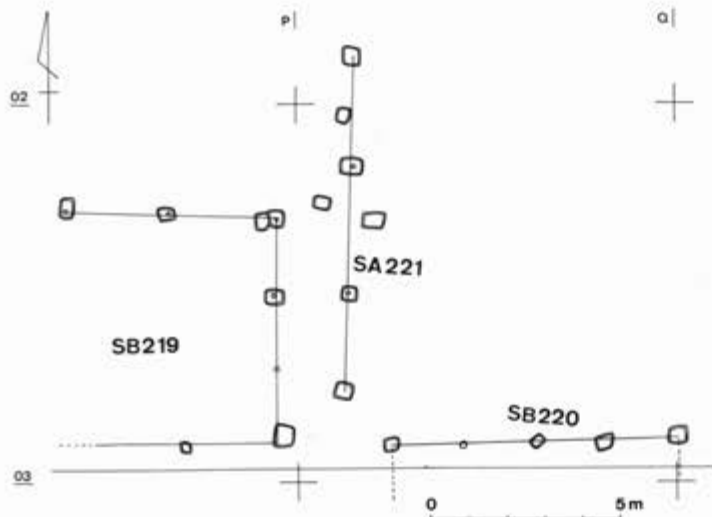
S B216・217・218 F地区の北辺やや東寄りの部分で、3棟がほぼ同一地点に重複して検出された。柱穴掘形の切り合い関係から、S B218→S B216→S B217の順に建て替えられたと考えられる。S B216は、東西3間分(約6.5m、1間2.1~2.2m)、S B217は東西3間(約4.2m、1間2.1m)・



第70図 S B020実測図



第71図 S B216~S B218平面図



第72図 S B 219・S B 220・S A 221平面図

南北1間以上(約3mを確認)、S B 218は東西2間分(約4.2m、1間2.1m)をそれぞれ確認したにとどまる。いずれも、大半が調査区外へのびるため、その全容は不明であるが、S B 217が総柱建物跡で倉庫と考えられることや、3棟が同一地点に建て替えられたように存在することから、いずれも倉庫の可能性が高い。主軸は、S B 216・S B 218がほぼ座標北、S B 217がN-2°-Eを向く。

S B 219・S B 220・S A 221 F地区の南端付近で検出した。この付近は、後述する中世の島畑を造成する時の削平がひどいため、遺構の遺存状況が極めて悪い。このため、いくつかの柱穴は確認できるが、つながりが十分確認できないものが多い。こうしたなか、柱穴の並びが確認できたものを掘立柱建物跡としてS B 219・S B 220、櫓列としてS A 221を認識した。S B 219は、南北3間(5.9m、1間1.8~2m)・東西2間以上(約5.6m、1間2.8m)の建物跡である。また、S B 220は東西に4間分の柱の並び(約7.5m、1間1.8~2m)を確認したもので、櫓列の可能性もあるが南側へ展開する建物跡として報告する。S A 221は、南北に3間分(約9m、1間約3m)の柱穴の並びを確認したが、東西方向にこれとつながる柱穴を認められなかったことから櫓列とした。

S D 006 C地区南西隅で検出した。位置関係から、昨年度及び一昨年度に実施したD地区西辺部検出の南北溝の延長部に相当する。今回は、わずかに一部を検出したにすぎないが、幅1.5m前後・深さ0.8m前後を測り、主軸はN-7°-Wの方向にのび、総延長約80m分を確認したことになる。埋土から、9世紀初頭頃の土器片が出土した。

素掘り溝群 C地区では調査区西半部北寄りでは数条を確認したにとどまり、多くはF地区で確認した。F地区で検出した素掘り溝群は、その方向から大きく3群に整理して捉えている。南北方向にのび、N-5°-Wのもの(A群)、南北方向にのびほぼ座標北からN-1°-Eのもの(B群)、東西方向にのびE-3°-N~E-4°-Nのもの(C群)である。切り合い関係などから、A→B→Cの順に変遷したと判断している。

(6)平安時代中期~後期(C地区：第2遺構面、F地区：第2遺構面)

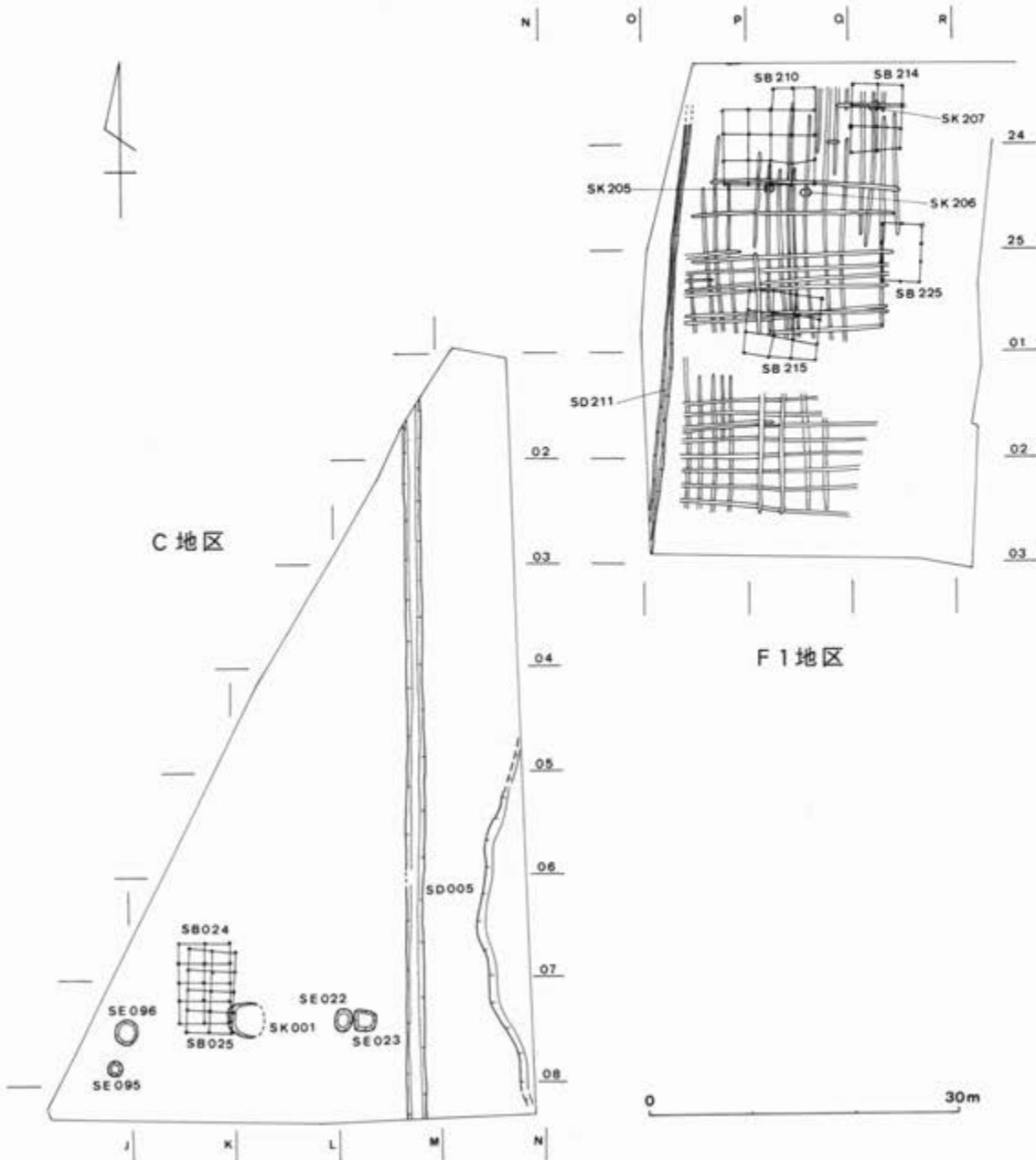
この時期の遺構としたのは、10~11世紀のもので、これに対応する遺構面は、C地区の第2遺構面、F地区の第2遺構面である。ただし、C地区では、第2遺構面でこの時期の遺構が明瞭に検出できたわけではなく、後述する島畑造成に伴い、中世に削られた部分で溝・井戸などを確認したにとどまる。一方、F地区では掘立柱建物跡4棟、土坑3基のほか素掘り溝群を検出した。

①検出遺構

SB210 F地区北半部西側で検出した掘立柱建物跡。東西4間(約9.3m、1間2~2.2mで西端の1間のみ2.7m)・南北3間(約7.1m、1間2.3~2.4m)の総柱建物の北東部に2間(3.9m)×1間(2.1m)の張り出し部が付く。主軸はほぼ座標北を向き、柱掘形は径0.3m前後の円形をなす。

なお、西辺の1間分は、柱間の寸法が異なり、建物跡とは区別して柵列と認識すべきかもしれない。

SB214 SB210の東側で検出した掘立柱建物跡である。東西2間(約4.7m、1間2.3~2.4m)・南北3間(約6.5m、1間2~2.4m)の南北棟総柱建物跡で、主軸はN-3°-Eを測る。柱掘形は径0.3m前後の円形をなす。



第73図 平安時代中期～平安時代末主要遺構配置図

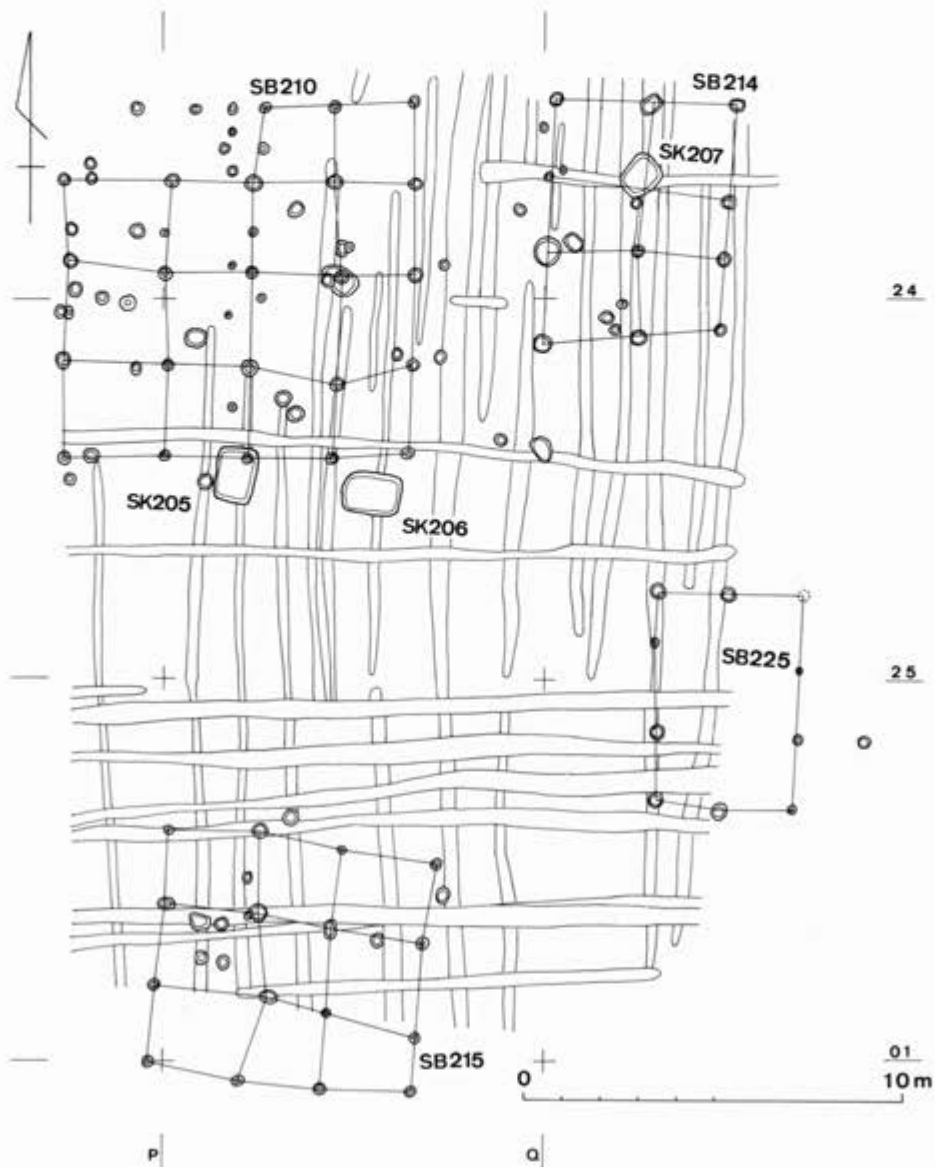
S B 215 F 地区中央付近で検出した掘立柱建物跡。東西3間(約7.2m、1間2.2~2.5m)・南北3間(約6m、1間1.4~2.1m)の総柱建物跡である。主軸はN-7°-E。柱掘形は径0.3m前後の円形をなす。

S B 225 F 地区中央やや東寄りで検出した掘立柱建物跡。東西2間(約3.6m、1間1.8m)・南北3間(約5.5m、1間1.5~1.8m)の南北棟建物跡である。主軸はN-1°-E。柱掘形は径0.3m前後の円形をなす。

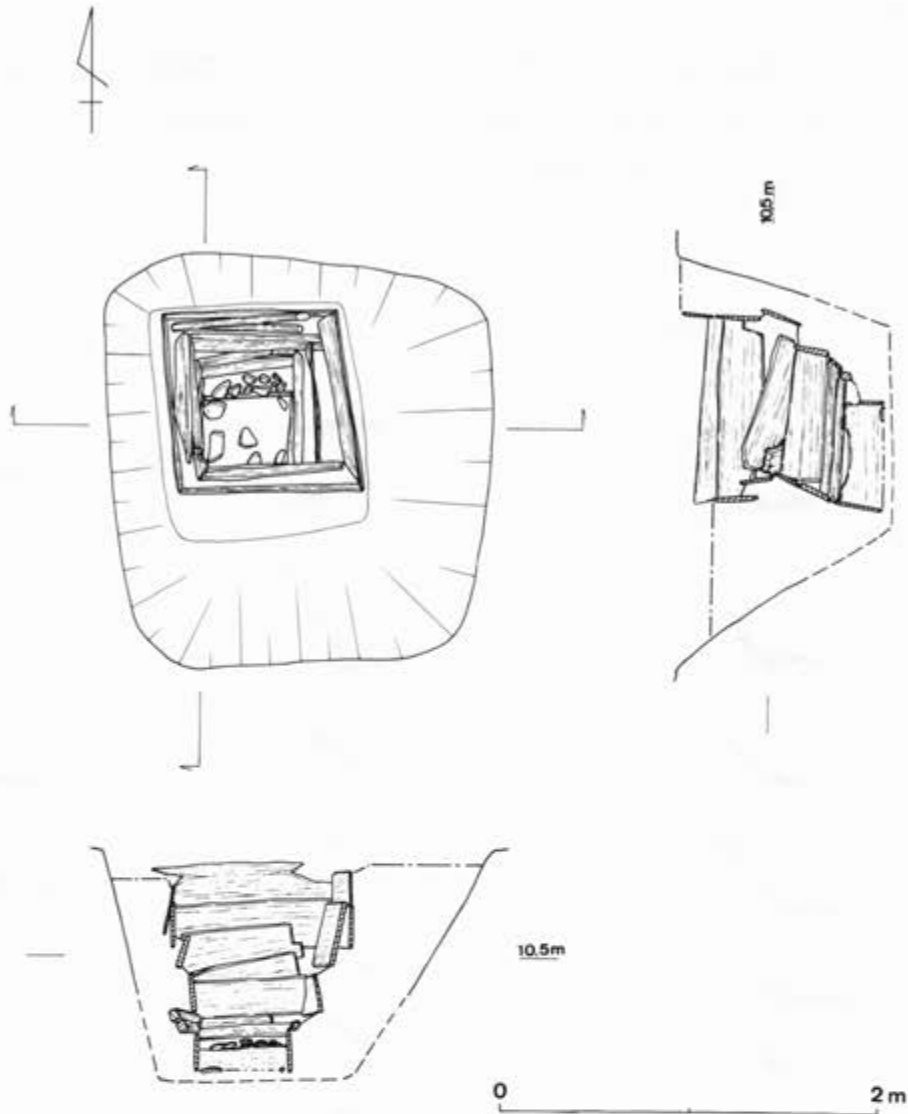
S K 205 S B 210の南辺柱筋と重複して検出した長方形の土坑である。南北約1.5m・東西1mの長方形を呈し、深さ約0.2mが遺存する。

S K 206 S K 205の東側で検出した長方形の土坑。南北約1m・東西1.5mの長方形を呈し、深さ約0.2mが遺存する。

S K 207 S B 214の中央北寄りでこれと重複して検出した。1.1m×0.9mの長方形を呈し、深



第74図 F1地区北半部第3遺構面主要遺構平面図



第75図 SE023実測図(内側井戸枠除去後)

さ約0.2mが遺存する。

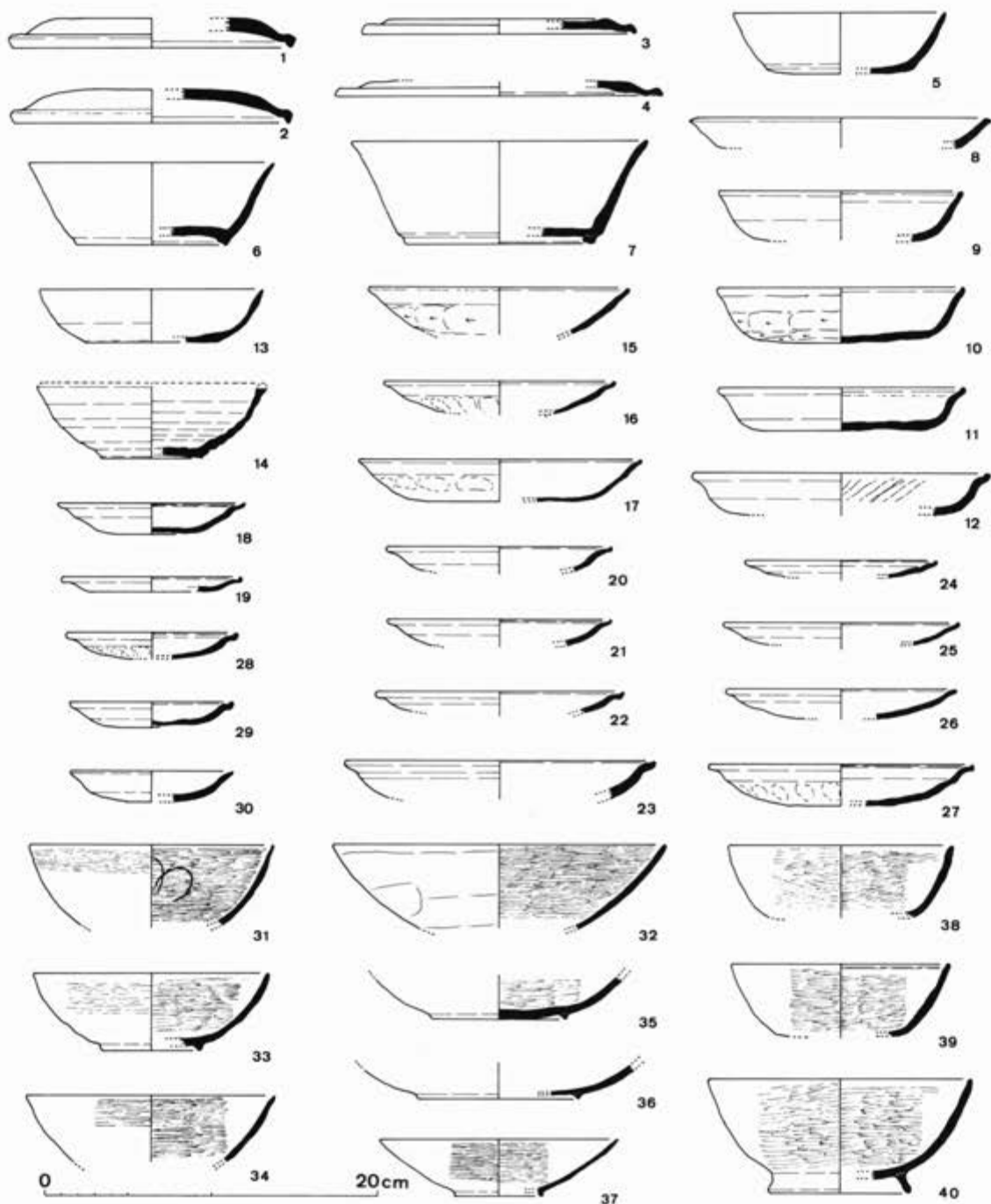
SE023 C地区の南半部で検出した井戸である。一辺約2.4mの隅丸方形の掘形の内部に蒸籠組の井戸枠が遺存していた。井戸枠は約1.2m四方と、約1m四方の二重に設けられていたが、外側の枠が崩れた後に内側が造り直されたと判断している。なお、第75図には内側の井戸枠を撤去した後の状況を、図版第56-(2)には内側井戸枠を検出した状況を示した。埋土中からは、11世紀前半頃の土器類とともに、木簡片などが出土している。

SD005 C地区の東半部を一直線に南北にのびる溝である。幅約1.2m・深さ約0.6mを測り、断面は「U」形を呈する。

素掘り溝群 F地区で検出した素掘り溝群は、その方向からみて大きく2群に分けて把握している。南北方向にのび、ほぼ座標北からN-1°-Wの方向を示すもの(D群)、東西方向にのびE-2°-N~E-3°-Nの方向のもの(E群)である。切り合い関係などからみて、D→Eの順に変化したと判断している。

②出土遺物(第76・77図)

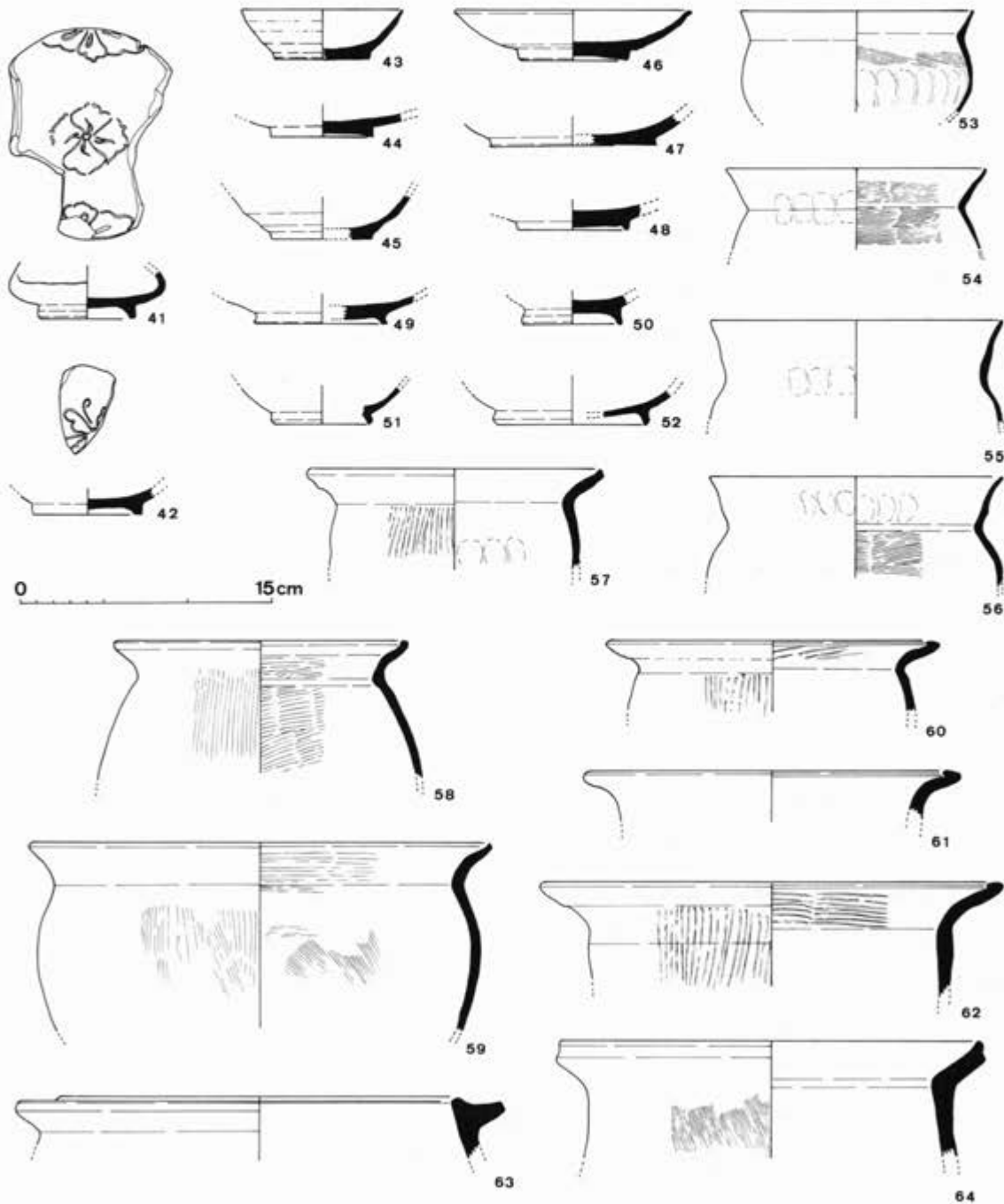
奈良～平安時代の遺構に関しては、先述のように、C地区第2遺構面及びF地区第3遺構面で奈良時代末～平安時代前期(8世紀末～9世紀後半)、F地区第2遺構面を中心とする平安時代中期～後期(10世紀後半)を中心とする遺構群をそれぞれ検出した。本来は、各遺構面に対応する出土遺物を報告すべきであるが、これらに対応する遺物は包含層出土品が大半であり、細かな分類を行い、時期別に遺物を区分することが現状では難しいため、ここでは奈良時代末～平安時代後期の遺物として一括して報告する。



第76図 出土遺物実測図(5)

1～4は、須恵器杯蓋である。1・2は、平らな天井部からなだらかに下がる口縁部を有し、時期的にはやや古い資料である(8世紀後半)。3・4は、偏平な形態をなし、平らな天井部と短く屈曲する口縁部からなる。5は、高台を持たない杯身である。形態から、杯蓋(1・2)の時期に相当すると考えている。6・7は、高台を付す杯身である。6は口径15cm・器高5cm、7は口径18cm・器高6.3cmを測る。高台は、底部と口縁部の境に付されており、形態からみて9世紀前半頃のものと考えられる。8は、須恵器皿である。口縁部のみの破片で、口径18cm前後に復原される。

9～12は、土師器杯及び皿である。9～11は、口径15cm前後・器高3cm前後の杯である。9・



第77図 出土遺物実測図(6)

10は、上外方へ口縁部が立ち上がった後、端部はわずかに外反し内側へ折り返す。9は、磨滅のため調整痕を明瞭に観察できないが、10は口縁部外面下半から底部をヘラ削りする。11は、口縁部端部付近が強く外反した後、内側へ折り返す。12は、口径18.5cm前後に復原される皿で、口縁部の形態は10と共通し、内面に暗文が認められる。12がやや古相を示すほかは、ほぼ8世紀末～9世紀初頭頃のものと考えている。

13は、須恵器杯身である。平らな底部から内湾気味に口縁部が立ち上がる。15・16とともにF地区のS K 204から出土した。15は土師器杯、16は土師器皿である。15は体部外面下半をヘラケズりする。10世紀初頭～前半頃に属すると考えられる。17は、土師器皿であるが、やはりこれらと同時期のものであろう。

14は、須恵器碗である。平らな底部から内湾する口縁部が立ち上がり、粘土紐の巻き上げ痕を明瞭に残す。10世紀後半～末頃のものと考えられる。

18～30は、土師器皿である。19～26はF地区のS B 210を構成する柱穴から、29・30はC地区のS E 023から出土した。18～27は、口縁部がナデによって強く外反し、端部を上方へ突出させて終わる。中でも、18～27は薄手で、10世紀中葉～後半頃を中心とするものと判断される。一方、28・29はやや厚手で、11世紀前半頃まで下ると考えられる。30は、口縁部端部が強く外反するもので、やはり11世紀前半頃のものであろう。

31～40は、黒色土器杯及び碗である。ここに示したものはすべてF地区から出土した。32は、平らな底部から大きく口縁部が開く杯で、外面をヘラケズリ、内面をヘラミガキで仕上げる。31・33・34は、碗である。口縁部は、内外面ともヘラミガキによって仕上げられる。そのうち、31は内面に暗文が認められる。35・36は、底部片である。いずれも断面三角形の高台を付す。37は、直線的に口縁部が開く小型品で、内外面ともヘラミガキを施す。38・39は、形態的には杯に近く、平らな底部から内湾気味の口縁部が立ち上がる。40は、「ハ」の字状にしっかり踏ん張る高台を付す。時期的には、32が9世紀中葉～後半、31が10世紀前半に属すると考えられるほかは、10世紀中葉～後半を主体とすると思われる。

41～48は、緑釉陶器である。41は耳皿で、陰刻花文が描かれる。42も皿と考えられる底部片で、陰刻花文の一部が確認される。ともに、猿投方面の製品と考えられる。43は平高台を有する小型の碗、44は平高台を有する皿である。また、45・46は平高台を有する皿の底部片、47は蛇目高台を有する碗の底部片、48は、輪高台を有する皿底部片と考えられ、いずれも京都近郊の製品と考えられる。時期的にはほぼ9世紀末葉～10世紀前半頃を中心として考えている。49～52は、灰釉陶器である。49が、輪高台をもつ皿ないし碗の底部片で、9世紀後半頃までさかのぼる資料である。ほかは、いわゆる三日月形の高台をもつ碗の底部片で、10世紀のものである。

53～56は、黒色土器甕である。いずれも、偏球状の体部から「く」の字状に外反する口縁部を有するが、口縁部が明瞭に「く」の字状に屈曲するもの(53・54)、なだらかに屈曲するもの(55・56)の2者がある。時期的には、ほぼ10世紀中葉～後半期と判断される。

57～64は、土師器甕である。口縁部の形状からみて、大きく6タイプに分かれる。口縁部が

「く」の字状に短く外反し、端部を上方へつまみ上げるもの(57)、端部を内側へ折り返すもの(58)、同様に強く外反させ端部をつまみ上げるもの(59)、強く外反させたあと端部を大きく内側へ折り返すもの(60~62)、羽釜状に口縁端部下に突帯を付すもの(63)、器壁が厚く、「く」の字状に外反した後、端部をつまみ上げるもの(64)である。時期的には、58が8世紀後半~末頃までさかのぼる可能性があるが、その他はほぼ9世紀末葉~10世紀のものとして判断している。

(7)平安時代末葉~鎌倉時代初頭(C地区:第1遺構面、F地区:第1遺構面)

この時期の検出遺構は、C・F両地区とも第1遺構面で検出したものを指している。時期的には、12~13世紀のものを含んでいるが、出土遺物や遺構の切り合い関係などから、明らかに12世紀段階のものとして13世紀以降のものとの2時期に分類することが可能なため、検出遺構に関してはこの両者に分けて報告する。12世紀段階のものにはC地区の掘立柱建物跡2棟、井戸3基、土坑1基などがあり、13世紀以降のものはC・F地区とも島畑及び島畑造成直前に位置づけている地割りに関する溝(S D004・201・211)及び素掘り溝群、野井戸である。なお、12世紀段階の遺構群に関しては、第73図に示した。

①検出遺構

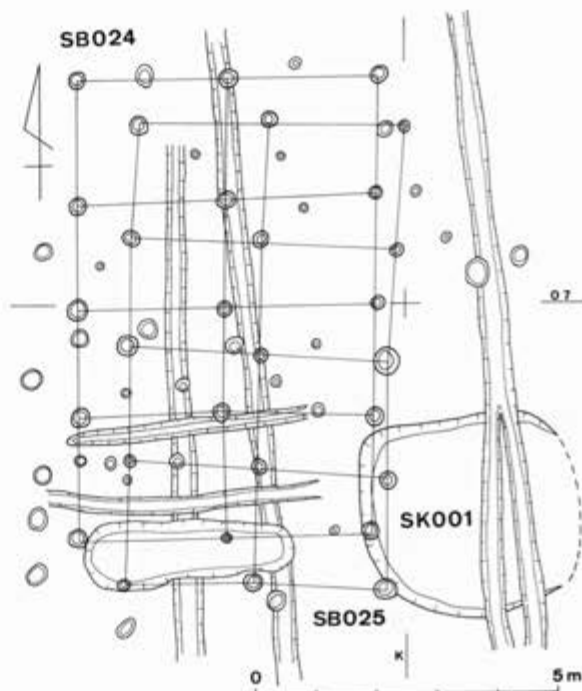
a. 12世紀段階の遺構

この時期の主な遺構には、C地区の掘立柱建物跡2棟(S B024・025)、井戸3基(S E022・095・096)、土坑1基(S K001)などがある。

S B024・025 C地区南西隅付近で検出した掘立柱建物跡である。ほぼ同一地点に2棟が重複して検出された。2棟とも4間×2間の南北棟総柱建物跡で、規模も近似している。S B024は、南北7.2m(1間1.8m)・東西4.7m(1間2.3m前後)で、主軸はほぼ座標北を向く。S B025は、南北7.3m(1間1.8~1.9m)・東西4.2m(1間2.1m)で主軸はN-2°-Eを向く。直接的な柱穴掘形の切り合い関係がなく、両者の前後関係は不明であるが、その主軸からS B024→025へと建て替えられたと判断している。また、柱穴からの出土遺物や、後述する12世紀後半頃の遺物が出土したS K001を切っていることから12世紀末葉~13世紀初頭頃の建物跡と考(註10)えている。

S E022 C地区南辺中央付近で検出した。径約2.2mの円形の掘形を有し、深さ約1.3mが遺存する。径約1.3mの円形の井戸枠の痕跡を確認した。埋土は淡灰褐色砂質土である。

S E095 C地区南西隅で検出した。径約1.2mの円形の掘形を有し、深さ約1.3mが遺



第78図 S B024・S B025平面図

存する。井戸枠の痕跡は確認できなかった。埋土は淡灰褐色砂質土である。

S E 096 C地区南西隅、S E 095の北側約4 mの部位で検出した。径約1.4 mの円形の掘形を有し、深さ約1.3 mが遺存する。井戸枠の痕跡は確認できなかった。埋土は淡灰褐色砂質土である。

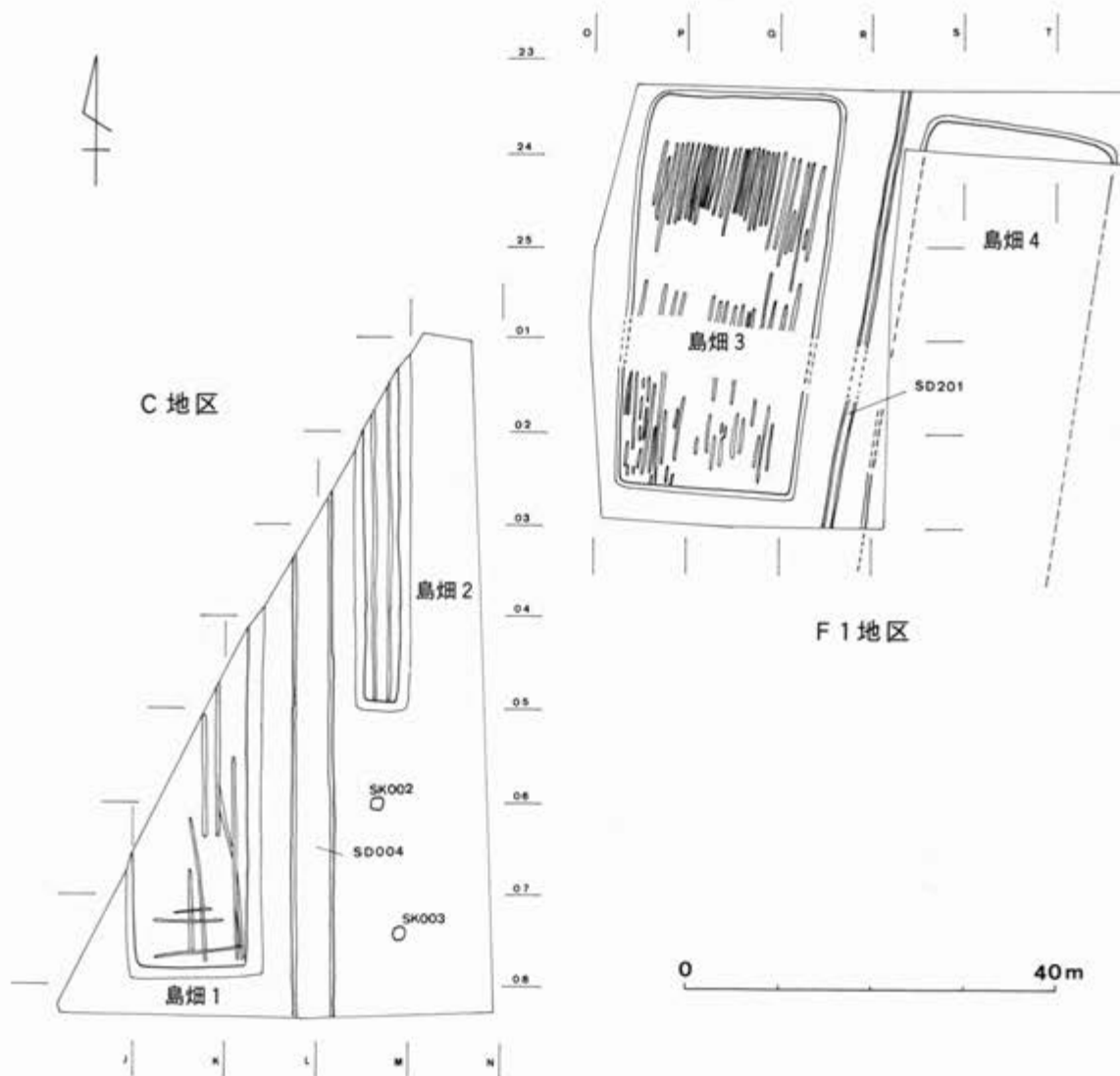
S K 001 上記S B 024・025の東側で、これに一部重複して検出した。一辺約2 mの隅丸方形を呈する土坑で、深さ約0.2 mが遺存し、埋土は淡灰褐色砂質土である。埋土中から瓦器碗、土師器皿、同羽釜などの土器片が出土した。

S D 211 F地区西辺で検出した南北溝である。幅約0.7 m・深さ約0.2 mを測る。断面はゆるやかな「U」字形をなす。

b. 13世紀以降の遺構

この時期の検出遺構は、素掘り溝群及び鳥畑、溝(S D 004・201)、野井戸と考えられる土坑(S K 002・003)などである。

鳥畑 鳥畑とは、現在も付近一帯で認められる周囲の水田より一段高くなった畑地である。これまでの内里八丁遺跡の発掘調査によって、その初現が鎌倉時代(13世紀末~14世紀頃)までさか



第79図 鎌倉時代以降主要遺構配置図

のはるものが徐々に確認されてきている。また、その大半が、もともと全体が微高地であった部分で、島畑部分を残してその周囲を削りとることによって造営されていることも明らかとなっている。このため、島畑が造られ始めた頃の景観は、現在のように水田地帯のなかに島畑が点在するといったものではなく、微高地の中に溝状の窪地が徐々に造られていくといったものだったと考えている。なお、検出される島畑間にもそれぞれで方向性の異なるものが認められる。造営された时期的な差異、もしくは小地域内での地割りの差異が反映されていると考えられるが、現状では細かな検討は行えていない。今年度の調査では、島畑を合計4か所で確認した。C地区で2か所、F地区で2か所である(島畑の名称は西側から島畑1～4とした)。その規模は、調査区外へのびるものが多いが、島畑1が東西約13m・南北40m以上、島畑2は東西6m・南北35m以上、島畑3は東西13m・南北24m、島畑4は東西13m・南北40m以上である。やはり、いずれの島畑も周囲を削り取ることによって造営されたものであったが、島畑2のみは元来かなり低いものであったが、後世に周囲の土砂を盛り上げることによって高くされた痕跡を認めた。これは、その形態にも反映されているようで、島畑2のみは幅が狭く、畦畔状となっている。当初の造営段階での利用形態が異なっていた可能性もある。また、時期に関しても従来の調査結果と同様、鎌倉時代(13世紀末～14世紀頃)と推測される結果を得ている(島畑外の水田部と考えられる地点で14世紀頃の遺物が出土、また島畑上で島畑造営直前と考えられる遺構が13世紀後半頃のものであった)。なお、それぞれの主軸に関しては、島畑1・同2はほぼ座標北を向き、島畑3・同4はN-10°-Eである。C地区の島畑1・2は、すでに昭和初期に削りとられ一面水田となっていたが、F地区の島畑3・4は調査直前まではほぼ同一地点で島畑として活用され続けていた。

S D004 C地区中央を南北にのび、幅約5mを測るが、深さは約0.2mが遺存するにすぎない。

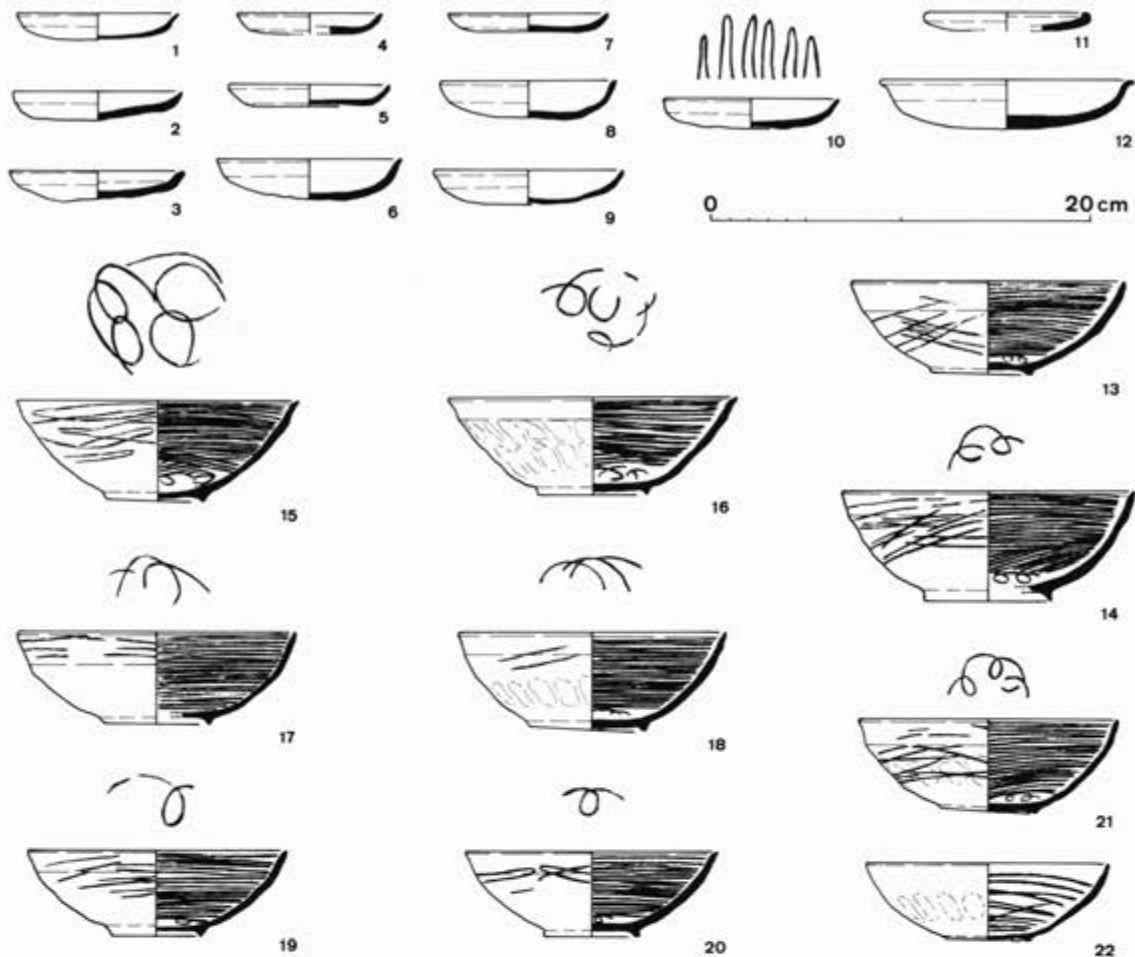
S D201 F地区東辺部で検出した南北溝である。幅約1m・深さ約0.3mを測り、断面は「U」字形をなす。

素掘り溝群 この段階の素掘り溝群は、C・F地区とも後述する島畑部の上面で検出した。C地区では主に西半部で確認した島畑1の北半部で、F地区では島畑3の上面でそれぞれ確認した。検出した素掘り溝群は、それぞれが確認された島畑と同一の方向性を示し、C地区ではほぼ座標北を向き、F地区ではN-10°-Eを示す。島畑造成後の耕作の痕跡とも考えることはできるが、一部島畑部を越えてのびていたものが、その造成の際に削平されたものもあるため、ここでは島畑造成直前のものと判断している。

②出土遺物

この時期の遺物は、C・F地区とも第1遺構面調査時に出土したものが主体をなす。时期的にはほぼ12世紀後半から13世紀段階のものが主体をなすが、主に遺構(掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑など)から出土したものは12世紀後半～末頃の時期を示している。ここでは、C地区で検出した土坑(S K001:1～10・16～21)の出土資料を中心に図示した(他には、S E096:3・15、S D004:11～13、S D211:14、F地区包含層:22)。

1～5・7は、土師器皿である。口径9cm前後を測る。6・8～10は、瓦器皿である。口径



第80図 出土遺物実測図(7)

10cm前後を測り、10では内面見込みにジグザグの暗文を認める。11・12も土師器皿である。11は、口径9cmの扁平な小皿である。12は、口径13.5cm・器高5.4cmを測る大皿で、口縁端部付近を強く外反させる。

13~22は瓦器碗である。大半は、口径15cm前後・器高5.5cm前後を測り、内面見込みには螺旋状の暗文を認め、ほぼ12世紀中頃~後半頃のものと見える。うち、14は、口径16cm・器高6cmを測るやや大型のもので、高台もやや高く、古相(12世紀中頃)を呈する。一方、22は、口径13cm・器高4cmを測る小型化したもので、高台も低く新相(13世紀前半)を呈している。

4. まとめ

今年度の調査では、昨年度の調査に引き続き、弥生時代から鎌倉時代にわたる一帯の土地利用の変遷が明らかとなった。ここでは、時代を追ってその概要をまとめておきたい。

弥生時代中期 今年度の調査では、昨年度に引き続き弥生時代中期と考えられる土坑を1基確認した。土坑以外の顕著な遺構及び、明確な遺物包含層は確認していないものの、この地の開発がこの時期までさかのぼることが徐々に明らかとなってきたといえる。なお、京都文化博物館が調査を行った内里八丁遺跡G地区^(註11)では、弥生時代前期末~中期初頭の遺物が大量に出土しており、

かつ竪穴式住居跡なども検出されている。

弥生時代後期末～古墳時代 弥生時代後期末(庄内期)には、C地区で集落跡が確認された。しかも、同時期の竪穴式住居跡はこの南側(D地区)へ広がっており、これまでに今年度に検出した9基と合わせ、合計22基の竪穴式住居跡が検出されたこととなる。C地区では、こうした竪穴式住居跡に加え、周溝遺構を2基確認した。現状では特異な施設に伴うものと判断している。さらに、F地区ではこの時期の谷地形が検出され、土器・木製品など多数の出土遺物をみた。なお、C地区(正確にはD地区からC地区にわたる)に存在する集落跡は、過去の調査成果からすれば、D地区及びB地区の東半部からC地区にかけて広がる微高地に立地することとなり、その南方及び南西方向へ向かってゆるやかに下がった低地部分に水田跡が拡がり、北から北東側では今回F地区で検出した谷地形によって区切られていたと考えられる。一方、古墳時代前期(布留式併行期)に至ると、集落は別の場所へ移動したようで、この時期に相当する遺構はほとんど確認されない。古墳時代中期～後期には、昨年度調査を行ったD地区を中心に集落が形成されていたが、今年度のC・F地区では顕著な遺構は確認されなかった^(註12)。

飛鳥時代 飛鳥時代の遺構として報告したのはC地区第3遺構面で検出した掘立柱建物跡、土坑(炉跡を含む)、井戸などである。遺構、特に掘立柱建物跡の主軸方向をみると少なくとも3～4時代にわたるものが存在するようであり、時期的には出土遺物から7世紀中葉～末葉に属すると考えている。これら遺構群に関して、特に注目されるのは、1)南山背地域では数少ない7世紀の掘立柱建物跡のみが確認された点、2)遺跡内で小鍛冶が行われていた点、の2点である。前者に関しては、南山背地域では従来から一般集落への掘立柱建物跡の導入が遅れることが指摘されており、7世紀の掘立柱建物跡によって構成される遺跡は、城陽市にある正道官衙遺跡及び芝山遺跡などに限られていた。しかも、この両遺跡は、官衙ないしは官衙的な色彩を帯びた遺跡と認識されている。こうした面では、今回検出した遺構群に関しても単なる一般的な集落遺跡と認識すべきでなく、官衙遺跡(郡家の出先機関など)や在地の有力豪族の居館の一部としての可能性を検討する必要があるだろう。また、こうした意味では、後述する古山陰道との関連や、遺跡内で小鍛冶が行われていた点も重要なポイントといえる。

奈良時代末～平安時代前期 奈良時代末～平安時代前期の遺構は、C地区第2遺構面で大型掘立柱建物跡1棟及び土坑を3基、溝1条を検出したにとどまる。しかし、過去のこの遺跡の調査成果では、この時期の遺構・遺物はさまざまな面で注目すべき点を有していた。足利説「古山陰道」との関連や、「延喜式」内膳司条に記載される「奈良園」との関連などである。「古山陰道」との関連が最も注目されるのは、過去に実施したD地区の調査で検出された溝である(今回のSD006も含まれる)。溝は、南南東-北北西へ向かってのび、埋土中からは、奈良時代末～平安時代前期の遺物が出土している。また、これを少しさかのぼる時期の遺物が出土する溝が若干方向を違えその西側に存在することも確認されている。あたかも、若干時期を違え、溝が付け替えられた状況を呈しているのである。溝の性格について、この時期の掘立柱建物跡の示す主軸とはかなりの振れをもっており、建物跡群を区画する溝とは捉えがたい面がある。現状では平行する溝

は確認されておらず、今後に残された課題は多いものの、この溝こそが山陰道の東側溝とする説もあり注目される。他方、過去のB地区の調査で、東西棟、南北棟の掘立柱建物跡が計10棟以上検出されている。規模は2間×4～5間のものが多く、これらに伴って多量の製塩土器、石帯、墨書土器などが出土しており、官衙的な色彩をもつ遺構群と認識されている。これについては、この地が古山陰道に面する交通の要衝といった観点でとらえることができるなら、郡家の出先機関としての館などを想定することも可能かもしれない^(注13)。

平安時代中期～後期 平安時代以降、一帯で耕作の痕跡としての素掘り溝群が数層にわたって検出されるようになる。そして、その方向性が上記の溝(S D006など)とほぼ同一の方向から、徐々に北そして若干東へ振るものへと変化していく状況が確認されている。出土遺物からの細かな検討は行えていないものの、こうした状況は、一帯の耕作地としての本格的な開発がS D006などの示す時期である、平安時代前期頃から行われ始めたことを示唆すると考えている。というのも、こうした畑地としての開発の痕跡に関しては、上記の「奈良園」との関連が考えられるからである。ただし、「奈良園」に関しては、実際にはその中心施設を離れてしまえば、遺構としては単に畑地を中心とした農村景観が検出されるのみであろうと考えられ、最終的に何をもって、検出遺構が「奈良園」の一画として認識できるのかは不明な点が多い。こうした中、この地の「奈良園」としての景観は、平安時代中期～後期段階の遺構群が端的に示しているのかもしれない。平安時代中期～後期(10～11世紀)の遺構は、C地区で井戸・溝が検出されたのをはじめ、F地区では掘立柱建物跡4棟、土坑4基のほか、素掘り溝群などがあつた。後世の鳥畑造成に伴い、大幅な削平が行われたC地区では不明な点も多いが、F地区では2～3期にわたる素掘り溝群が検出され、これらは、先述のように、平安時代前期もしくは中期頃から南南東→北北西→南→北→南南西→北北東へと、その方向を変えながら連綿と鎌倉時代初頭頃までの盛んな耕作地としての土地利用の痕跡を示している。この間、F地区で検出されたように、数棟の掘立柱建物跡によって構成される単位集落が営まれるが、一帯の景観の主体は耕作地と考えられる。すなわち、これとほぼ同時期の掘立柱建物跡群は、B地区で検出されているが、あくまで畑地が広範囲に展開するなかに、数十mごとに単位集落が点在するといった景観が想定されるのである。

平安時代末～鎌倉時代以降 平安時代末頃、すなわち12世紀後半～末頃も一帯に鳥畑が造成される以前は、先の10～11世紀の景観と基本的に大きな変化はなかったと判断している。F地区では、もはや掘立柱建物跡は確認されなかったものの、C地区南東部で検出した掘立柱建物跡やこれに近接するD地区の北半部で昨年度に検出した同時期の掘立柱建物跡などは、こうした状況を示していると考えられる。ところが、13世紀以降、一帯の耕作地としての開発は新たな局面を迎えたようである。集落の痕跡は姿を消し、一面が耕作地へと変化した。また、それまで水掛かりの悪かった微高地上は畑地ないしは陸田として利用し、木津川の水と闘いながら、水田としてはわずかな範囲を開発していたにすぎない状況から、微高地部分を一部削り取って地下げを行って水田部分を確保し、削り残した部位を鳥畑として活用するといった状況へと変化したのである。その背景には、耕作地の拡大を意図した、中世荘園(石清水八幡領；奈良荘)の存在が大きく関与

したと考えられる。

(森下 衛)

- 注1 「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
「京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
「京都南道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第67冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注2 奥平廣子、福田玲子、辻井和子、栃木道代、森田千代子、与十田節子、坪内達雄、小川正志、長谷川洋、上田真一郎、榊原貴子、前田 稔、大杉麻紀、高橋あかね、菅谷友一、坂本 薫、細山田章子、宮本美紀、大林祐司、前野博史、本多伯舟、小荒尚幸、渡辺 努、八尾嘉男
- 注3 調査期間中、下記の方々からは、専門的な指導・助言をいただいた。
高橋誠一氏(関西大学)、山中敏史氏(奈良国立文化財研究所)、植山 茂氏・山下秀樹氏・定森秀夫氏(京都文化博物館)
- 注4 注1文献に同じ。
- 注5 八幡市北東部一帯の地形に関しては、下記の文献を参考としている。なお、遺跡の立地などに関しては、多分に私見を交えている。
中塚 良「木津川下流域の表層地質と遺跡立地—八幡木津川河床遺跡・新田遺跡を例に—」(『京都考古』第33号 京都考古刊行会) 1984
鳥居治夫「山城国久世郡・綴喜郡・相楽郡に於ける条里の考察」 1986
- 注6 この旧河道は、現在も蜻蛉尻川という名称で幅5m前後の農業用水路としてその名残りをとどめるが、かつては幅が50m近くに及ぶ流路を形成していたらしいことが、ほ場整備が行われる以前の空中写真によって確認される。また、この蜻蛉尻川は、江戸時代に木津川への排水の便が悪く、大雨が降った際にたびたび氾濫をおこし、周辺の集落で問題となったことも記録に残っている。
- 注7 足利健亮『日本古代地理研究』 1985
- 注8 『延喜式』卷三十九 内膳司
- 注9 ここで周溝遺構としたS X 079などの性格については、当調査研究センター理事都出比呂志氏(大阪大学教授)のご指導を得た。
- 注10 この部分の建物跡は、当初、3棟が存在すると考えていたが、その後の検討の結果、ここに報告する2棟のみが建物跡として認識できると判断した。
- 注11 G地区の調査成果に関しては、植山 茂氏・山下秀樹氏・定森秀夫氏(京都文化博物館)のご教示に

よる。

注12 G地区で古墳時代前期(布留式併行期)の集落跡が検出されている。今回、F地区で出土した多くの遺物も、位置関係からみて、このG地区の集落跡付近から流れてきたものと考えられる。

注13 B・D地区の調査成果については、以下の報告に詳しい。

「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

「京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

「第二京阪自動車道関係遺跡平成6年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第67冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

「第二京阪自動車道関係遺跡平成7年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

圖 版

圖 版

(1) P.A.工区全景
(北から)



(2) A-5地区
弥生・古墳時代遺構検出状況
(全景、北から)



(3) A-5地区
弥生・古墳時代遺構検出状況
(全景、南西から)

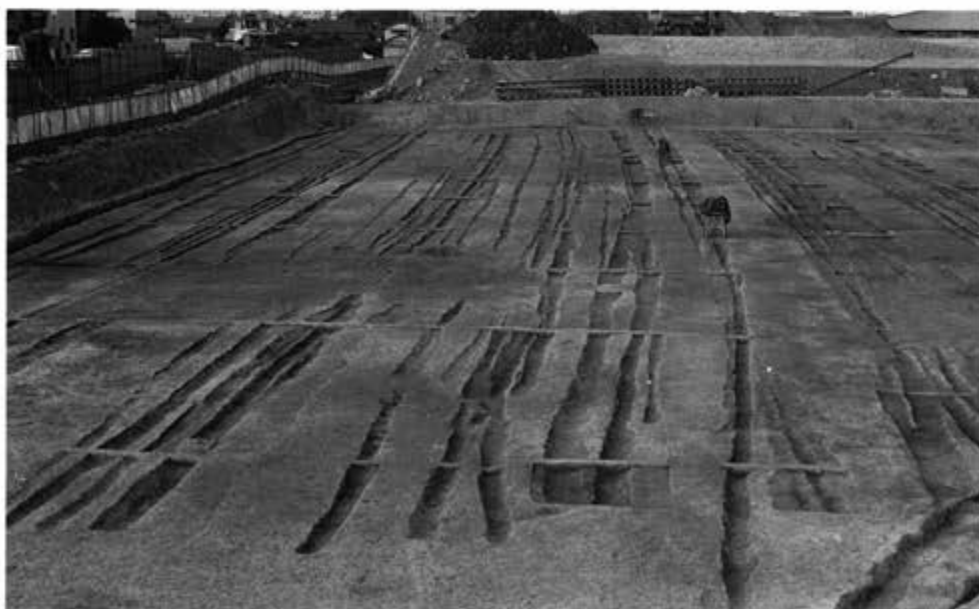




(1)A-5 地区中世遺構
(素掘り溝群)検出状況
(全景、北から)



(2)A-5 地区中世遺構
(素掘り溝群)検出状況
(中央部、南から)



(3)A-5 地区中世遺構
(素掘り溝群)検出状況
(西辺部、南から)

(1)A-5地区長岡京期
遺構検出状況
(全景、南から)



(2)A-5地区長岡京期
遺構検出状況
(全景、南から)



(3)A-5地区長岡京期
主要遺構検出状況
(全景、北から)



図版第4 長岡京跡左京第384次



(1)A-5 地区東三坊大路
西側溝 S D33001・十三町
東辺溝 S D363100検出状況
(南から)

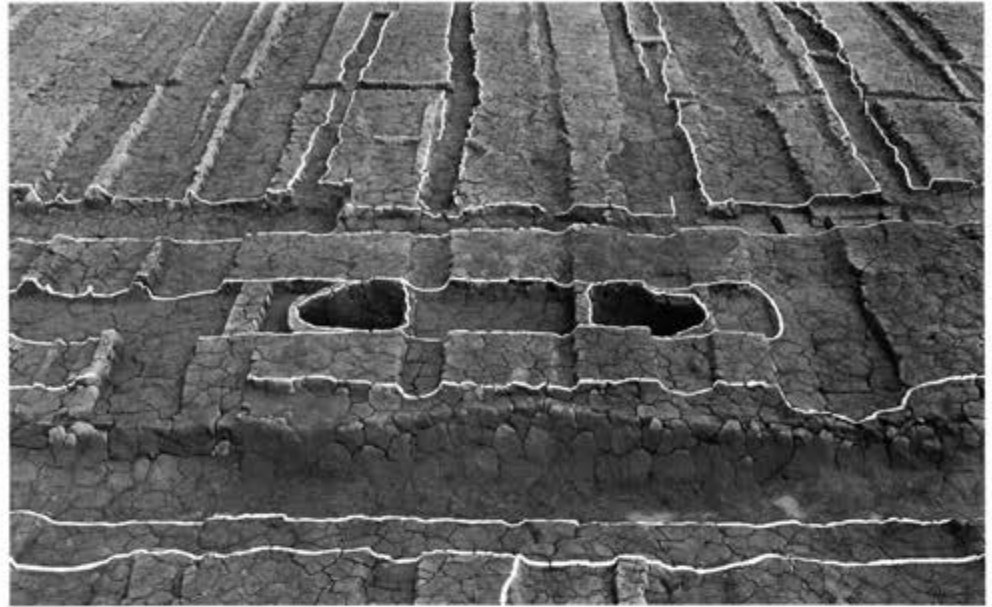


(2)A-5 地区南一条大路
路面 S F 33006検出状況
(東から)



(3)A-5 地区南一条大路
北側溝 S D33003・十三町
南辺溝 S D33004など検出状況
(東から)

図版第5 長岡京跡左京第384次



(1)A-5 地区十三町
門跡 S B 384110 検出状況
(南から)



(2)A-5 地区十三町
門跡 S B 384110・S X 384112
町内通路側溝検出状況
(北から)



(3)A-5 地区十三町
南辺溝 S D 33004
牛の足跡検出状況
(東端部、南東から)

図版第6 長岡京跡左京第384次



(1)A-5 地区十六町
掘立柱建物跡群など検出状況
(南から)



(2)A-5 地区十六町
掘立柱建物跡群など検出状況
(東から)



(3)A-5 地区十六町
掘立柱建物跡
S B384112検出状況
(南から)

(1)A-5 地区十六町
井戸 S E 384108内
井戸側検出状況
(北から)

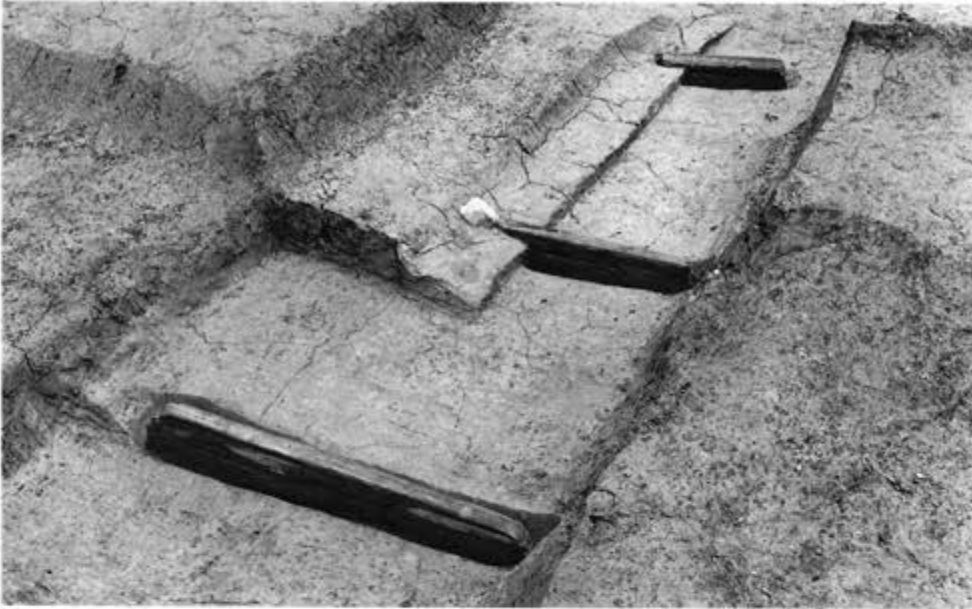


(2)A-5 地区十六町
井戸 S E 384108完掘状況
(北から)



(3)A-5 地区十三町
井戸 S E 384092内
井戸側構築状況
(北から)





(1)A-5 地区十三町
暗渠 S X 384091 検出状況
(南西から)



(2)A-5 地区十三町
暗渠 S X 384109 検出状況
(南から)



(3)A-5 地区
南一条大路北側溝内
木鋤出土状況
(西端部、南から)

(1)A-5地区
水田区画検出状況
(北西から)



(2)A-5地区
水田区画検出状況
(南から)



(3)A-5地区
流路S R 33016検出状況
(東から)





(1)A-5 地区
流路 S R 33016内溝 S D 33017
検出状況
(東から)



(2)A-5 地区
方形周溝墓群検出状況
(北東から)

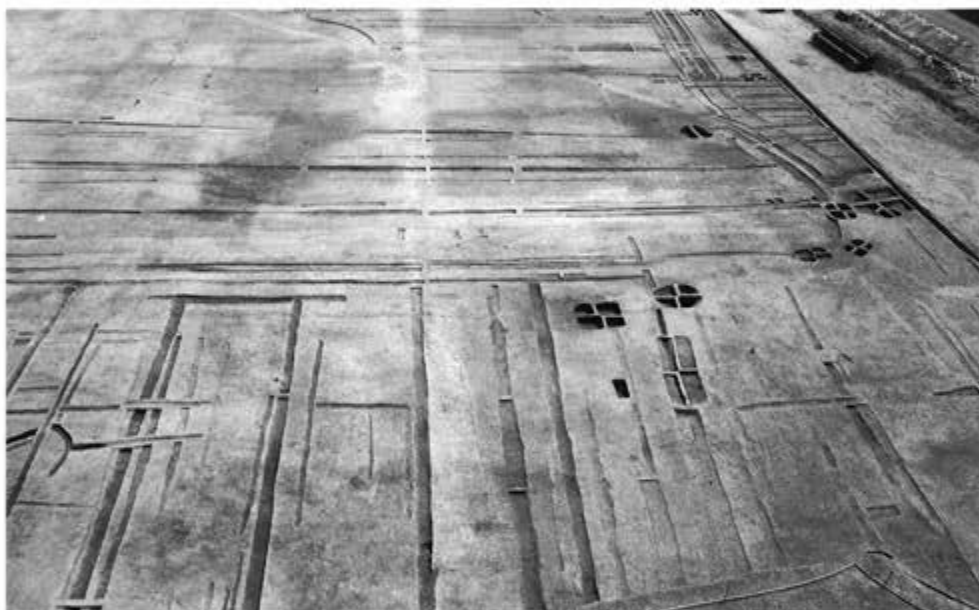


(3)A-5 地区
方形周溝墓 S X 384114
検出状況
(南東から)

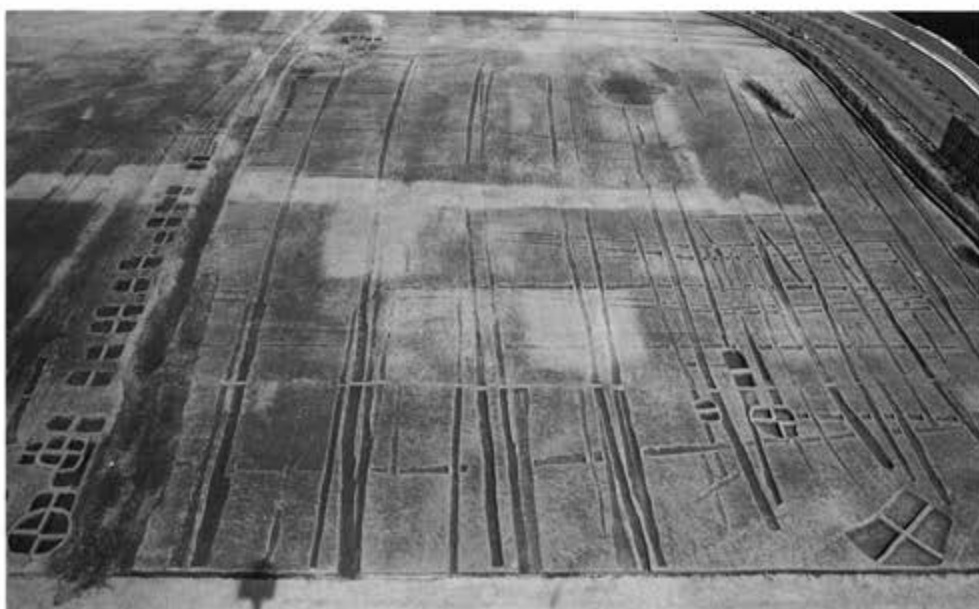
(1) B-5b・B-8 地区
中世・平安時代遺構検出状況
(全景、北から)



(2) B-5b 地区
中世・平安時代遺構検出状況
(近景、北から)



(3) B-8 地区
中世・平安時代遺構検出状況
(近景、西から)





(1) B-8 地区
井戸 S E 385536 内井戸側・
井筒(水溜め)検出状況
(西から)



(2) B-5 b 地区
井戸 S E 385519 内井戸側・
井筒(水溜め)検出状況
(南東から)



(3) B-5 b 地区
井戸 S E 385543 内井筒
(水溜め)検出状況
(西から)



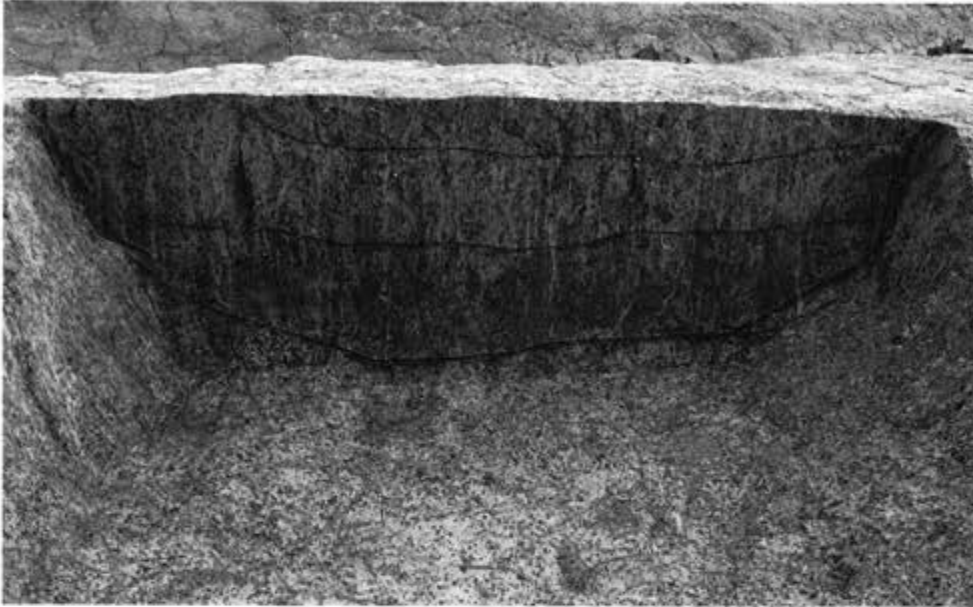
(1) B-5 b・B-8 地区
南一条大路両側溝検出状況
(西から)



(2) B-5 b 地区
南一条大路北側溝 S D33003
b 区西壁セクション
(東から)



(3) B-5 b 地区
南一条大路北側溝 S D33003
i 区西壁セクション
(東から)



(1) B-8 地区
南一条大路南側溝 S D33002
b区西壁セクション
(東から)

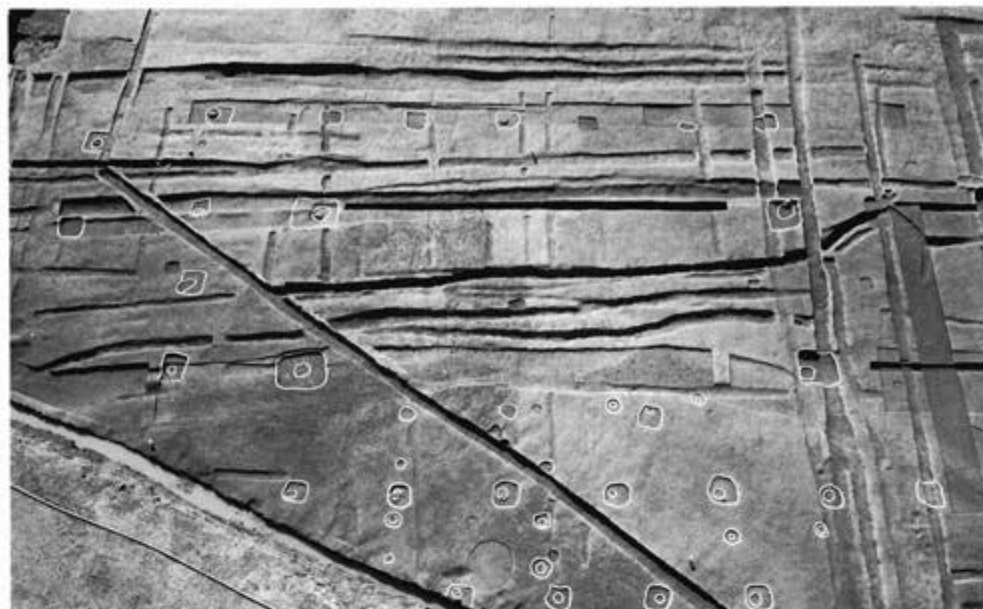


(2) B-8 地区
南一条大路南側溝 S D33002
i区西壁セクション
(東から)

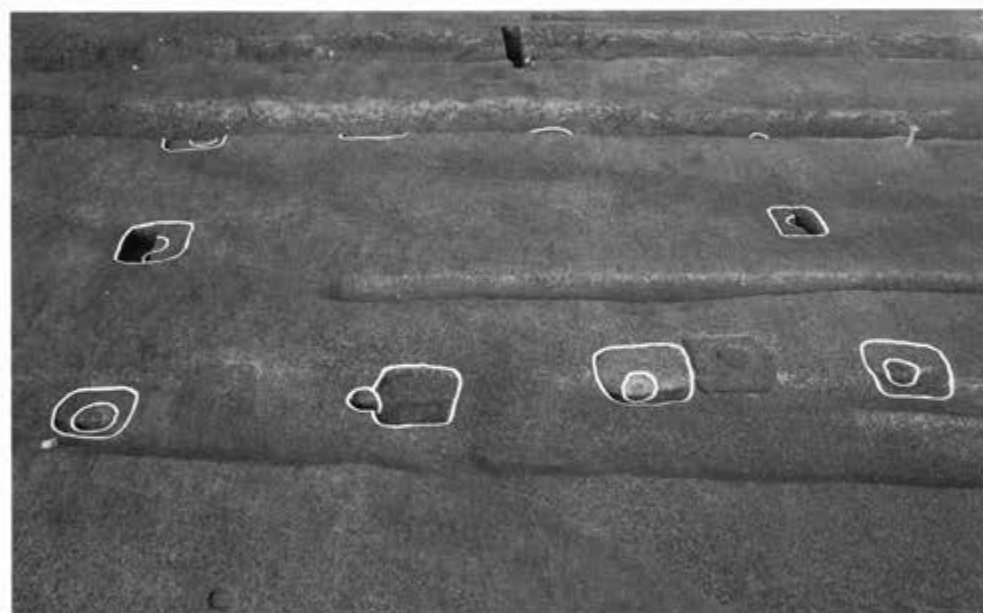


(3) B-8 地区
大溝 S D33305
d区南壁セクション
(北から)

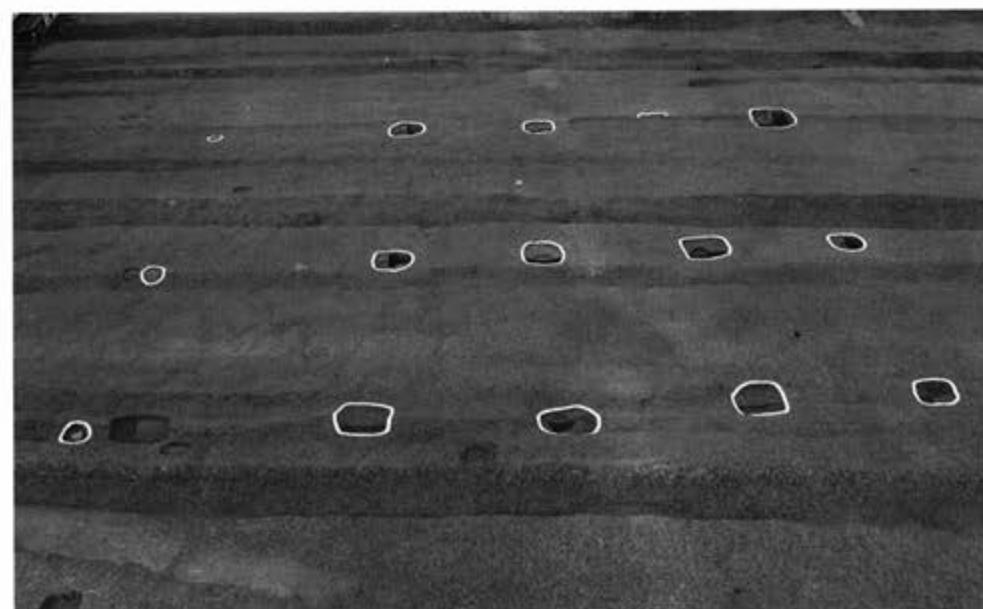
(1)B-5b地区五町
掘立柱建物跡 S B385511
検出状況
(北から)

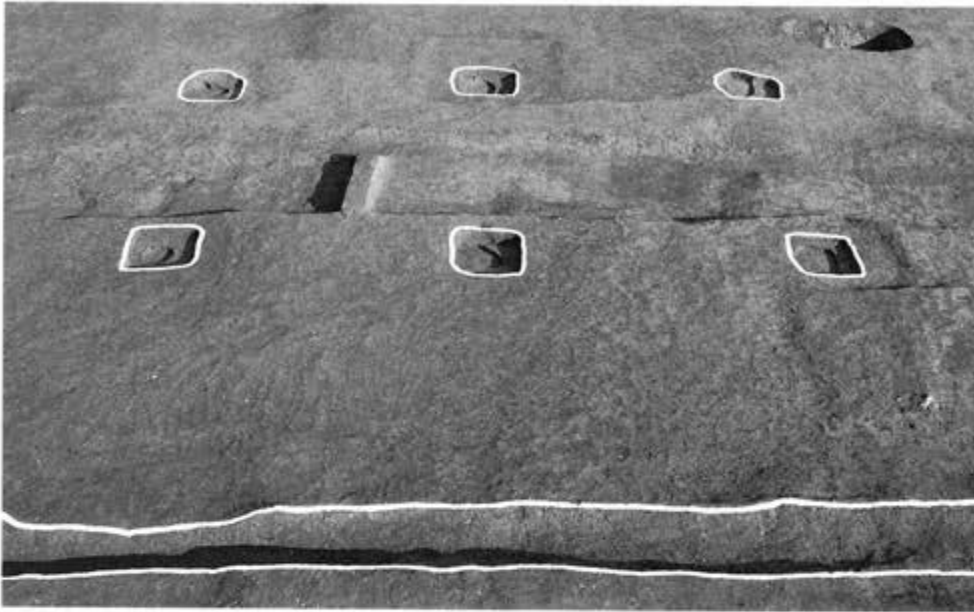


(2)B-5b地区五町
掘立柱建物跡 S B385512
検出状況
(南から)



(3)B-5b地区五町
掘立柱建物跡 S B385513
検出状況
(南から)





(1)B-5b地区五町
掘立柱建物跡S B385546
検出状況
(西から)

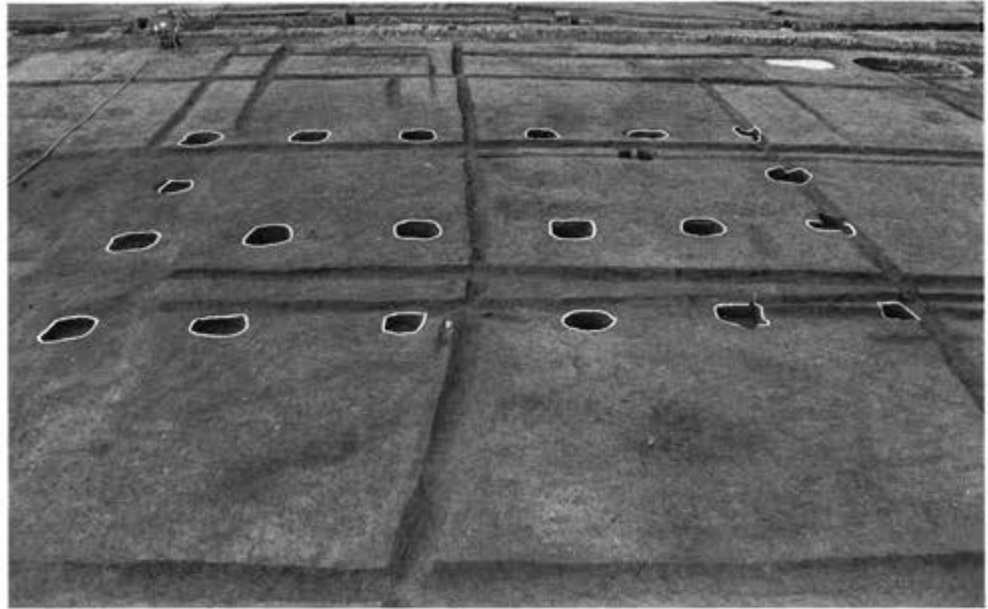


(2)B-5b地区五町
門跡S B385547柱穴1
礎板出土状況
(西から)



(3)B-5b地区五町
方形土坑S X385538完掘状況
(西から)

(1)B-8 地区八町
掘立柱建物跡 S B385514
完掘状況
(南から)



(2)B-8 地区八町
掘立柱建物跡 S B385515
完掘状況
(西から)



(3)B-8 地区八町
掘立柱建物跡 S B385516
完掘状況
(北から)





(1)B-8 地区
大溝 S D33305 須恵器壺
出土状況
(西から)



(2)B-5 b 地区南一条大路
北側溝 S D33003 土師器高杯
出土状況
(南から)



(3)B-5 b 地区五町
掘立柱建物跡 S B385513
柱穴 9 須恵器杯出土状況
(北から)



(1)B-5 b地区
溝 S D385609
C区須恵器高杯出土状況
(西から)



(2)B-5 b地区
方形周溝墓 S T385619
弥生土器出土状況
(北西から)



(3)B-5 b地区
方形周溝墓 S T385619
木棺墓石鏃・石剣出土状況
(南西から)



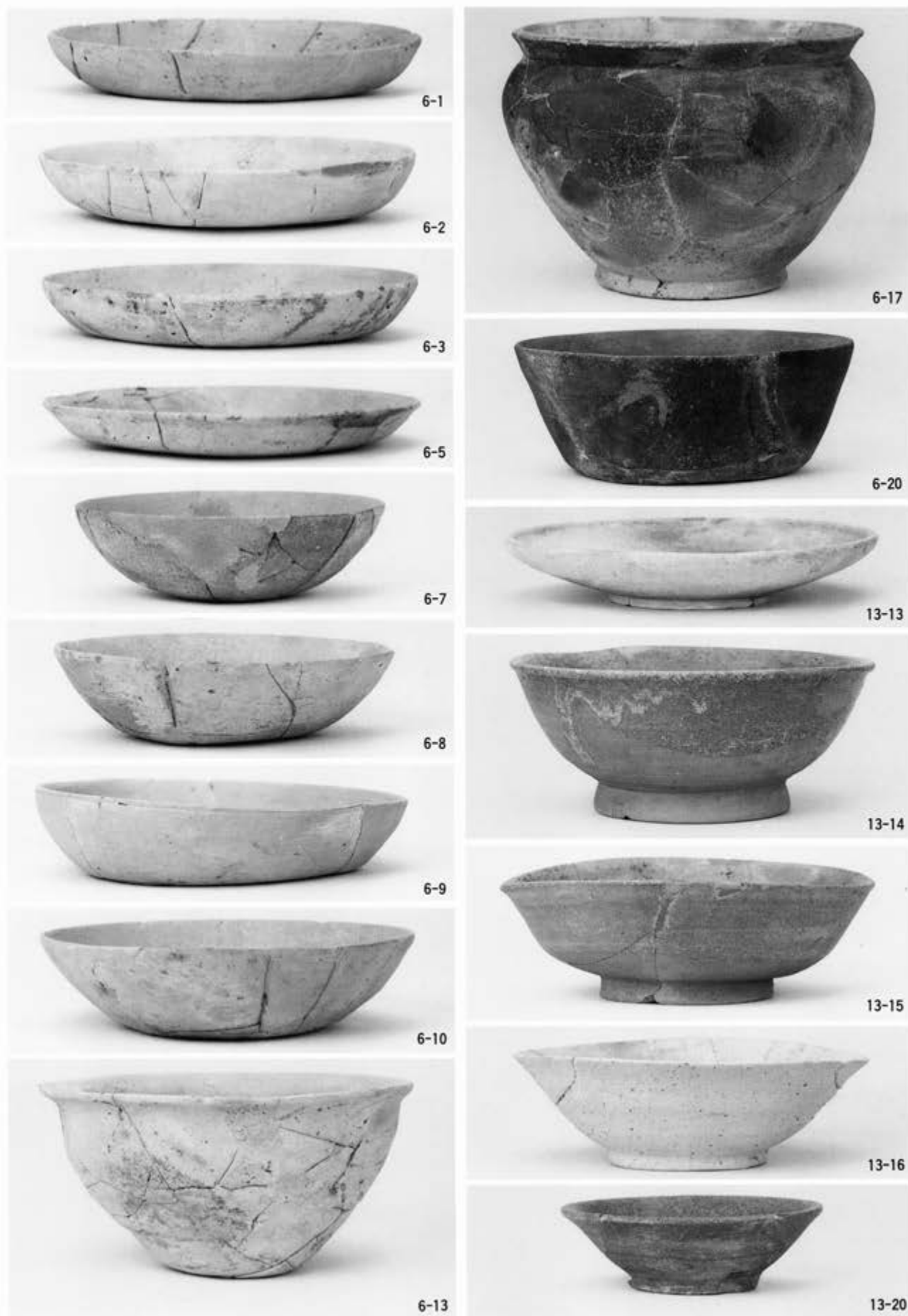
(1) B-8 地区
方形周溝墓 S T 616・615
完掘状況
(南から)



(2) B-5 b 地区
溝群検出状況
(西から)



(3) B-5 b・B-8 地区
弥生・古墳時代遺構
検出状況
(全景、北から)





13-17



13-18



13-21



16-5



16-10



13-22



13-22



16-14



16-16



16-6



16-6

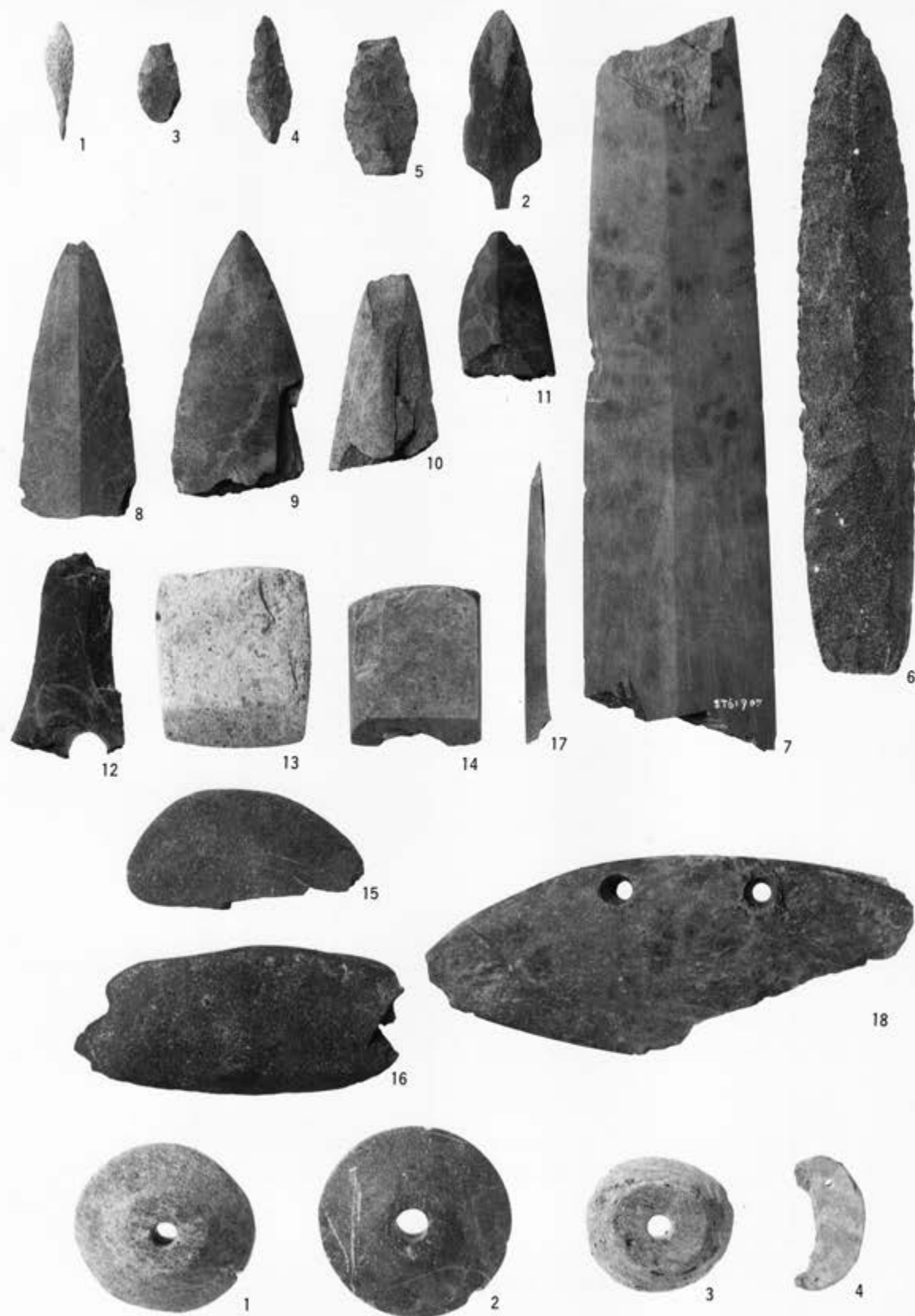


16-19



16-20







(1)調査地遠景 (空中写真、南東から)



(2)調査地遠景 (空中写真、北から)



(1)調査地遠景 (空中写真)



(2)第3・4トレンチ全景 (空中写真、下方が北)



(2)第1トレンチ下面全景(北から)



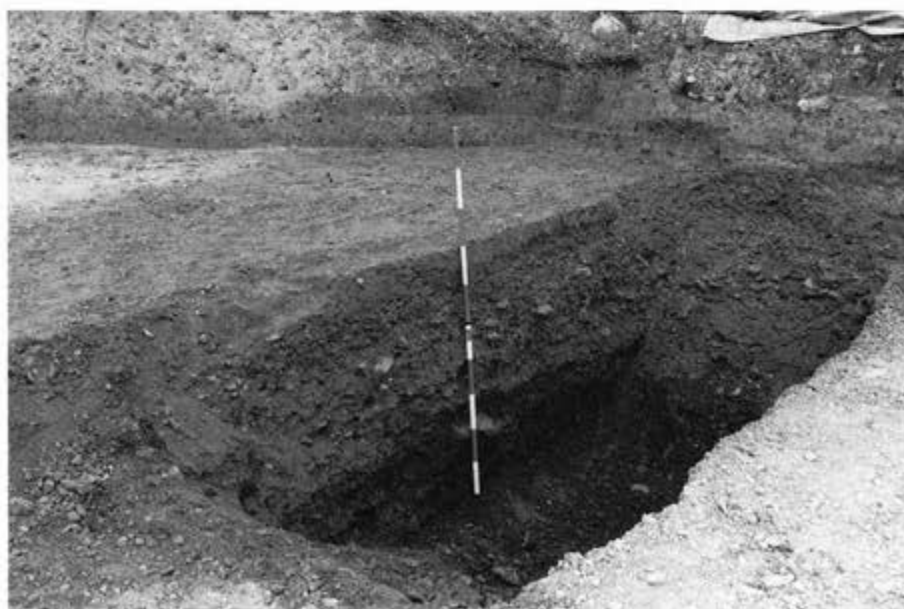
(1)第1トレンチ上面全景(北から)



(1)第1トレンチ中世溝検出状況
(東から)



(2)第1トレンチ流路検出状況
(東から)



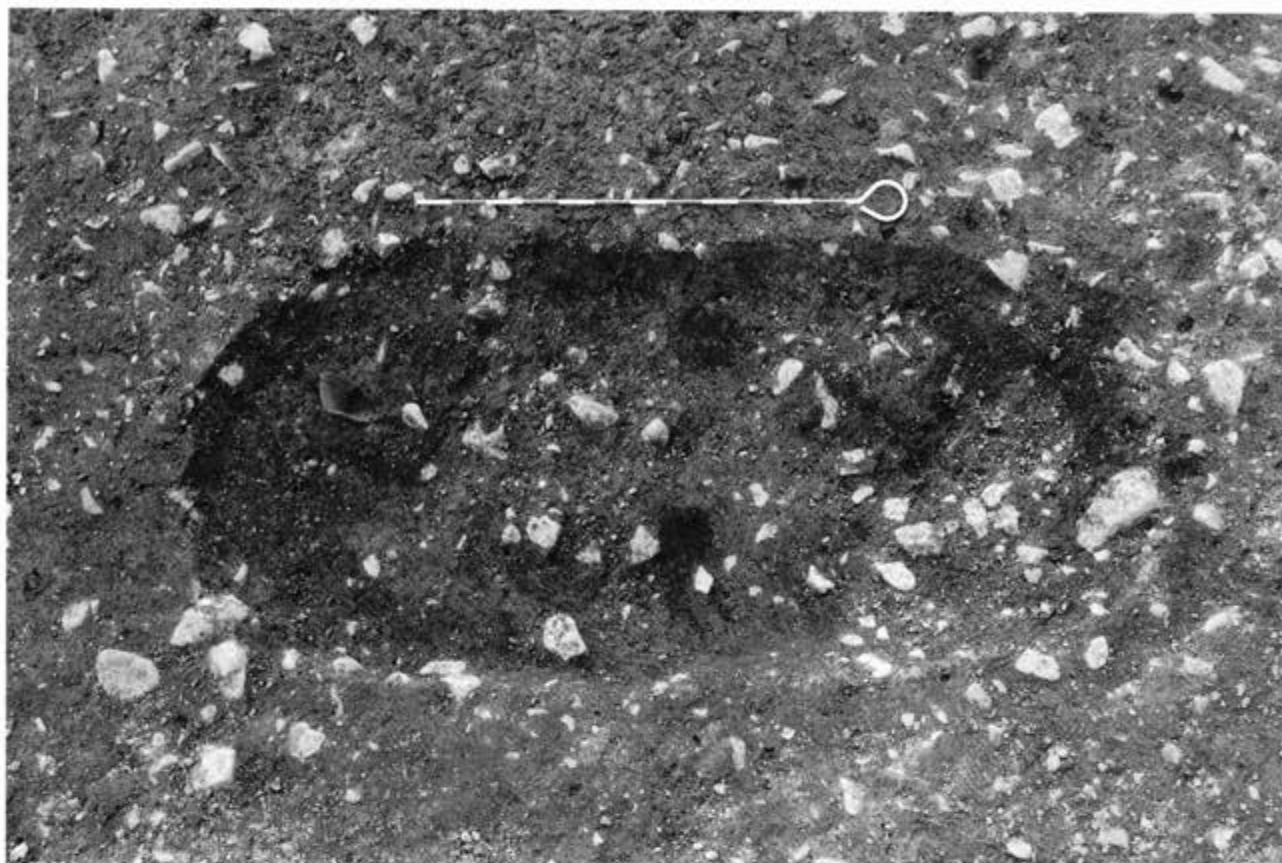
(3)第1トレンチ旧小畑川河道断ち割り
(北東から)



(1)第2トレンチ全景(西から)



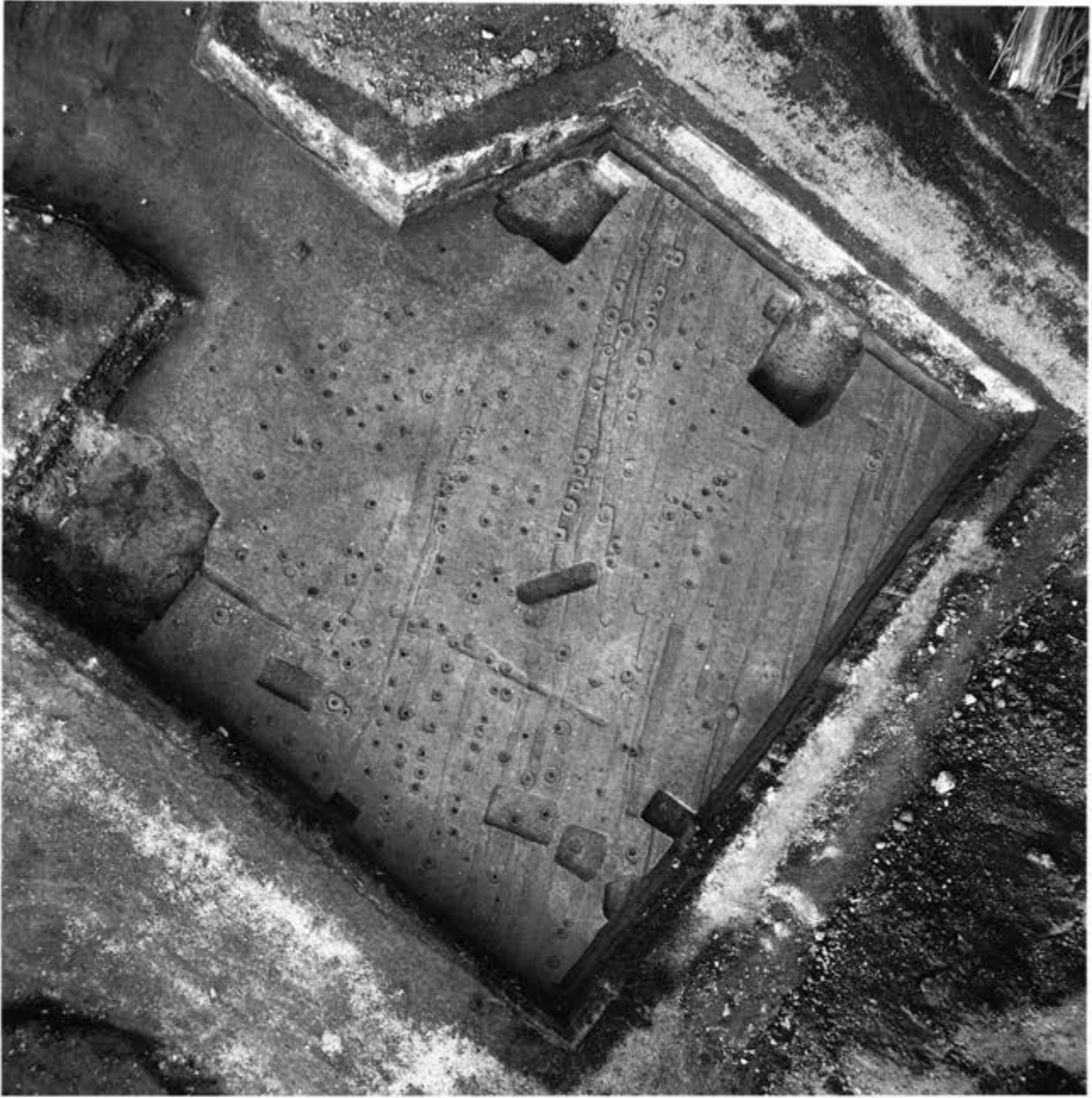
(2)第2トレンチ全景(北西から)



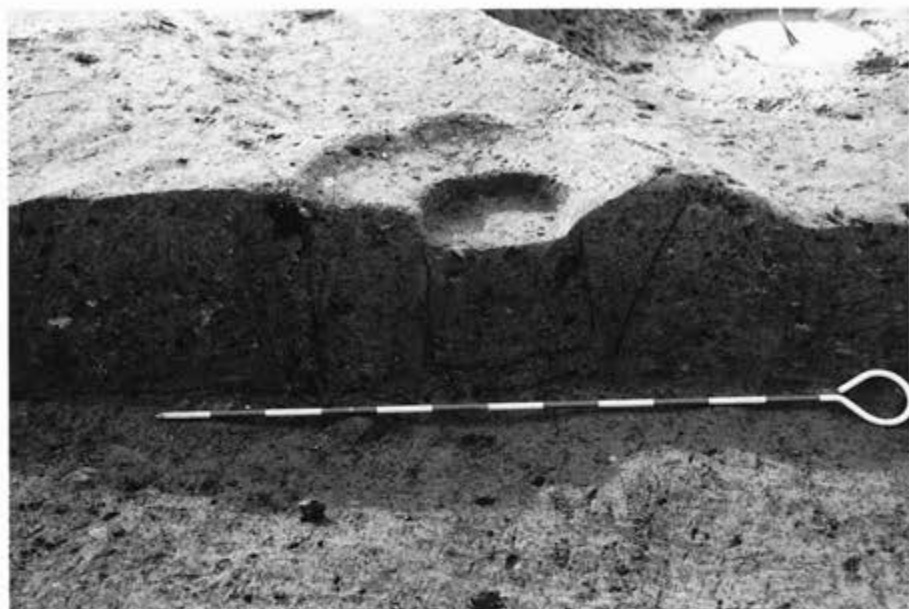
(1)第2トレンチ土坑S K 38920検出状況 (南から)



(2)第2トレンチ土坑S K 38920完掘状況 (南から)



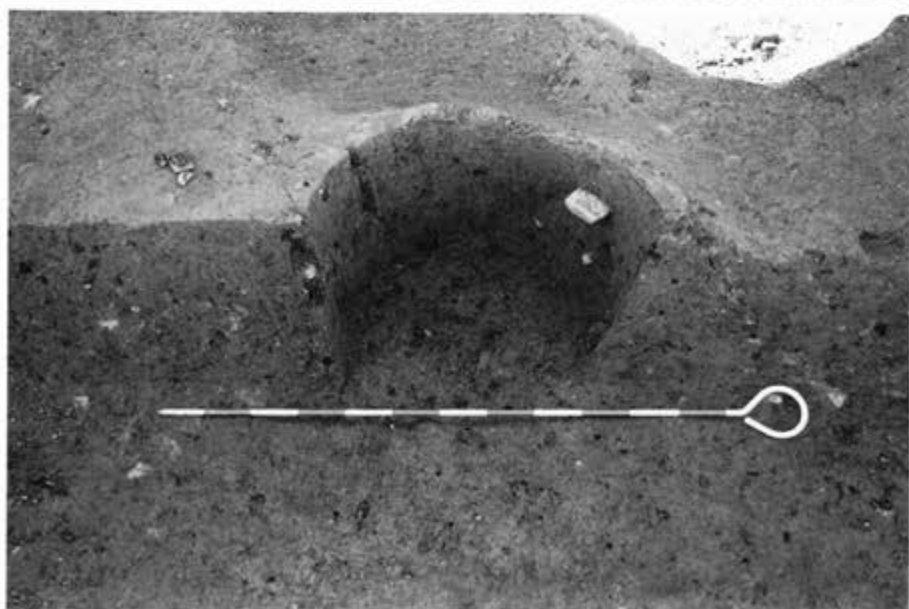
第4トレンチ上面遺構検出状況（上方が北）



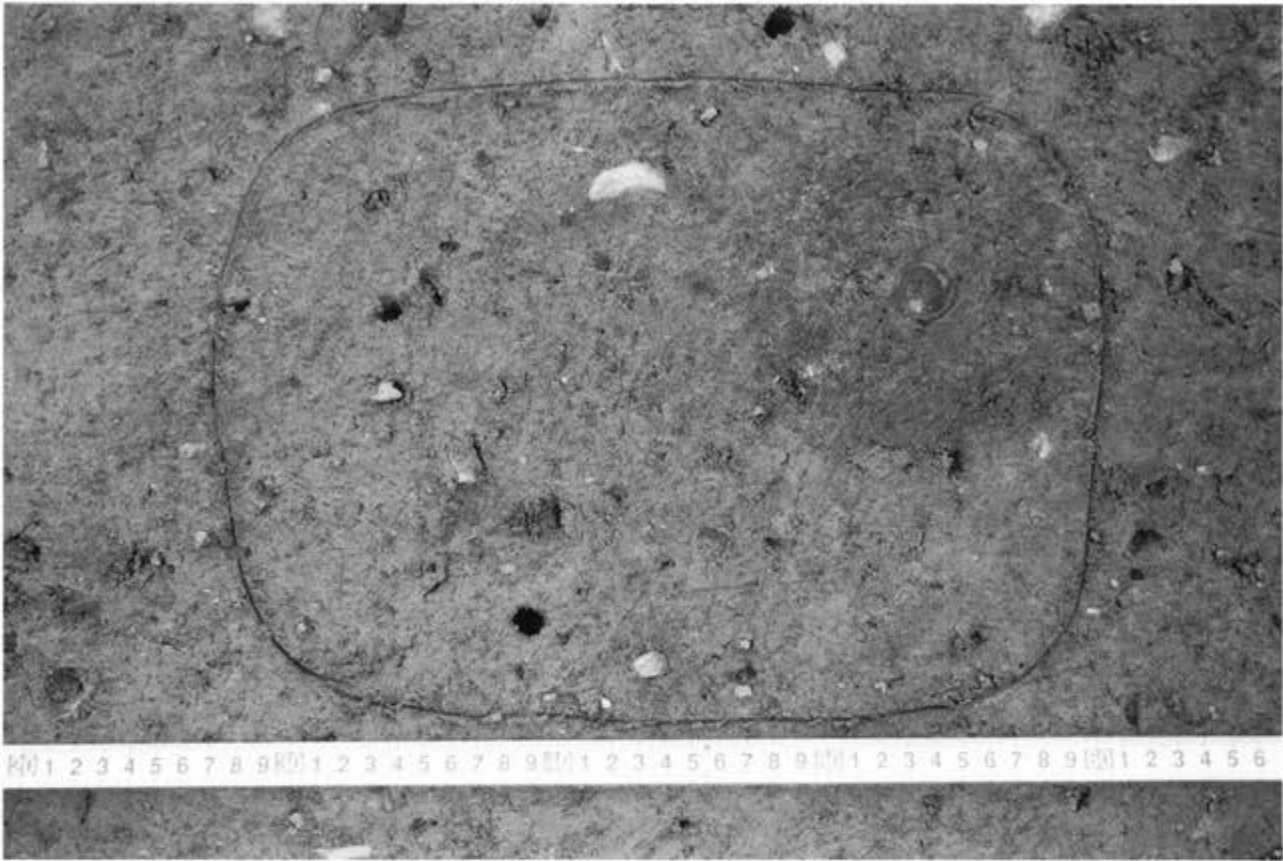
(1)第4トレンチ柱穴47断ち割り
(北から)



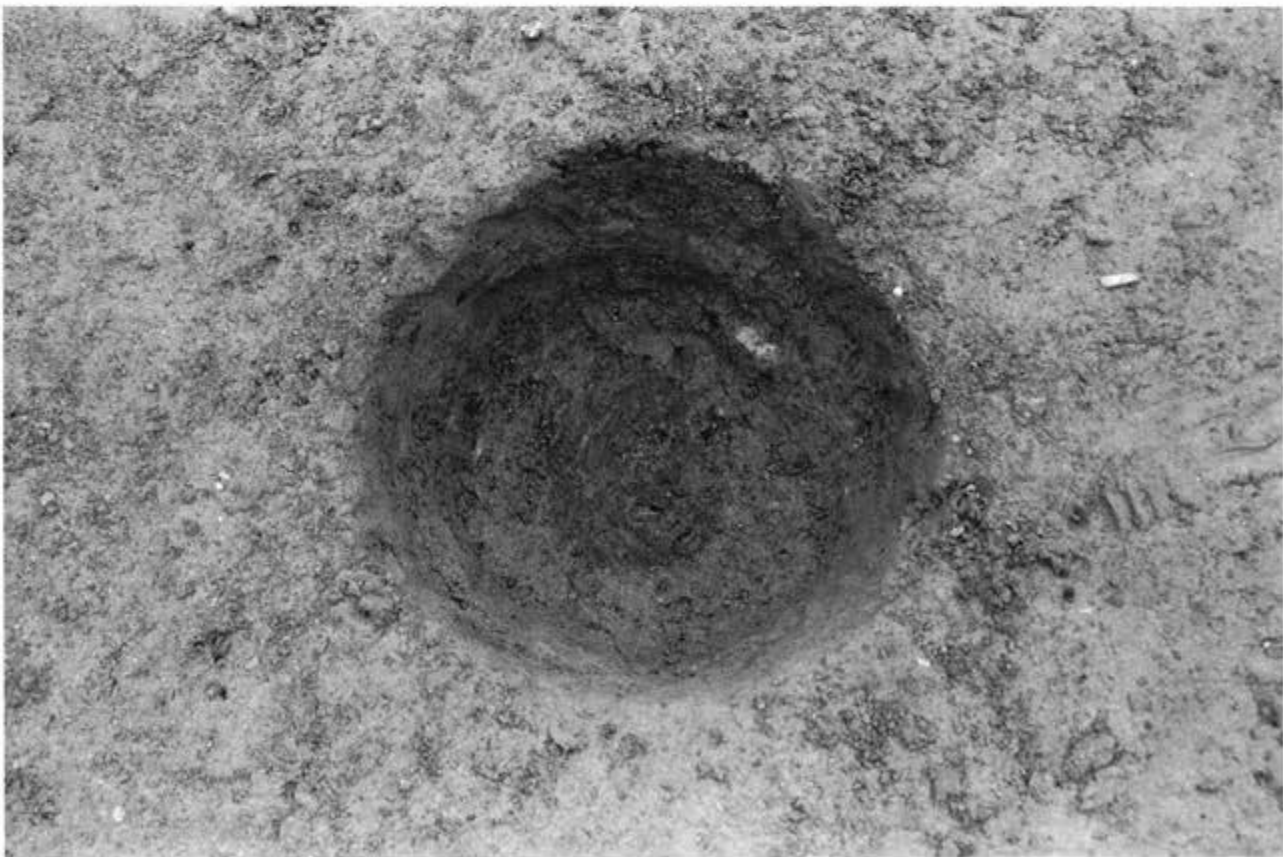
(2)第4トレンチ柱穴47柱痕検出状況
(北から)



(3)第4トレンチ柱穴47完掘状況



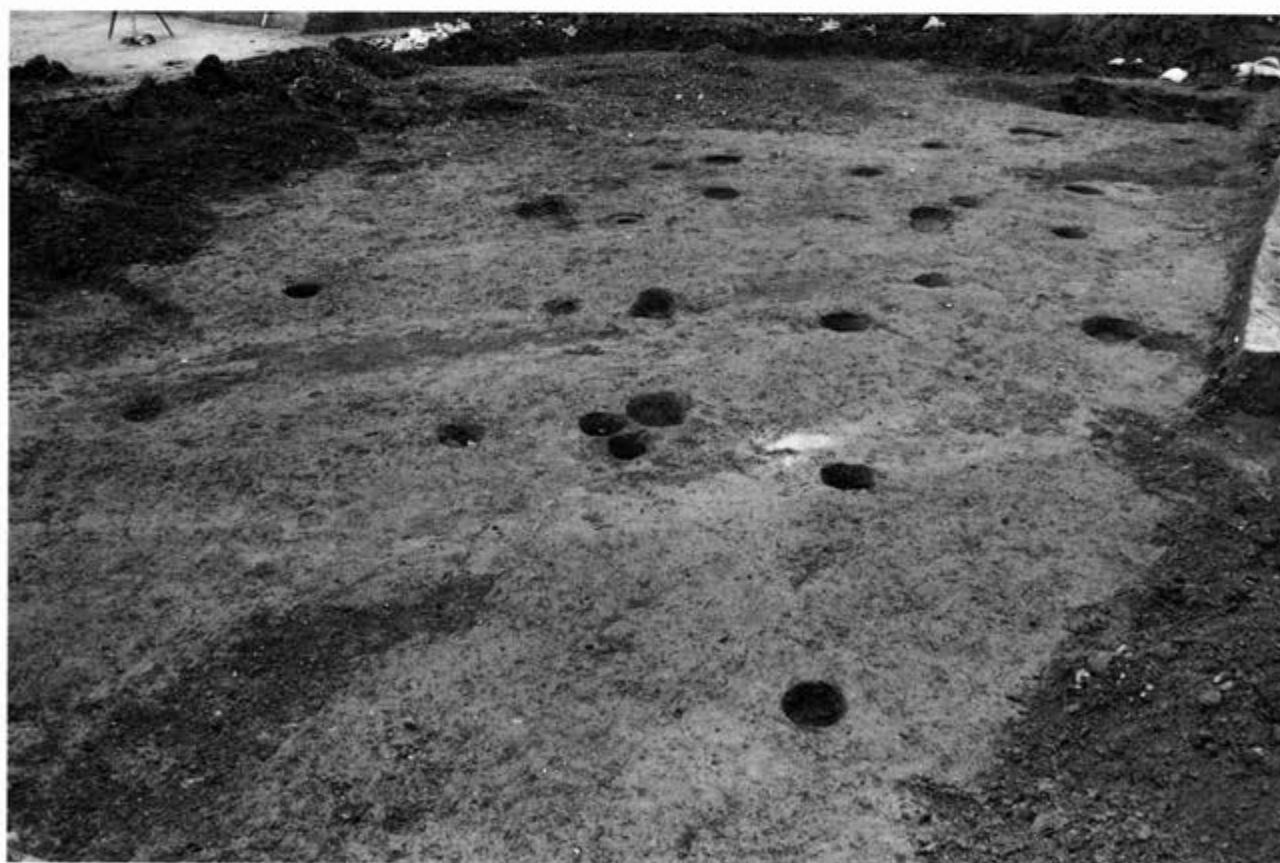
(1)第4 トレンチ柱穴23洪武通寶検出状況(北西から)



(2)第4 トレンチ柱穴35完掘状況(南から)



(1)第4トレンチ下面遺構検出状況(北東から)



(2)第4トレンチ下面遺構検出状況(南東から)



(1)第4トレンチ柱穴24遺物検出状況(北から)



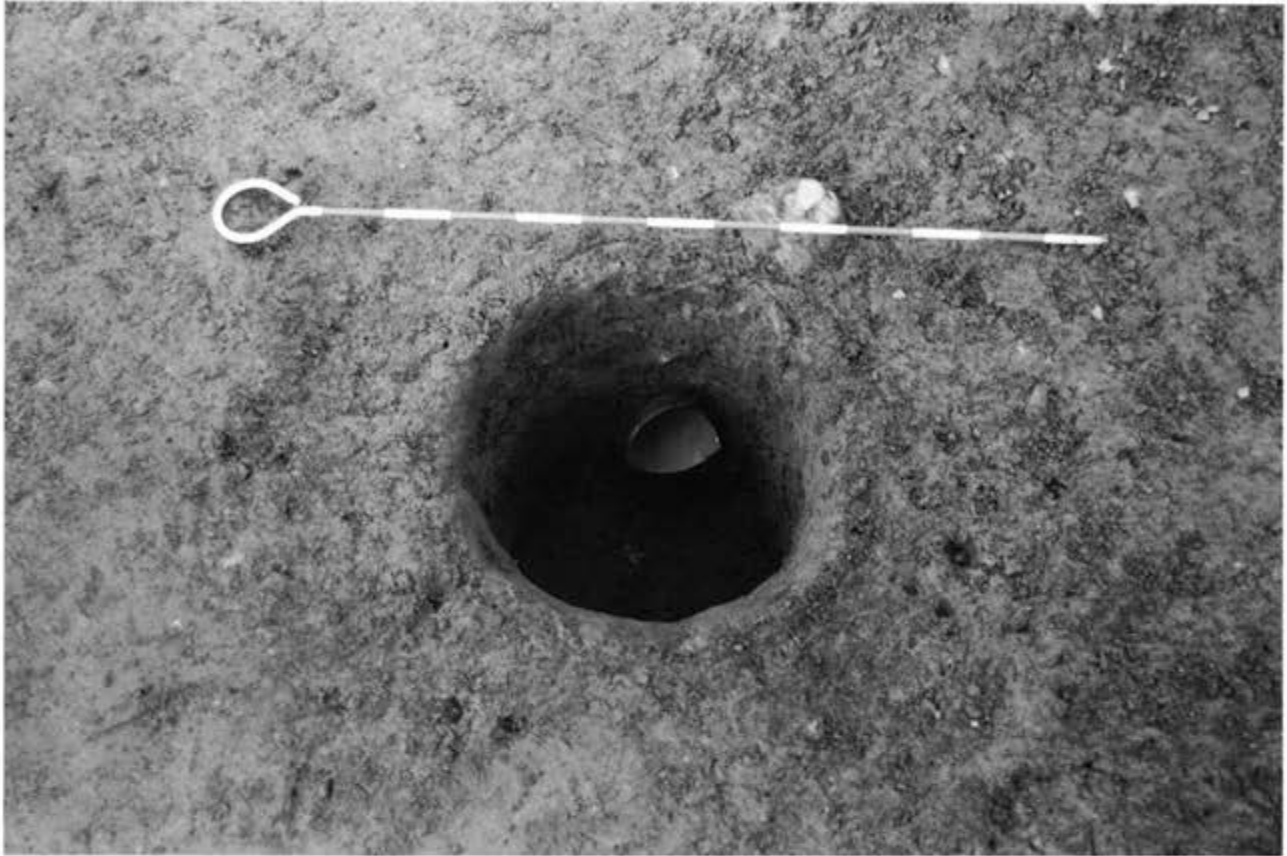
(2)第4トレンチ柱穴24遺物検出状況(北から)



(1)第4トレンチ柱穴32遺物検出状況(南から)



(2)第4トレンチ柱穴34遺物検出状況(南東から)



(1)第4トレンチ柱穴26遺物検出状況(東から)



(2)第4トレンチ柱穴36遺物検出状況(南から)



第42図



第4トレンチ



19



14



20



15



21



16



22



17



23



18



24





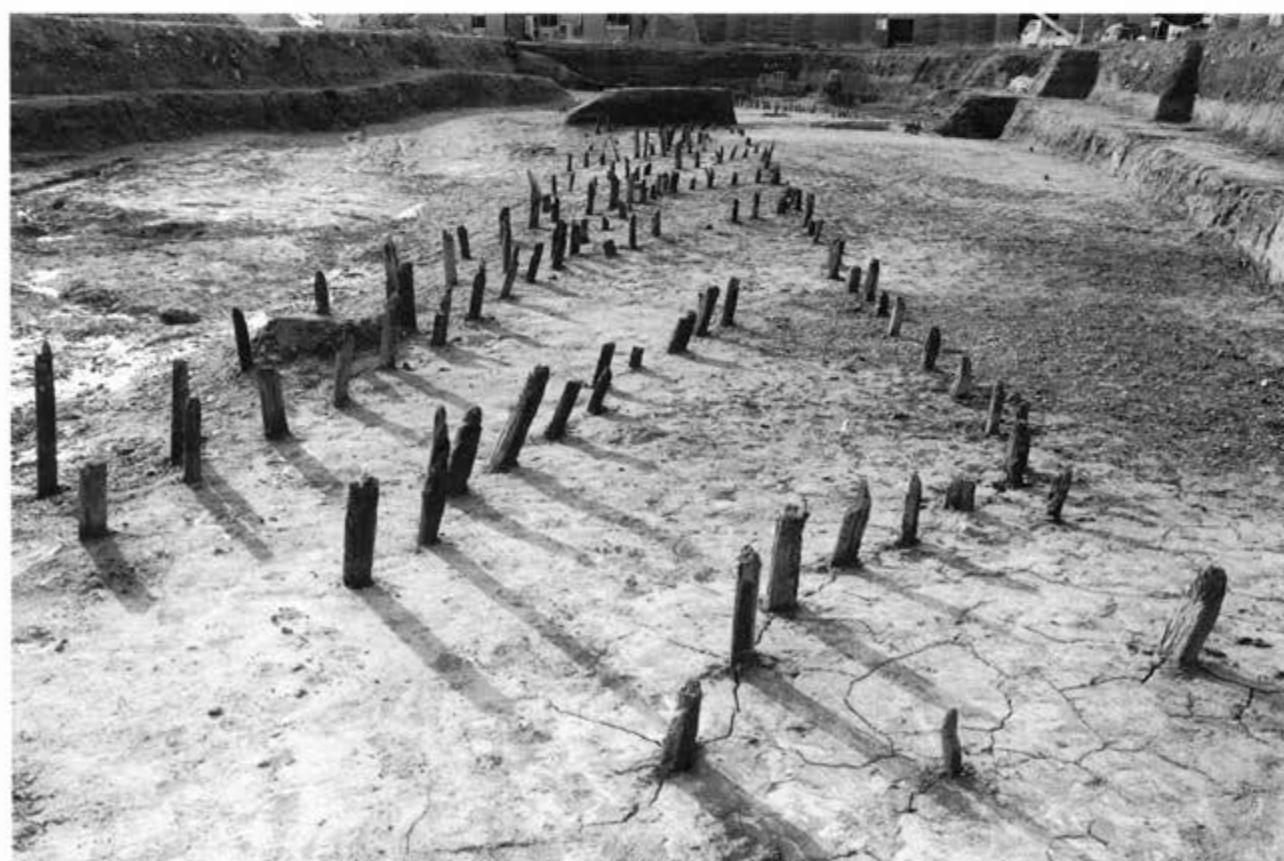
(1)左京第366次第4トレンチ古墳時代前期溝 S D36671・S D36673検出状況 (南から)



(2)左京第366次第4トレンチ古墳時代前期溝 S D36673完掘状況 (南から)



(1)左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列S X 36675検出状況(北東から)



(2)左京第366次第4トレンチ奈良時代杭列S X 36675検出状況(北東から)



(1)左京第366次第4トレンチ
奈良時代杭列
S X 36604・S X 36675検出
状況



(2)左京第366次第4トレンチ
奈良時代杭列
S X 36675検出状況
(北東から)



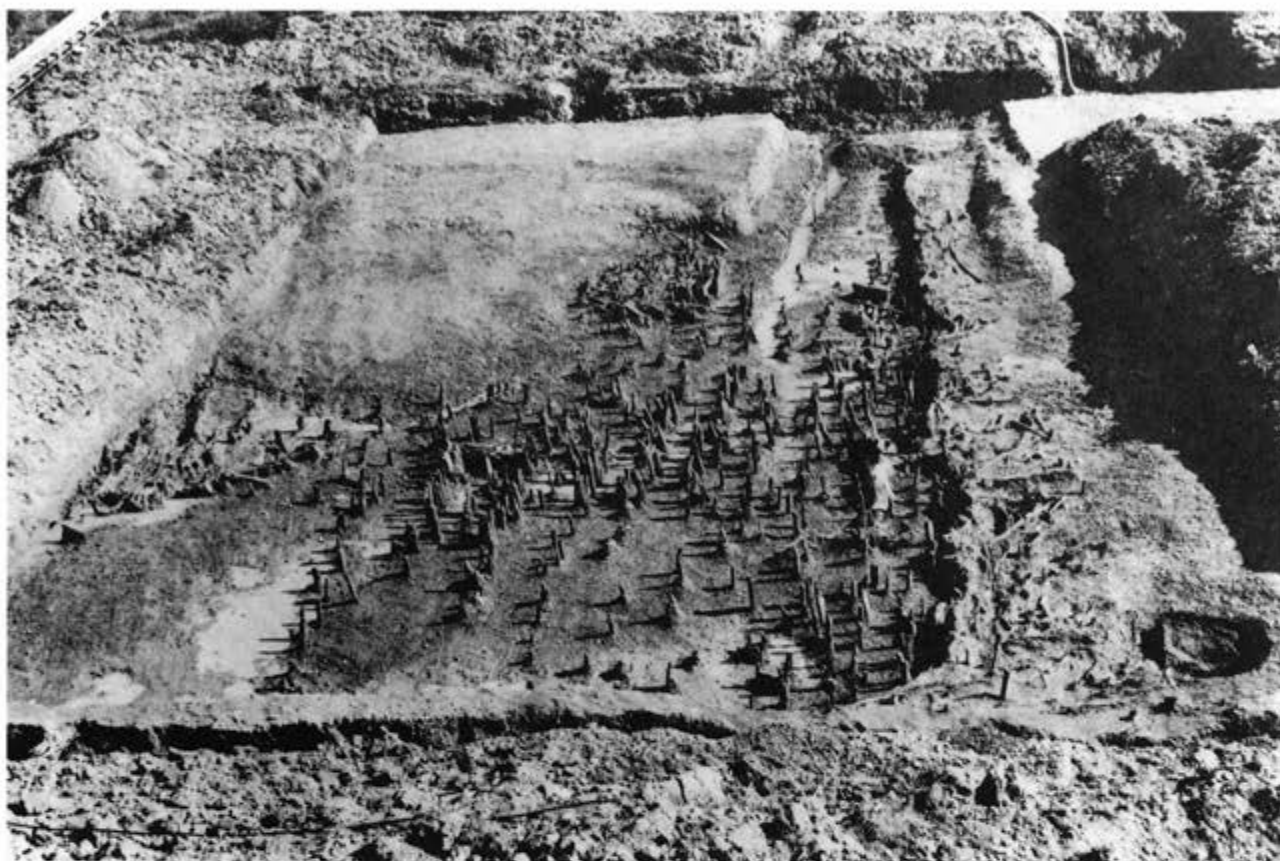
(3)左京第366次第4トレンチ
奈良時代杭列
S X 36604・S X 36675検出
状況
(北東から)



(1)左京第353次東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝検出状況（南から）



(2)左京第353次東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝完掘状況（南から）



(1)左京第4次(府立向陽高校)杭検出状況(南から) 注8から転載



(2)左京第4次(府立向陽高校)杭列検出状況



(1)調査地全景 (南上空から)



(2)調査地全景 (北上空から)



(1)C地区第4遺構面全景(南から)

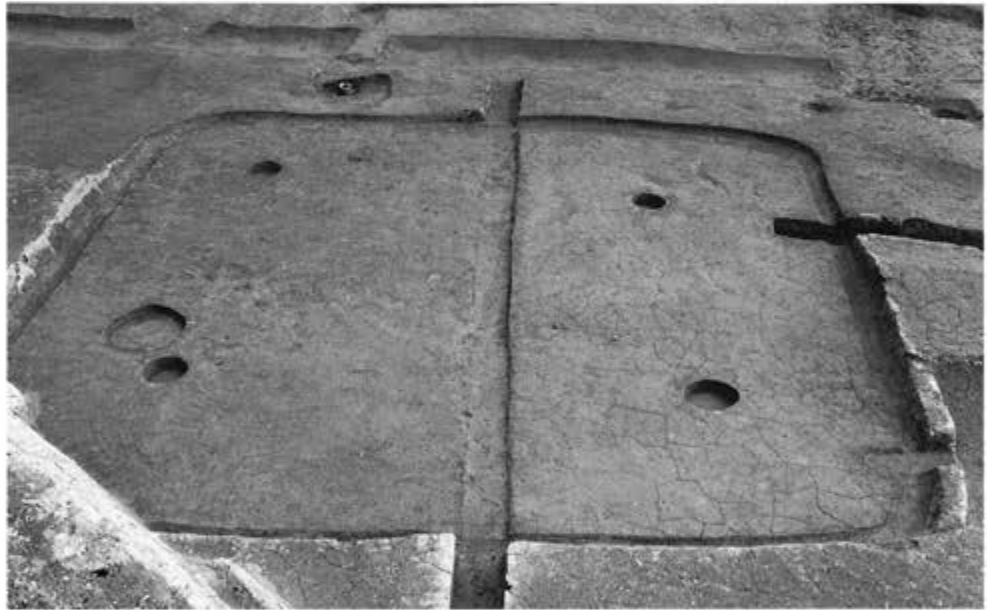


(2)C地区第4遺構面竪穴式住居跡群(南から)

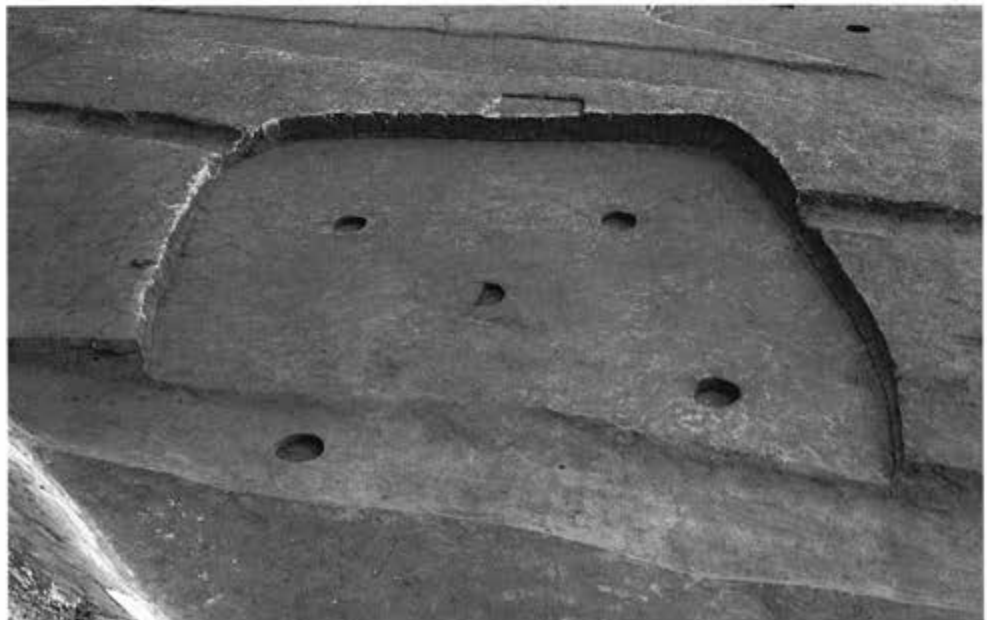
(1)C地区第4遺構面
SH082・SH083・SH092
検出状況
(南東から)



(2)C地区第4遺構面
SH076検出状況
(西から)



(3)C地区第4遺構面
SH085検出状況
(西から)





(1)C地区第4遺構面S X079全景(南東から)

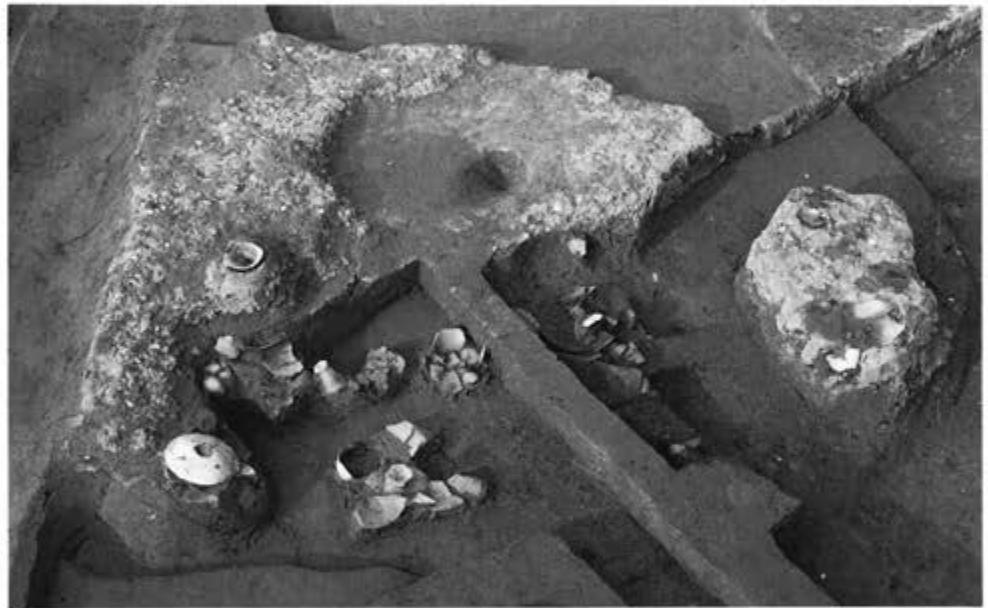


(2)C地区第4遺構面S X098全景(南東から)

(1)C地区第4遺構面
S X099検出状況
(南から)



(2)C地区第4遺構面
S H091南東隅
(土坑及び石敷き)検出状況
(南から)

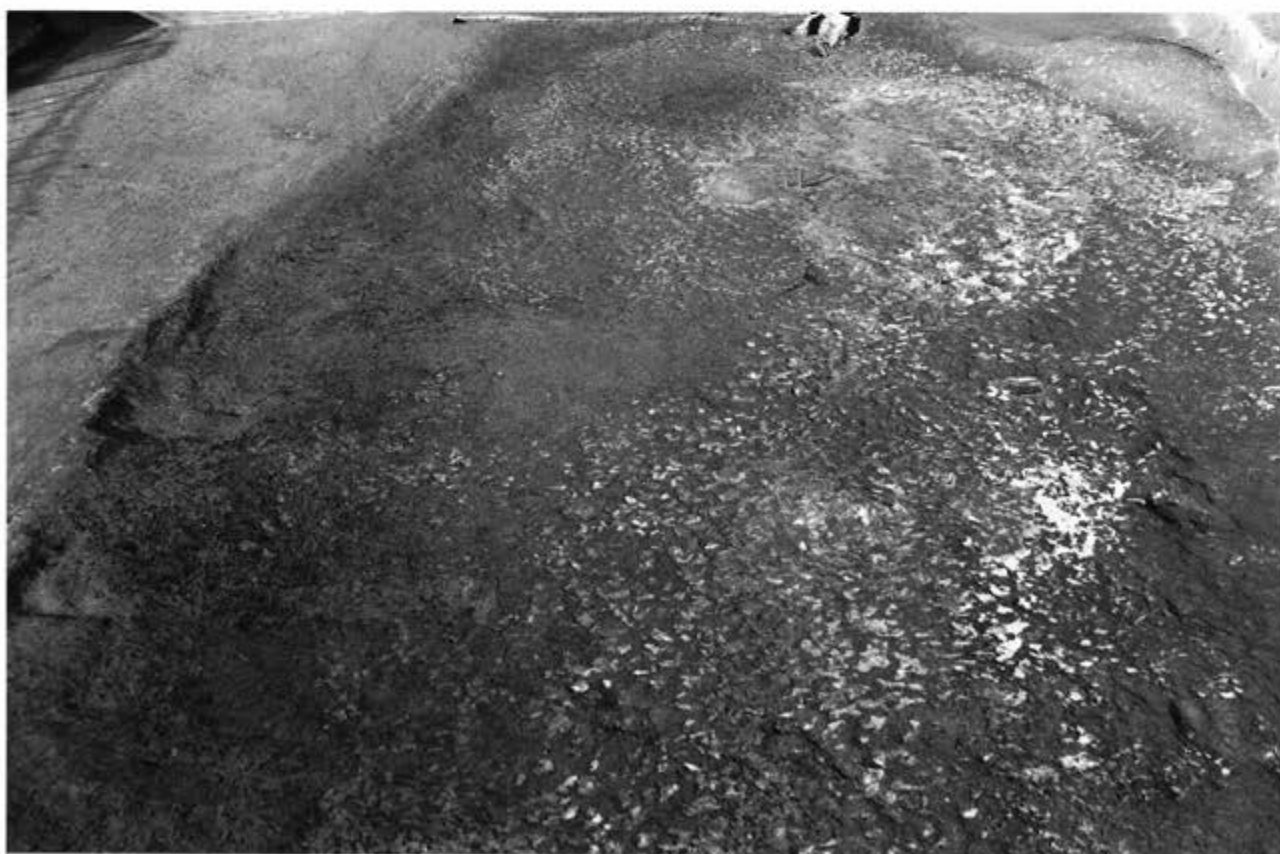


(3)C地区第4遺構面
S K103検出状況
(東から)





(1) F 1 地区第 6 遺構面全景 (南から)



(2) F 1 地区第 6 遺構面 S D224 足跡状遺構検出状況 (南から)



(1) F 1 地区第 5 遺構面全景 (南から)



(2) F 1 地区第 5 遺構面 S D 222 南端部遺物出土状況 (南から)



(1)F 1地区第4遺構面全景(南から)



(2)C地区第3遺構面全景(南から)

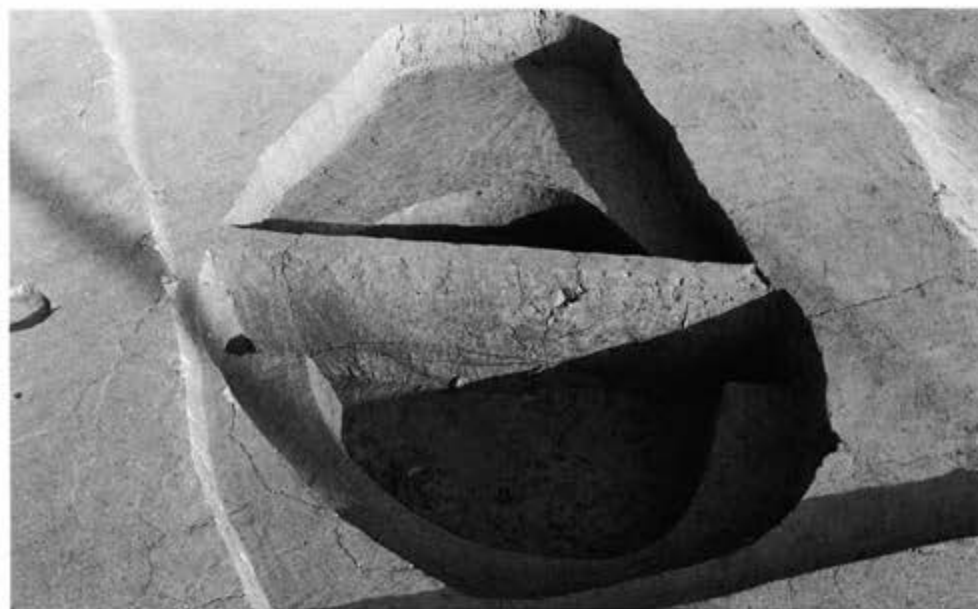
図版第53 内里八丁遺跡



(1)C地区第3遺構面
S B056・S B057・S B058
検出状況
(北から)



(2)C地区第3遺構面
S B053・S B054・S B055
検出状況
(南から)



(3)C地区第3遺構面
S E051検出状況
(西から)

図版第54 内里八丁遺跡



(1)C地区第3遺構面
S B021検出状況
(南から)



(2)C地区第3遺構面
S X033検出状況
(南から)



(3)C地区第3遺構面
S X030検出状況
(東から)



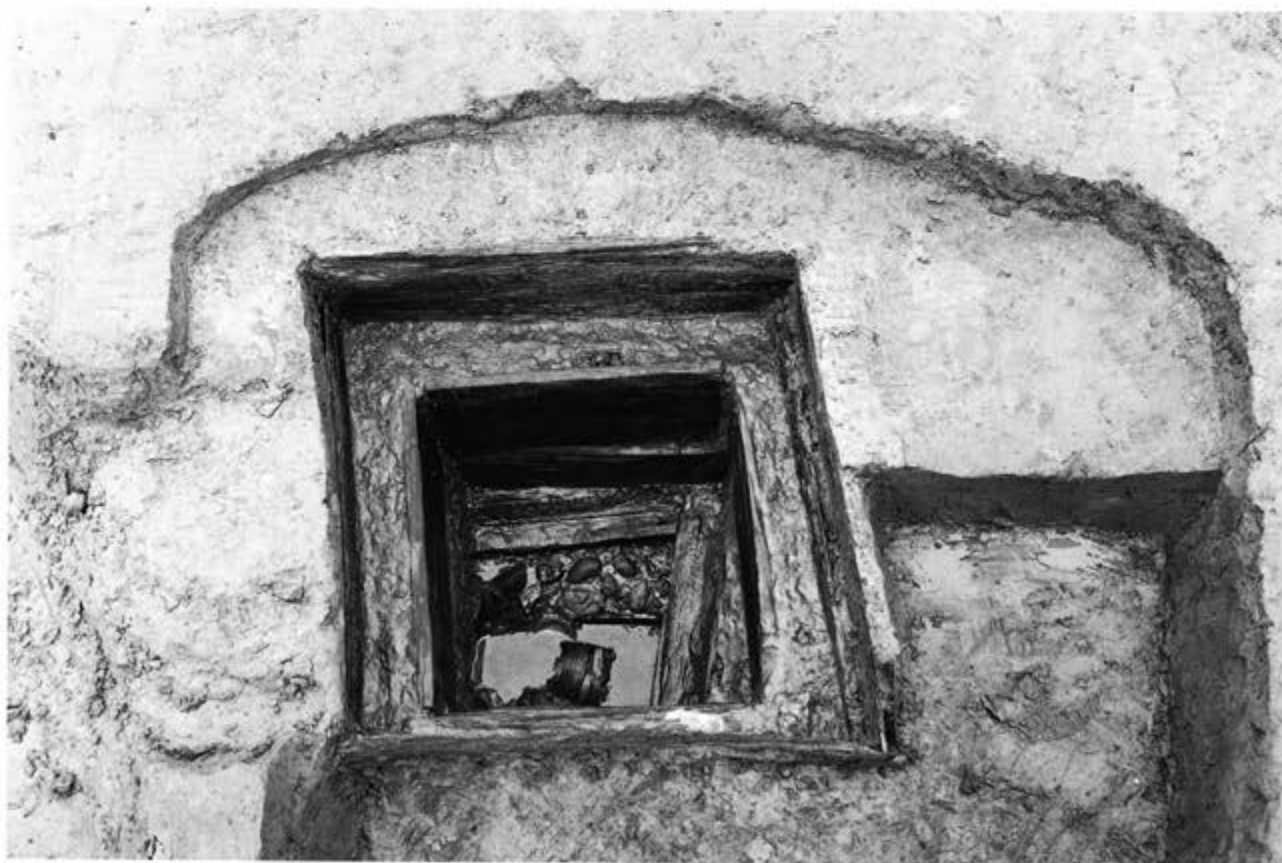
(1)調査地全景 (C地区第2遺構面、F1地区第3遺構面、北から)



(2)C地区第2遺構面全景 (南から)



(1)C地区第2遺構面S B020検出状況(南から)



(2)C地区第2遺構面S E023検出状況(南から)



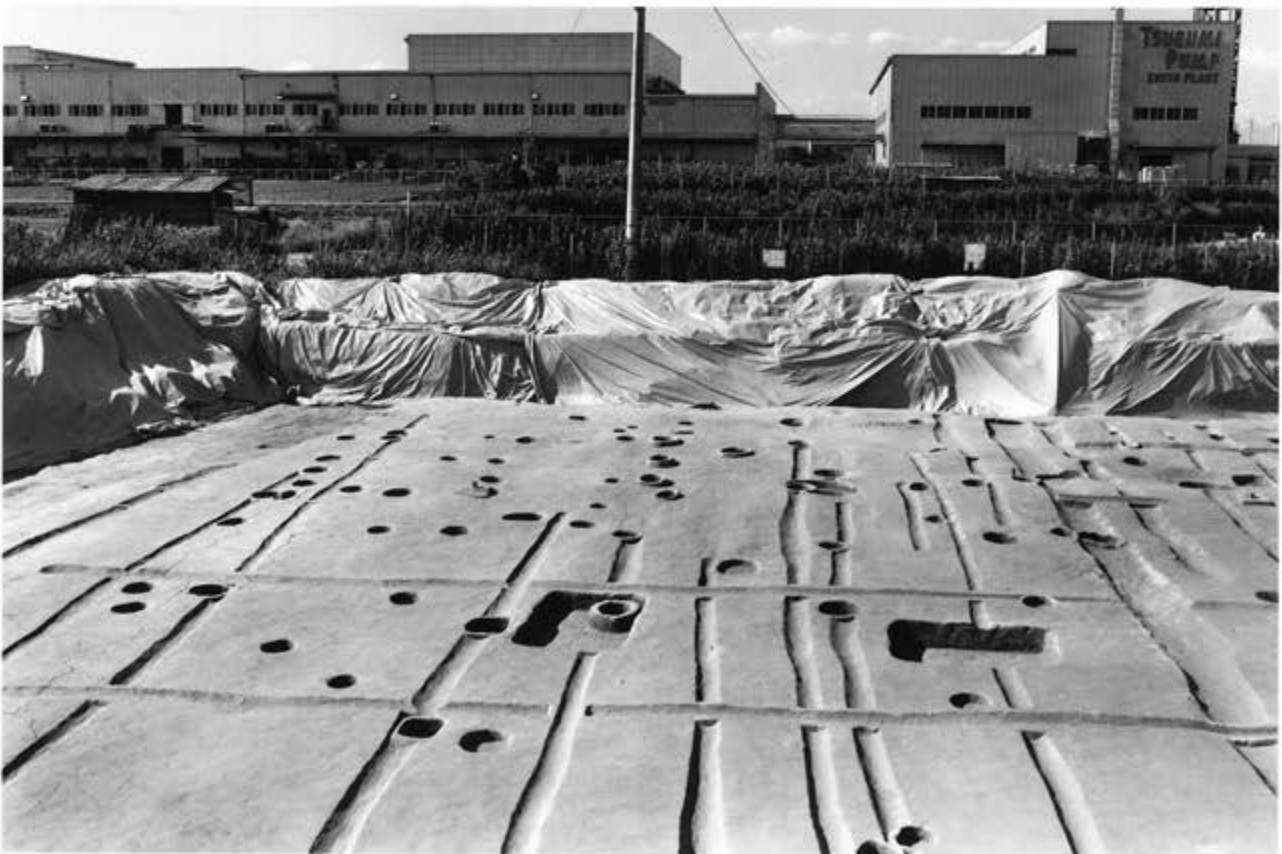
(1) F 1 地区第 3 遺構面全景 (南から)



(2) F 1 地区第 3 遺構面 S B 216・S B 217・S B 218 検出状況 (南から)



(1) F 1 地区第 2 遺構面全景 (南から)



(2) F 1 地区第 2 遺構面 S B 210・S K 206・S K 207 検出状況 (南から)



(1)C地区第1遺構面全景(南から)



(2)C地区第1遺構面S B024・S B025検出状況(南から)



(1) F 1 地区第 1 遺構面全景 (南から)



(2) F 1 地区第 1 遺構面鳥畑 3 検出状況 (南から)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第78冊							
編著者名	野島 永・岩松 保・中川和哉・小池 寛・森下 衛							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1997 年		12 月		26 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょう あとさきょう うだい384・ 385じ、ひが しつちかわい せき 長岡京跡左 京第384・ 385次、東土 川遺跡	きょうとしみなみく くぜひがしつちかわ ちょうかないだ 京都市南区久世東 土川町金井田	107	10	34° 56' 27"	135° 43' 25"	19950408 ～ 19960228	14,480	道路拡幅
ながおかきょう あとさきょう うだい389 じ、なかふく ちいせき 長岡京跡左 京第389次、 中福知遺跡	むこうしかみうえの ちょういけのじり・ だいもん 向日市上植野町池 ノ尻・大門	208	13 42	34° 55' 49"	135° 42' 38"	19960726 ～ 19970114	1,780	団地建設
うちざとはっ ちょういせき 内里八丁遺 跡	やわたしうちざとこ あざひゅうがどう 八幡市内里小字日 向堂	210	37	31° 51' 33"	133° 14' 51"	19960416 ～ 19970227	3,800	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東土川遺跡	集落・墓	弥生 古墳 鎌倉・室町		方形周溝墓・環濠 流路・溝 素掘り溝・井戸		弥生土器・石器 須恵器・土師器・紡 錘車 緑釉陶器・灰釉陶器 無釉陶器・土師器・ 瓦器		石剣・石鏃
長岡京跡左 京第384・ 385次	都城	長岡京期		掘立柱建物・井戸・条坊側溝		須恵器・土師器・人 形		
長岡京跡左 京第389次	都城	長岡京期		流路		須恵器・土師器・瓦 埴		
中福知遺跡	集落・耕作地	平安 鎌倉 室町		溝・柱穴・櫛 溝・柱穴・櫛 溝・柱穴・櫛		土師器・黒色土器 土師器・瓦器・錢貨 土師器・瓦器・錢貨		

内里八丁遺跡	集落	弥生 古墳 飛鳥 奈良 平安 鎌倉	竪穴住居・土坑 竪穴住居・溝・土坑 掘立柱建物・土坑・井戸 掘立柱建物・土坑・溝 掘立柱建物・土坑・溝・井戸 鳥畑・溝	弥生土器 古式土師器 須恵器・土師器 須恵器・土師器 瓦器・陶磁器・木製品	
--------	----	----------------------------------	--	---	--

京都府遺跡調査概報 第78冊

平成9年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 株式会社 大光社

〒604 京都市中京区間之町通
二条下ル鍵屋町
Phone (075)222-1333